

関戸遺跡

関戸遺跡

福岡県久留米市田主丸町豊城所在遺跡の調査

一般国道二二〇号線うきはバイパス建設事業関係調査報告

第二十七集

二〇二五

2025

九州歴史資料館

九州歴史資料館

一般国道 210 号線うきはバイパス建設事業関係調査報告 第 27 集

関戸遺跡

福岡県久留米市田主丸町豊城所在遺跡の調査

2025

九州歴史資料館

序

本報告書は、令和3年度に一般国道210号線うきはバイパス建設に伴い国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所の委託を受けて発掘調査を行った、久留米市田主丸町豊城に所在する関戸遺跡の発掘調査報告書です。

関戸遺跡の調査では古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柵列、土坑、溝などから土師器・須恵器・円面硯などが出土し、これまで知られていなかった豊城地区での歴史が解明されました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、福岡国道事務所や久留米市教育委員会の関係諸機関の方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

令和7年3月31日

九州歴史資料館

館長 吉田 法稔

例　言

- 1 本書は一般国道 210 号線うきはバイパス建設事業に伴い、令和 3 年度に九州歴史資料館が発掘調査を実施した、福岡県久留米市田主丸町豊城に所在する関戸遺跡の発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査および報告書作成は国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所からの委託を受け、九州歴史資料館が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真および遺物写真の撮影は坂本真一・梶佐古幸謙が行い、遺物写真は西宏明（埋蔵文化財調査室）の協力を得た。空中写真撮影はワールド・フォト・サービスによるドローン撮影を委託した。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は坂本・梶佐古が行い、遺物実測図は坂本と整理作業員が作成した。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館にて実施した。
- 6 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館にて保管する。
- 7 本書に使用した第 2 図は、国土交通省国土地理院発行の 1 / 50,000、「甘木」「吉井」「久留米」「日田」を一部、改変したものである。本書で使用した方位は座標北である。
- 8 本書の執筆と編集は坂本が行った。

目 次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査・整理の組織	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	2
III 発掘調査の記録	13
1. 遺跡の概要	13
2. 遺構	13
1. 掘立柱建物跡	13
2. 柵列跡	23
3. 壓穴住居跡	23
4. 土坑	134
5. 溝	140
6. その他の出土遺物	144
IV おわりに	150

挿図目次

第1図 福岡県久留米市田主丸町位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図（1/50,000）	7
第3図 関戸遺跡調査区位置図（1/2,500）	10
第4図 関戸遺跡遺構配置図（1/300）	11・12
第5図 1号掘立柱建物跡実測図（1/40）	14
第6図 2・3号掘立柱建物跡実測図（1/40）	15
第7図 4号掘立柱建物跡実測図（1/40）	16
第8図 5・7号掘立柱建物跡実測図（1/40）	17
第9図 6・10号掘立柱建物跡実測図（1/40）	19
第10図 8号掘立柱建物跡および3・5・6・8・9号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/40、1/3）	20
第11図 9・11号掘立柱建物跡実測図（1/40）	21
第12図 12号掘立柱建物跡、1～3号柵列跡および2号柵列跡出土土器実測図（1/40・1/3）	22
第13図 1・2号壓穴住居跡実測図（1/40）	24
第14図 2号壓穴住居跡カマド、土器出土状況実測図（1/20）	25
第15図 1・2号壓穴住居跡出土土器実測図（1/3）	26
第16図 3号壓穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	27
第17図 4号壓穴住居跡実測図（1/40）	28

第 18 図	5号竪穴住居跡、5・6号カマド実測図（1/40、1/20）	30
第 19 図	6・7号竪穴住居跡、7号カマド実測図（1/40、1/20）	31
第 20 図	8・9号竪穴住居跡、9号カマド実測図（1/40、1/20）	33
第 21 図	5～9号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	34
第 22 図	10・14号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	35
第 23 図	11・12号竪穴住居跡実測図（1/40）	37
第 24 図	13号竪穴住居跡実測図（1/40）	38
第 25 図	11～13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	39
第 26 図	13・15号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	41
第 27 図	15号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	42
第 28 図	16号竪穴住居跡実測図（1/40）	43
第 29 図	16号竪穴住居跡カマドおよび出土土器実測図（1/20、1/3）	44
第 30 図	17号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）	45
第 31 図	18号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	46
第 32 図	17・18号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	47
第 33 図	19～21号竪穴住居跡、19号カマド実測図（1/60、1/30）	49
第 34 図	19～21号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	50
第 35 図	22・23号竪穴住居跡実測図（1/60）	52
第 36 図	22～24号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	53
第 37 図	24号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	54
第 38 図	25号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	56
第 39 図	26・54号竪穴住居跡実測図（1/40）	57
第 40 図	26・54号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	58
第 41 図	25・26・54号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	59
第 42 図	27号竪穴住居跡実測図（1/40）	60
第 43 図	28号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	61
第 44 図	29・30号竪穴住居跡実測図（1/40）	62
第 45 図	30号竪穴住居跡カマドおよび29～31号竪穴住居跡出土土器実測図（1/20、1/3）	63
第 46 図	31号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	65
第 47 図	32号竪穴住居跡および出土土器実測図1（1/40、1/3）	66
第 48 図	32号竪穴住居跡カマドおよび出土土器実測図2（1/20、1/3）	67
第 49 図	33号竪穴住居跡および出土土器実測図1（1/40、1/3）	68
第 50 図	33号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）	69
第 51 図	33・35号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	71
第 52 図	35号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	72
第 53 図	34・36・39号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	73
第 54 図	36号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	74
第 55 図	37号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	75

第 56 図	38 号竪穴住居跡および 37・38 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/40、1/3）	76
第 57 図	40 号竪穴住居跡実測図（1/40）	78
第 58 図	41 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	79
第 59 図	40・41 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	80
第 60 図	42・52 号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/40、1/3）	81
第 61 図	43 号竪穴住居跡実測図（1/40）	82
第 62 図	44 号竪穴住居跡実測図（1/40）	83
第 63 図	43・44 号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	85
第 64 図	43・44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	86
第 65 図	45・46 号竪穴住居跡、46 号カマド実測図（1/40、1/20）	87
第 66 図	47・48 号竪穴住居跡、48 号カマド実測図（1/40、1/20）	89
第 67 図	49～51 号竪穴住居跡実測図（1/40）	91
第 68 図	45～48・50・51 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	92
第 69 図	53・55・56 号竪穴住居跡出土土器測図（1/3）	93
第 70 図	53・55・56 号竪穴住居跡、53 号カマド実測図（1/60、1/30）	94
第 71 図	57 号竪穴住居跡・カマドおよび出土土器実測図（1/40、1/20、1/3）	96
第 72 図	58～60 号竪穴住居跡実測図（1/60）	97
第 73 図	58・59 号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	98
第 74 図	60 号竪穴住居跡カマドおよび 58～60 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/20、1/3）	99
第 75 図	61・62 号竪穴住居跡および 61～63 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/40、1/3）	101
第 76 図	63 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	103
第 77 図	64・65 号竪穴住居跡実測図（1/60）	104
第 78 図	66 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/40、1/20）	106
第 79 図	67・68 号竪穴住居跡実測図（1/40）	107
第 80 図	67・68 号竪穴住居跡カマド実測図（1/20）	108
第 81 図	64・65・67・68 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	109
第 82 図	69・92 号竪穴住居跡・69 号カマド実測図（1/40、1/20）	110
第 83 図	69 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	111
第 84 図	70・71 号竪穴住居跡実測図（1/40）	113
第 85 図	72・73 号竪穴住居跡および 72 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/40、1/3）	114
第 86 図	74・75 号竪穴住居跡、75 号カマド実測図（1/40、1/20）	115
第 87 図	76 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）	117
第 88 図	73～76 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	118
第 89 図	76 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	119
第 90 図	77・78 号竪穴住居跡、78 号カマド実測図（1/40、1/20）	120
第 91 図	79 号竪穴住居跡・カマド土器出土状況実測図（1/40、1/20）	121
第 92 図	77～79 号竪穴住居跡出土土器実測図 1（1/3）	122
第 93 図	77～79 号竪穴住居跡出土土器実測図 2（1/3）	123

第 94 図	77～79号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)	124
第 95 図	77～79号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/3)	125
第 96 図	80号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)	127
第 97 図	81～83号竪穴住居跡および81号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)	128
第 98 図	84号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)	129
第 99 図	85号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)	131
第 100 図	84・85号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	132
第 101 図	86・87号竪穴住居跡実測図 (1/40)	133
第 102 図	88・91号竪穴住居跡および87・88・90・91号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)	135
第 103 図	89・90号竪穴住居跡実測図 (1/40)	136
第 104 図	1～3・5号土坑実測図 (1/40)	137
第 105 図	4・6・7号土坑実測図 (1/40)	138
第 106 図	2・3・5・6号土坑出土土器実測図 (1/3)	139
第 107 図	1～10号溝、流路断面図・土層実測図 (1/40)	141
第 108 図	1・2・4・5・7・8号溝、流路跡出土遺物実測図 (1/3)	143
第 109 図	ピット出土土器実測図 (1/3)	145
第 110 図	遺構検出出土土器実測図 (1/3)	146
第 111 図	遺構検出出土瓦実測図 (1/3)	147
第 112 図	出土土製品・石製品実測図 (1/2)	148
第 113 図	出土鉄製品実測図 (1/2)	149
第 114 図	関戸遺跡須恵器・土師器変遷図 (1/8、1/12)	151
第 115 図	関戸遺跡時期別変遷図 (1/600)	152

図版目次

図版 1	1 関戸遺跡合成写真 (真上から)	
図版 2	1 調査区周辺 1 (北東から)	2 調査区周辺 2 (北から)
図版 3	1 北調査区東側 1 (真上から)	2 北調査区東側 2 (真上から)
図版 4	1 北調査区西側 1 (真上から)	2 北調査区西側 2 (真上から)
図版 5	1 南調査区西側全景 (真上から)	2 南調査区東端 (東から)
	3 南調査区東側 1 (西から)	4 南調査区東側 2 (西から)
図版 6	1 1号掘立柱建物跡 (真上から)	2 2・3号掘立柱建物跡 (真上から)
	3 4・5号掘立柱建物跡 (真上から)	
図版 7	1 7号掘立柱建物跡・3号柵列跡 (真上から)	2 6・10号掘立柱建物跡 (真上から)
	3 9号掘立柱建物跡 (東から)	4 12号掘立柱建物跡・1号柵列跡 (東から)
図版 8	1 1号竪穴住居跡 (西から)	2 2号竪穴住居跡 (東から)
	3 2号竪穴住居跡カマド (東から)	4 2号竪穴住居跡土器出土状況 (東から)

- 図版9 1 3号竪穴住居跡（東から） 2 4号竪穴住居跡（南から）
 3 5・6号竪穴住居跡（南から）
- 図版10 1 5号竪穴住居跡カマド（南・西から） 2 7号竪穴住居跡（東から）
 3 6号竪穴住居跡カマド（東から） 4 7号竪穴住居跡カマド（東から）
- 図版11 1 9号竪穴住居跡（南から） 2 10・14号竪穴住居跡（東から）
 3 9号竪穴住居跡カマド（南から） 4 13号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版12 1 13号竪穴住居跡（南から） 2 15号竪穴住居跡（南から）
 3 15号竪穴住居跡カマド（南から） 4 16号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版13 1 16号竪穴住居跡（南から） 2 17号竪穴住居跡（南から）
 3 18号竪穴住居跡（東から）
- 図版14 1 18号竪穴住居跡カマド（東から） 2 19号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 19号竪穴住居跡（南から） 4 20号竪穴住居跡、2・3号土坑（南から）
- 図版15 1 22～24号竪穴住居跡（南から） 2 24号竪穴住居跡（西から）
 3 25号竪穴住居跡（南から）
- 図版16 1 24号竪穴住居跡カマド（西から） 2 31号竪穴住居跡カマド（東から）
 3 26号竪穴住居跡（東から） 4 27号竪穴住居跡（南から）
- 図版17 1 28号竪穴住居跡（南から） 2 30・40号竪穴住居跡（西から）
 3 31号竪穴住居跡（東から）
- 図版18 1 32号竪穴住居跡（東から） 2 33・38号竪穴住居跡（南西から）
 3 32号竪穴住居跡カマド（東から） 4 33号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版19 1 34・36号竪穴住居跡（西から） 2 35号竪穴住居跡（南から）
 3 36号竪穴住居跡カマド（南から） 4 37号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版20 1 37号竪穴住居跡（南から） 2 41号竪穴住居跡（南から）
 3 42号竪穴住居跡（南から）
- 図版21 1 41号竪穴住居跡カマド（南から） 2 43号竪穴住居跡カマド（西から）
 3 43号竪穴住居跡（西から） 4 44・46号竪穴住居跡（南から）
- 図版22 1 44号竪穴住居跡カマド（南から） 2 46号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 44号竪穴住居跡（南から） 4 47・48号竪穴住居跡（南から）
- 図版23 1 47号竪穴住居跡カマド（南から） 2 49号竪穴住居跡（南から）
 3 50号竪穴住居跡カマド（西から）
- 図版24 1 51号竪穴住居跡（東から） 2 52号竪穴住居跡（西から）
 3 53号竪穴住居跡（南から）
- 図版25 1 53号竪穴住居跡カマド（南から） 2 54号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 54号竪穴住居跡（南から） 4 56号竪穴住居跡（北から）
- 図版26 1 57号竪穴住居跡（南から） 2 58号竪穴住居跡（南から）
 3 57号竪穴住居跡カマド（南から） 4 58号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版27 1 59号竪穴住居跡カマド（南から） 2 60号竪穴住居跡カマド（東から）
 3 60号竪穴住居跡（東から） 4 61号竪穴住居跡（東から）

- 図版 28 1 62号竪穴住居跡土層（北から） 2 63号竪穴住居跡（東から）
 　　3 63号竪穴住居跡カマド（東から） 4 66号竪穴住居跡カマド（東から）
- 図版 29 1 64号竪穴住居跡（東から） 2 65号竪穴住居跡（東から）
 　　3 66号竪穴住居跡（東から）
- 図版 30 1 67号竪穴住居跡カマド（東から） 2 68号竪穴住居跡カマド（東から）
 　　3 67・68号竪穴住居跡（北から） 4 69号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版 31 1 69号竪穴住居跡カマド（南から） 2 70～72号竪穴住居跡（東から）
 　　3 73号竪穴住居跡（南から）
- 図版 32 1 75号竪穴住居跡カマド（南から） 2 78号竪穴住居跡カマド（東から）
 　　3 75号竪穴住居跡（南から） 4 76号竪穴住居跡カマド（東から）
- 図版 33 1 76号竪穴住居跡カマド（東から） 2 77号竪穴住居跡（南から）
 　　3 78号竪穴住居跡（東から）
- 図版 34 1 79号竪穴住居跡（東から） 2 79号竪穴住居跡土器出土状況（東から）
 　　3 79号竪穴住居跡カマド周辺（東から）
- 図版 35 1 79号竪穴住居跡カマド1（東から） 2 79号竪穴住居跡カマド2（東から）
 　　3 79号竪穴住居跡（東から）
- 図版 36 1 80号竪穴住居跡（南から） 2 81号竪穴住居跡（南から）
 　　3 82号竪穴住居跡（南から） 4 83号竪穴住居跡土層（北から）
- 図版 37 1 84号竪穴住居跡（南から） 2 85号竪穴住居跡（南から）
 　　3 84号竪穴住居跡カマド（南から） 4 85号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版 38 1 1号土坑（北から） 2 4号土坑（東から）
 　　3 5号土坑（南から）
- 図版 39 1 6号土坑（北から） 2 道路状遺構（北から） 3 流路跡（南から）
- 図版 40 1 1号溝（東から） 2 2号溝（東から）
 　　3 4号溝（南から） 4 5号溝（南から）
- 図版 41 1 7号溝（西から） 2 8号溝（南から） 3 作業風景
- 図版 42 1 1号溝土層（東から） 2 4号溝土層（東から） 3 5号溝土層（南から）
 　　4 7号溝土層（西から） 5 流路跡土層（南から）
- 図版 43 出土土器1
- 図版 44 出土土器2
- 図版 45 出土土器3
- 図版 46 出土土器4
- 図版 47 出土遺物1
- 図版 48 出土遺物2

表目次

表1 うきはバイパス調査地点一覧	8
------------------	---

I はじめに

1. 調査に至る経過

一般国道 210 号線は大分県大分市と福岡県久留米市を結ぶ幹線道路である。

交通安全の確保、さらには地域間の交流や産業振興の支援を目的とした延長約 14km のバイパスとなり、昭和 48 年度に事業を着手し、昭和 59 年の一部開通以降、順次路線を開通してきた。現在、久留米市田主丸町から、うきは市浮羽町を結ぶ約 13km が暫定 2 車線で供用されている。(福岡国道事務所ホームページ及びパンフレットから)

関戸遺跡は、久留米市田主丸町に所在し、先のうきはバイパス未貫通区間約 1 km 内に所在する。平成 29 年度用地買収が完了した地点

の試掘調査を実施し、遺跡が確認された約 2,500m²は、平成 30 年度に新開遺跡として九州歴史資料館が発掘調査を実施している。

その後、継続的に福岡国道事務所と用地買収の進捗状況確認等の協議を進めてきたが、令和 2 年 11 月の協議において、福岡国道事務所より未開通区間で約 7 割の用地買収が完了したため、用地買収完了範囲を年度内に試掘調査実施の依頼があった。そのため、令和 3 年 2 月に県文化財保護課と九州歴史資料館の立ち合いのもと、久留米市文化財保護課が試掘・確認調査を実施する計画で進めていた。

しかし、年明けの令和 3 年 1 月 18 日に県文化財保護課と福岡国道事務所との協議で、令和 3 年度に県道甘木田主丸線から県道三川田主丸線までの約 500 m、未開通区間内の遺跡の発掘調査を完了させてほしいとの依頼があった。

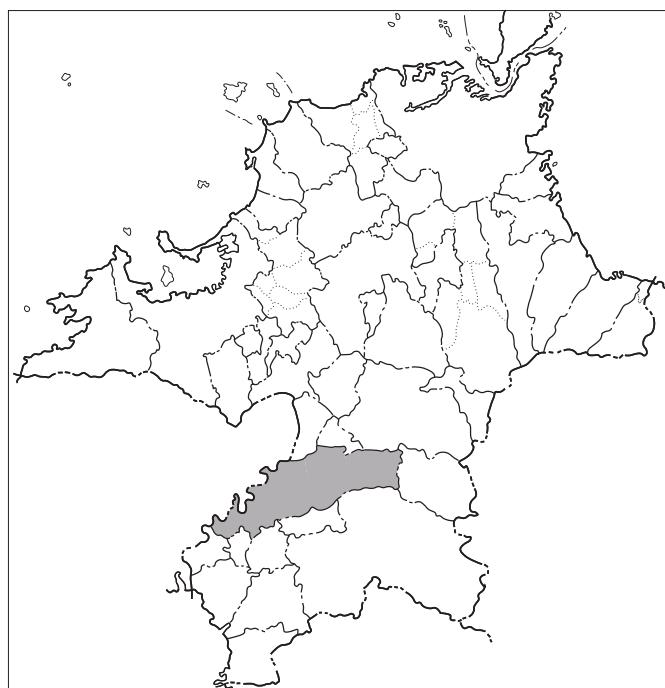
それを受け、令和 3 年 2 月 2・3 日に久留米市文化財保護課が試掘・確認調査を実施し、対象範囲、計約 5,000m²で遺構を確認した。

その当時はコロナウイルス感染症拡大防止対策期間であったことから、主にメール等で断続的に協議を進め、3 月 12 日の協議において、発掘調査は九州歴史資料館が行うこととなった。

令和 3 年 4 月 8 日には再度、県文化財保護課と福岡国道事務所で調査実施に係る詳細協議、6 月 3 日には現地協議を行い、6 月 15 日から調査に着手した。

2. 調査・整理の組織

令和 3 年度の調査時、および令和 5・6 年度の整理報告時の体制は以下の通りである。



第 1 図 福岡県久留米市田主丸町位置図

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	令和3年度	令和5年度	令和6年度
所長	福本 仁志	仲谷 俊昭	金井 仁志
副所長	島川 浩一	城戸 康介	城戸 康介
建設監督官	藤井 節朗	花田 賢司	花田 賢司
計画課長	佐々木智文	木場 和俊	木場 和俊
	沼尾 健太		
専門官	猿渡 基樹	松石 耕太	松石 耕太
調査係長	尾形 泰則	相川 雅央	桑木野玲奈
企画係長	大住 智宣	下川 恭平	下川 恭平
工務課長	下尾崎隆博	大川雄一郎	戸高 哲也
工務第一係長	江崎 修平	永山 宏	山崎 修二
工務第二係長		藤島 将矢	鳴添 翔一
専門員	坂本 哲治	川上晃一郎	川上晃一郎

福岡県教育委員会

教育長	吉田 法稔	吉田 法稔	寺崎 雅巳
副教育長	寺崎 雅巳	上田 哲子	上田 哲子
教育監	合屋 伸一	山本 博康	古賀 浩利
教育総務部長	上田 哲子	松永 一雄	松永 一雄

九州歴史資料館

館長	城戸 秀明	城戸 秀明	吉田 法稔
副館長	安永 千里	吉村 靖徳	吉村 靖徳
総務室長	伊藤 幸子	黒岩 計光	山下 雄二
総務班長	高山美保子	岡本 裕子	岡本 裕子
文化財調査室長	吉村 靖徳		
埋蔵文化財調査室長		吉田 東明	吉田 東明
同 文化財調査班長	森井 啓次	進村 真之	進村 真之
同 企画主査		坂本 真一	坂本 真一
同 技術主査	坂本 真一		
同 主任技師	梶佐古幸謙		

II 遺跡の位置と歴史的環境

うきはバイパス建設に関わる発掘調査では、これまで26集もの報告書が刊行されている。それぞれの報告書において、周辺遺跡の立地や歴史的環境について何度も説明されているので、あえて書かない

が、これまで刊行された報告書についてまとめ、関戸遺跡周辺の歴史的環境として紹介する。

日永遺跡（第1地点：うきは市浮羽町大字山北 昭和61年度調査）

弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代の3時期の遺跡である。遺構は竪穴住居跡76軒、掘立柱建物跡22棟、土坑10基、溝7条などを検出する。その中でも特に、弥生時代後期の遺構から銅矛・銅戈埋納遺構を検出したことが注目される。この埋納遺構は 1.1×0.25 mを測る長楕円形の土坑で、埋納された銅矛と銅戈は鋒先をそろえて置かれ、また土層観察から、木箱の中に入れられたことも判明している。銅矛と銅戈が一緒に埋納された出土状況の明確な遺構は、この当時全国でも初めての出土例となった。この埋納遺構の近くには、同時期の大型竪穴住居跡（ 8.65×6.9 m前後）もある。古墳時代では初期～前期と後期の2時期の遺構を検出する。弥生時代と比べて、初期から前期にかけての住居数は減少している。後期の住居数は増え、屋内型のカマドが多く検出するが、突出型も少数検出される。他にも、詳細な時期の記述はないが、古墳時代後期以降かと思われる 4×7 間以上の大型の掘立柱建物跡1棟もある。

塚堂遺跡（第2地点：うきは市吉井町大字宮田・徳丸 昭和54～57・59～61年度調査）

調査はA～E地点に分けられて行われている。縄文時代の遺構はないが、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期～奈良時代、中世までの竪穴住居跡70軒、掘立柱建物跡20棟、土坑18基、溝43条、周溝状遺構16条などを検出する。その中で特に注目されるのは、5世紀後半の塚堂古墳である。うきはバイパス関係の調査では、周濠が調査対象であった。※（古墳の詳細については第1集を参考にしていただきたい。）古墳は前方後円墳で、2重の周濠が巡る。石室は前方部と後円部で確認され、定型化されつつある横穴式石室とする。後円部石室の方が副葬品構成により、前方部石室より古い様相になる。トレンチ調査により、周濠から円筒埴輪、朝顔型埴輪、人物埴輪、家形埴輪、衣蓋形埴輪、盾形埴輪、冑形埴輪、馬形埴輪、形象埴輪などが出土する。

奈良時代の遺構としては、E地点で第3～6地点の調査で検出した21～27号ピット列群が挙げられる。同じような形状のピットが同間隔で連続して検出されていて、波板状遺構（波板状凹凸面）とも呼ばれるものと酷似し、道路状遺構の可能性もある。

堂畠遺跡（第4地点：うきは市吉井町大字新治 平成8・9・12～14年度調査）

1～4次調査が行われ、弥生時代中期後半～8世紀末、中世の集落遺跡を検出する。弥生時代中期後半～後期にかけての竪穴住居跡では、円形～楕円形と方形があり、円形→方形へと変遷する。住居跡以外には、中期後半の環濠と考えられる3次調査の8・20・24・25号溝から、須玖II式の土器が大量に出土する。後期の遺構は少なく、後期初頭～前半では1次調査の12号土坑から、豊前系の壺も出土する。遺構以外にも混入品ではあるが、中期後半の伊予系壺頸部（1次調査26号竪穴住居跡）、後期初頭の吉備系高坏口縁部（3次調査25号溝）なども出土する。また後期の25号土坑からは小形仿製鏡1点も出土する。古墳時代前期では、3次調査の竪穴住居跡3軒や2次調査の竪穴状遺構2棟など遺跡内で個々に点在し、集落を構成する。148号竪穴住居跡からは畿内系、瀬戸内系、山陰系の外来系土器が出土し、古墳時代前期前半の良好な一括資料である。この他にも混入品であるが籠目土器の体部片1点やV様式系の加飾壺口縁部片も出土する。中期後半になると、カマドを付設する17・23号竪穴住居跡2軒も出現するが、須恵器は出土していない。後期前半の竪穴住居跡はなく、後期中頃にかけて良好な一括資料を出土する152号竪穴住居跡などがあり、小規模の集落がまた形成される。後期後半には竪穴住居跡数は103軒と多くなるが、7世紀前半～中頃になると仁右衛門畠遺跡や船越高原遺跡と同様に集落

が一時途絶えている。その後、集落は小規模ながら7世紀後半～8世紀末頃にかけても続いている。ここでは竪穴住居跡に付設されたカマドから屋内型と突出型に大きく2つに分けられ、それにより住居跡の平面形は、前者は縦長長方形、後者は横長長方形となる。またカマドの方位も規則性が見られ、同一場所で数回建て替えを行うなど土地の規制が伺え興味深い。竪穴住居跡以外には7世紀後半の1次調査で検出された2×8間の1号掘立柱建物跡と2×6間の9号掘立柱建物跡などの有力者の居館的な建物もある。この時期の遺物では、8世紀中頃の転用硯が出土する113号竪穴住居跡や3次調査1区遺構面出土でも円面硯と転用硯、製塙土器が出土する。中世では竪穴状遺構、土坑や溝などを検出する。

仁右衛門畠遺跡（第5地点：うきは市吉井町大字新治 平成7～9年度調査）

弥生時代と古墳時代の集落遺跡である。弥生時代は、中期初頭～前半と後期中葉～後半の2時期に分けられる。竪穴住居跡15軒、土坑101基、甕棺墓1基、溝1条を検出する。竪穴住居跡は円形、楕円形、方形のものが共存するような形で検出し、時期は中期初頭で1軒、他は中期前半に集中する。土坑は101基と数多くを検出するが、平面が長方形や楕円形に近いものが多い。断面の形状は袋状になるものはないが、大半は貯蔵穴として機能を終えたものを廃棄土坑として再利用されている。その内、68号土坑のみ湧水点にまで到達し、階段状の掘り込みがある井戸もある。44・81・112号土坑からは、この時期の土器以外にも鋳造鉄斧が3点出土する。中期前半以降、集落は一時途絶える。後期中葉～後半では検出した竪穴住居跡4軒、土坑1基、溝1基と中期に比べて減少する。

古墳時代以降では、竪穴住居跡67軒、掘立柱建物跡17棟、土坑23基、井戸1基、溝23条、墓4基を検出する。前期検出の竪穴住居跡6軒では、住居構造により出土土器が異なり、2本柱の長方形で在地系土器、4本柱の正方形では外来系土器が多い。中期では炉からカマドへと代わる時期の竪穴住居跡を15軒検出する。カマドを持つ竪穴住居跡は8軒を検出し、その内、36、39、42、65、87号竪穴住居跡では土師器の多孔式瓶、把手付き大型鍋、初期須恵器の壺片や甕片が出土する。

6世紀末から1世紀の間は集落は形成されていないが、7世紀後半～8世紀後半にかけて、2×3間や3×6間の掘立柱建物跡や、突出型のカマドも検出する。その中でも7世紀末の83号竪穴住居跡からは円面硯が出土する。8世紀末～9世紀初頭には3軒の竪穴住居跡が検出され、それ以降は竪穴住居は無くなり、掘立柱建物へと代わっていく。12世紀までには溝4条、墓1基があるが遺構数は減少する。12世紀以降では、掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑、墓などを検出する。その中でも幅3m、深さ1.3mを測る17号溝はL字状に曲がる区画溝となり、領主の居館を囲む溝と想定する。またそれらの関係者と思われる墓からは白磁碗や龍泉窯系青磁碗などが出土する。

稻崎A・B遺跡（第6・7地点：うきは市吉井町大字新治 昭和62年度調査）

A遺跡からは縄文時代後期後半の西平式や、晚期前半の黒色磨研土器片が出土するが、それに伴う遺構は検出されていない。主に古墳時代前期の自然流路の大溝などがあり、そこから庄内式から布留式にかけての土師器の甕が出土する。B遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡や溝から須恵器片が出土するが、明治時代以降の水田改修を受け、遺構はあまりない。

堺町遺跡（第9A地点：うきは市吉井町大字生葉 平成元・2年度調査）

古代から中世にかけての溝などを検出する。その中でも8世紀後半の須恵器を出土した7号溝や玉縁口縁の白磁碗や龍泉窯系青磁碗が出土した12～13世紀頃の1号溝は、生葉荘の地割に沿う可能性を指摘する。この1号溝と同時期の水田跡や橋脚状遺構として0.5～0.8m間隔で並ぶ杭列を検出する。橋脚状遺構が埋没した後には、旧郡境に沿って作られた幅1.3mを測る、小角礫を敷き詰めた道路状遺構

もある。

大碇遺跡（第9A地点：うきは市吉井町大字生葉 平成元・2年度調査）

縄文時代～中世の複合遺跡である。縄文時代の遺構はないが、曾畠式、太郎迫式、御領式や晩期に属する遺物が出土する。弥生時代では前期後半～中期初頭の竪穴住居跡、土坑、溝、甕棺墓を検出する。竪穴住居跡は、中央に炉跡がある円形と、正方形又は長方形の大きく2つに分けられる。その内、円形プランの8号竪穴住居跡の炉跡は、加熱を受けた碧玉製管玉、突帯状に隆起した石に刻み目を入れた自然石、敲き石、石鎌が一緒に出土しており、祭祀的なものを意味する遺構である。土坑の大半は貯蔵穴で、その内2基の土坑からは完形の土器が出土しており、使用途中で埋没している。溝はV字状に細く深く掘りこまれるタイプとU字状に近い形状のタイプの2つがある。4つの溝が環濠となる可能性があるが、判然としていない。また4号溝のみ陸橋を検出する。甕棺墓は中期前半頃の成人棺2基と小児棺3基を検出する。なお、ここではまとまった土器が出土した土坑や溝から弥生時代の前期後半～中期初頭の編年図を想定する。古墳時代では7世紀後半代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑を検出する。竪穴住居跡のカマド形態は屋内型と半突出型の大きく2種類に分けられる。掘立柱建物跡の多くは、1×2間の小型の建物である。中世の遺構は少なく、13世紀後半代の掘立柱建物跡や井戸1基のみである。井戸は大部分を石組みで構築し、最下部に桶を敷設するもので、桶の底面中央からは完形の土師器皿と焼けた骨が出土し、井戸廃絶時の祭祀と考えられている。

鷹取五反田遺跡（第9B地点：うきは市吉井町大字鷹取 平成2・5・6年度調査）

弥生時代と古墳時代以降の遺跡である。弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴状遺構1基、円形周溝状遺構6基、貯蔵穴5基、土坑40基、甕棺墓24基、土壙墓2基、石棺墓1基を検出する。竪穴住居跡の多くは長方形で、中央に炉跡を挟むようにその長軸線上に主柱穴2本を持つ。甕棺墓はその内20基程が集中して検出され、墓域を形成する。また甕棺墓近くで検出された41号土坑では丹塗土器が大量に出土しており、甕棺墓に伴う祭祀行為後の廃棄土坑も検出される。その他、貯蔵穴や竪穴住居跡、土坑からは炭化米も検出する。

古墳時代以降では大きく5世紀前～中葉、6世紀中葉～末、8世紀中～後葉の3つの時期に分けられ、竪穴住居跡76軒、掘立柱建物跡7棟、土坑1基、土壙墓8基、溝16条を検出する。5世紀前～中葉では7軒の竪穴住居跡があり、その内4軒でカマドを検出する。112号竪穴住居跡からは住居廃絶後に、完形の須恵器大甕、土師器壺や壺部と脚部を外された高壺などを使った祭祀が行われている。6世紀中葉～末では、竪穴住居跡52軒と多くの住居跡を検出し、カマドの多くは北壁中央に設置するが、一部では西壁に設置する住居跡もある。屋内型と突出型のカマドの違いにより、住居の長さが1辺5～6mと3～4mとで、分かれている。大部分の溝もこの時期で、東西や南北方向に延びる。8世紀中～後葉では竪穴住居跡を15軒検出するが、ほとんどの住居跡で主柱穴がなく、カマドも突出型が多い。土壙墓からは7世紀代の須恵器が出土しており、竪穴住居跡の時期とは異なることから、近くの船越高原遺跡の集落の墓と考えられている。

船越高原A遺跡（第10地点：久留米市田主丸町大字船越 平成8～12・16年度調査）

ここでは2～3面にわたって遺構を検出し、弥生時代前期末～中期前半、中期後半～末の時期の竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡1棟、土坑77基、溝約50条、ピットなどを検出する。竪穴住居は大型の6×4mと小型の4m以下の2つに分けられ、一部の貯蔵穴からは堅果類が出土する。ここで出土した8点の弥生土器の甕は、外面口縁下に沈線を3条又は4条を螺旋状に巡らせる特徴がある。

古墳時代以降の遺構は竪穴住居跡 74 軒、掘立柱建物跡 7 棟、土坑 17 基、溝約 70 条、竪穴状遺構 5 基を検出する。4世紀、5世紀、6世紀中頃～8世紀前半、11世紀に分けられ、主に6世紀後半～7世紀初頭にかけての遺構が多い。5世紀の竪穴住居跡が 2 軒あり、107 号竪穴住居跡は、炭化材が多く残る焼失住居跡である。6世紀後半～7世紀初頭の 113 号竪穴住居跡では横長長方形のプランを呈する大型の住居跡となり、壁際に柱列が並ぶ畿内で検出される大壁造りの住居に似た遺構も検出する。竪穴住居跡は7世紀代には 1 辺 4 m 程の長方形や方形のプランが多いが、8世紀になると 1 辺が 3 ～ 5 m の方形プランが多くなる。カマドも突出型カマドが増えていく。古墳時代後期～奈良時代にかけては、粗い布目と格子目タタキを施す平瓦を出土する溝を検出する。

中世では、道路状遺構を検出する。数条の溝に直交する方向で、多数の波板状遺構が連続して連なる状況を検出する。集落から水田などへの道が想定されている。

船越二ノ上遺跡（第 11 地点：久留米市田主丸町大字船越 平成 6 ～ 9 年度調査）

弥生時代～古墳時代、古代～中世、近代の遺跡である。弥生時代の遺構は少なく、前期後半の遺構はないが刻目が付く甕のみの出土である。中期後半は土坑や自然流路があり、鋤先口縁の高坏や壺が出土し、後期からはピットのみであるが袋状口縁壺の一部を検出する。古墳時代では、前期の遺構として竪穴住居跡 1 基や土坑・溝から布留式段階の甕や器台が少量出土する。中期後半～後期にかけては、竪穴住居跡群を検出する。中期後半の竪穴住居跡では、カマド付近からミニチュア土器 5 点と覆土から土製模造鏡が 1 点出土するなど住居内祭祀を示す一例もある。後期の竪穴住居跡では、カマド形態が半突出や突出などがあり、カマド形態の時期的変化を示す好例である。その他、古代では 10 世紀頃の土師器坏や黒色土器などが出土した土坑や溝、11 世紀中頃～後半代の土師器坏や瓦器碗を出土した土坑などがある。その他、中世では 12 世紀代の井戸、近代では昭和 10 年代に埋没した旧河川跡も検出する。

松門寺 A 遺跡（第 13 地点：久留米市田主丸町大字常盤 平成 11 年度調査）

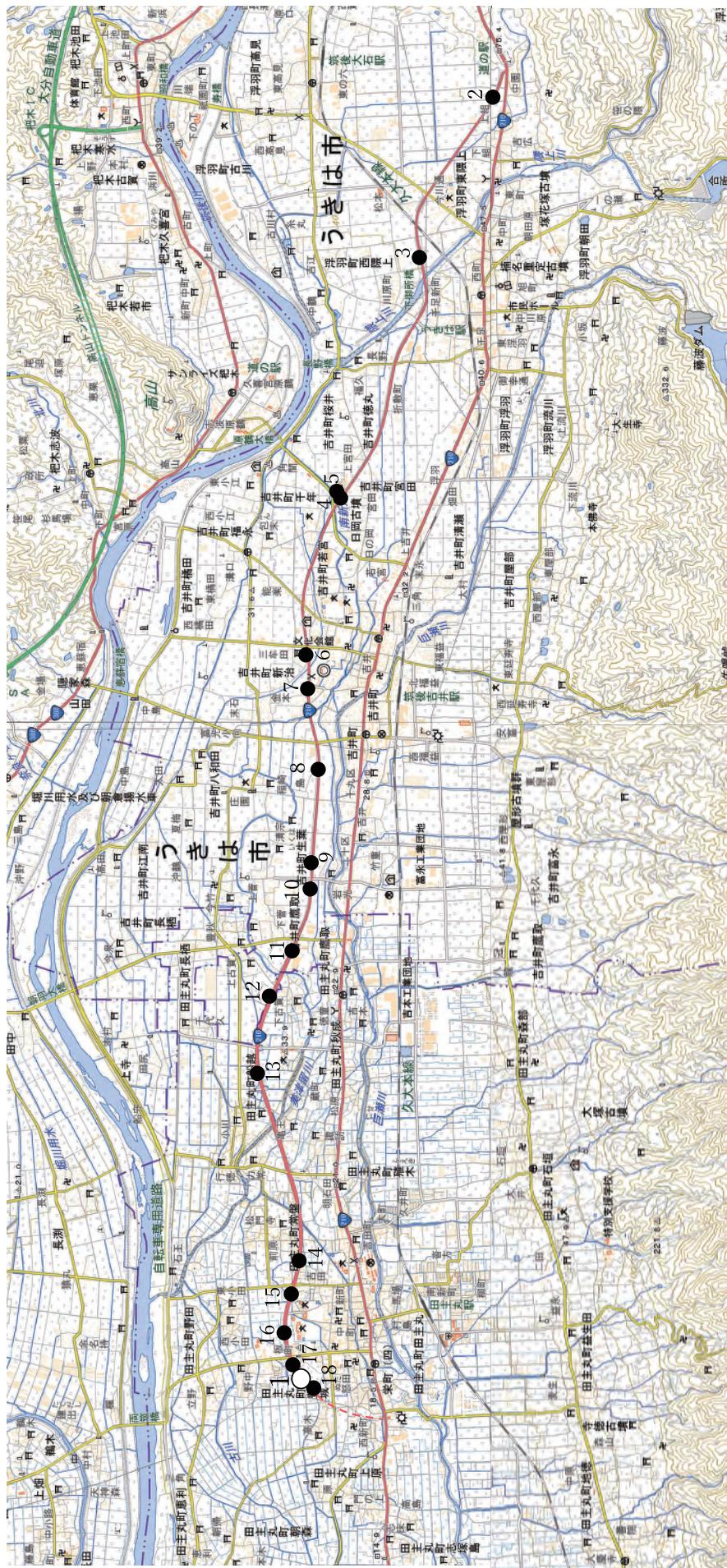
弥生時代後期～10世紀頃にかけての旧河道が遺跡の大部分を占めていて、目立った遺構は少ない。旧河道の両岸の堤防上には弥生時代後期、古墳時代中期、鎌倉時代の土坑や溝を検出する。古墳時代中期には粘土を採掘した掘り込みなども検出し、埋土の黒褐色土層からは初期須恵器のジョッキ形土器片も出土する。

玉田遺跡（第 14 地点：久留米市田主丸町大字常盤 平成 15 年度調査）

溝 1 条と旧河川を検出し、その堆積物からは弥生時代前期～中期初頭、後期中葉～古墳時代前期、古墳時代中期、古代～中世の遺物が出土する。出土した弥生時代前期～中期の土器の中には、口縁部内面に三角突帯が付く豊後下城式系の壺形土器 2 点がある。また、8世紀代の須恵器の高台付坏片 1 点は墨書き土器で「木」偏を書く。その他に中世の陶磁器も多く出土し、白磁や同安系・龍泉系青磁、瀬戸灰釉陶器の壺形土器片も出土する。

大的遺跡（第 14 地点：久留米市田主丸町大字田主丸 平成 12 ・ 13 年度調査）

弥生時代前期後半、古墳時代中期、奈良時代の遺跡が 3 面にまたがり、竪穴住居跡や土坑、掘立柱建物跡、溝と竪穴状遺構を検出する。1 面目の奈良時代の遺物は少ないが、6 号溝から 8 世紀前半の土器が出土する。古墳時代中期の 2 面目では、竪穴住居跡 6 軒を検出し、その内、2 号竪穴住居跡では屋内型のカマドが付く。須恵器は出土しないが、土師器壺・甕・鉢・坏などが住居跡からまとまって出土する。カマド出現期の集落を考える上で、良好な資料である。3 面目では弥生時代前期後半の板付 II 式頃の円形住居跡 13 軒を検出する。2 次調査では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての水田跡も検出する。



- 1 開戸遺跡 2 日永遺跡 3 西隈上中川原遺跡 4 塚堂遺跡 5 塚堂古墳 6 堂畠古墳 7 仁右衛門畠遺跡 8 稲崎A・B遺跡
 9 大碇遺跡 10 堤町遺跡 11 鷹取五反田遺跡 12 船越高原A遺跡 13 船越二ノ上遺跡 14 松門寺A遺跡 15 玉田遺跡 16 大大的遺跡
 17 日詰遺跡 18 新開遺跡

※国土地理院発行「甘木」「久留米」「吉井」「日田」を一部改変

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

る。その他、筑紫大地震（678年）の痕跡と思われる噴砂も確認する。

日詰遺跡（第14・15地点：久留米市田主丸町大字豊城 平成12・13・15年度調査）

1～3次調査を行い、弥生時代、古代、中世の遺跡が2面にまたがっている。弥生時代の遺構は少なく、前期後半～末頃の貯蔵穴3基と中～後期にかけての溝1条を検出する。古代の遺跡では、6世紀後半～9世紀前半にかけての掘立柱建物跡8棟、竪穴住居後53軒、土坑、溝などを多数検出する。掘立柱建物跡については遺物が少なく、詳細な時期の特定はできていない。竪穴住居跡は7世紀末～8世紀中葉にかけての住居跡が最も多く、8世紀中葉以降は竪穴住居跡は無くなる。その後、黒色土器が出土する8世紀末から9世紀前半にかけての土坑を2基検出する。中世の遺構はあまり多くはないが、11世紀中頃～12世紀前半にかけての井戸や土坑・溝を検出する。なお、ここでは不整形なピット状の掘り込みが連なる遺構と溝2条が並行に連なる2つの道路状遺構も検出する。2次調査では、近代の土坑からこの遺跡周辺にあった両筑軌道に使用された石炭殻や大量なガラス瓶も検出する。

新開遺跡（第15地点：久留米市田主丸町大字豊城 平成30・令和3年度調査）

2次に渡る調査で、弥生時代中期と古墳時代後期～8世紀までの2時期の遺跡である。1次調査では2面を確認し、弥生時代中期中頃～後半の遺構として竪穴住居跡4軒、土坑18基、溝4条を検出した。古墳時代後期以降の6世紀前半～8世紀までの遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑4基、溝1条を検出する。特に6世紀末～7世紀初頭にかけての遺構が多い。これら以外にも、2号溝と流路で黒色土器、3号溝で皇宗通寶を出土するなど新しい時期の遺構もある。

西隈上中川原遺跡（第19地点：うきは市浮羽町大字西隈上 平成16年度調査）

旧河川により、遺構の大部分は消失するが、弥生時代中期～後期の流路や落ち込み、古墳時代の溝を検出する。古墳時代前期の5号溝は緩やかな弧を描くことから、環濠の可能性もある。

以上、これまでのうきはバイパス関係の埋蔵文化財調査をまとめてみた。最初の塚堂遺跡の調査から45年経過し、関戸遺跡の調査と合わせて18遺跡がうきはバイパス関係の発掘調査において判明した。

表1 うきはバイパス調査地点一覧

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積 (m ²)	発掘調査面積 (m ²)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮羽	9. 日永	日永	19,000	16,800	S61	H4・5	6・7集
2	吉井	7. 塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54-57・59-61	S57-59・62	1-5集
3	吉井	7. 能楽		5,100	試掘のみ	H6		
4	吉井	6 7. 三牟田	堂畠	12,700	※ 14,000	H8・9・12-14	H13・15・16	17・20・23集
5	吉井	6. 新治	仁右衛門畠	8,400	8,115	H7-9	H11・12	12・14集
6	吉井	6. 稲崎 A	稻崎 A	6,300	1,300	S62	H9	9集
7	吉井	6. 稲崎 B	稻崎 B	4,900	530	S62	H9	9集
8	吉井	6. 清宗		2,400	試掘のみ	H1		
9A	吉井	5 6. 上菅 A	堺町・大礎	21,000	18,800	H1・2	H5	8集
9B	吉井	5 6. 上菅 B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	9・10集
10	田主丸	5. 船越 A	船越高原 A	25,000	10,920	H8-12・16	H11-13・19	13・15・16・25集
11	田主丸	5. 船越 B	船越二ノ上	20,000	15,155	H6-9	H10	11集
12	田主丸	5. 植木		19,200				
13	田主丸	5. 常盤	松門寺 A	15,000	1,900	H11	H13	18集
14	田主丸	5. 野田 A	玉田・大的・日詰1次	14,800	※ 6,920	H12・13・15	H14・19	19・21・25集
15	田主丸	5. 野田 B	日詰2・3次・関戸・新開	18,300	※ 11,335	H14・15・30・R3・4	H14～17・R4・6	22・24・26・27集 (本書)
16	田主丸	5. 野田 C		13,500				
17	浮羽	7. 朝日		2,400	試掘のみ			
18	浮羽			28,400				
19	浮羽		西隈上中川原遺跡	16,600	3,800	H16	H19	25集

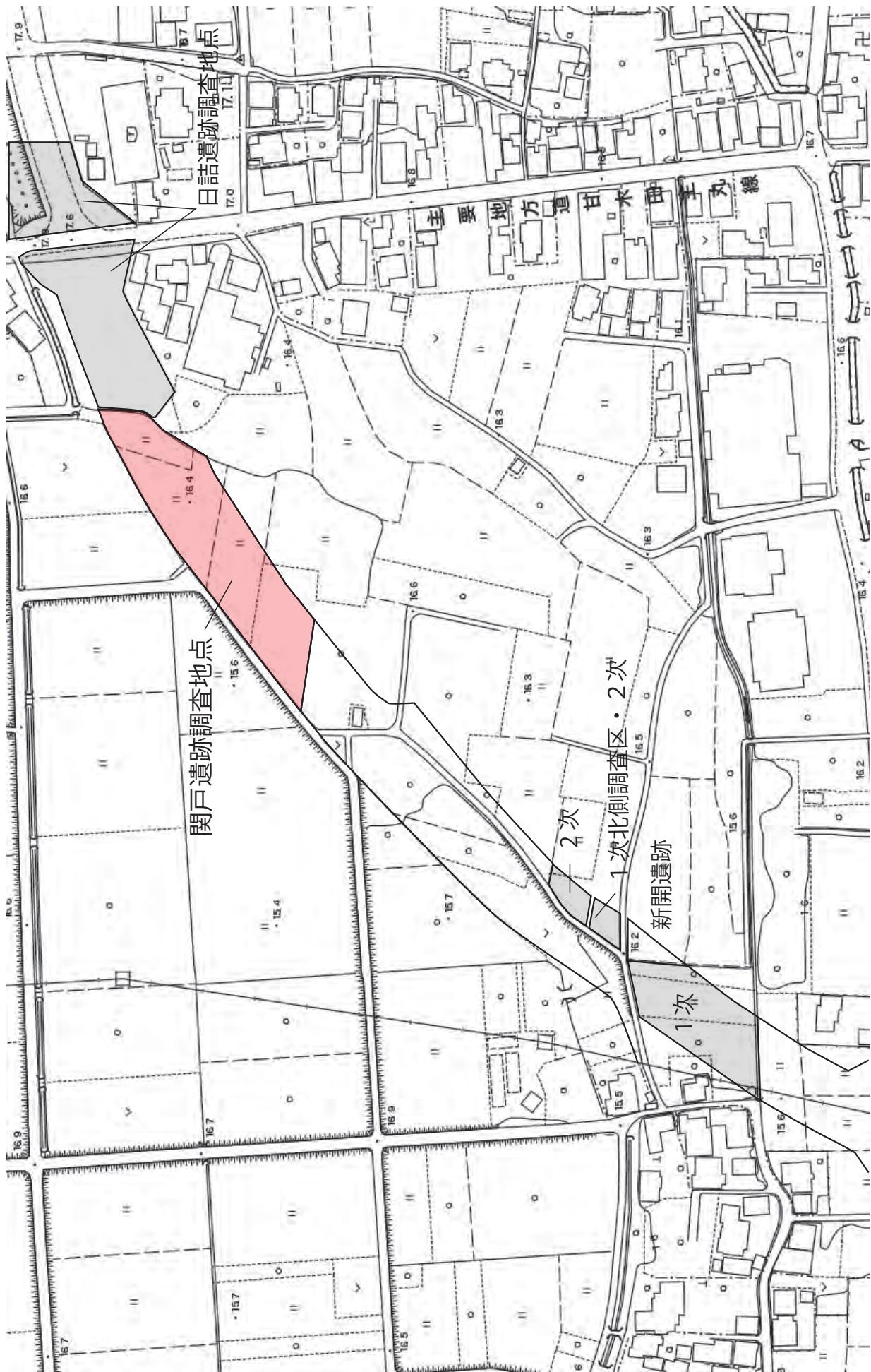
※複数面を計上する。

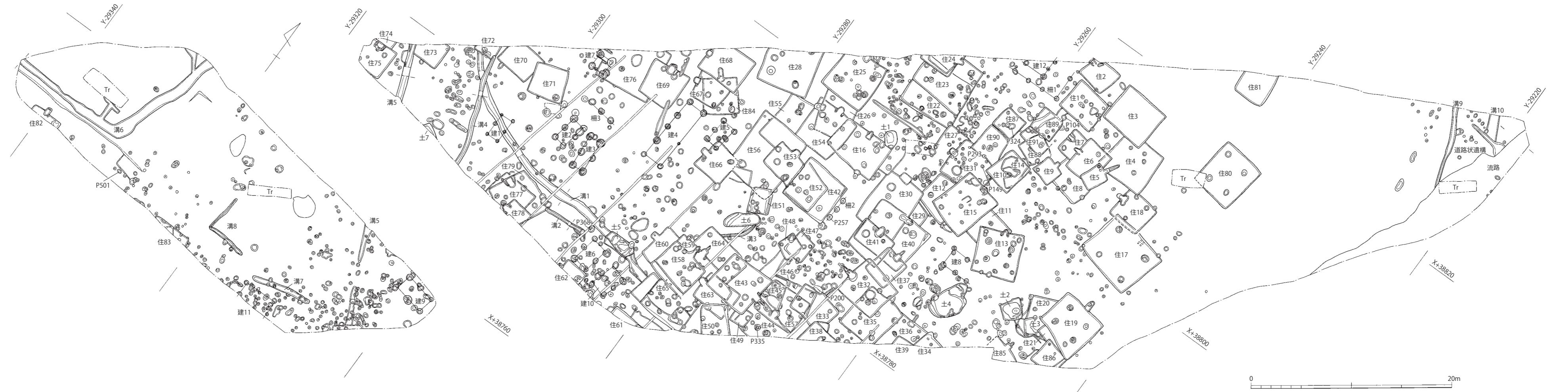
これまで、西は久留米市田主丸町～東はうきは市吉井町の地域において、知られていなかった弥生時代前期後半以降～後期後半、古墳時代、奈良時代、中世にかけての遺跡が集中して発見され、周辺の歴史の解明に寄与されている。

参考文献

- 馬田弘稔編 1983 「塚堂遺跡Ⅰ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
副島邦弘編 1984 「塚堂遺跡Ⅱ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会
佐々木隆彦編 1984 「塚堂遺跡Ⅲ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会
馬田弘稔編 1984 「塚堂遺跡Ⅳ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
馬田弘稔編 1988 「塚堂遺跡Ⅴ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集 福岡県教育委員会
緒方泉編 1993 「日永遺跡1」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会
緒方泉編 1994 「日永遺跡2」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会
水ノ江和同編 1994 「堺町・大碇遺跡」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集 福岡県教育委員会
水ノ江和同編 1999 「鷹取五反田遺跡Ⅰ上巻」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会
水ノ江和同編 1999 「鷹取五反田遺跡Ⅰ下巻 稲崎A・B遺跡」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集
福岡県教育委員会
水ノ江和同編 1999 「鷹取五反田遺跡Ⅱ上巻」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集 福岡県教育委員会
水ノ江和同編 1999 「鷹取五反田遺跡Ⅱ下巻」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集 福岡県教育委員会
吉田東明編 1999 「船越二ノ上遺跡」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集 福岡県教育委員会
吉田東明編 2001 「仁右衛門畠遺跡Ⅰ 古墳時代編」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 福岡県教育委員会
齋部麻矢編 2001 「船越高原A遺跡Ⅰ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第13集 福岡県教育委員会
吉田東明編 2001 「仁右衛門畠遺跡Ⅱ 弥生時代編」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第14集 福岡県教育委員会
進村真之編 2001 「船越高原A遺跡Ⅱ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第15集 福岡県教育委員会
進村真之編 2002 「船越高原A遺跡Ⅲ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第16集 福岡県教育委員会
重藤輝行編 2002 「堂畠遺跡Ⅰ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集 福岡県教育委員会
今井涼子編 2002 「松門寺A遺跡」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第18集 福岡県教育委員会
今井涼子編 2003 「大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第19集 福岡県教育委員会
大庭孝夫編 2004 「堂畠遺跡Ⅱ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第20集 福岡県教育委員会
今井涼子編 2004 「大的遺跡Ⅱ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第21集 福岡県教育委員会
小澤佳憲編 2005 「日詰遺跡Ⅱ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第22集 福岡県教育委員会
大庭孝夫編 2005 「堂畠遺跡Ⅲ 上巻」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 福岡県教育委員会
大庭孝夫編 2005 「堂畠遺跡Ⅲ 下巻」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 福岡県教育委員会
小澤佳憲編 2006 「日詰遺跡Ⅲ」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第24集 福岡県教育委員会
小澤佳憲編 2008 「玉田遺跡 船越高原A遺跡Ⅳ 西隈上中川原遺跡」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告
第25集 福岡県教育委員会
坂元雄紀編 2024 「新開遺跡」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第26集 福岡県教育委員会

第3図 開戸遺跡調査区位置図 (1/2,500)





第4図 関戸遺跡遺構配置図（1/300）

III 発掘調査の記録

1. 遺跡の概要

関戸遺跡は久留米市田主丸町豊城に所在し、東側には主要地方道甘木田主丸線（県道33号線）が南北に走る。遺跡は東側に日詰遺跡、南西側には新開遺跡に挟まれた位置にある。調査が行われた令和3（2021）年は周辺の田地の圃場整備が行われた後であり、旧地形は失われている。平成18（2006）年の日詰遺跡の報告書によると、日詰遺跡は筑後川の埋没河川に隣接する低段丘の先端部で、標高16.7～17mに位置しており、水路を挟んだすぐ西側に位置する関戸遺跡では標高16m前後とやや低くなる。

関戸遺跡は東側から流路跡を検出し、日詰遺跡との間を分断するように流れていた。その付近に関しては、遺構はあまりないが、流路跡の埋土から中世の陶磁器が出土する。そこより西側にかけては、遺構密度が高くなり、古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物跡12棟、竪穴住居跡92軒を検出する集落遺跡となる。さらに西側へ進むにつれて、住居跡は少なくなり、新開遺跡に向かって下がる浅い谷状地形となる。

遺跡は通路を挟んで、大きく北調査区と南調査区に分けた。北調査区はさらに4つに分割して調査を行った。まず北調査区の東側から表土剥ぎを始め、6月15日に調査を開始した。9月28日の空撮終了後、弥生時代の遺構の有無を調べるためにさらに掘り下げたが、遺構は確認できなかった。通路を挟んだ南調査区については、北調査区と並行して調査を行った。こちらも全面発掘ができず、3回に分けて調査を行った。調査は1月14日から表土剥ぎを開始した。2回反転した後、3月9日に南調査区の埋め戻しを終了した。北調査区は3月10日、最後の空撮終了後に埋め戻しを開始し、25日に埋め戻しを終了して全ての調査を終えた。今回の調査では掘立柱建物跡12棟、柵列3条、竪穴住居跡92軒、土坑7基、溝10条と流路跡を検出し、古墳時代後期～奈良時代にかけての遺物がパンケース109箱出土した。

2. 遺構

1. 掘立柱建物跡

柱穴の埋土は地山に近い暗褐色土になり、何度も検出を試みたが、柱痕跡はほとんど確認できなかつた。出土遺物は小片が多く、建物跡の時期を検討する上で不明な点も多いが、5号・6号・8号・9号掘立柱建物跡が7世紀後半以降の建物跡であることから、他の建物跡も同時期以降の可能性がある。

1号掘立柱建物跡（第5図 図版6）

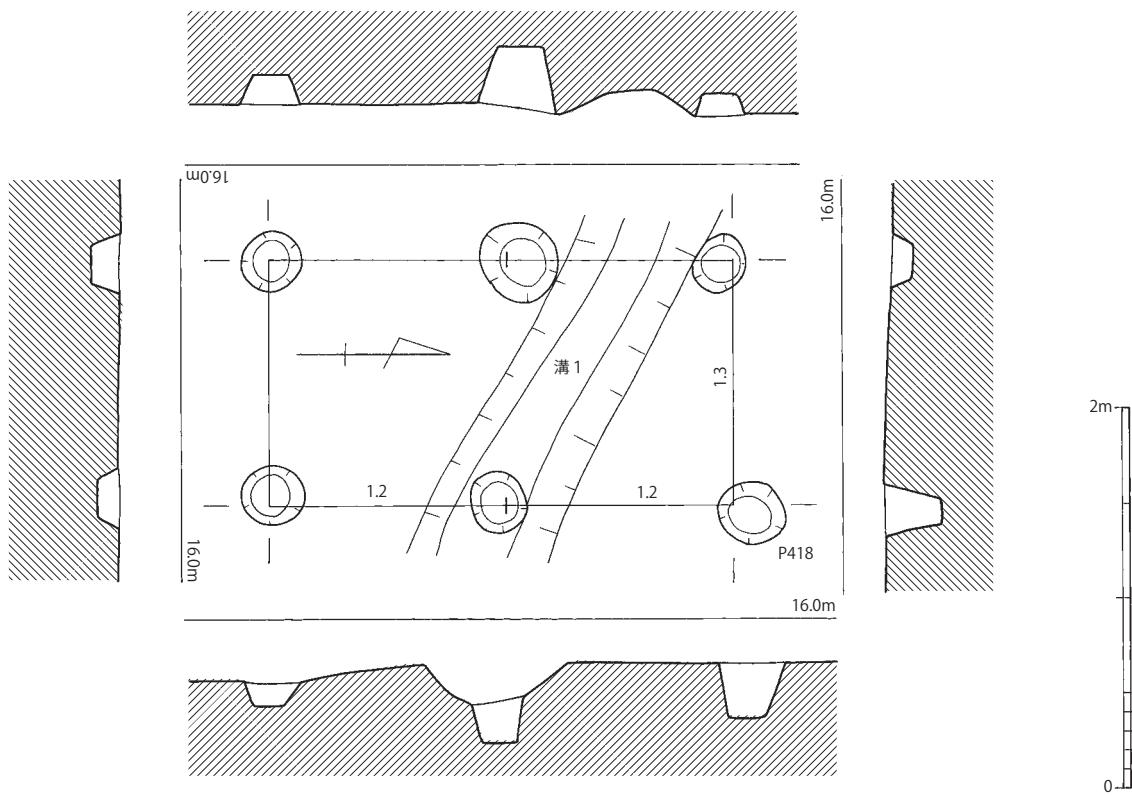
調査区西壁側に位置し、1号溝に切られる。南北に伸びる方向で建てられた1×2間の建物跡で、柱間はほぼ同じ間隔で1.2～1.3mを測る。柱穴は径0.3～0.4m、深さ0.3mを測る。何度も検出を試みたが、柱痕跡は検出されなかつた。

出土遺物はほとんどなく、P418から土師器片が出土する。

2号掘立柱建物跡（第6図 図版6）

1号掘立柱建物跡の北東側に位置し、P476の柱穴に切られる。北北東に伸びる方向で建てられた1×2間の建物跡で、柱間は1.3～1.4mを測る。柱穴は径0.5～0.7m、深さ0.15～0.4mを測る。

出土遺物は須恵器や土師器の小片のため、図化はできない。



第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

3号掘立柱建物跡（第6・10図 図版6）

2号掘立柱建物跡東側に位置し、その柱穴を切るが、埋設暗渠に一部の柱穴を切られる。北北西に伸びる方向で建てられた 1×2 間の建物跡で、柱間は1.4、1.6、1.7 mを測る。柱穴は径0.6～0.7 m、深さ0.2～0.4 mを測る。一部の柱穴の柱痕部分は径0.2～0.3 mを測り、さらに一段下がる。

第10図1はP473出土の須恵器坏の底部片である。口縁部を欠損するので、身の底部とした。外面底部には「×」を描き、その交差部分に「—」が接するヘラ記号を施す。

4号掘立柱建物跡（第7図 図版6）

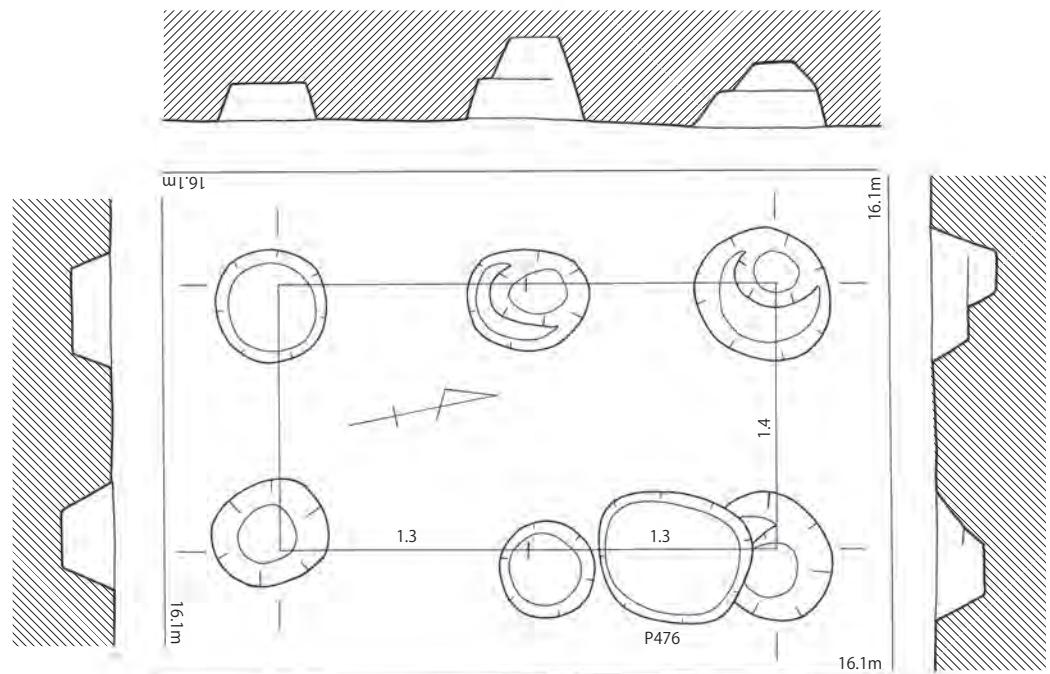
3号掘立柱建物跡の北東に位置し、北北東に伸びる方向で建てられた 1×4 間の建物跡である。東側は1基の柱穴しか検出していないので、柵列の可能性が高い。柱間は1.6、1.8、2.0 mを測るが、P401のみ柱間が3.0 mと西側の柱列とは異なる。柱穴は径0.5～0.65 m、深さ0.2～0.5 mを測る。柱痕部分は径0.3～0.4 mを測り、さらに一段下がる。

出土遺物は須恵器や土師器の小片のため、図化はできない。

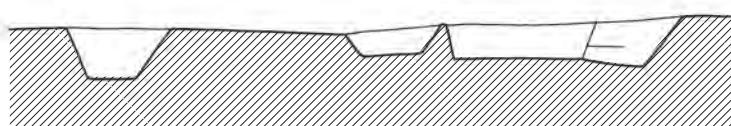
5号掘立柱建物跡（第8・10図 図版6）

4号掘立柱建物跡の東側に位置し、66号竪穴住居跡を切る。北北東方向に建てられた 1×4 間の建物跡で、柱間は1.3、1.4 mを測る。柱穴は径0.4～0.7 m、深さ0.15～0.5 mを測る。柱痕部分は径0.2 m測り、さらに一段下がる。

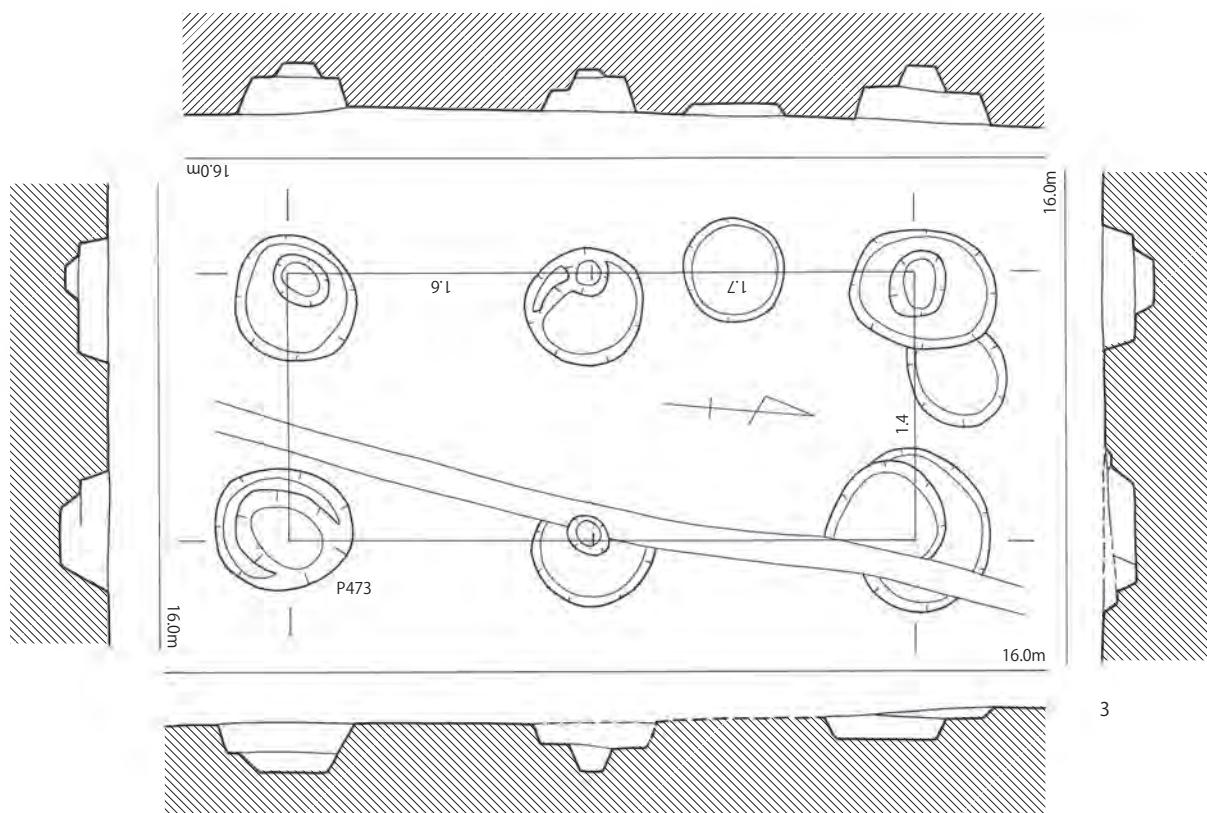
第10図2はP602出土の須恵器坏の口縁部片である。焼成はやや不良のため、色調は灰白色を呈す。



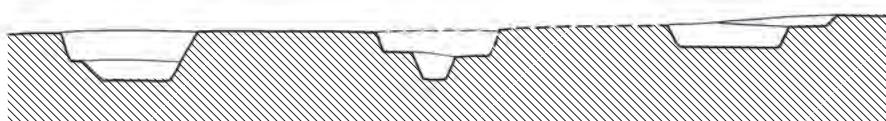
2



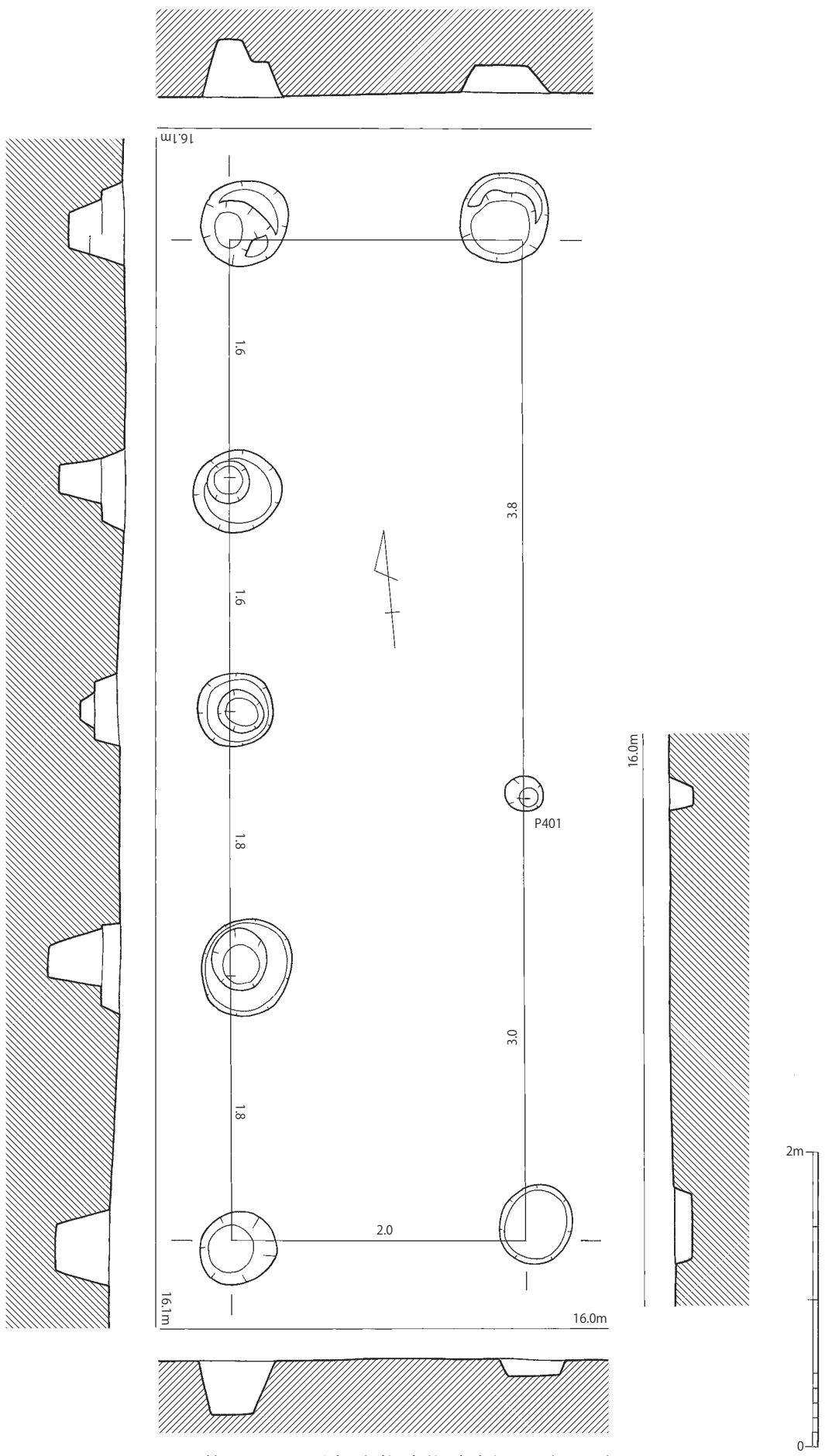
0 2m



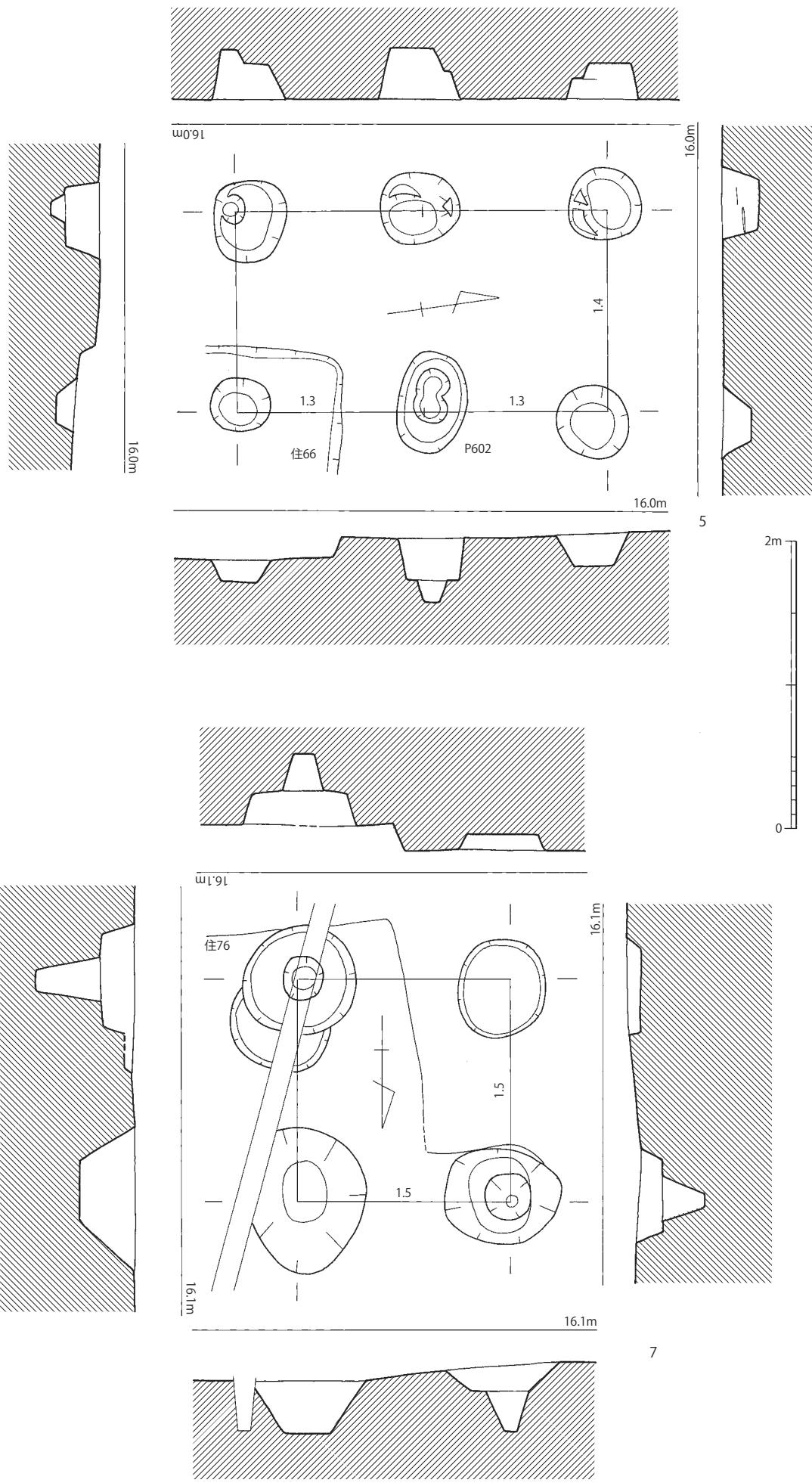
3



第6図 2・3号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第7図 4号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第8図 5・7号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

建物跡の時期は出土した須恵器高台付坏片から、7世紀後半以降か。

6号掘立柱建物跡（第9・10図 図版7）

調査区南西隅に位置する。北東方向に建てられた1×2間の建物跡で、柱間は1.3、1.7mを測る。柱穴は径0.4～0.8m、深さ0.15～0.45mを測る。柱痕部分は径0.2～0.3mを測り、さらに一段下がる。

第10図3はP361出土の須恵器坏蓋片である。撮みは低い鉢状であるが、中央部分は尖る。4はP357出土の須恵器坏片で、小片のため身としたが、蓋の可能性もある。5はP363出土の土師器甕片で、外湾する口縁部片である。調整は外面に刷毛目、内面は横方向のケズリである。

建物跡の時期は、出土した須恵器坏蓋片と土師器甕片から7世紀後半以降か。

7号掘立柱建物跡（第8図 図版7）

2号掘立柱建物跡の北側に位置し、76号竪穴住居跡を切る。北方向に建てられた1×1間の建物跡で、柱間は1.5mを測る。柱穴は径0.8～1.0m、深さ0.1～0.7mを測る。柱部分はさらに一段下がる。

出土遺物は須恵器や土師器の小片のため、図化はできないが、76号竪穴住居跡が7世紀後半以降なので8世紀代の建物跡の可能性がある。

8号掘立柱建物跡（第10図）

調査区中央の南側に位置し、13号竪穴住居跡の西側で検出する。13号竪穴住居跡との切り合いは不明で、北東の柱穴は検出できずに掘り飛ばした可能性がある。北方向に建てられた2×1間の建物跡で、柱間は1.4、1.6、1.8mを測る。柱穴は径0.4～0.6m、深さ0.1～0.3mを測る。柱痕部分は径0.2m程、さらに一段下がる。

第10図6はP191出土の須恵器高台付坏片で、口縁部は欠損する。高台は体部との境目に付き、高台端部は外へ伸びる。

建物跡の時期は、出土した須恵器高台付坏片から7世紀後半以降か。

9号掘立柱建物跡（第10・11図 図版7）

西側調査区の東隅に位置し、一部の柱穴は他のピットに切られる。北東方向に建てられた2×1間の建物跡で、柱間は1.5、1.7mを測る。柱穴は径0.4～0.7m、深さ0.2～0.4mを測る。

第10図7はP562出土の土師器甕の口縁部片で、ゆるやかに外湾し、内面には稜が付かない。

建物跡の時期は、出土した土師器甕片から7世紀後半以降か。

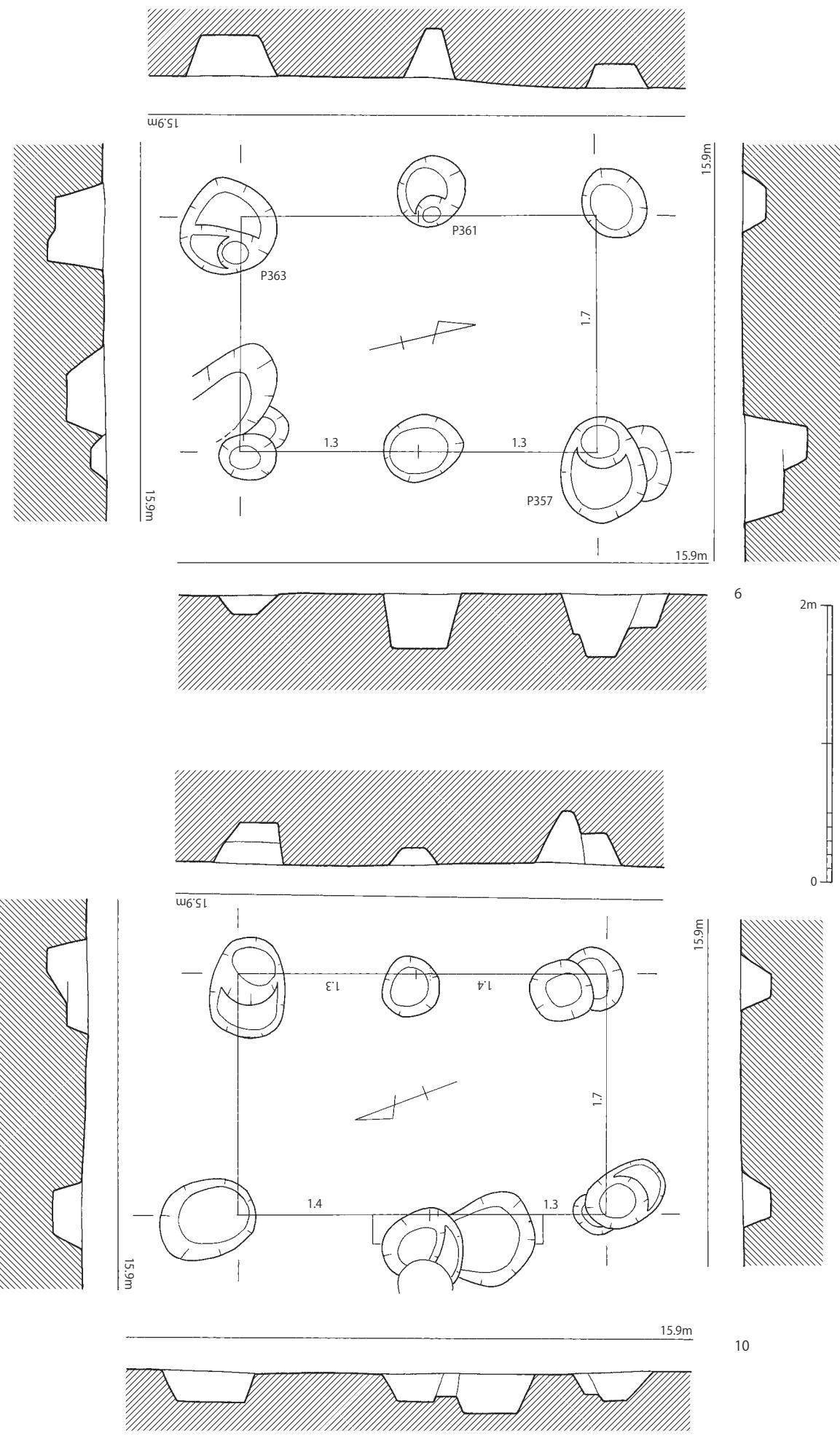
10号掘立柱建物跡（第9図 図版7）

6号掘立柱建物跡の東側に位置し、一部の柱穴は他のピットに切られる。北東方向に建てられた1×2間の建物跡で、柱間は1.3、1.4、1.7mを測る。柱穴は径0.4～0.7m、深さ0.2～0.3mを測る。

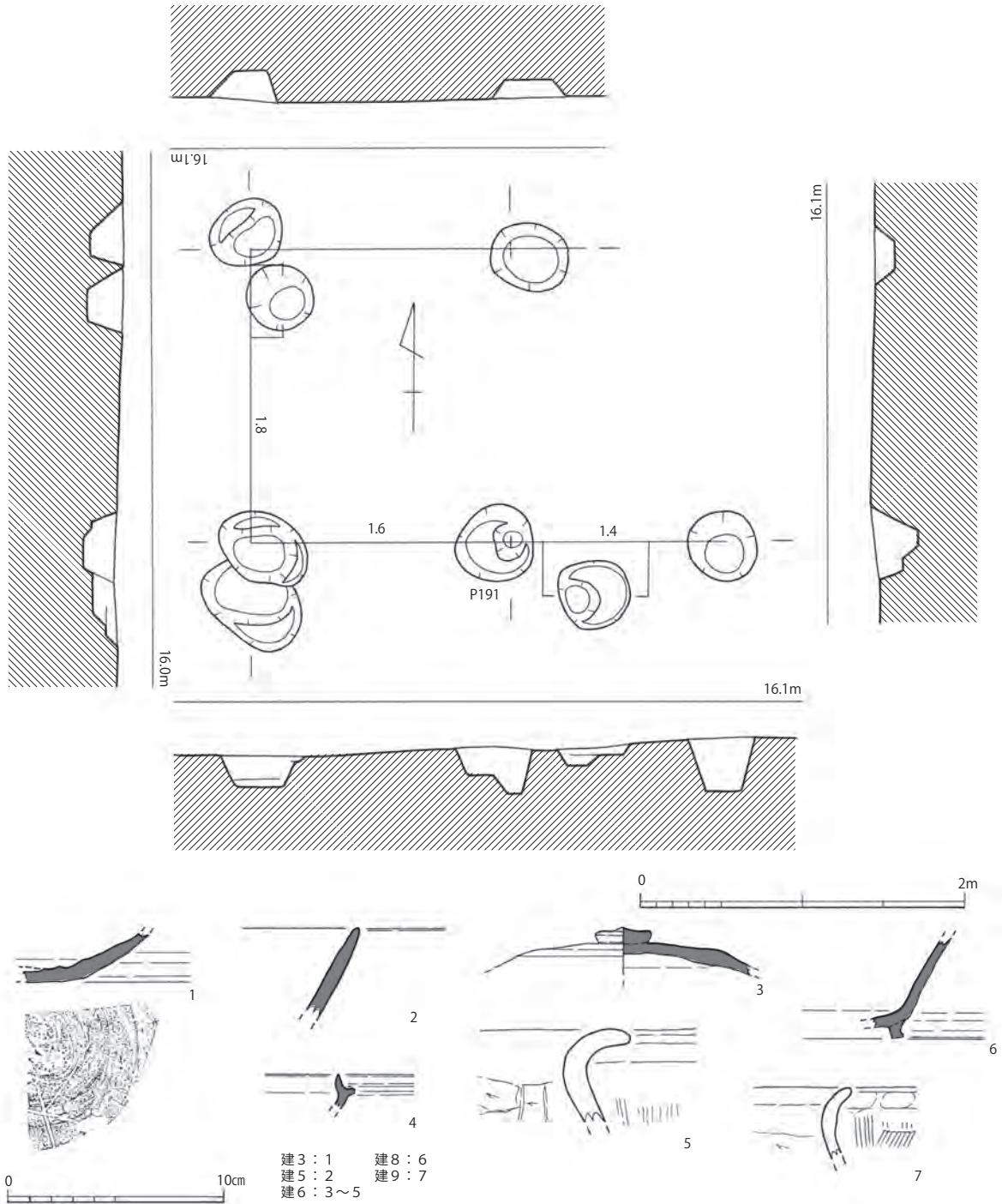
出土遺物は須恵器や土師器の小片のため、図化はできない。

11号掘立柱建物跡（第11図）

9号掘立柱建物跡の南西側に位置し、コの字状に柱間が巡る。北北東方向に建てられた2×1間の



第9図 6・10号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



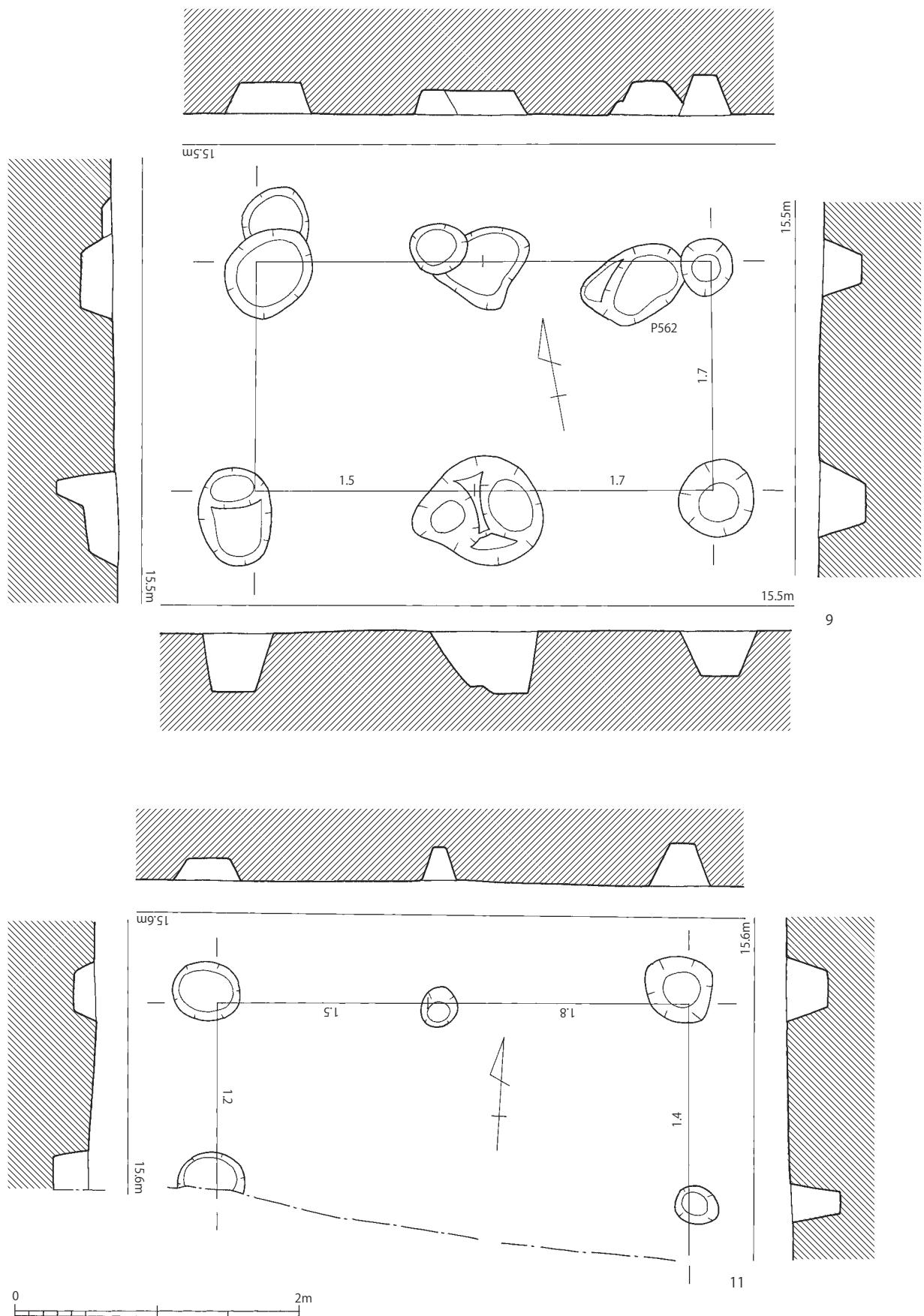
第10図 8号掘立柱建物跡および3・5・6・8・9号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/40、1/3)

建物跡としたが、南側は柱穴を検出していないので、柵列の可能性が高い。柱間は 1.2 ~ 1.8 m を測る。出土遺物は須恵器や土師器が小片のため、図化はできない。

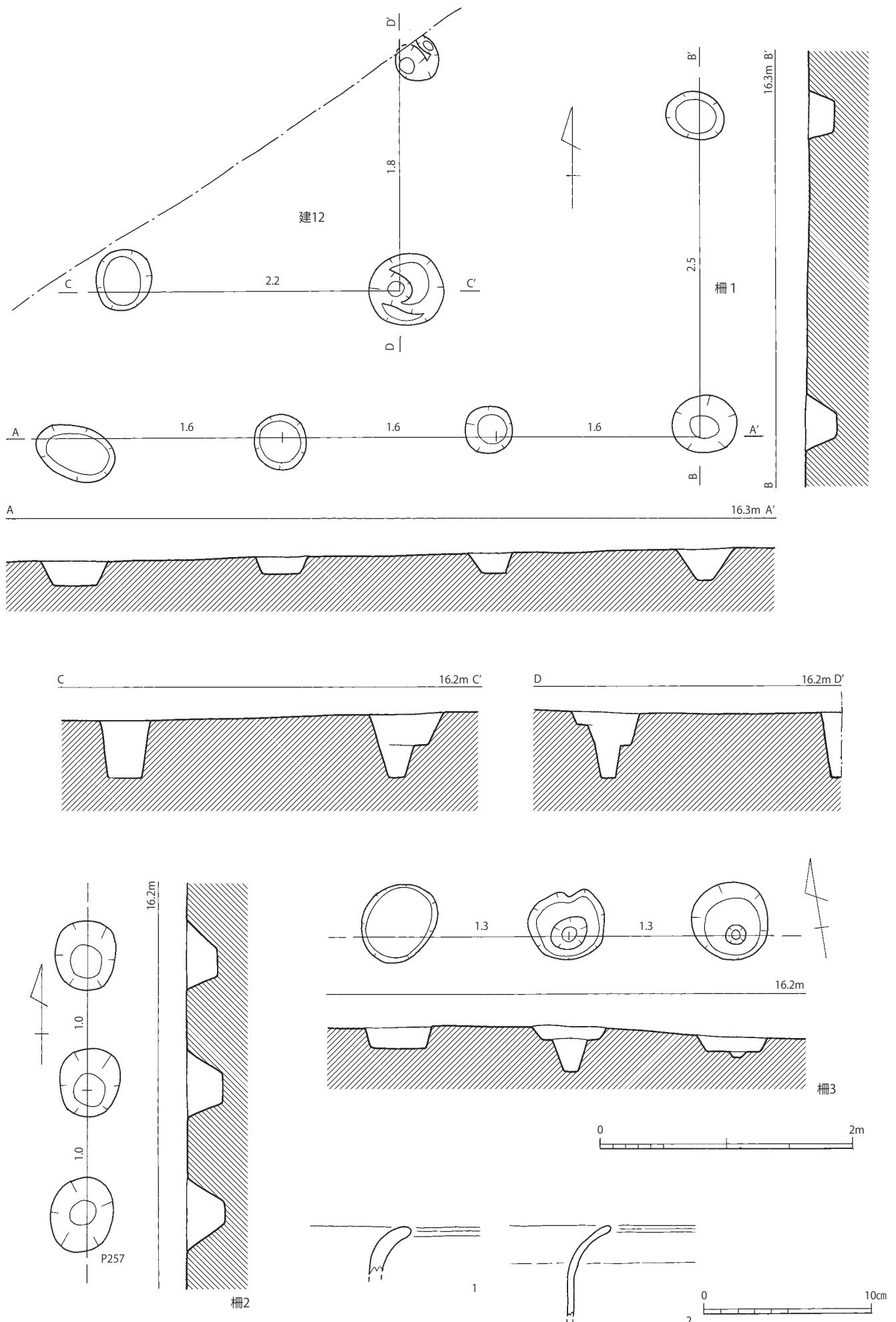
12号掘立柱建物跡（第12図 図版7）

調査区北壁の中央に位置し、壁際で検出したため、全てのピットを検出できていない。南北方向に長く建てられた 1 × 2 間以上の建物跡となる可能性がある。柱穴は円形で、0.35 ~ 0.6 m、深さ 0.5 m を測り、柱間は南北で 1.8 m、東西で 2.2 m を測る。

土師器の小片が出土するが、図化はできないため、建物跡の時期は不明である。



第11図 9・11号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第12図 12号掘立柱建物跡、1~3号柵列跡および2号柵列跡出土土器実測図 (1/40、1/3)

2. 構列跡

1号構列跡（第12図 図版7）

12号掘立柱建物跡の南側に位置し、その建物跡を囲むように1m外側にL字状に検出した柱穴列である。柱穴は円形～長円形状で、径0.35～0.5m、深さ0.15～0.25mを測る。柱穴はその建物跡と同方向に柱穴列は並び、南北方向で1間以上、東西方向で3間以上を検出する。柱間は1.6m、2.5mを測る。

土師器の小片が出土するが、図化はできないため、構列跡の時期は不明である。

2号構列跡（第12図）

42号竪穴住居跡の東側に位置し、住居跡に沿うように並んだ柱穴列である。柱穴は長円形で径0.4～0.55m、深さ0.3mを測る。南北方向に2間分を検出し、柱間は1.0mを測る。

第12図1と2はP257出土の土師器甕片で、口縁部はゆるやかに外湾する。

構列跡の時期は、出土した土師器甕片から7世紀後半以降か。

3号構列跡（第12図 図版7）

2・3号掘立柱建物跡の北側に位置し、東西方向のやや南寄りに柱穴列が並ぶ。柱穴は円形～不整形で、径0.6m、深さ0.2m以下を測る。2基の柱穴には柱痕跡が残り、円形で径0.1～0.25m、深さ0.05～0.25mを測る、柱間は1.3mを測り、2間分検出する。北側にも同じような柱穴があるが、柱列が少しずれていることと柱痕跡を確認できなかったので除外した。

建物跡の時期は、土器が出土していないため不明である。

3. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第13・15図 図版8・43）

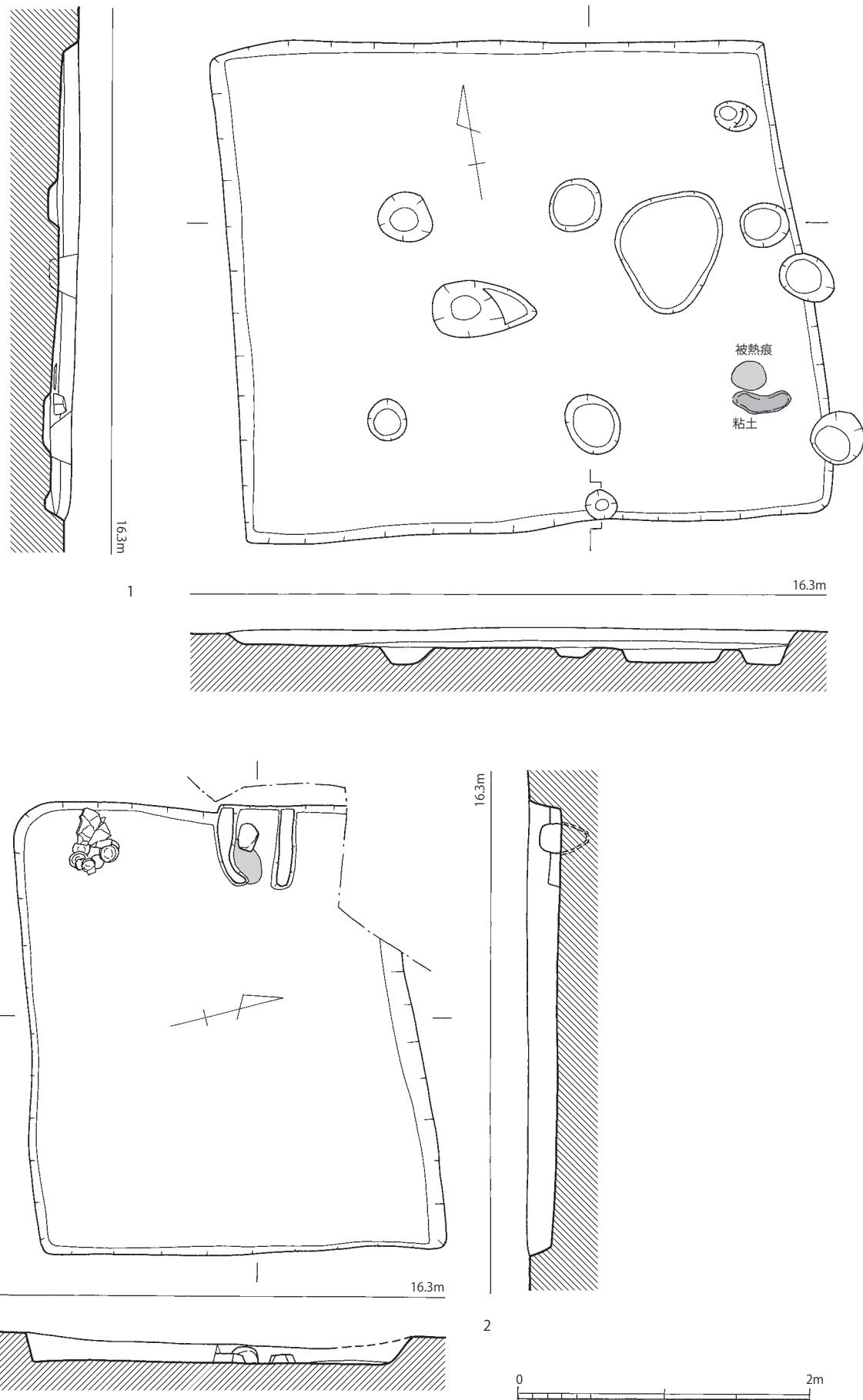
調査区東側に位置し、掘り方は東西に長い長方形の住居跡を確認した。南北3.4m×東西4.0m、深さ0.15mを測り、中央には主柱穴と思われる4つの柱穴を確認した。柱穴は円形～楕円形状で径0.3～0.4m、深さ0.15m未満であった。南東隅近くにはカマドの可能性がある0.2～0.25mの楕円形状の被熱痕跡と0.4×0.1mの硬化した灰白色粘土の固まりを確認した。

第15図1は須恵器壺蓋片で、天井部のみ残存する。撮みは、平坦な鉢状になる。2は土師器壺で、全体的に薄手に作られている。体部下位で屈曲し外面に稜が付く。復元口径15.6cmを測る。3～5は土師器甕片である。3と4は小形で、体部はあまり張らない。5の口縁部は外湾して頸部で窄まり、内外面に稜が付く。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。復元口径15.0cm、16.0cm、27.0cmを測る。

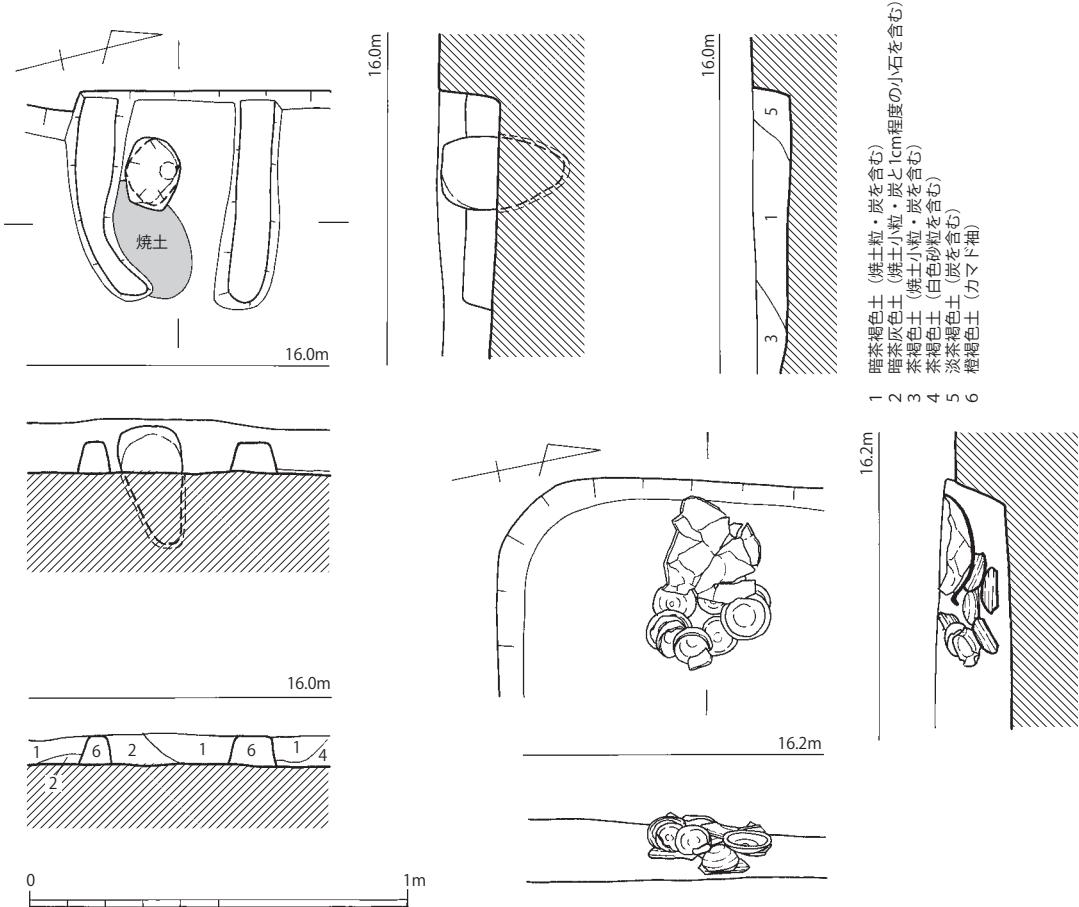
住居跡の時期は、出土した土器から8世紀前半か。

2号竪穴住居跡（第13～15図 図版8・43）

1号竪穴住居跡の北側に位置し、調査区壁際で検出した住居跡である。東西方向に長い長方形で、北西隅は調査区外になるため、未検出であるが、東西3.05m×南北2.8m、深さ0.2mを測る。住居内には主柱穴を検出できなかった。南西隅の住居壁の近くには、土器が集中して出土しており、この遺跡を代表とする一括資料となるものである。土器は、土師器甕と須恵器壺が重なる状態で出土し、その内、須恵器壺身の2点は口縁部を意図的に打ち欠いていた。カマドは西壁中央付近に検出したが、主柱穴は



第13図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第14図 2号竪穴住居跡カマド、土器出土状況実測図 (1/20)

確認できなかった。

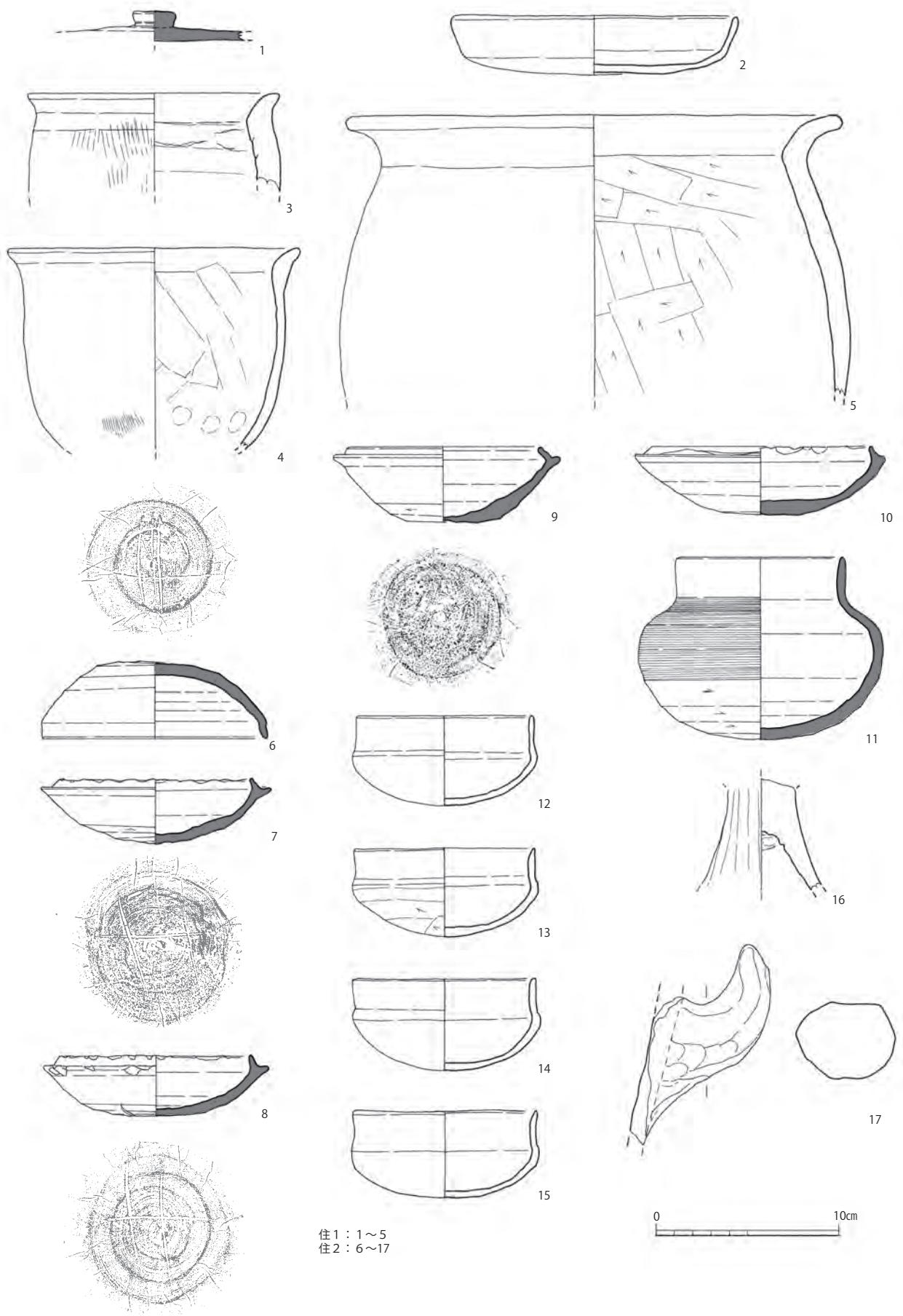
カマドは住居壁に直接貼り付けた造り付け型である。長さ 0.55 m、幅 0.1 m 前後、高さ 0.15 m の白色粘土で作られた両袖が残存し、中央には支脚が残存していた。支脚の大きさは長さ 0.2 m 前後、高さ 0.3 m を測り、平らな部分を上にし、先の尖った部分を下にして 0.15 m 程を埋設して設置していた。なお、カマド内の前面は焼土が堆積していた。

第15図 6～11は須恵器である。6は壺蓋で、外面の口縁付近で折れて、口縁端部は垂直になる。内面の横ナデの痕跡は明瞭である。7～10は壺身である。7と8は口縁端部を打ち欠いている。調整は内外面とも横ナデであるが、外面底部付近のみヘラケズリを施す。外面底部に「升」の字状のヘラ記号を描く。口径は 12.2cm、10.4cm、10.5cm、10.6cm、11.5cm を測る。11は壺である。口縁は垂直に立ち、体部中位で最大径を測る。外面体部はカキ目とヘラケズリ、内面は横ナデを施す。12～17は土師器である。12～15は壺で、底部は丸みを持つが、口縁部が垂直に立つことから身と考えた。外面体部は横方向のケズリを施し丸くする。口径 9.7cm、9.8cm、10.0cm、10.0cm を測る。16は土師器の高壺脚部片で、外面は垂直方向に削ることで円形の脚部を形作る。17は土師器の甌の把手である。把手の断面は潰れた橢円形状を呈する。

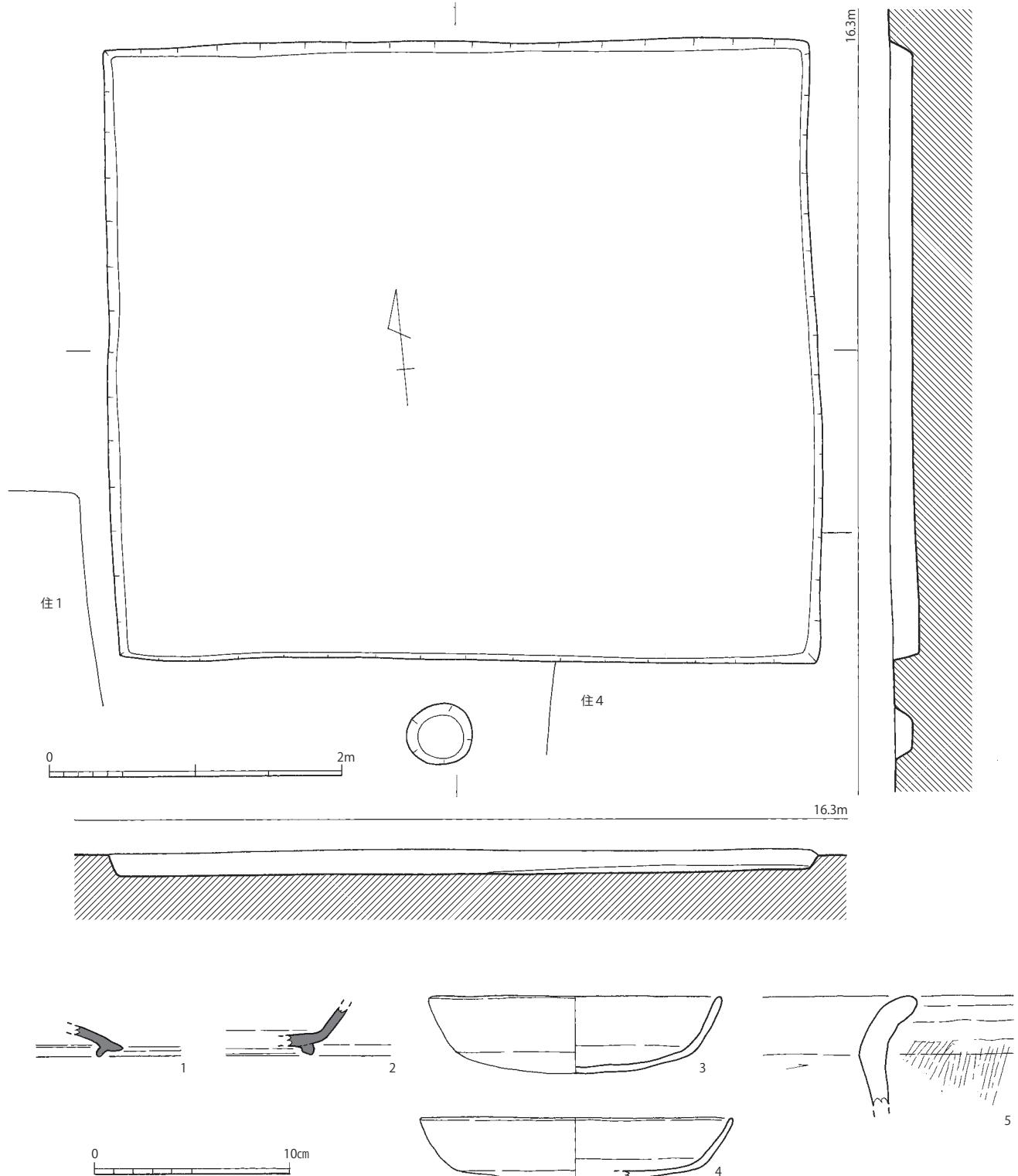
住居跡の時期は、出土した須恵器壺や土師器壺の形状から 6世紀末～7世紀初頭になり、関戸遺跡の中でも最も古い時期の住居跡の一つである。

3号竪穴住居跡（第16図 図版9）

1号竪穴住居跡の東側に位置し、南東側は4号竪穴住居跡を切る住居跡である。掘り方は東西に長い



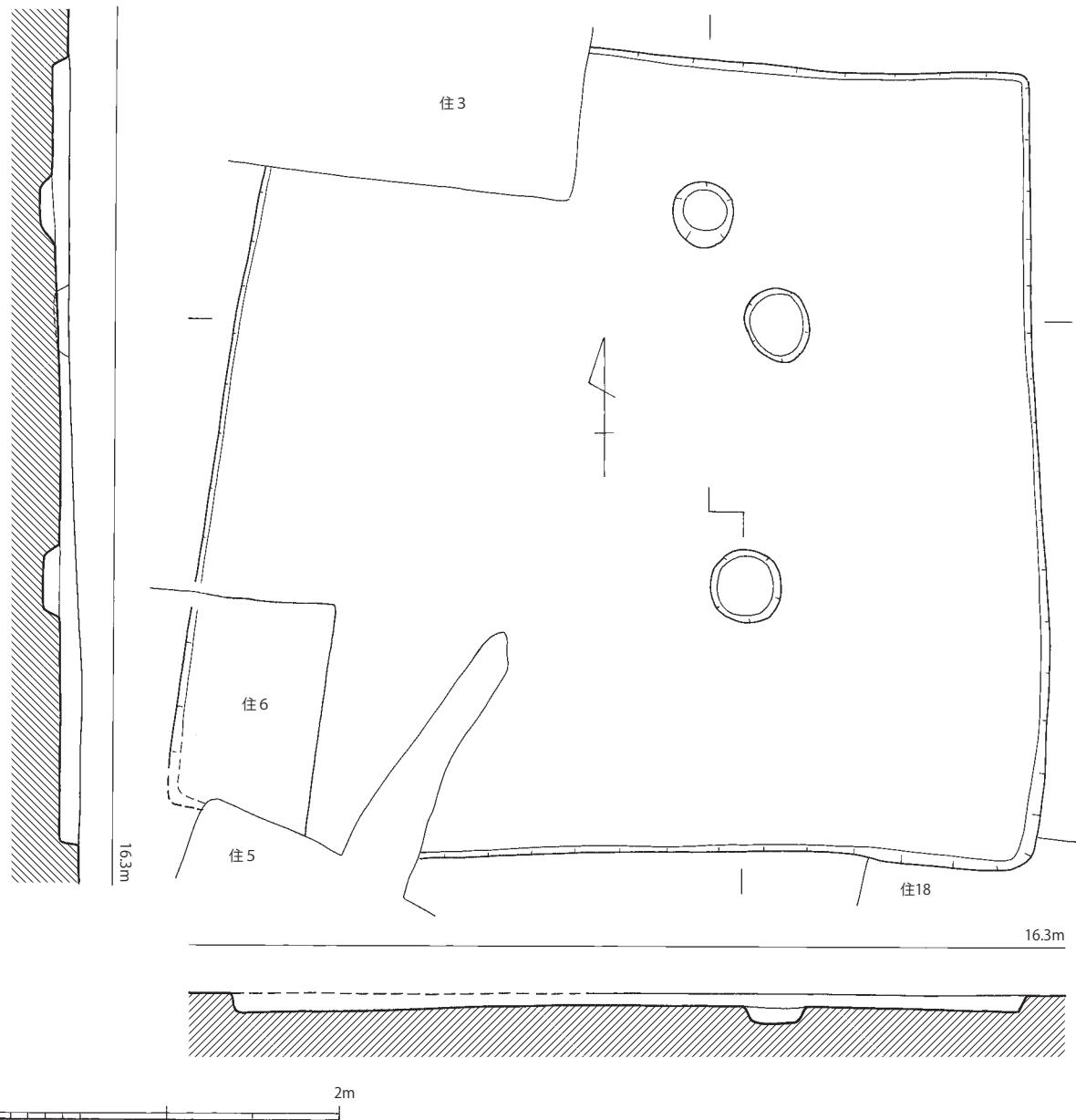
第15図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/ 3)



第16図 3号堅穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)

長方形で南北 $4.25\text{ m} \times \text{東西 } 4.85\text{ m}$ 、深さ 0.15 m を測る。ピットは住居内部ではなく、住居外にいくつかのピットを確認することはできたが、主柱穴になるようなものは検出できなかった。長さが 5 m 近い大型の住居跡である。カマドは確認できなかった。

第16図1は須恵器壊蓋片である。口縁部と受け部が短いので、蓋として使用か。2は須恵器高台付壊片である。高台端部は僅かに外へ伸びる。3と4は土師器壊である。3の底部は中央付近に丸みを持つ。4の底部は平底に近い形状で、僅かに丸みを持つ。共に内外面の調整は摩滅して不明である。口径 15.0 cm 、復元口径 16.0 cm を測る。5は土師器甕片で、口縁部は外反し、内面に稜が付く。調整は外面に刷毛目、



第17図 4号竖穴住居跡実測図 (1/40)

内面はケズリである。

住居跡の時期は、かえりのある須恵器壊蓋片があるが、土師器壊などから8世紀前半か。

4号竖穴住居跡（第17図 図版9）

3号竖穴住居跡の南東側に位置し、3号・5号・6号竖穴住居跡に北側と南西側を切られ、18号竖穴住居跡を切る住居跡である。調査区東側には流路があり、その影響を受けてこの住居から東側では住居跡は少なくなる。住居の形状は西壁が東壁より内側に入り込むくずれた長方形で、南北4.55m×東西5.1mを測る。深さが0.1m以下と浅く、住居跡の内部から主柱穴と思われる2つのピットを確認したが、これも深さが0.1m以下と浅い。

出土遺物は図化できるものはなかったが、3号竖穴住居跡に切られるのでそれ以前の住居跡となる。

5号竖穴住居跡（第18・21図 図版9・10・43）

4号竖穴住居跡の南側に位置し、北側の4号竖穴住居跡と西側の6号竖穴住居跡を切る住居跡である。

形状は長方形で、南北 2.35 m × 東西 1.85 m を測る。深さは 0.3 m で、地山をさらに 0.1 m ほど掘り下げて貼床を施していた。住居内部のピットは少なく、北側の隅に浅い柱穴 2 基を検出したが主柱穴とは考えられない。また南側の隅に被熱痕跡を確認したので、別の住居跡があったのかもしれない。

カマドは北東壁の中央に設置した突出型といわれるカマドになる。焚口側には径 0.2 m 以下の楕円形の被熱痕跡があるが、カマドの袖は確認できなかった。カマドは突出部分で長さ 1.65 m、幅 0.45 m 以下になる。焚口側の深さは 0.2 m で、煙道側に向かって 0.1 m 以下と浅くなる。煙の排出口からは土器が出土し、出土位置から考えてこれを蓋として使用していた可能性がある。埋土は暗褐色や暗茶褐色土で、地山との判別はしにくい。

第 21 図 1 は須恵器高台付坏片である。高台断面は四角形で低い。2 と 3 はカマドの煙出し部から出土した土師器坏で、口縁部は外側に大きく開く。器高は低く、底部は平底である。調整は外面底部のみヘラ切りで、あとはナデである。口径 16.2cm と 17.0cm を測る。4 は土師器甕の口縁部片で、大きく外反して開く。調整は外面に刷毛目、内面はケズリを施す。

住居跡の時期は、出土土器から 8 世紀末頃か。

6 号竪穴住居跡（第 18・19・21 図 図版 9・10）

5 号竪穴住居跡の西側に位置し、4 号竪穴住居跡を切り、5 号竪穴住居跡に南東壁側を切られた住居跡である。南北方向に長い長方形で、東西 3.0 m × 南北 3.6 m を測る。深さ 0.15 m とこれも浅い。住居内には北壁中央付近に径 0.3 ~ 0.35 m、深さ 0.35 m のピット 1 基のみを検出した。これが住居に関連する可能性がある。

カマドは西壁中央に設置した突出型のカマドである。焚口側には両袖が残り、袖の内側には焼土が残る。煙道は伸びていた可能性もあるが、検出面を掘り下げすぎて確認できなかった。カマドの大きさは長さ 0.9 m、幅 0.65 m、深さ 0.05 m を測る。袖は長さ 0.3 m、幅 0.15 m、高さ 0.1 m 以下で残存し、焚口が窄まるように作られる。

第 21 図 5 は須恵器高台付坏片で、高台は低く、端部は外に開く。6 ~ 9 はカマド出土の土師器で、6 ~ 8 は甕片である。いずれも口頸部は「く」字状で外湾する。8 のみ口縁端部が平たく外へ伸びる。調整は口縁部はナデであるが、体部は外面に刷毛目、内面はケズリである。復元口径 23.0cm、25.0cm、28.0cm を測る。9 は鉢片で、底部は欠損する。形状はすり鉢状で、口頸部付近で肉厚になり、外へ大きく開く。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。復元口径 29.0cm を測る。

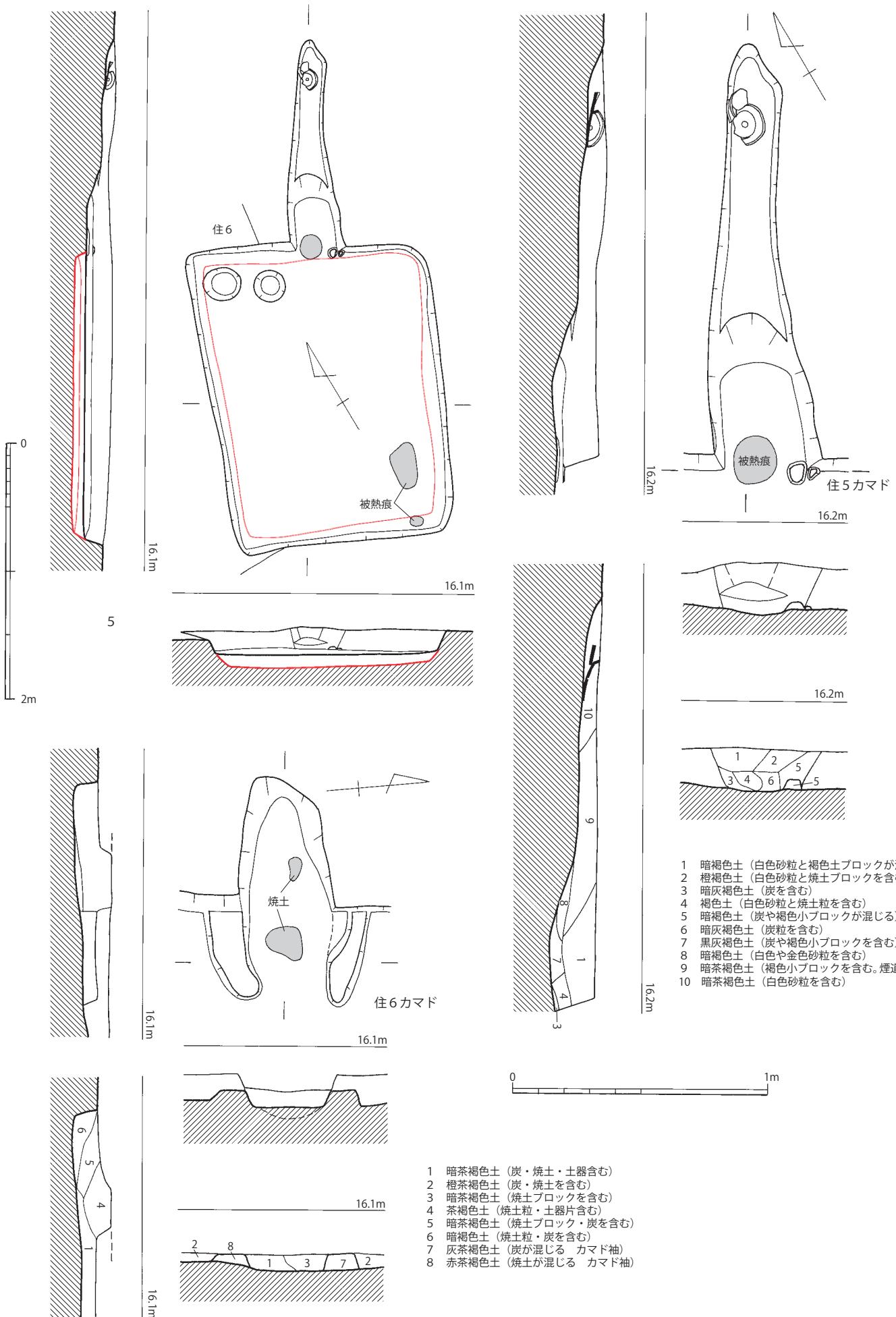
住居跡の時期は、7 号竪穴住居跡を切り、須恵器高台坏片や土師器甕片から 8 世紀前半か。

7 号竪穴住居跡（第 19・21 図 図版 10）

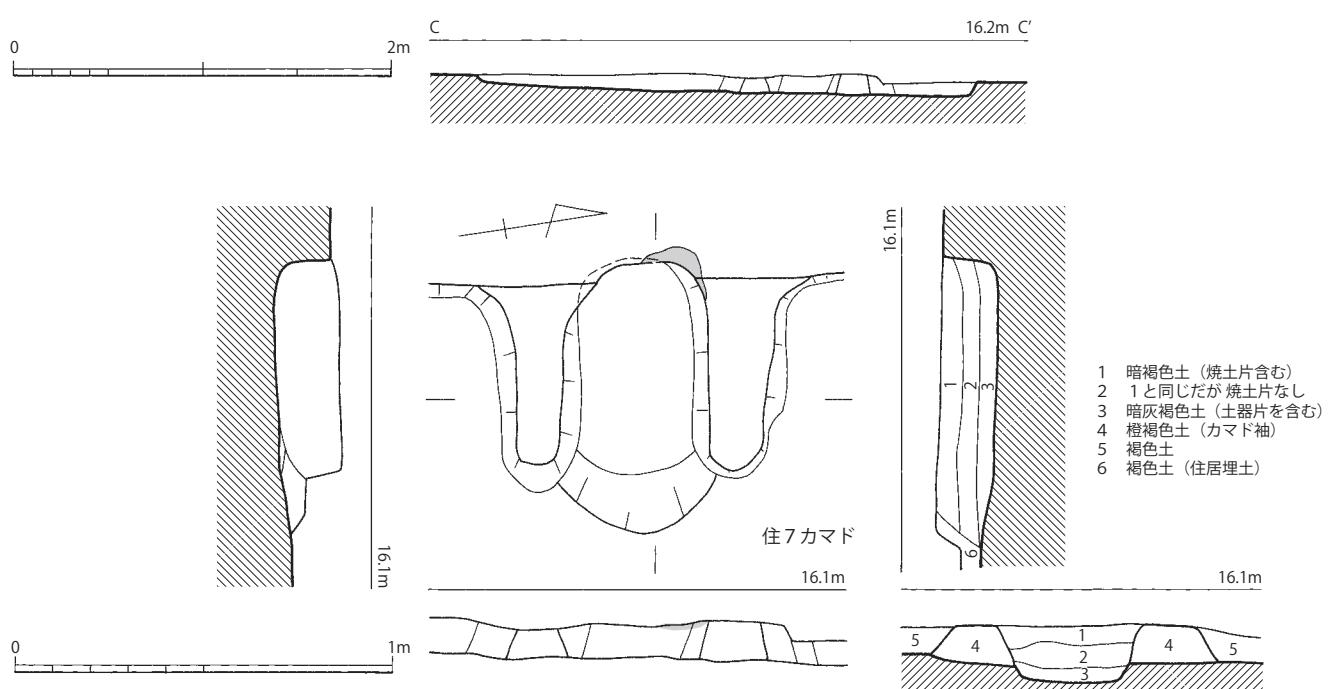
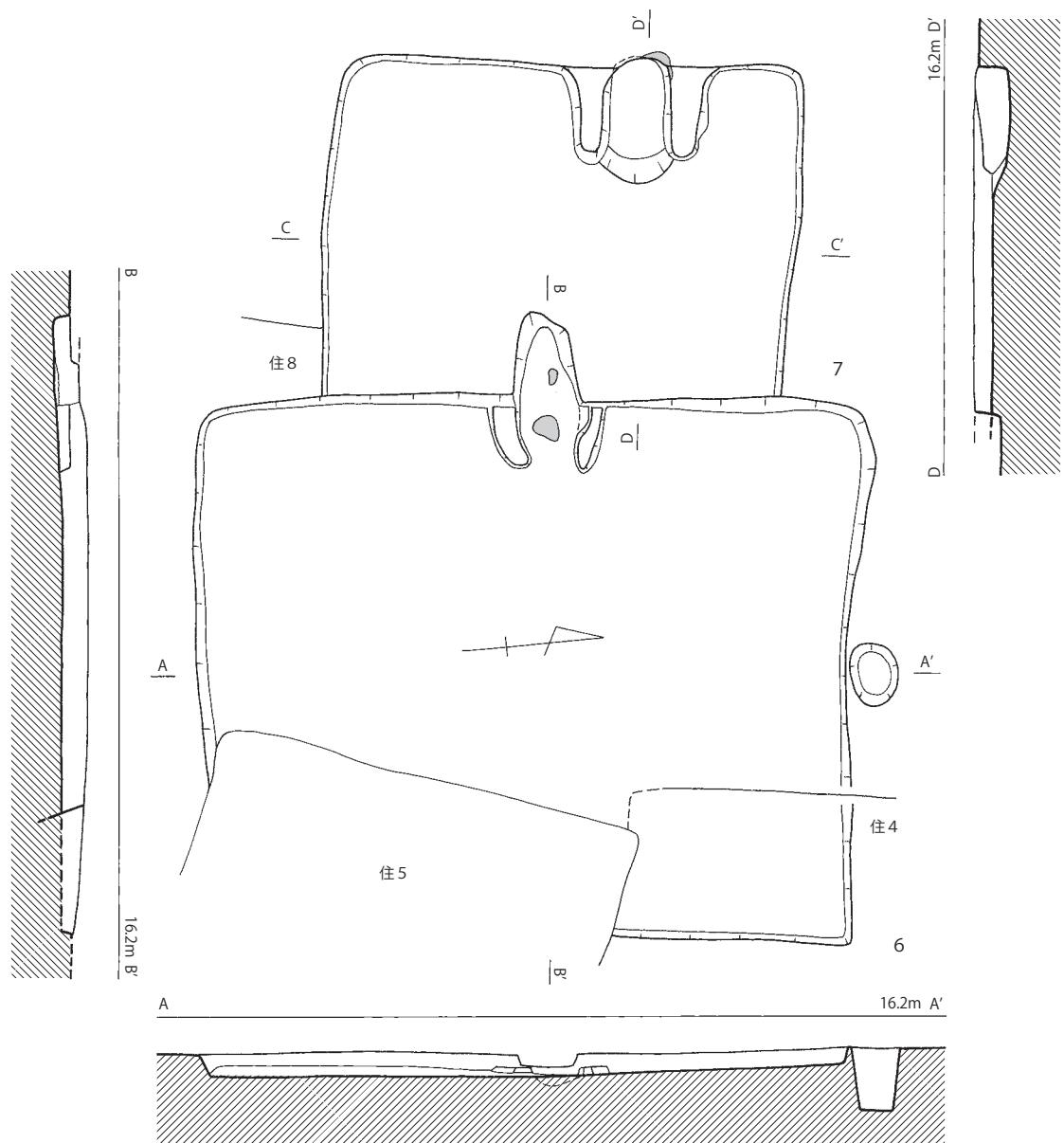
6 号竪穴住居跡の西側に位置し、その住居跡に東壁側を切られた住居跡である。6 号竪穴住居跡より 1 m 程幅は狭く、東西 1.9 m × 南北 2.65 m を測る。深さは 0.15 m 以下とこれも浅い。住居内からはピットは検出されなかった。

カマドは東壁側の北寄りに設置された造り付け型で、長さ 0.7 m、幅 0.85 m、深さ 0.1 m を測る。両袖は被熱を帯びて変色した橙褐色土でやや硬化し、壁面に対して垂直方向に一直線に伸びる。長さ 0.55 m 以下、幅 0.3 m、厚さ 0.1 m 以下を測る。

第 21 図 10 はかえりのある須恵器坏蓋で、撮みは低い宝珠状で、口縁部には受け部がある。口径 15.0



第18図 5号竪穴住居跡、5・6号カマド実測図 (1/40、1/20)



第19図 6・7号竪穴住居跡、7号カマド実測図 (1/40、1/20)

cmを測る。11は土師器坏片で、底部を欠損する。全体的に肉厚な作りで、口縁直下で折れ曲がり、底部に向かって丸みをもつ。12は土師器鉢片で、第21図9と同様な形状である。調整は外面に刷毛目、内面にはケズリを施す。復元口径28.0cmを測る。

住居跡の時期は、かえりのある須恵器坏蓋や土師器の坏の形状から7世紀末か。

8号竪穴住居跡（第20・21図）

7号竪穴住居跡の南側に位置し、北側を5号～7号竪穴住居跡に南西側を9号竪穴住居跡に切られた住居跡である。掘り方は北側を切られているが、南北2.75m以上×東西4.1mを測るので長方形状を呈するか。深さは0.3m以下を測るが、0.15mの厚さで貼床を施す。住居内には中央にある柱穴以外に主柱穴となるピットは検出できなかった。東壁と南壁中央にもピットがあり、これが主柱穴になるのかもしれない。なお、カマドは検出していない。

第21図13は須恵器高台付坏片である。高台は高く、端部は外へ伸びる。14と15は須恵器壺片である。14は口縁部片で、端部は内側に折れて、窄まる。15は肩部片で、外面の屈曲部の上部に、沈線状の凹みがある。内外面はナデである。16は土師器坏で、器高は4.0cmと他の坏より深くなる。内面には僅かにミガキが残る。復元口径14.6cmを測る。

住居跡の時期は、5号～7号・9号竪穴住居跡に切られることと、出土土器から7世紀後半か。

9号竪穴住居跡（第20・21図 図版11）

8号竪穴住居跡の西側に位置し、その住居跡を切る。掘り方は南北2.1m×東西2.3mを測り、やや東西に長い長方形である。深さ0.15mと浅く、住居内には主柱穴と考えられるピットは南西隅に1基しか検出できなかった。

カマドは突出型で、北壁中央に設置し、煙道部やカマドの袖は検出できなかった。焚口部は長さ0.4m、幅0.45m、深さ0.15m以下を測る。底面中央には0.2m幅で硬化した焼土を検出した。

第21図17は土師器甕又は鉢の口縁部片である。口縁部は大きく外反する。18は土師器甕の把手である。断面はやや崩れた楕円形状を呈する。

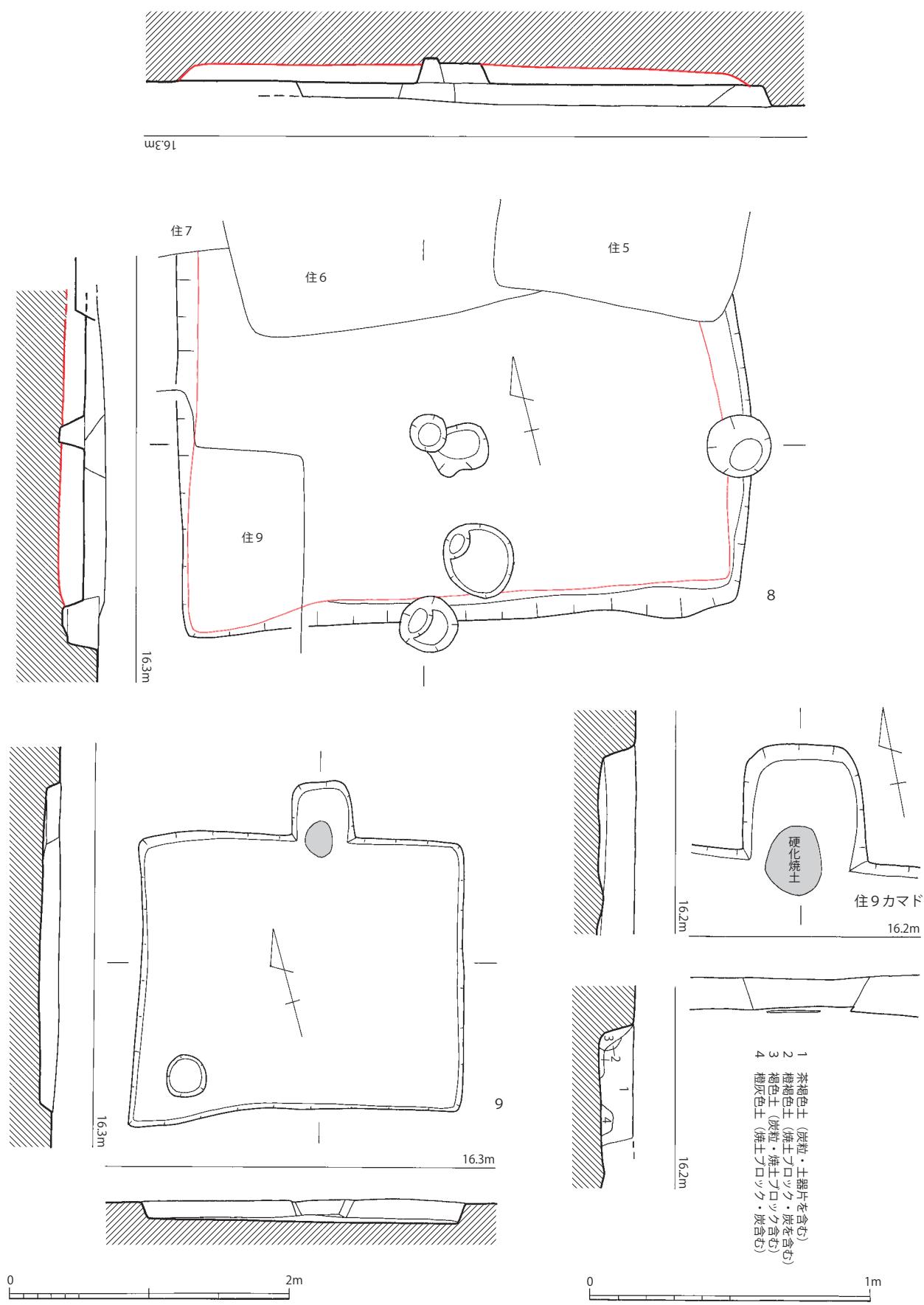
住居跡の時期は、8号竪穴住居跡を切ることや出土土器から8世紀後半以降か。

10号・14号竪穴住居跡（第22図 図版11・47）

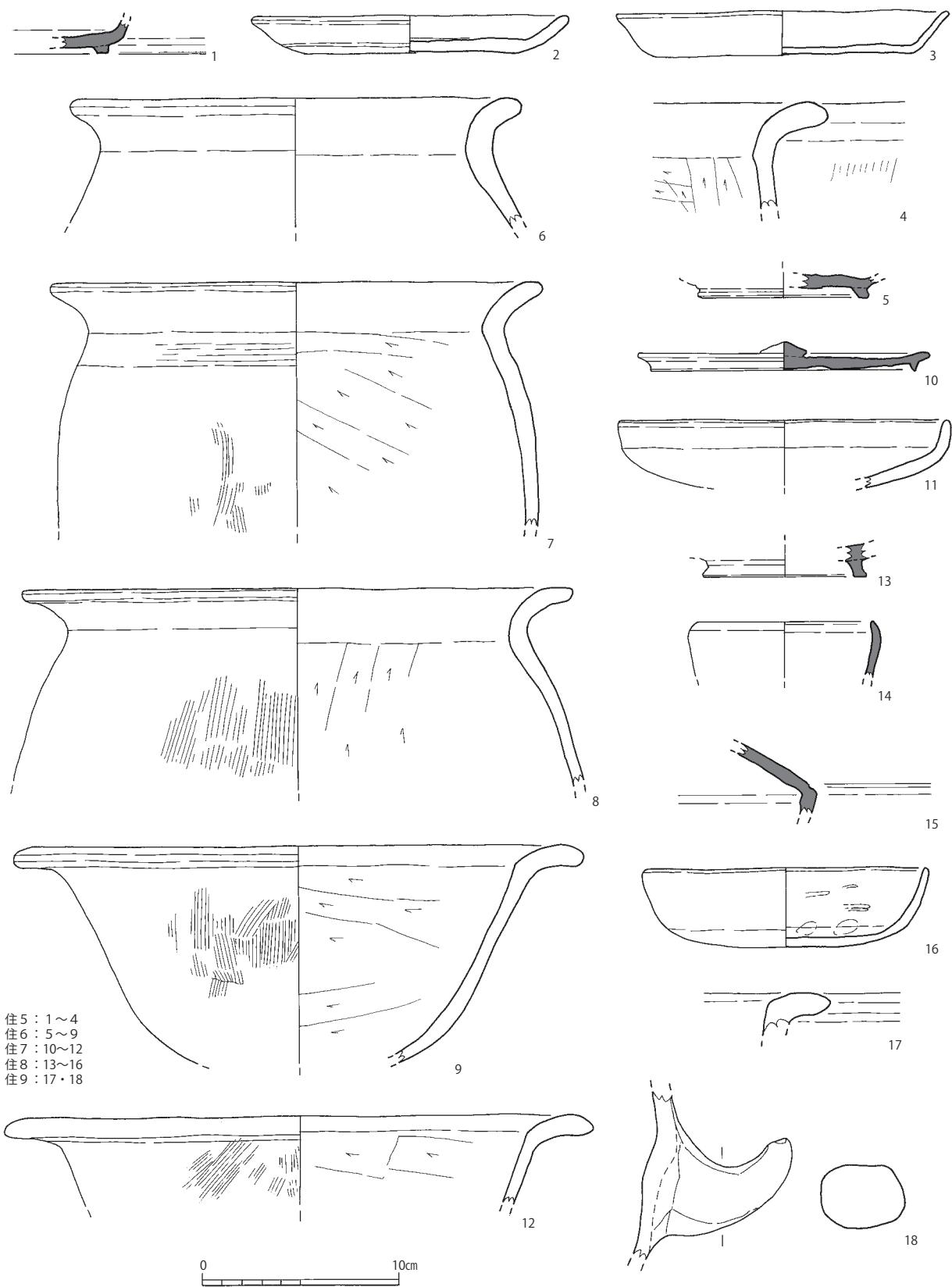
9号竪穴住居跡の南西に位置する。10号竪穴住居跡下から検出した遺構を14号竪穴住居跡と別番号を付した。切り合いで10号竪穴住居跡が14号竪穴住居跡を切る。

10号竪穴住居跡は長方形で、南北3.45m×東西3.0mを測る。深さ0.15mと浅く、主柱穴と考えられるピットやカマドは検出できなかった。

10号竪穴住居跡出土土器は第22図1～9になる。1は須恵器坏蓋の撮み片で、鉗状になる。2は須恵器坏蓋片で、身の可能性もある。3は須恵器高台付坏片である。高台は底部と体部の境に付き、高台は低い。4と5は須恵器坏片である。4は体部中位で立ち上がる口縁をもつ。6と7は土師器の甕片で、6の口縁部は僅かに外湾するが、7は頸部で最も肉厚になり、口縁端部は外反する。口径13.9cm、14.8cmを測る。8と9は土師器甕の口縁部片で、口縁は外反する。6～9の調整はいずれも外面に刷毛目、内面はケズリであるが、8のみ内面の頸部付近に刷毛目が残る。

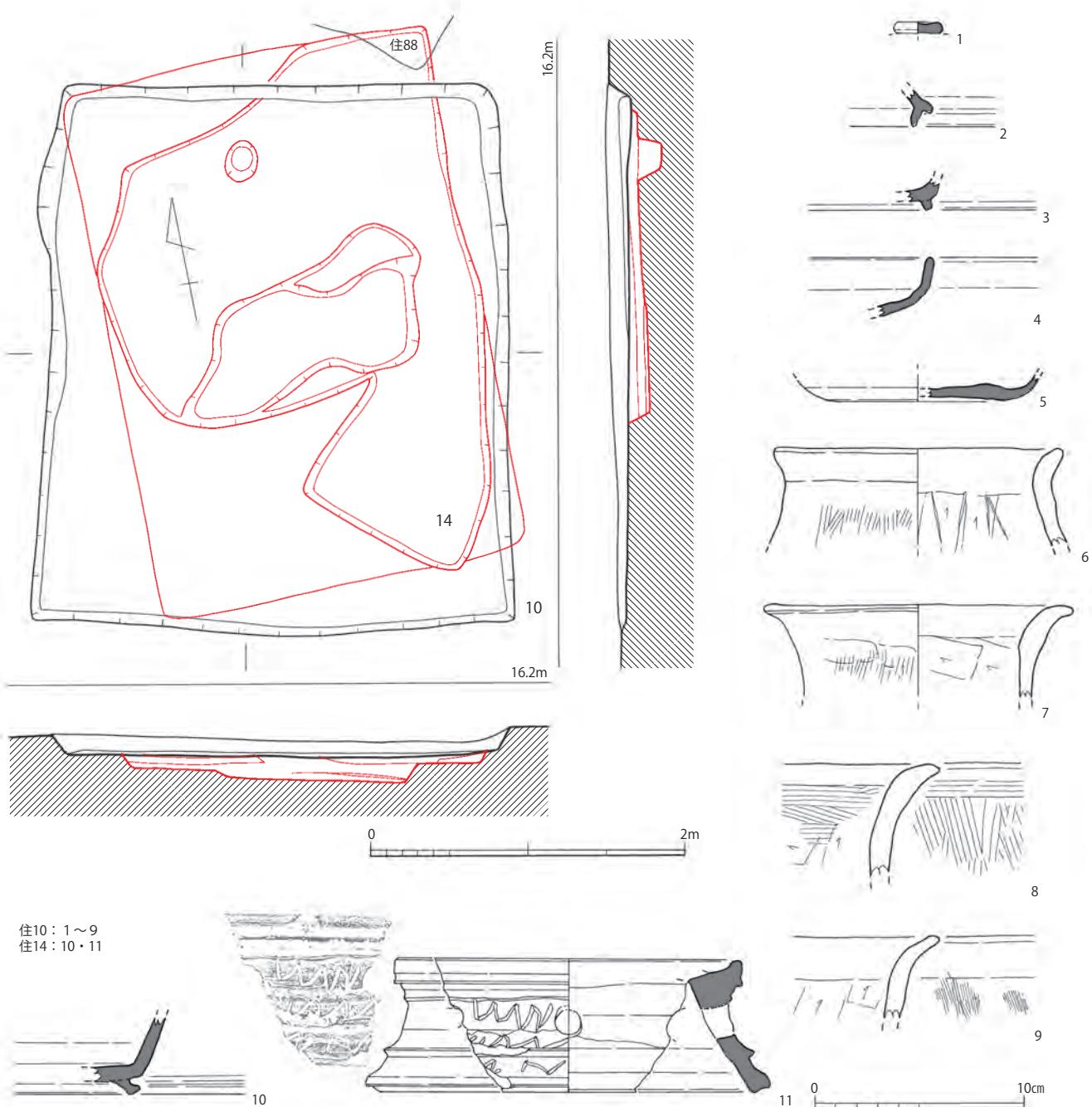


第20図 8・9号竪穴住居跡、9号カマド実測図 (1/40、1/20)



第 21 図 5~9号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

14号堅穴住居跡は10号堅穴住居跡の床面を掘り下げすぎたために、住居跡の掘り方が歪な形状になる。おそらく、本来は赤線で示す南北3.45m×東西2.4mを測る南北方向に長い長方形の住居跡と考えられる。中央部分はさらに0.15m掘り下げられ、ピットとして判断した。その他にも径0.2~0.25mの橢円形で、深さ0.15mを測るピット1基を検出した。ここもカマドの痕跡は検出できなかった。



第22図 10・14号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40, 1/3)

14号竪穴住居跡出土土器は第22図10と11である。10は須恵器高台付壺片で、高台は高く、外へ開くように端部が伸びる。11は唯一出土した須恵器円面硯片である。外提の端部は短く肉厚で尖り、その下部には突帯が付く。圈台には円形の透かしが2ヶ所あり、その間を粗雑な鋸歯文が巡る。透かしの下にも突帯が一条巡り、その下にも粗雑な鋸歯文が巡る。復元口径は16.4cmを測る。なお、12号竪穴住居跡出土の脚端部の破片と接合している。

遺構の時期は出土土器および切り合いかから、10号竪穴住居跡は8世紀前半、14号竪穴住居跡は7世紀後半になる。

11号竪穴住居跡（第23・25図）

10号竪穴住居跡の南側に位置し、東側を13号竪穴住居跡に、西側を15号竪穴住居跡に切られた住居跡になる。南北の壁面から長さ3.35m、東西は北東隅の角から残存する長さを測ると3.0m以上とな

る。深さは0.15m以下と浅く、主柱穴と考えられる径0.45m、深さ0.35mのピット1基を検出したが、カマドの痕跡は検出していない。

第25図1は13号竪穴住居跡のカマド近くで出土した須恵器壺蓋の口縁部片で、嘴状になる。2は土師器壺である。全体的にボール状で丸みを持ち、底部に向かって薄く平たくなる。口径12.0cmを測る。3は土師器甕の口縁端部片で、ゆるやかに外湾する。調整は内外面の口縁から頸部付近にかけてはナデ、指頭圧痕が所々に残るが、それより下は外面に刷毛目、内面はケズリを施す。口径19.0cmを測る。

住居跡の時期は、13号竪穴住居跡に切られることと、13号竪穴住居跡出土土器には6世紀後半～7世紀初頭の須恵器が混入していることから、11号竪穴住居跡はその時期か。

12号竪穴住居跡（第23・25・112・113図 図版43・47・48）

11・15号竪穴住居跡の西側に位置し、東側の半分以上を15号竪穴住居跡と南西隅を30号竪穴住居跡に切られた住居跡である。壁面は北壁でやや北よりに膨らみ、南壁と方向がずれる。主柱穴と思われる柱穴は、2基西壁に並行するように検出し、径0.5m程の円形状で、深さ0.3～0.4mを測る。カマドは検出できなかったが、住居内中央北よりに焼土を検出した。

第25図4と5は須恵器壺蓋である。4は口縁部とかえりが水平になり、天井部は欠損する。調整は内外面にナデであるが、外面体部中程～天井部に向けてヘラケズリを施す。5は宝珠形の攝みをもつが、口縁部を欠損する。6は須恵器高台付壺片で、復元高台径7.6cmを測る。7は土師器壺片である。底部は薄く平たく作られるが、口縁に向かって器壁は厚く、丸みをもつ。調整は摩滅していて不明である。復元口径15.9cmを測る。8～11は土師器甕片で、口縁～頸部の形状は外湾する。10と11は口頸部が低く短い。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。8と9は復元口径20.4cm、30.1cmを測る。土器以外には土錘1点と鉄滓2点も出土する。

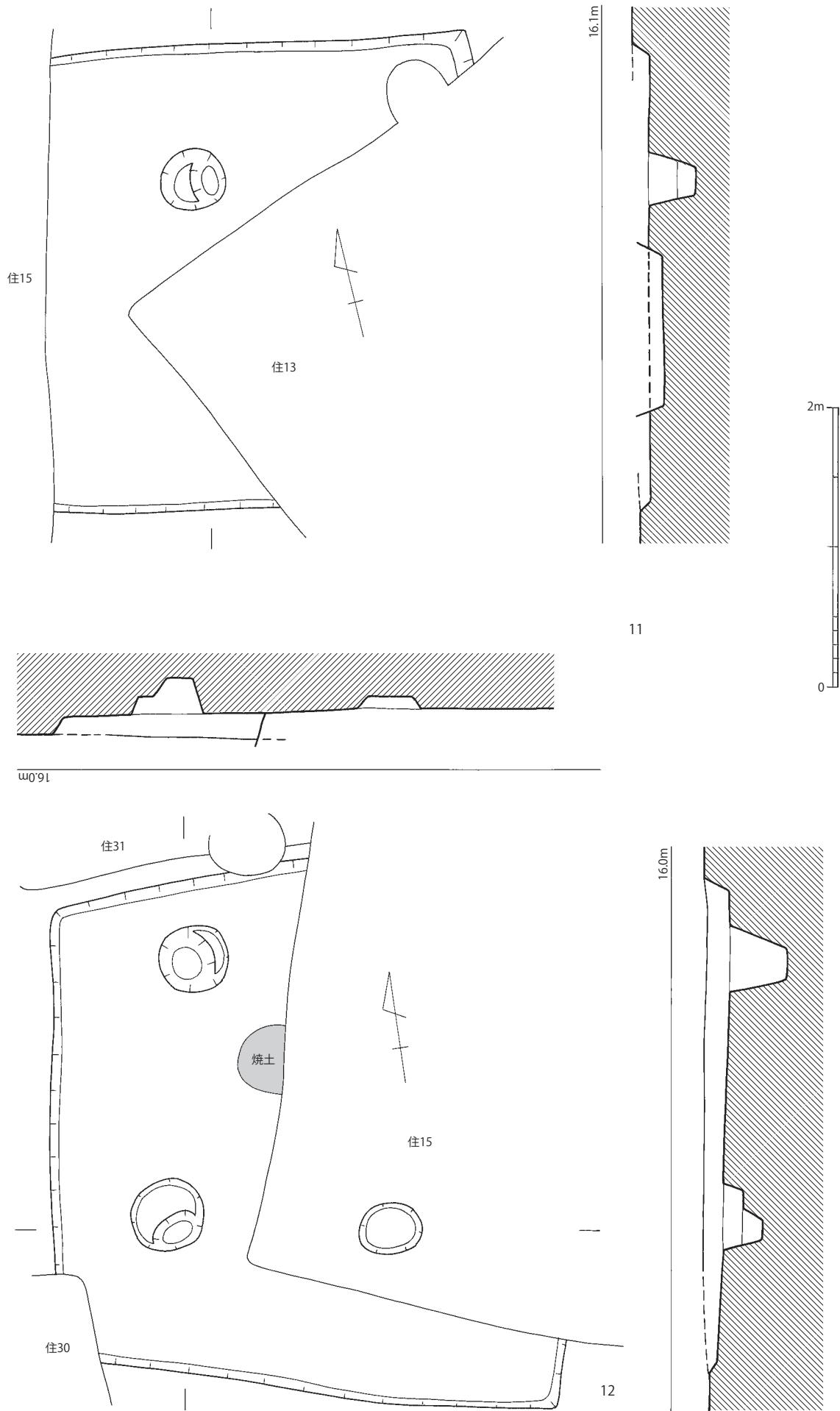
住居跡の時期は、かえりのある須恵器や土師器壺から7世紀後半～末頃か。

13号竪穴住居跡（第24～26・113図 図版11・12・48）

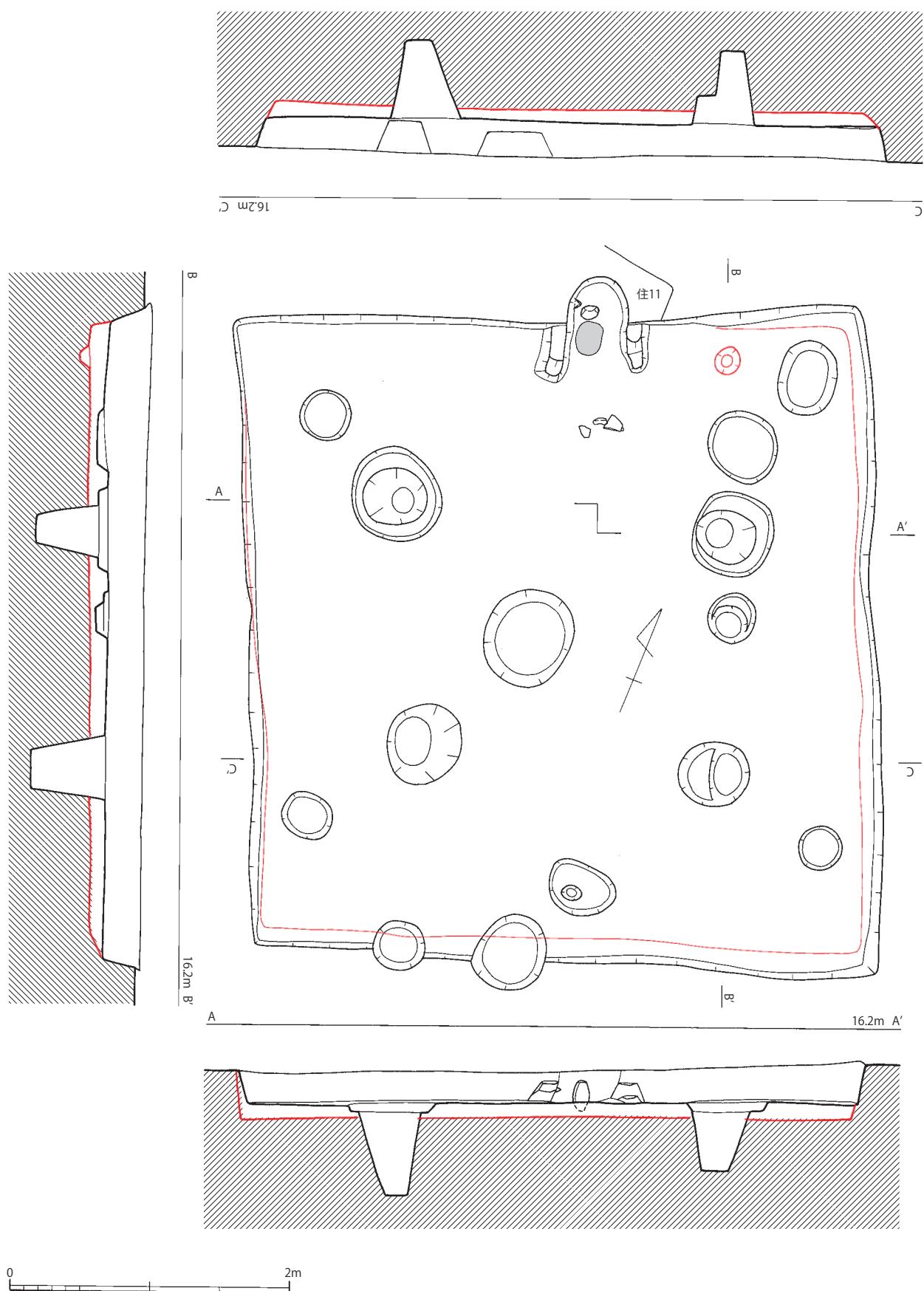
11号竪穴住居跡の東側に位置し、その住居跡を切る。掘り方は南北4.7m×東西4.5mを測り、僅かに南北方向が長いが、形状は正方形に近い。深さ0.3mと他の住居跡に比べて残存し、さらに0.1m程の貼床も施す。主柱穴と思われる柱穴を4基確認でき、それぞれは径0.5～0.7m、深さ0.5～0.6mを測る。その他の住居内の柱穴は深さが0.1m程しかなく、浅い。

カマドは北壁中央に突出型を設置し、両袖が残存していた。両袖は褐色土に焼土ブロックが混入した土で作られ、直線上に0.3～0.4m程残存する。またカマドの中軸線より西側に支脚が残存していた。支脚の大きさは長さ0.15m、高さ0.2mを測り、平らな部分を上にし、先の尖った部分を下にして0.1m以下を埋設して設置していた。煙道は検出されなかった。

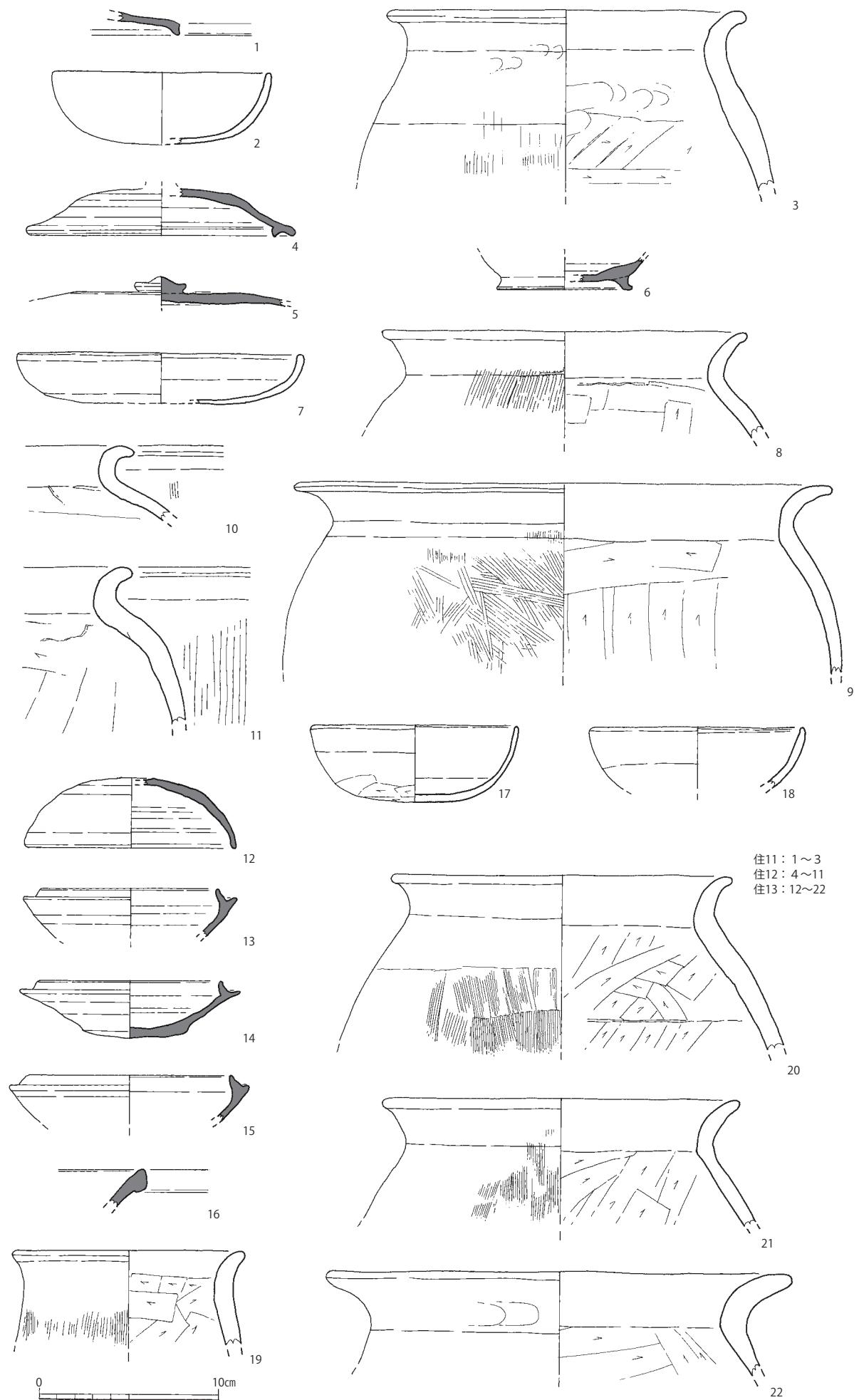
第25図12は須恵器壺蓋片で、全体的に丸みをもち、口縁端部は丸くなる。復元口径12.0cmを測る。13～15は壺身片で、口縁と受け部との高低差は5mm程であり目立たない。14は底部まで残存したもので、他の部位と比べて底部は肉厚になる。復元口径10.0cm、10.4cm、13.4cmを測る。調整はいずれも内外面ナデ、外面底部はヘラケズリである。16は須恵器甕の口縁部片で、口縁は角張る。17と18は土師器壺で、丸底で丸みのある形状である。調整はいずれも摩滅していて不明だが、17の外面底部にはケズリを施す。復元口径11.6cmと12.0cmを測る。19～22は土師器甕片で、口頸部の形状はいずれも頸



第23図 11・12号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第24図 13号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第25図 11～13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

部は窄まり、口縁部は外反する。22のみ口縁部が厚く、内面に薄い稜が付く。いずれも体部の調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。復元口径 13.0cm、19.0cm、20.0cm、26.0cmを測る。羽口片 1 点も出土する。

出土した須恵器蓋坏や土師器坏は、6世紀末～7世紀初頭を中心とする時期だが、11号竪穴住居跡を切るので、これらの土器は11号竪穴住居跡に伴う土器の可能性が高い。そのため、13号竪穴住居跡の時期は、第25図22の土師器甕片から8世紀前半か。

15号竪穴住居跡（第26・27図 図版12）

11号竪穴住居跡西側に位置し、この住居跡周辺にある11号・12号・31号竪穴住居跡を切る。形状は南北 5.2 m × 東西 4.2 m、深さ 0.2 m を測る長方形である。主柱穴と思われるピットを 3 基確認できるが、深さ 0.4 m の 1 基以外は深さ 0.2 m 以下と浅い。

カマドは13号竪穴住居跡と同様に北壁中央に設置し、両袖が残存していた。両袖は暗茶褐色土や灰褐色土で作られており、カマド中央に向かって窄まるように作られている。カマド内は西側が 0.15 m 深く掘り下げられ、中央に径 5cm 程の円形の石が置かれていた。この掘り方は支脚の石を外した痕跡と思われる。ここも煙道は検出されなかった。

第27図1～3は須恵器高台付坏片で、いずれも高台端部は外反する。復元高台径 7.2cm、9.0cmを測る。3の体部は明瞭にナデの痕跡が段状に残る。体部と底部との境に高台が付き、高台は真っすぐに伸びる。1・2よりは新しい時期か。4は低い須恵器高坏脚部片である。5と6は土師器甕片で、6の口縁端部は外反する。調整は外面に刷毛目、内面にケズリである。7は土師器甕の把手で、断面の上部は内側に凹む。

住居跡の時期は、11号・12号・31号竪穴住居跡を切ることと出土した須恵器高台付坏の高台端部の形状から、7世紀後半と8世紀前半の2時期があるので、住居跡の時期は8世紀前半か。

16号竪穴住居跡（第28・29図 図版12・13）

15号竪穴住居跡の西側に位置し、26号・54号竪穴住居跡を切る。形状は長方形で、南北 3.9 m × 東西 5.4～5.8 m、深さ 0.1 m 以下を測る。北壁中央にはカマドを設置する。西壁は東壁に比べ斜め方向に検出したため、カマドや主柱穴の位置から西壁の検出は誤っている可能性がある。主柱穴の 4 基は、径 0.5～0.6 m、深さ 0.1～0.4 m を測る。

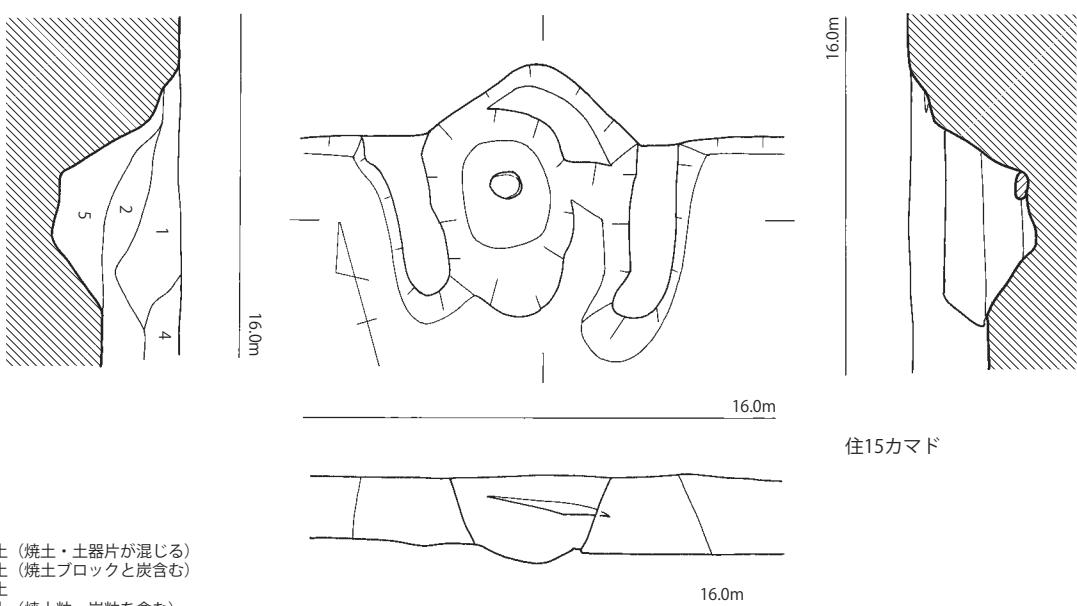
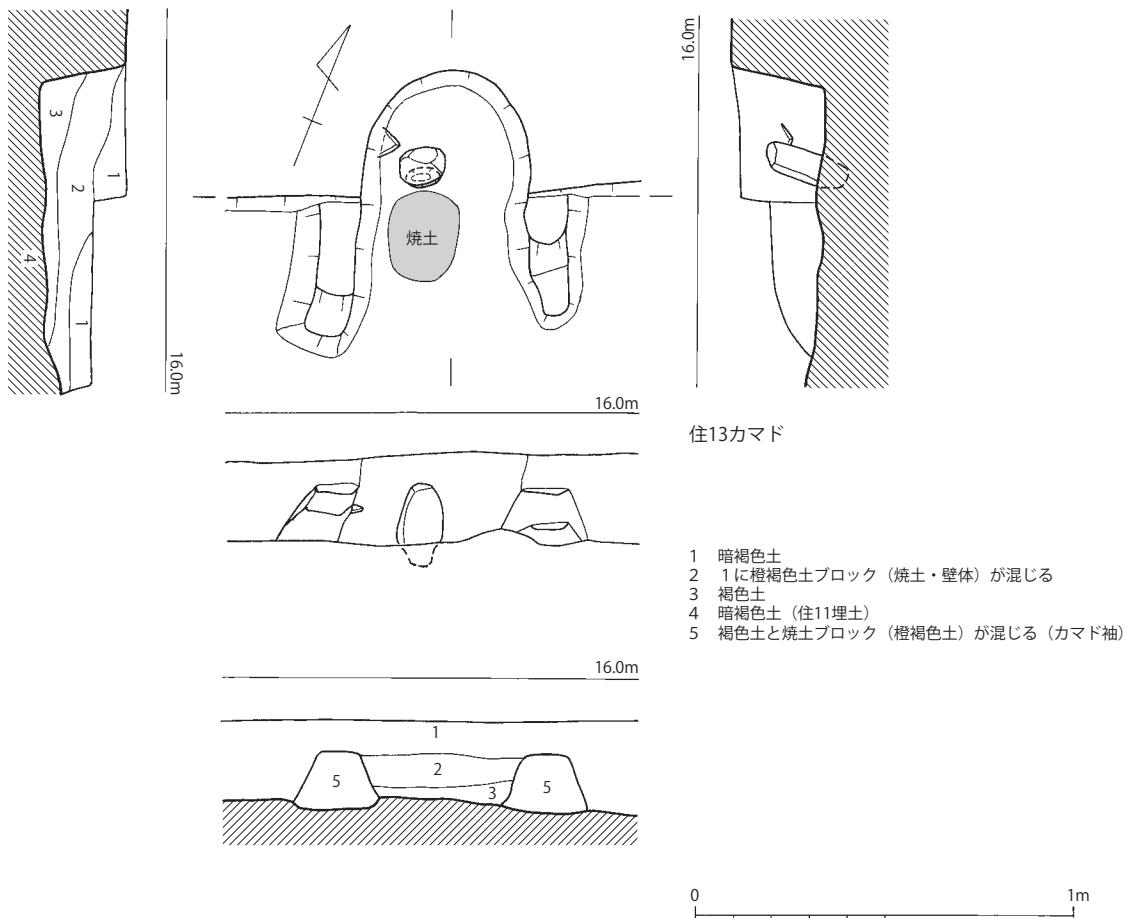
カマドは突出型で、両袖は残存していたが、煙道は検出されなかった。両袖は南側へ直線に伸び、しまりのある暗赤褐色土に、焼土ブロックや白色砂粒を混ぜて構築していた。焚口内中央には径 0.2 m 程の焼土を確認したが、支脚は検出されなかった。

第29図1は底部を欠損する土師器甕で、口縁部は外湾して端部は外へ伸びる。体部は底部近くで張り、最大径をとる。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。復元口径 14.2cmを測る。

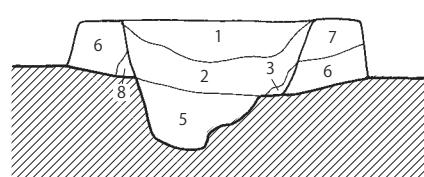
住居跡の時期は、26号・30号竪穴住居跡を切ることから、8世紀中頃以降か。

17号竪穴住居跡（第30・32・112図 図版13・47）

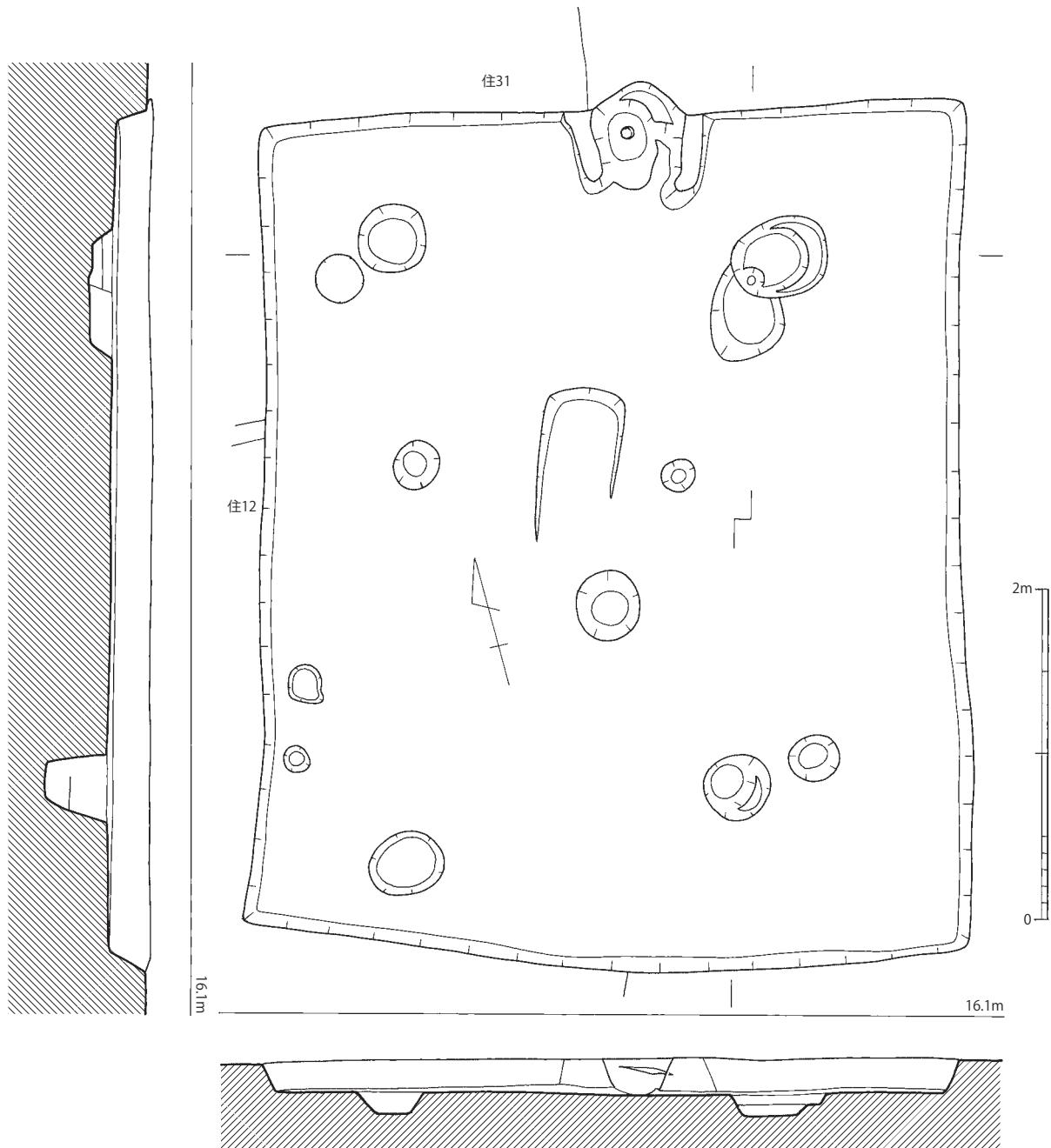
調査区東側に位置し、北西側の18号竪穴住居跡に切られる。掘り方は長方形で、南北 5.4 m × 東西 6.5 m、深さ 0.4 m 以下を測る。住居の規模は 5～6 m と他の住居跡と比べて一回り大きい。4基の主柱穴



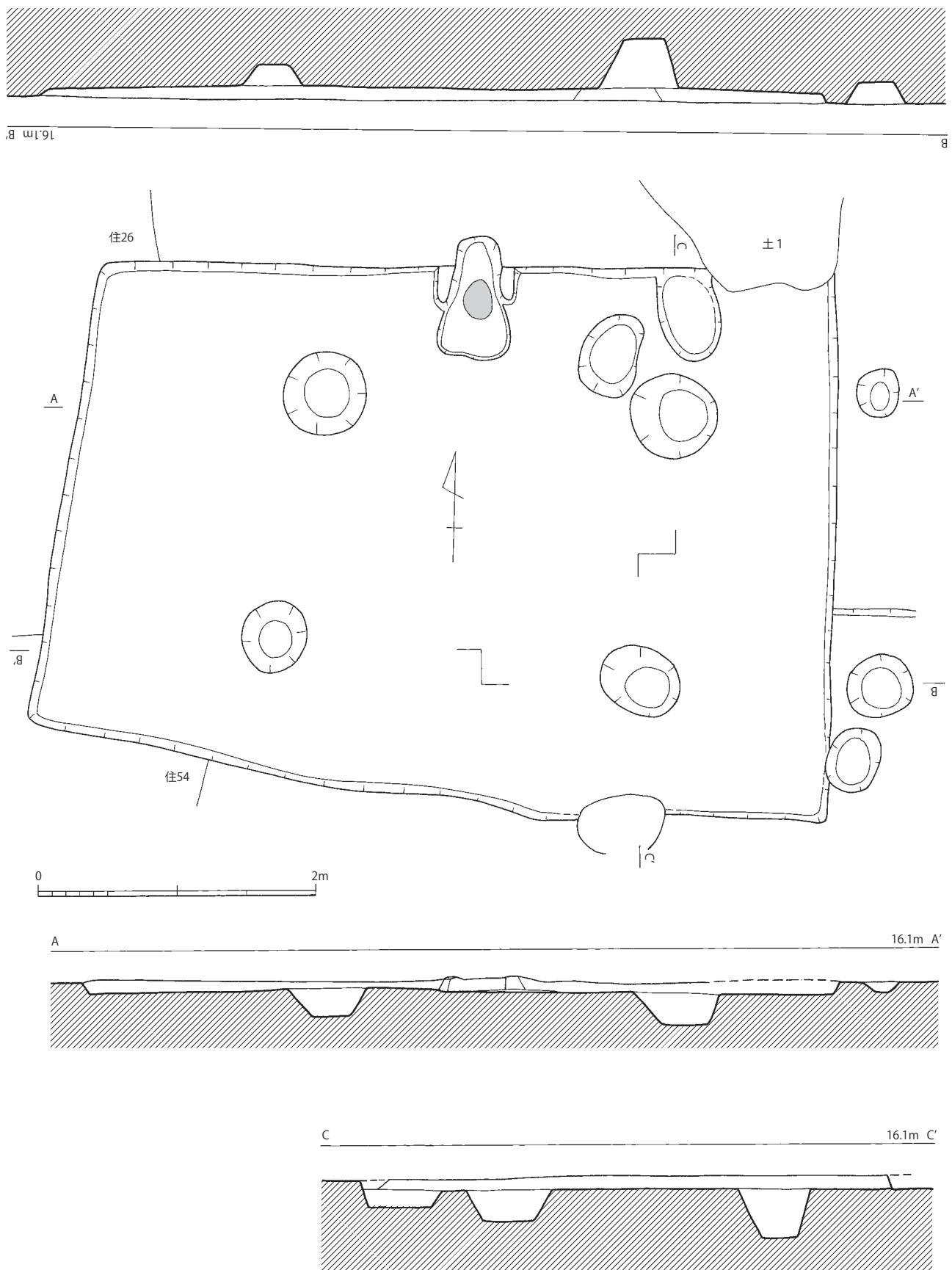
- 1 暗茶褐色土（焼土・土器片が混じる）
 2 暗橙褐色土（焼土ブロックと炭を含む）
 3 灰茶褐色土
 4 暗灰褐色土（焼土粒・炭粒を含む）
 5 橙茶褐色土（焼土ブロック・炭を含む）
 6 暗茶褐色土（炭がやや混じる）
 7 灰褐色土（白色砂粒が混じる） カマド袖
 8 橙色土（焼土ブロック）



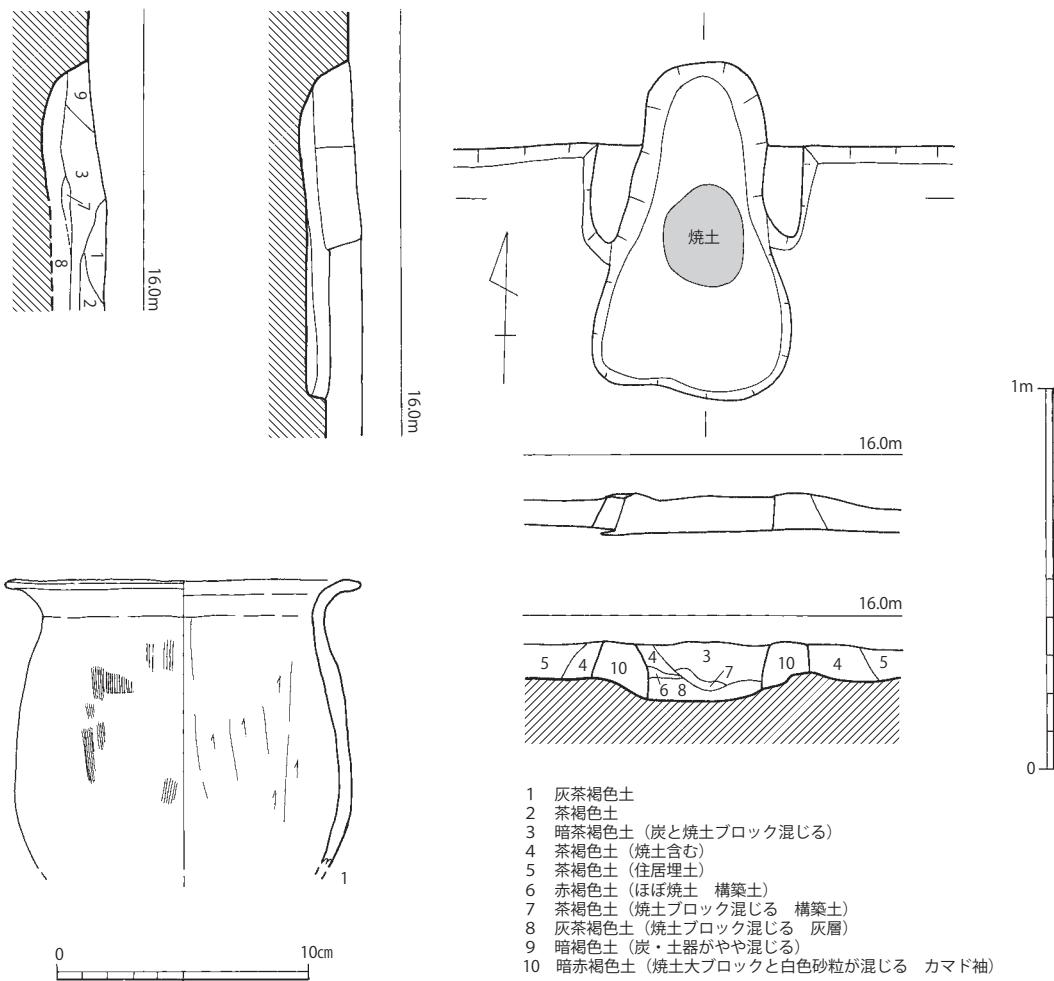
第26図 13・15号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)



第 27 図 15 号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)



第 28 図 16 号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第29図 16号竖穴住居跡カマドおよび出土土器実測図 (1/20、1/3)

を確認する。東壁側の2基は軸が揃うが、西壁側の軸は揃わない。柱穴は径0.5～0.8m、深さ0.4～0.5mを測る。それ以外にも住居壁側に、住居と関係するピットを検出した。

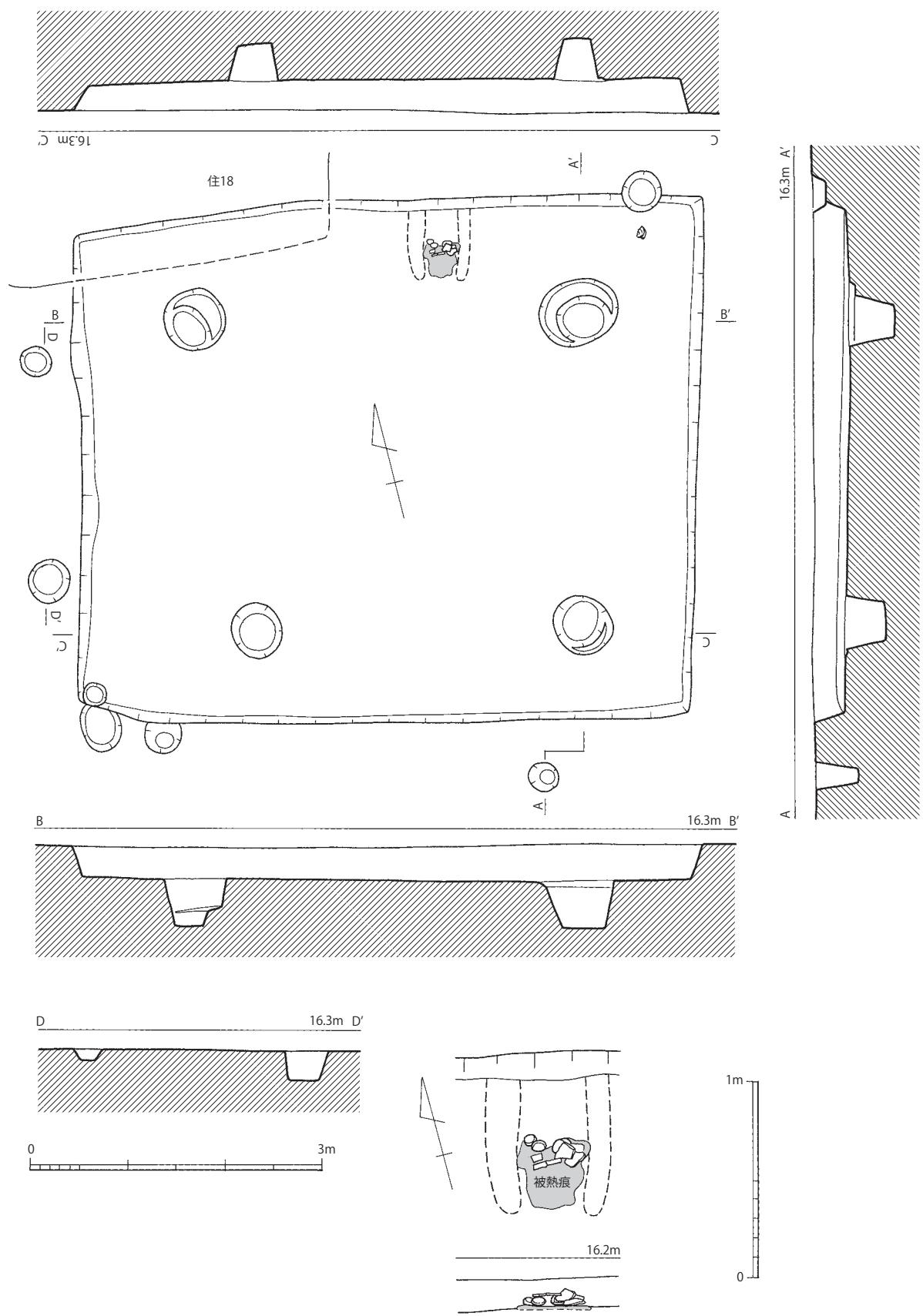
北壁中央には被熱痕跡と土器を検出したが、カマドを掘りすぎている。住居外にカマドが広がらないので、造り付け型か。0.3～0.4mの被熱痕跡の上面には、5～10cmの円形の石と土器片を検出した。

第32図1～3は須恵器壺蓋片である。1と2の口縁端部は丸く肥厚する。復元口径11.0cm、12.0cm、13.8cmを測る。4と5は須恵器壺身で、外面底部にヘラ記号を施す。4は4本、5は1本の線を描く。6は須恵器壺で、器高5.5cmと他の壺に比べて深いので短頸壺の蓋の可能性もある。外面にヘラケズリを施す。7と8は土師器壺である。7は外側に開くことから蓋とし、8は口縁が内傾することから身とした。復元口径10.0cm、10.5cmを測る。9は土師器高壺の壺部片、10は脚部片である。11～15は土師器甕片である。12は底部片で、平底に近い丸い形状になる。13と14は「く」字状になる甕片で、復元口径13.8cm、14.4cmを測る。15のみ他の甕とは異なる形状で、逆「L」字状になる。16は土師器鉢片で、底部は欠損する。調整は摩滅していて不明だが、全体的に薄手に作られている。復元口径15.0cmを測る。17は土師器甕の把手である。断面の形状は卵形になる。黒曜石の剥片1点も出土する。

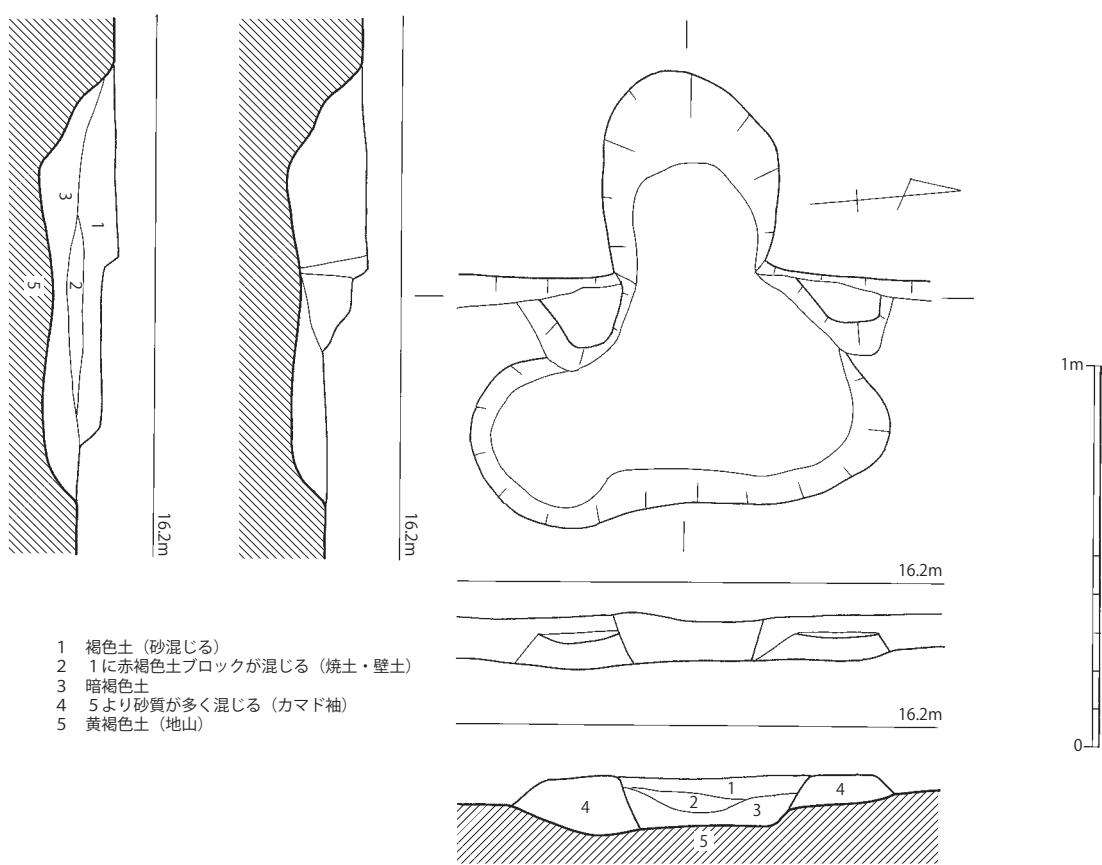
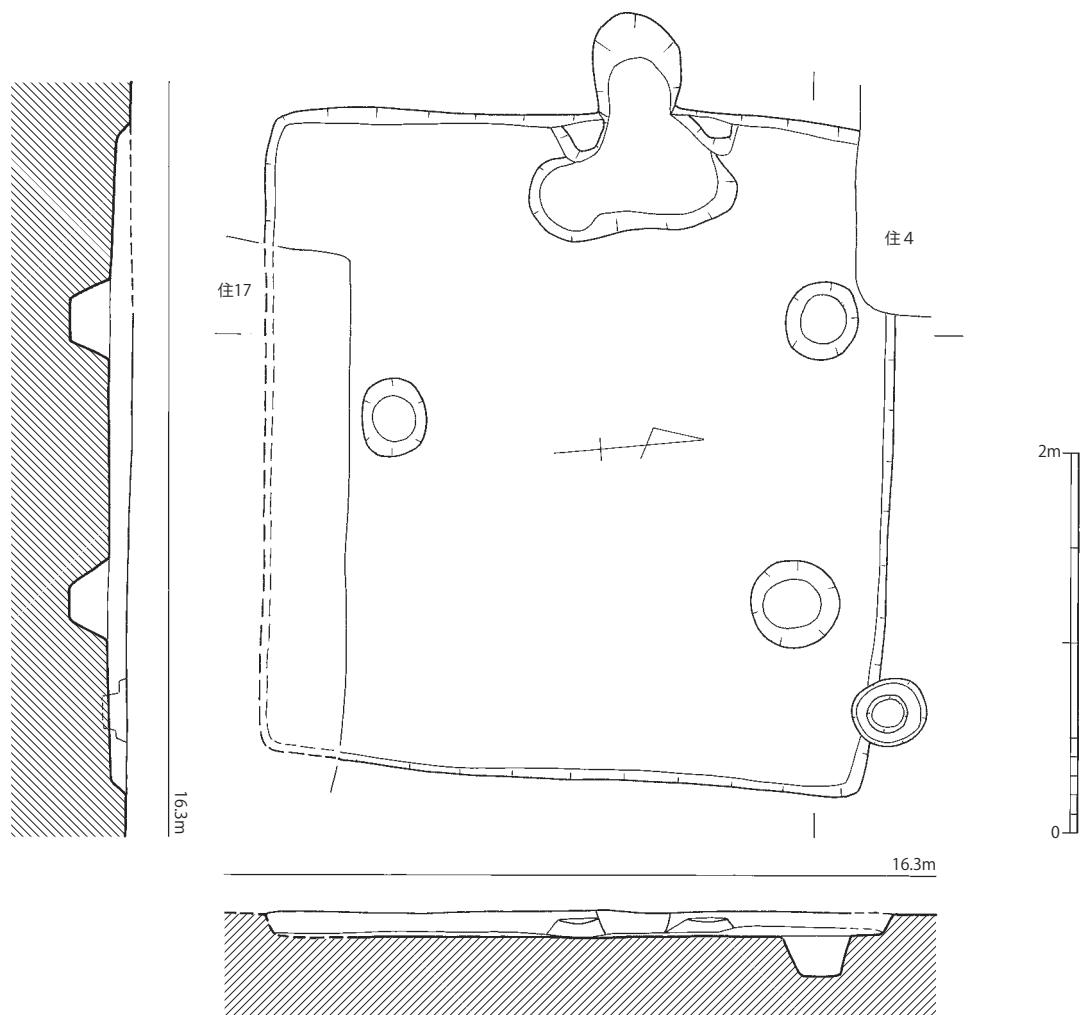
出土土器は6世紀末～7世紀初頭であることから、住居跡の時期はその頃か。

18号竖穴住居跡（第31・32図 図版13・14）

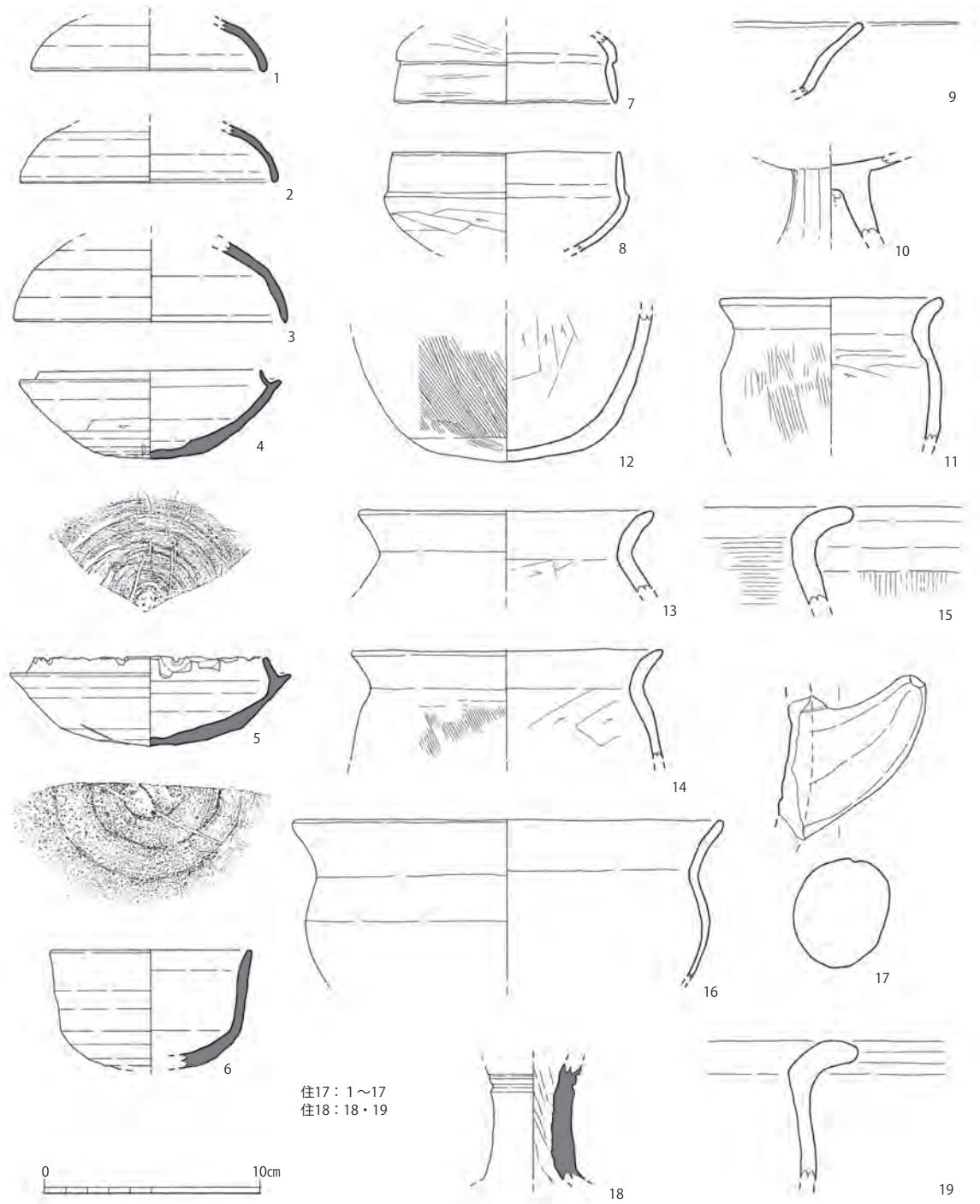
17号竖穴住居跡の北側に位置し、北側を4号竖穴住居跡に切られる。掘り方は正方形に近く、南北3.3m×東西3.5m、深さ0.15m以下を測る。主柱穴は北壁側で、2基検出し、径0.4m、深さ0.2mを測る。



第30図 17号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)



第31図 18号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



第32図 17・18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

住居跡はさらに深さ0.1m以下と浅いため、南壁側は掘りすぎて壁がなくなっている。

西壁中央には突出型のカマドを設置し、長さ0.2m以下の両袖を検出する。右袖は地山である黄褐色土を削り出して構築する。カマド内に被熱痕跡はなく、硬化もしていない。焚口側でも焼土は検出していないが、長円形状で長さ0.4m×1.1mの範囲で、深さ0.05m程掘り下がる。

第32図18は須恵器高坏脚部片である。外面上部には沈線が二条巡り、内面には絞りの痕跡が明瞭に残る。19は土師器の甕片である。口頸部は肥厚して外反し、内面には稜が付く。

住居跡の時期は4号竪穴住居跡に切られることから、それよりも古い7世紀後半か。

19号竪穴住居跡（第33・34図 図版14・43）

17号竪穴住居跡の南に位置し、北北東寄りに建てられる。住居跡は東西に長い長方形状で、南北3.95

～5.1 m × 東西 5.25 m、深さ 0.2～0.3 m を測る。調査の都合上、東側 1/3 を新たに拡張して掘削したため、南東隅が南へ掘りすぎている。北壁中央にはカマドを設置し、住居内には主柱穴と思われるピットを 4 基検出する。主柱穴はそれぞれ径 0.5～0.6 m、深さ 0.3～0.6 m を測る。

カマドは突出型で、煙道が住居外に伸びる。壁から南へ約 0.5 m 内で、被熱して硬化した部分や支脚を設置していたと思われるピット状の痕跡（径 0.1 m 以下）を検出したので、この辺りまでがカマドの範囲となる。煙道部分は長さ 1.0 m、幅 0.5 m を測り、煙道側から焚口側に向かって、緩やかに傾斜する。

第 34 図 1～3 は須恵器坏蓋片である。1 は蓋の口縁部片で、口縁とかえりとの高低差が 1 mm 程しかない。2 は高さ 5 mm 程と低い撮み片である。3 は口縁端部が嘴状で、復元口径 16.0 cm を測る。外面天井部には重ね焼の痕跡がある。4 と 5 は須恵器坏身で、5 の外面底部にはヘラ記号を施す。復元口径 10.0 cm と 11.9 cm を測る。6 は須恵器高台付坏片である。高台端部は外反する。復元高台径 8.8 cm を測る。7 は須恵器高坏脚部片か。長方形状の透かしの一部が残る。8 は土師器坏片で、口縁端部が僅かに外湾するので蓋の可能性がある。9 と 10 は土師器坏で、底部は丸底である。調整は摩滅していて、内外面とも不明である。復元口径 10.2 cm と口径 10.9 cm を測る。11 は土師器高坏脚部片である。12 の口縁はあまり開かない、肩部が張る土師器甕片である。内面は僅かにケズリが残る。復元口径 22.5 cm を測る。13～16 は土師器甕片で、口頸部は外反する。14 の口縁部は厚く、内面には稜が付く。いずれも調整は不鮮明だが、外面は刷毛目、内面はケズリか。

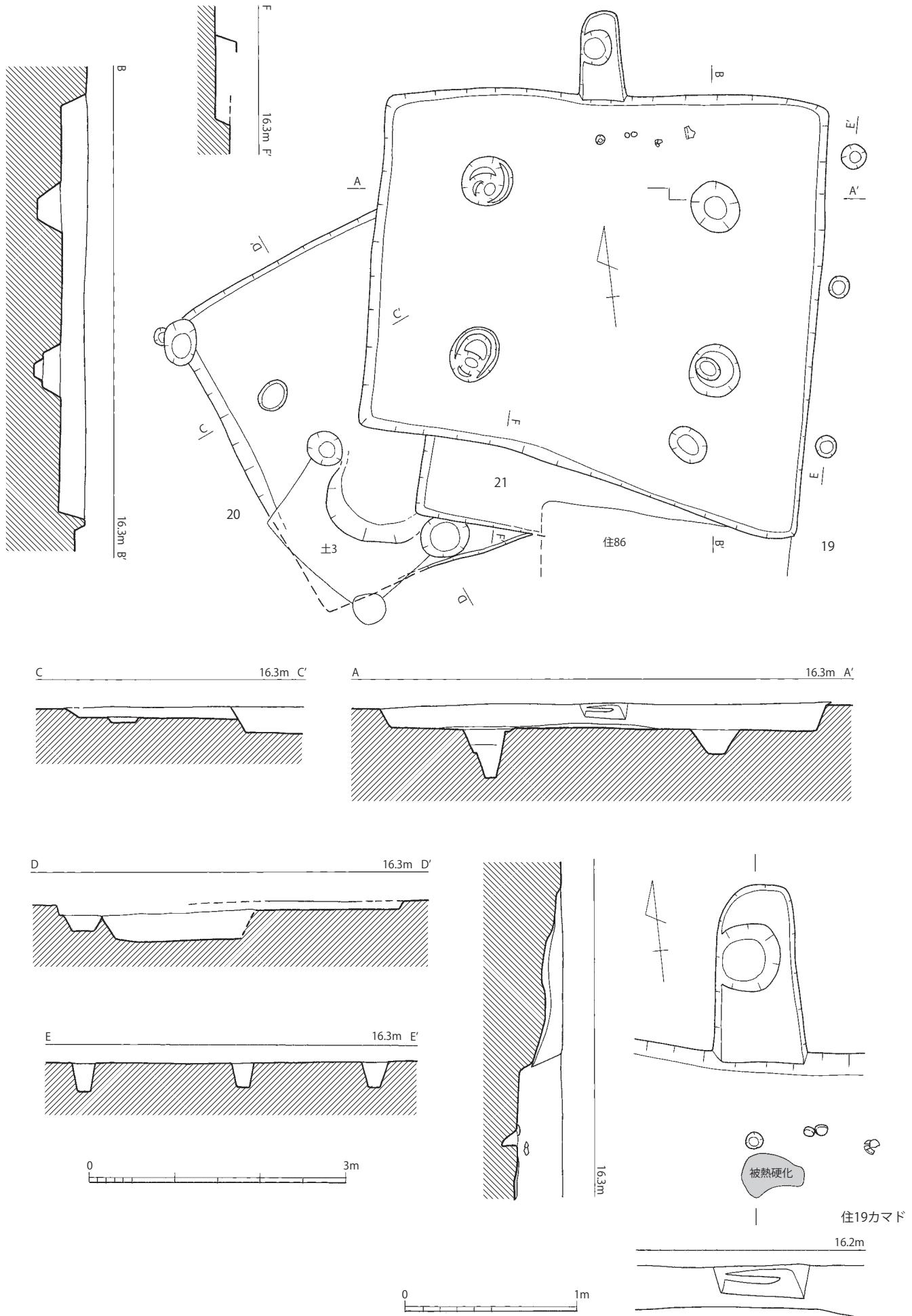
出土土器は、6 世紀末～7 世紀初頭、7 世紀後半～末、8 世紀中～後半の 3 時期にまたがるが、住居跡の時期は須恵器坏蓋片から 8 世紀中～後半か。

20・21 号竪穴住居跡（第 33・34・112・113 図 図版 14・47・48）

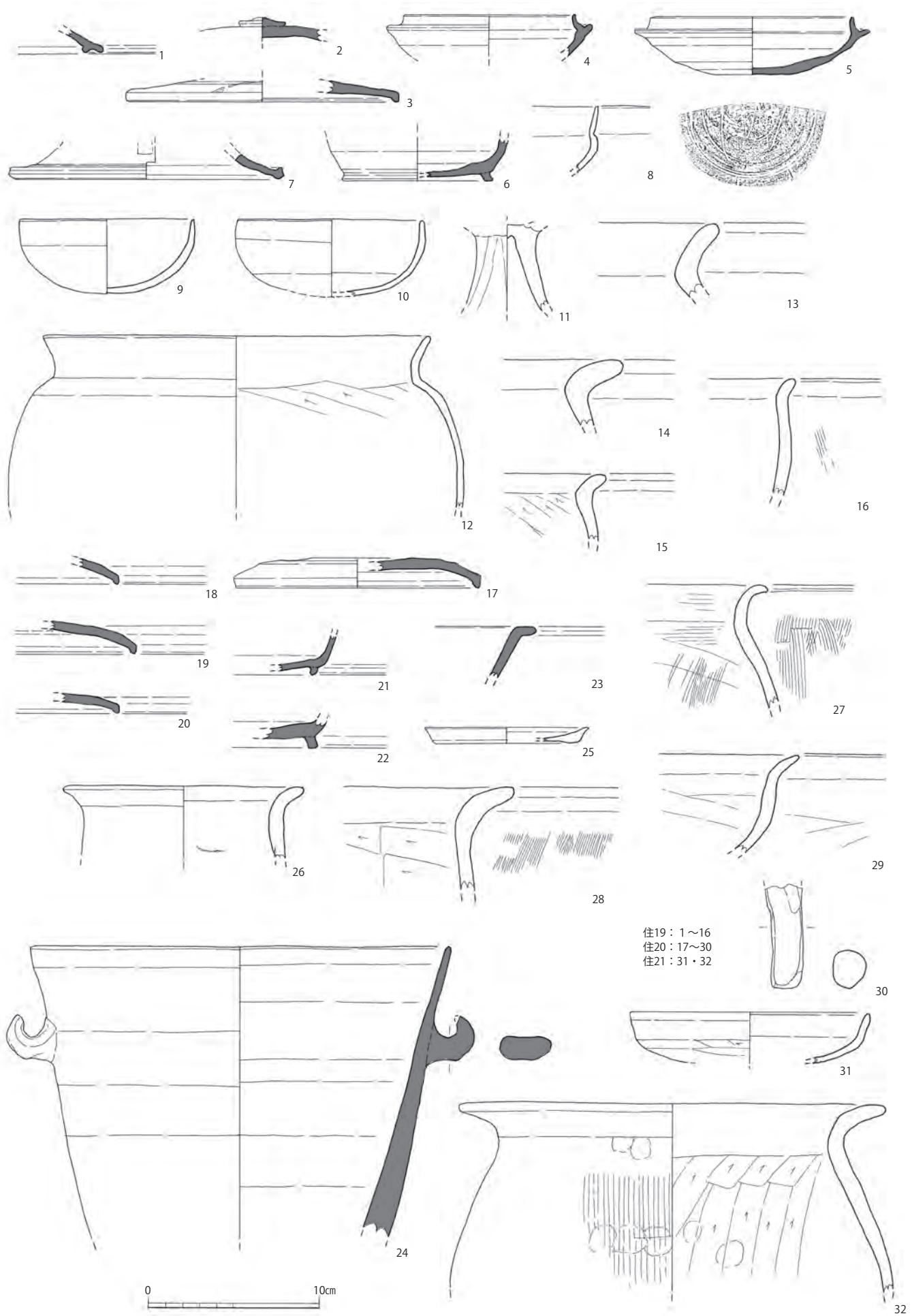
20 号竪穴住居跡は 19 号竪穴住居跡の西側に位置し、その住居跡に東側の大部分を切られる。北西方向に建てられ、南北 4.2 m × 東西 2.8 m 以上、深さ 0.1 m を測る。南東隅は 3 号土坑として別番号を付したが、この部分のみ、さらに約 0.4 m 以下掘り下がるので、それが住居の床面の可能性がある。

20 号竪穴住居跡出土土器は、第 34 図 17～30 である。17～20 は須恵器坏蓋片で、いずれも嘴状になる。17 は天井部に向かってわずかに窪む。復元口径 14.2 cm を測る。いずれも時期が新しいので 3 号土坑の遺物の可能性がある。21 と 22 は須恵器高台付坏片で、21 は低く幅の狭い高台が付く。22 の高台は外へ開く。23 は須恵器壺又は鉢片か。口縁端部が外へ伸びる。24 は須恵器甕片で、口頸部は屈曲もせずに底部に向かって直線状に伸びる。把手は器の大きさに比べ、作りが小さい牛角状になる。焼成不良のためやや軟質で、外面の色調は灰白色を呈すが、内面は土師器のような色調を呈す赤褐色である。時期は他の遺物とは異なり、筑前地域で出土する 7 世紀前半頃の甕である。復元口径 24.4 cm を測る。25 は土師器坏片である。浅い小皿状で、床と接地する部分のみ肉厚になる。復元口径 9.6 cm を測る。26 は土師器小形甕片で、口縁部は外湾する。復元口径 14.0 cm を測る。27 も土師器甕片で、口縁端部で外反し端部は水平になる。28 は土師器甕又は甕の口縁部片で、外湾する。29 は浅い土師器鉢片で、口縁端部がわずかに曲がって開く。30 は土師器鍋の脚部片か。上部は欠損するが、円柱状になる。他には土錐 1 点と鉄塊 2 点も出土する。

21 号竪穴住居跡は北側の 19 号竪穴住居跡と南側の 86 号竪穴住居跡に切られ、住居壁は南西隅で南北 0.95 m × 東西 1.5 m のみ残存し、深さは 0.2 m を測る。19 号竪穴住居跡が、南へ少し掘りすぎているので、本来は東西の長さは 4.4 m を測るのかも知れない。住居内に柱穴等は検出していない。



第33図 19～21号竪穴住居跡、19号カマド実測図 (1/60、1/30)



第34図 19～21号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

21号竪穴住居跡出土土器は第34図31と32である。31は土師器壺片である。体部中程で屈曲し、それより下の底部にかけ、ケズリを施して丸みのある底にする。復元口径14.0cmを測る。32は土師器甌片である。頸部で折れて、口縁は外湾する。調整は外面に刷毛目、内面はケズリを施し、所々に指頭痕が残る。復元口径24.8cmを測る。土錘1点も出土する。

住居跡は切り合いから20号竪穴住居跡が古く、次に21号→19号竪穴住居跡の順になる。そのため、出土土器から21号竪穴住居跡は7世紀後半～末頃、20号竪穴住居跡は6世紀末～7世紀初頭頃か。

22・23号竪穴住居跡（第35・36図 図版15）

調査区の北壁側中央に位置し、22号竪穴住居跡は北側を23号竪穴住居跡に切られるため、住居内の北側の壁はほとんど残っておらず、床面に見えたわずかなラインのみである。住居跡は北北西寄りに建てられ、形状は東西に長い長方形で、南北5.3m×東西5.9m、深さ0.2mを測る。カマドは検出されなかつたが、主柱穴は4基確認でき、それぞれ径0.4～0.5m、深さ0.4mを測る。

第36図1と2は22号竪穴住居跡出土である。1は土師器甌片で、口縁端部が僅かに外反する。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。復元口径15.4cmを測る。2は土師器甌の把手片である。

23号竪穴住居跡は22号竪穴住居跡の北側に位置し、北西隅を24号竪穴住居跡に切られる。22号竪穴住居跡とほぼ同じ形状と規模で、南北5.0m×東西5.8m、深さ0.1m以下を測る。カマドは検出されなかつたが、主柱穴は3基検出し、径0.5～0.7m、深さ0.5～0.7mを測る。

第36図3～8は23号竪穴住居跡出土土器である。3は須恵器壺で、調整は内外面ナデ、外面底部はヘラ切り後に、ナデを施す。復元口径14.9cmを測る。4は須恵器壺の口頸部片で、頸部に向かって窄まる。内外面はナデである。復元口径12.4cmを測る。5は須恵器甌の肩部片で、外面は格子目タタキ、内面は青海波の当て具痕を施す。6～8は土師器甌又は甌片である。内面の調整は頸部以下はケズリである。6は小型甌片で、復元口径13.0cmを測る。7は甌片で口縁から頸部の長さは短く、頸部で直角に近い角度で折れ曲がる。復元口径20.8cmを測る。8は甌の口縁部片で、外反する。

出土土器から、8世紀前半と8世紀中頃～後半に分けられる。24号竪穴住居跡に切られているため、23号竪穴住居跡は古くなり、8世紀中頃となる。さらに22号竪穴住居跡は23号竪穴住居跡に切られているため、8世紀前半か。

24号竪穴住居跡（第36・37図 図版15・16）

23号竪穴住居跡の北に位置し、東壁にカマドを設置する住居跡である。調査区境にあり、北西隅側の半分ほどは検出できていない。形状は方形又は長方形で、南北2.75m以上×東西3.5m、深さ0.2mを測る。住居内はさらに一段下がっていたが、主柱穴は検出されなかつた。

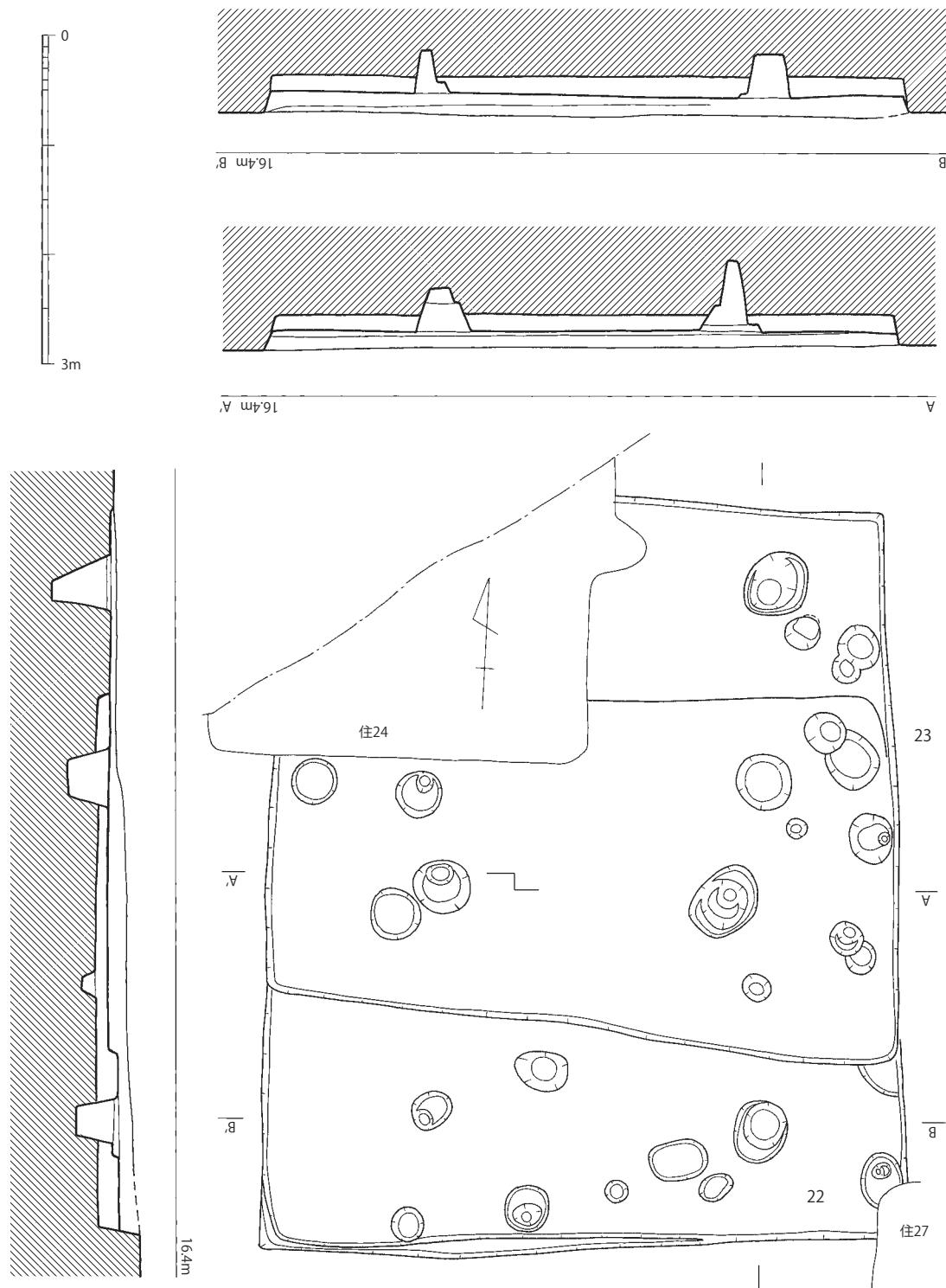
カマドの大部分が住居外に出る突出型で、0.6m前後の半円形状に掘られている。カマド内には被熱痕は確認できなかつたが、焼土や炭を多く含んだ暗茶褐色土などが堆積していた。カマドの袖は焼土が混じる褐色土で構築し、0.2m程ではあるが、両袖が残存する。煙道は検出されなかつた。

第36図9と10は須恵器高台付壺片で、9の高台は高く、外へ大きく広がる。10の高台は短く、僅かに外へ開く。9の方が時期的に古い。11は土師器甌片である。口縁端部で僅かに折れ、そのまま狭まりながら底部に向かう。復元口径28.0cmを測る。

出土土器は7世紀後半～末と8世紀中頃の2時期に分けられるが、検出時の土器の中には7世紀後半

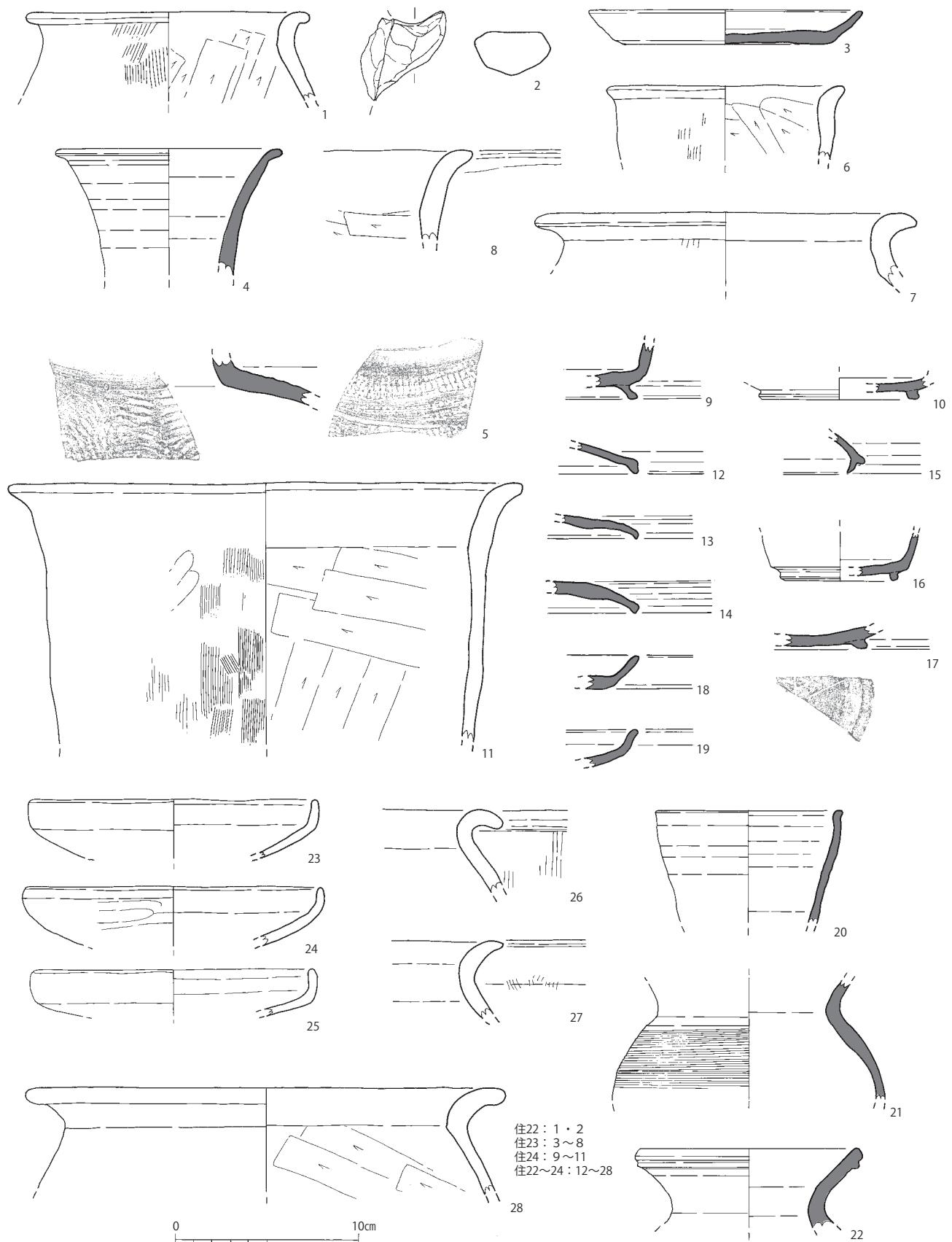
～8世紀後半までの土器も出土する。住居跡の時期は、22号・23号竪穴住居跡の切り合いも考慮し8世紀後半頃か。

第36図12～28は、22～24号竪穴住居跡の検出時の出土土器で、主に8世紀前半～中頃のものが多い。12～22は須恵器である。12～14は壺蓋片である。口縁端部は嘴状になる。15は壺蓋片としたが、身の可能性もある。16と17は高台付壺片である。16の高台端部は方形で垂直に貼り付く。復元高台径6.4cmを測る。17の外面には形状不明なヘラ記号が付く。18と19は壺片である。20は壺の口縁～頸部片で、口縁に向かって垂直に立つ。復元口径10.2cmを測る。21は壺又は甕の頸～肩部片で、外面にカキ目、内面にナデを施す。22は甕の口縁部片で、頸部で窄まり、口縁部は外湾する。復元口径12.4cmを測る。23

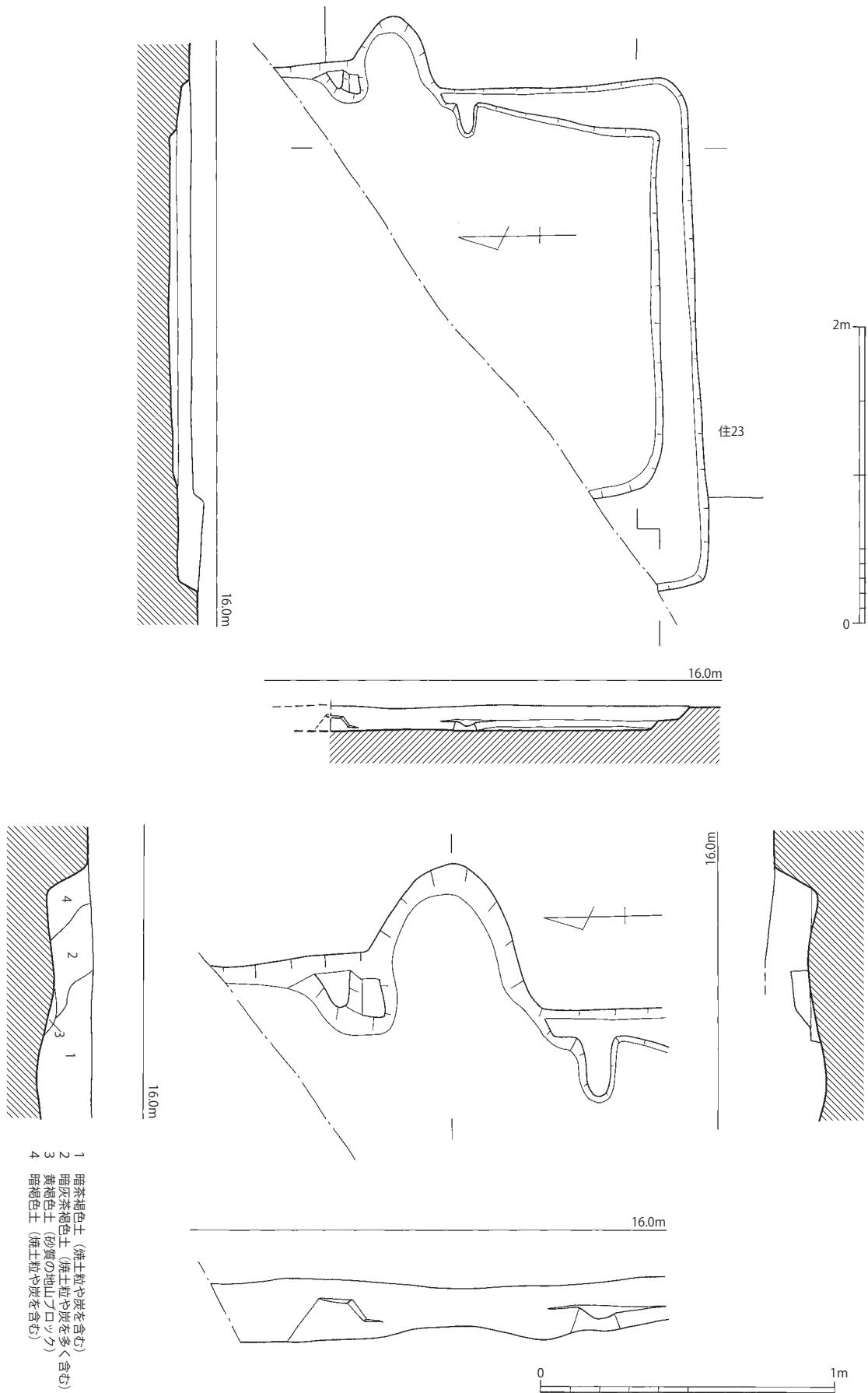


第35図 22・23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

～25は土師器坏片で、いずれも底部は欠損する。23～25は体部中位で折れ、内面に明瞭な稜が付く。底部は欠損するが、丸底状か。26～28は土師器甕の口縁部片で、外湾する。26は頸部で大きく折れ曲がる。28は口頸部が厚く、内面は明瞭な稜が付く。26と27は外面に僅かに刷毛目が残り、28は内面にケズリを施す。28は復元口径26.2cmを測る。



第36図 22～24号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第37図 24号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)

25号竪穴住居跡（第38・41・112図 図版15・47）

22号竪穴住居跡の西側に位置し、北西隅は検出できていない。形状はほぼ方形で南北5.1m×東西4.85m、深さ0.1mを測る。北壁にはカマドを設置し、住居の中軸より東寄りに主柱穴を4基検出した。そのうち南東側の1基は深さが0.1m以下なので柱穴ではない可能性が高い。径0.4～0.65m、深さ0.5mを測る。

カマドは突出型で、調査区境のため全部は検出されなかつたが、壁面の中央に設置する。住居内の焚口側から煙道側へ緩やかに傾斜し、0.1m下がる。袖は検出されなかつた。

第41図1は須恵器坏身片である。2と3は須恵器高台付坏片で、2の坏部の器高は低いが、口縁端部に向かって外へ開く。3の高台は高く、端部は外へ伸びる。復元高台径は9.7cm、18.6cmを測る。4は土師器坏片である。調整は摩滅するが、外面底部にはケズリを施す。5は土師器甕片で、口縁部で外湾し、内面に稜が付く。内面調整はケズリが僅かに残る。復元口径24.0cmを測る。土錘1点も出土する。

住居跡は、出土した須恵器高台付坏から7世紀後半頃か。

26・54号竪穴住居跡（第39～41図 図版16・25）

26号竪穴住居跡は25号竪穴住居跡の南側に位置し、16号竪穴住居跡に東側を、25号竪穴住居跡に北側を切られる。形状は長方形で、南北4.4m以上×東西3.6m、深さ0.1mを測る。西側中央にはカマドを設置し、主柱穴を2基検出す。柱穴は径0.45～0.5m、深さ0.25mを測る。南側の柱穴には径0.1m程柱痕跡がある。

カマドは突出型であるが、1.1m×0.7mの隅丸長方形状になる。カマドの底面の中央部分ではさらに下がり、深さ0.25mを測る。袖は検出されなかつた。

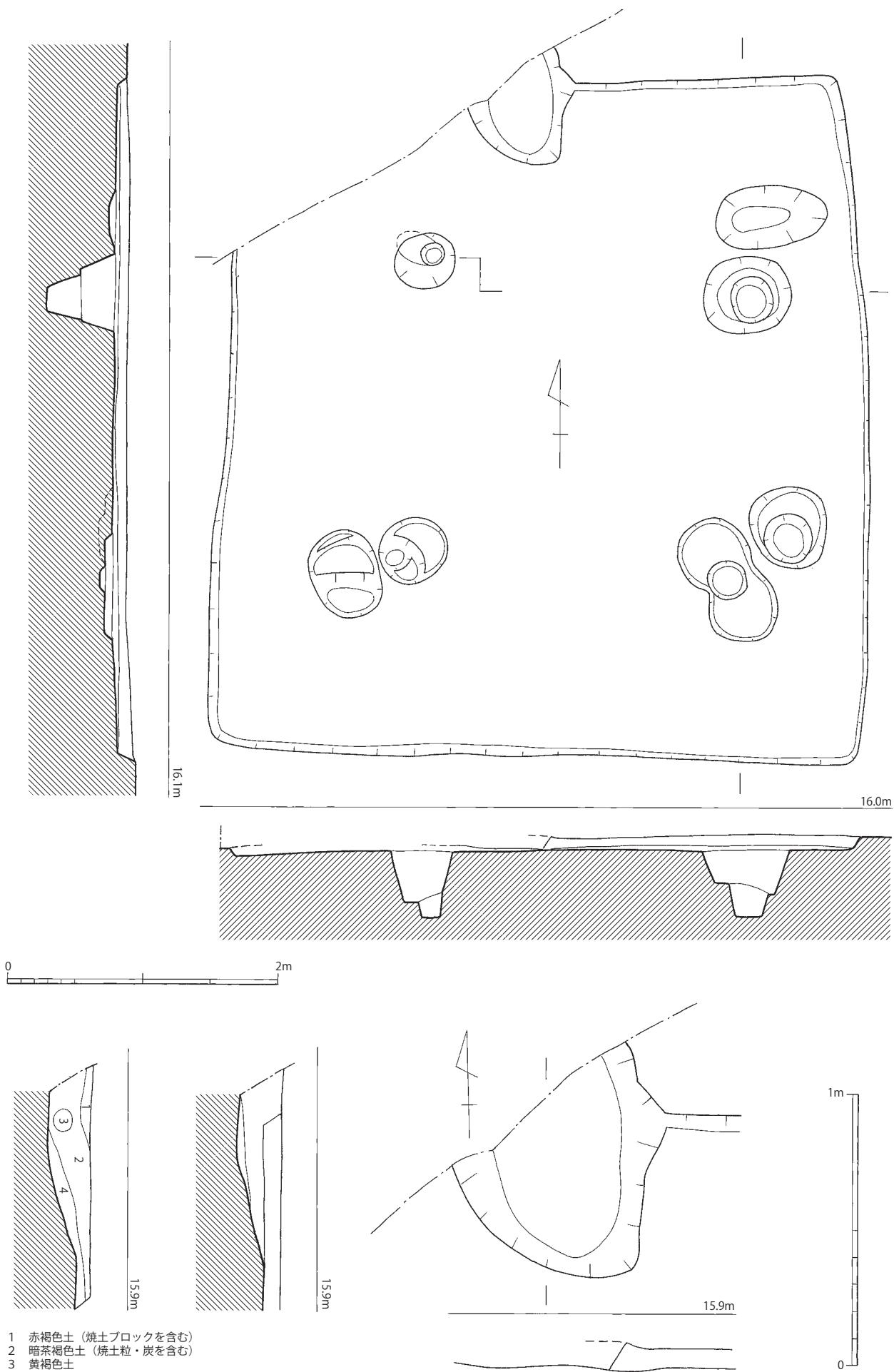
26号竪穴住居跡出土土器は第41図6～10である。6と7は須恵器坏身片で、6は器高2.5cmと低く、底部は平たくなる。復元口径9.4cmを測る。7は形状から身と判断した。8は土師器坏で、調整は摩滅のため不明である。体部下半は丸みがあり、体部中位で折り曲げ、口縁を垂直に立たせる。復元口径15.2cmを測る。9と10は土師器甕片である。9の口縁部はゆるやかに外湾し、体部中位で最大径になる。10の口縁部は外反し、口縁部内面で稜が付く。底部中央は欠損するが、丸底か。調整は摩滅しているが、外面に刷毛目、内面はケズリを施す。復元口径27.8cm、18.0cmを測る。

54号竪穴住居跡は、26号竪穴住居跡の下より検出された住居跡になる。形状はほぼ方形で南北4.75m×東西4.1～4.5m、深さ0.25mを測る。東壁側は直線ではなく、わずかにゆがんでいる。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴を4基検出した。主柱穴は径0.35～0.7m、深さ0.2m以下を測る。

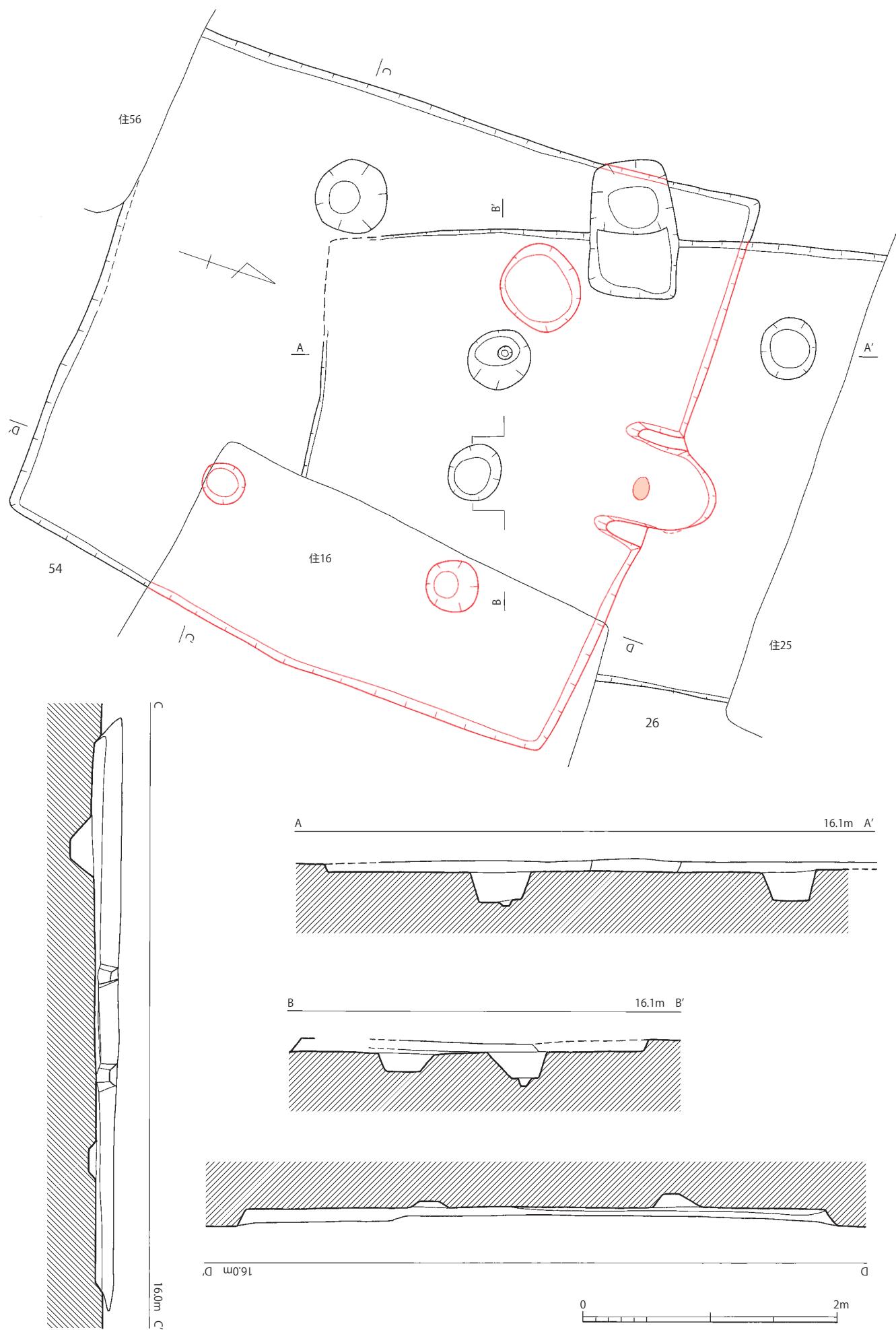
カマドは突出型で、住居外に0.4mの半円形状に掘られていた。煙道は検出されなかつたが、カマドの底面中央付近には、径0.15m前後の範囲で被熱痕を確認した。カマドの袖は暗茶褐色土で構築し、0.5m程真っすぐに伸びる両袖が残存する。

54号竪穴住居跡出土土器は、第41図11～14である。11と12は須恵器坏蓋片で、11はかえりのある坏蓋片、12は口縁端部が嘴状で、器高は1.2cmと低く、平たい形状になる。13と14は土師器甕片で、ともに口縁部は外反する。13は小形甕である。復元口径15.6cm、24.4cmを測る。

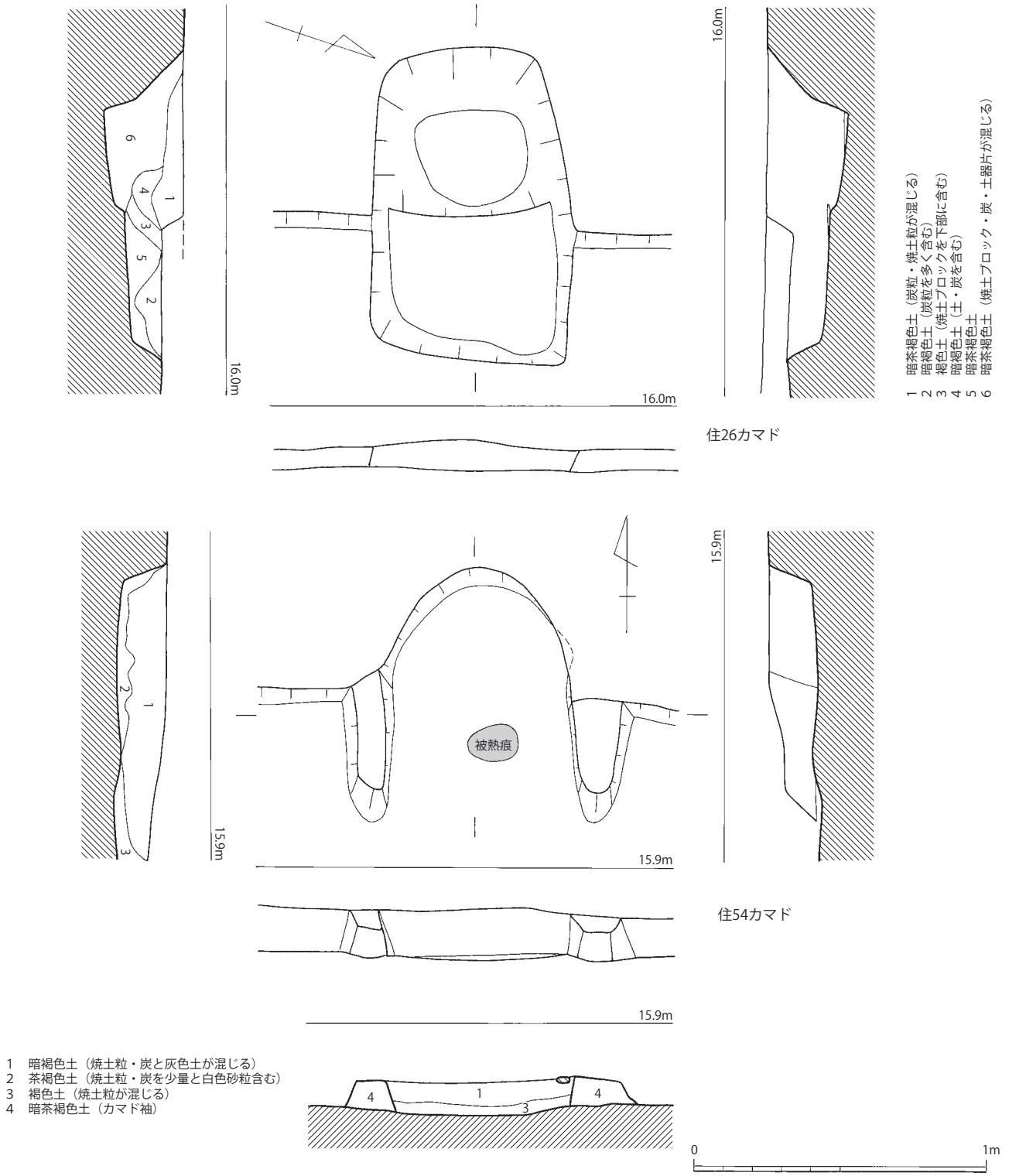
この2つの住居跡の出土土器は、7世紀前半、7世紀後半～末頃、8世紀前半～中頃の時期に分けられる。切り合いから住居跡の時期は、54号竪穴住居跡が7世紀後半～末頃で、26号竪穴住居跡は8世紀前半～中頃か。



第38図 25号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



第39図 26・54号竪穴住居跡実測図 (1/40)

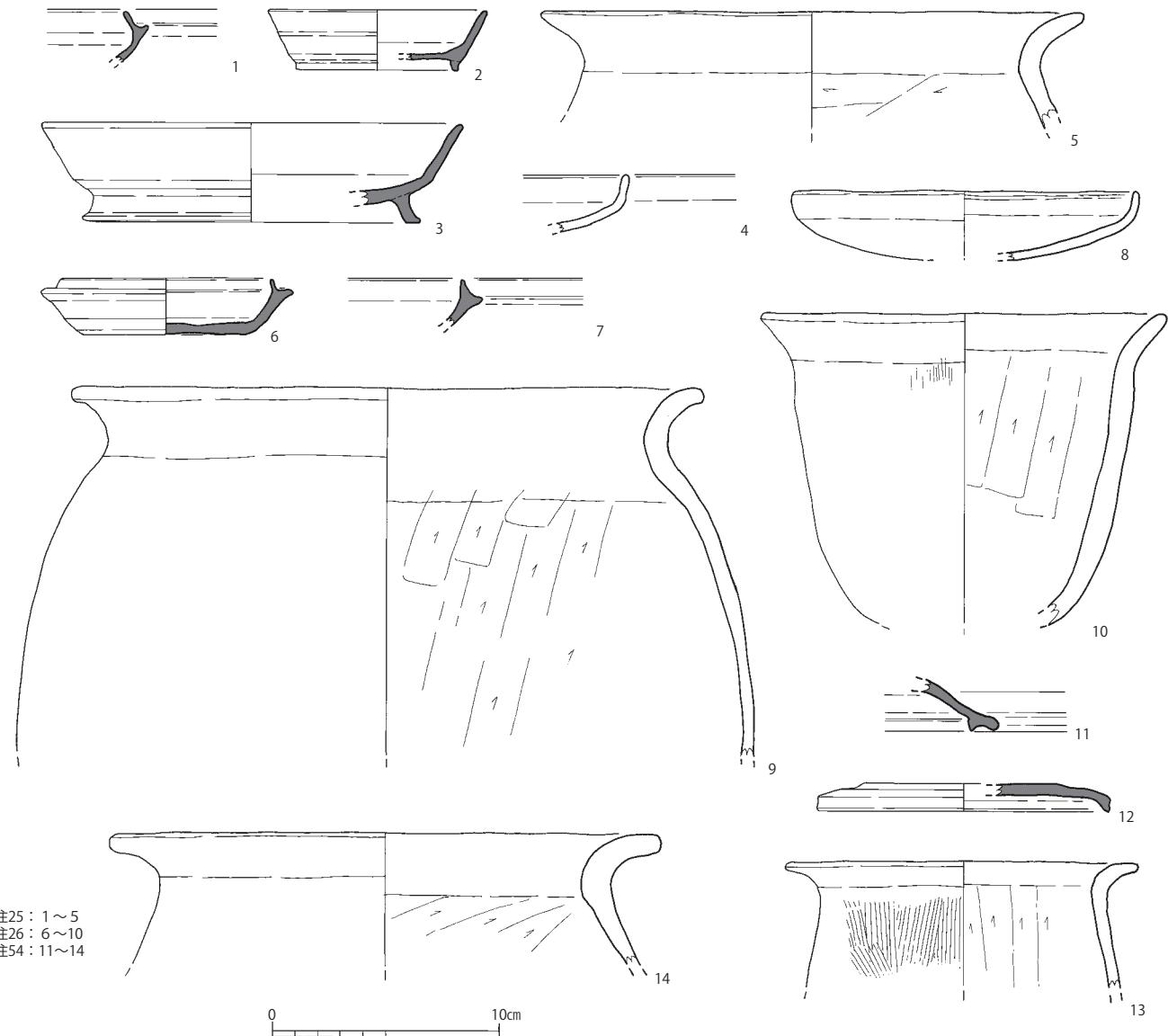


第40図 26・54号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)

27号竪穴住居跡 (第42図 図版16)

22号竪穴住居跡と31号竪穴住居跡の間に位置し、22号竪穴住居跡の南東隅部分を一部切り、31号竪穴住居跡には東側1/3程を切られる。形状は方形又は長方形で、南北2.4m以上×2.55m以上を測る。カマドや主柱穴は検出できなかったが、住居内中央と壁際に、円形で0.2~0.35m、深さ0.15~0.35mのピットをいくつか検出した。また住居内には貼床が施され、床面からさらに0.15m下がる。

出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、住居跡の時期は切り合い関係から、22号竪穴住居跡より新しく、31号竪穴住居跡よりは古くなるので、8世紀中頃前後か。



第41図 25・26・54号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

28号竪穴住居跡（第43・112図 図版17・47）

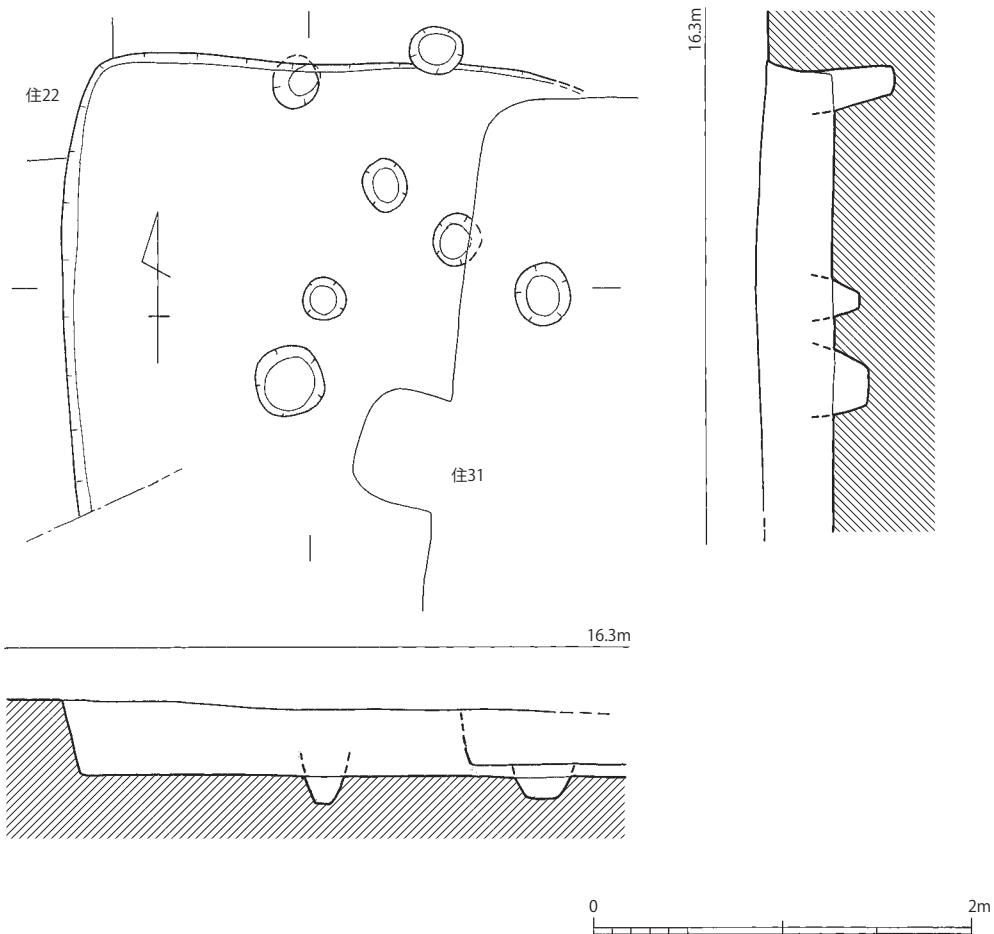
25号竪穴住居跡の西側に位置し、南側にある55号竪穴住居跡を切る。北側の1/3は調査区外になり、未検出である。形状は方形又は長方形状で、南北5.0m×東西5.3m、深さ0.1mを測る。カマドは検出できなかったが、主柱穴は3基検出した。東側にある2基は径0.25～0.3mの柱痕跡がある。いずれも径0.55～0.85m、深さ0.3mを測る。

第43図1は須恵器壺蓋である。調整は外面天井部付近にヘラケズリ、他はナデを施す。口径11.5cmを測る。2も須恵器壺蓋片か。口縁端部が嘴状になるが、角張らない。外面には幅の広い沈線が1条ある。3は土師器甕片である。口縁部は短く、ゆるやかに外湾する。調整は外面に細かい刷毛目、内面は粗いケズリを施す。復元口径25.6cmを測る。その他に土錘1点も出土する。

住居跡の時期は、出土した須恵器壺蓋は2種類あるが、土師器甕から8世紀前半か。

29号竪穴住居跡（第44・45図）

12号竪穴住居跡の南側に位置し、30号・40号竪穴住居跡に大部分を切られるため、北東隅付近のみ



第42図 27号竪穴住居跡実測図 (1/40)

残存する。北東隅部分のみ残存していたが、埋土の色も同様であったので、住居跡と判断した。南北1.7m×東西1.55m、深さ0.1m以下を測る。カマドおよび主柱穴は検出されなかった。

第45図1～3は須恵器壺身片である。口縁と受け部との高さは低い。4は土師器高壺の脚部片である。壺部との接合部の内外面にはケズリの痕跡がある。5と6は土師器甕片で、口縁端部は外反する。調整は外面は刷毛目、内面はケズリの痕跡がある。

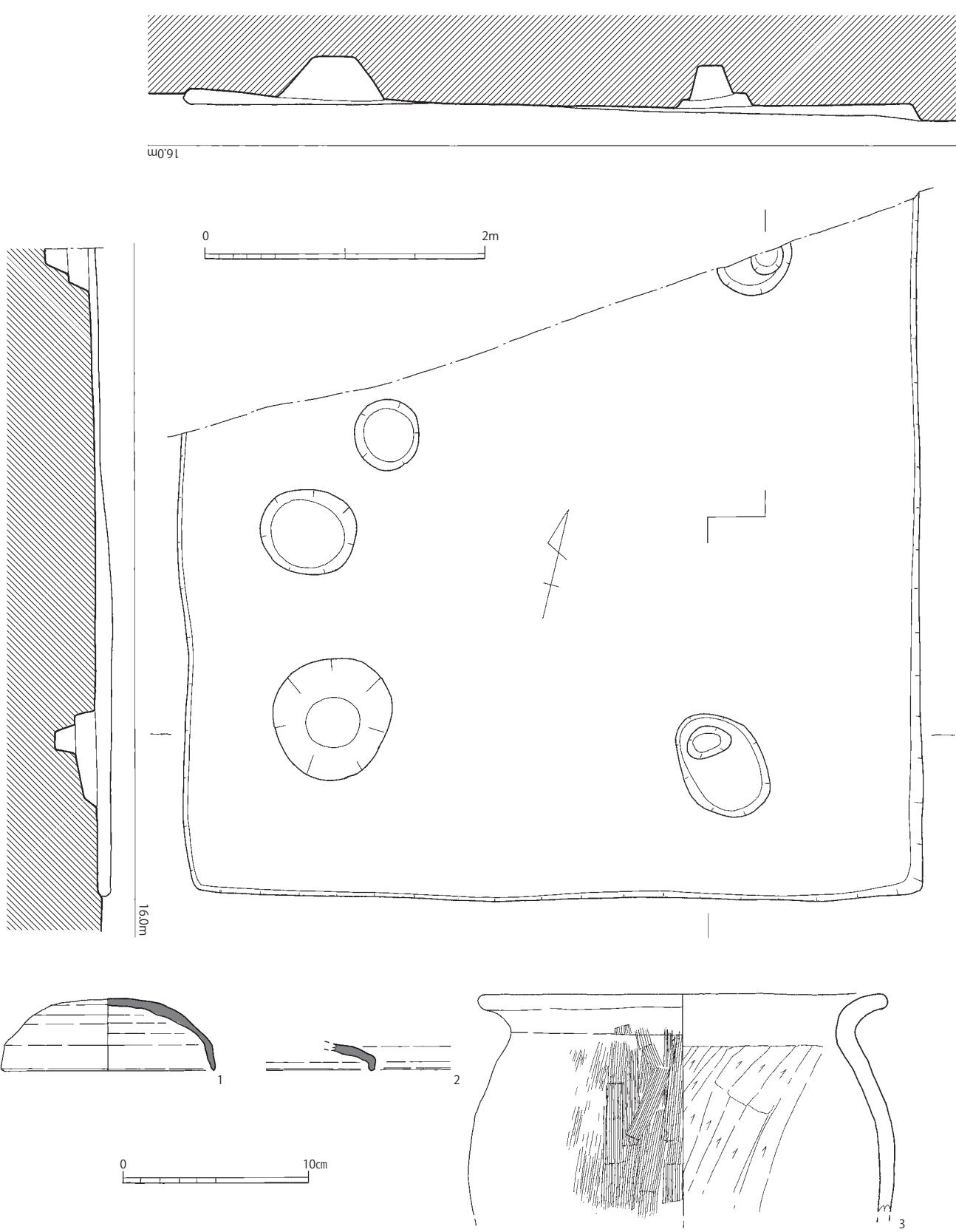
住居跡の時期は、出土土器から6世紀末～7世紀初頭か。

30号竪穴住居跡（第44・45・112図 図版17・47）

29号竪穴住居跡の西側に位置し、東側から南側にある29号・40号竪穴住居跡を切るが、南壁を41号竪穴住居跡に切られる。北壁のラインは少し掘りすぎた感があるが、南北に長い長方形で、南北5.8m×東西4.45m、深さ0.2mを測る。東壁中央にカマドを設置し、主柱穴は西側で2基検出する。径0.4～0.55m、深さ0.2～0.4mを測る。南側にも径0.3mの柱穴が2基あり、これも住居に関係する柱穴かも知れない。

カマドは突出型で、焚口側が0.15m程下がるが、煙道側へ徐々に上がっていく。長さ1.45m、幅0.65m、深さ0.3mを測る。煙道と袖は検出されなかった。

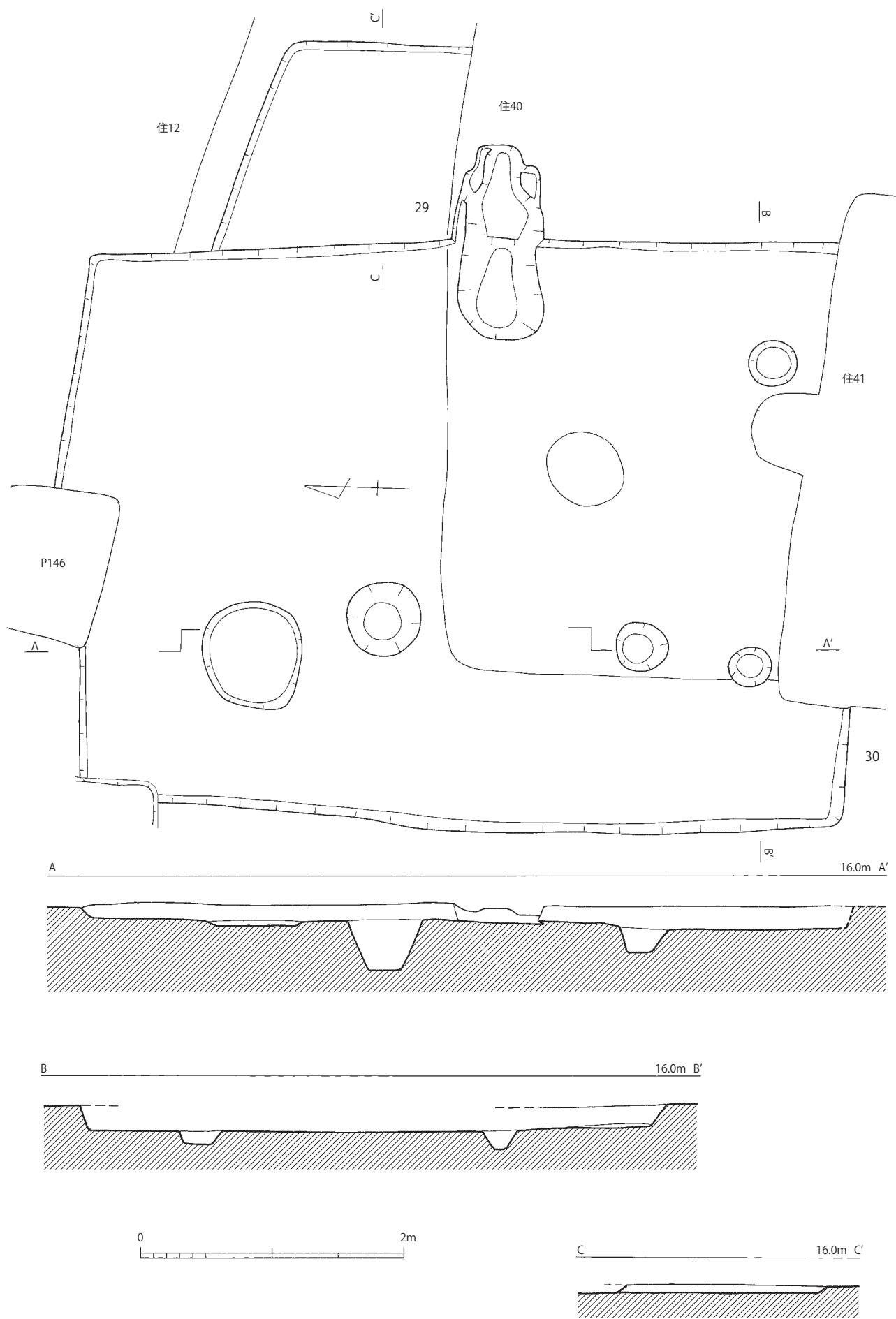
第45図7は須恵器壺蓋片で、口縁端部にはかえりがある。8は須恵器壺身片で、口縁部の形状から身と判断したが浅い壺か。9は須恵器高台付壺である。10は須恵器壺片か。全体的に薄手に作られ、口



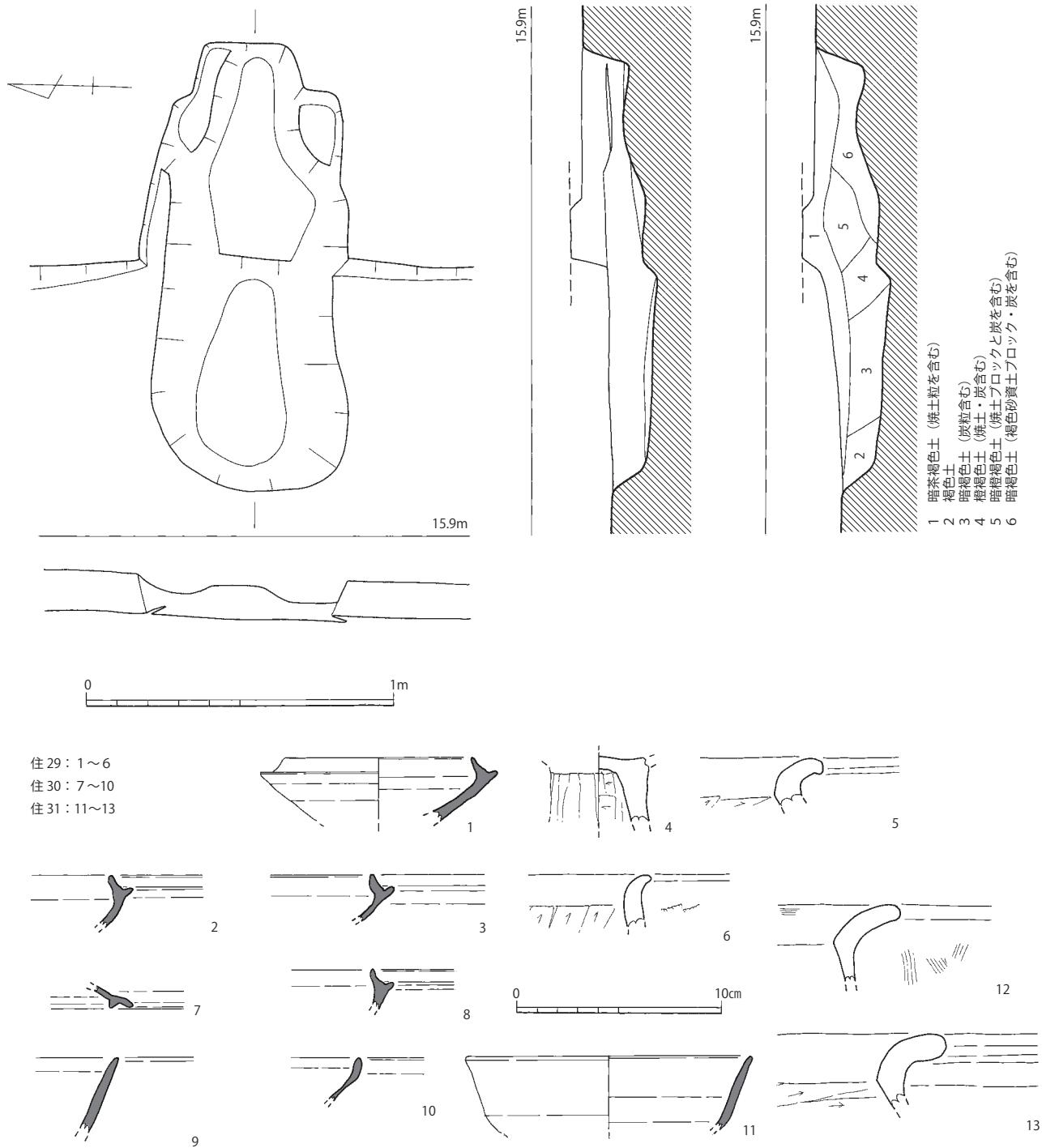
第43図 28号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)

縁端部で肥厚する。土錐1点も出土する。

住居跡の時期は、出土土器から7世紀後半か。



第44図 29・30号竪穴住跡実測図 (1/40)



第 45 図 30 号堅穴住居跡カマドおよび 29 ~ 31 号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/20、1/3)

31号堅穴住居跡（第 45・46 図 図版 16・17）

15号堅穴住居跡の北側に位置し、北側を90号堅穴住居跡、東側を10号堅穴住居跡に切られる。北西隅と南西隅付近を掘りすぎた感があるが、形状は方形に近く、南北4.2m×東西4.6m、深さ0.2mを測る。カマドは西壁中央に設置し、主柱穴を4基検出する。径0.3m前後、深さ0.2m以下を測る。

カマドは突出型で、長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.4mを測る。カマド中央には支脚があったことを示す長円形状の径0.3~0.5m、深さ0.2mを測るピット状の痕跡を確認した。煙道は検出されなかったが、両袖は黄褐色土で構築し、0.25~0.35mが残存する。

第45図11は須恵器高台付壺片で、復元高台径13.9cmを測る。12と13は土師器甕の口縁部片である。いずれも頸部で折れ曲がり、外へ大きく開く。調整は12の外面に刷毛目、13の内面はケズリである。

出土土器は8世紀中頃が多いが、他の住居跡の切り合いから10号・15号竪穴住居跡よりは古くなるので8世紀前半以前か。

32号竪穴住居跡（第47・48図 図版18）

調査区中央南側に位置し、35号・37号・41号竪穴住居跡を切る。南西隅は埋設暗渠で壊されていた。形状は方形又は長方形がやや崩れた形で、西壁に比べて東壁の北西隅を少し掘りすぎている感がある。南北4.5m×東西3.85～4.5m、深さ0.2mを測る。カマドは西側中央付近に設置し、主柱穴を4基検出する。径0.5m前後、深さ0.25～0.5mを測る。

カマドは突出型で、長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。カマド内の左右の壁面には一部、被熱痕が確認できる。焚口側は幅0.9mと半円状に開き、煙道側に向かって深さ0.1m程緩やかに傾斜するが、奥壁では急に立ち上がる。煙道は長さ1.2m、深さ0.2mを測り、最奥部分は幅0.2m以下と狭まるので、そこが煙道口になるか。底面中央には支脚の抜き取り痕と思われる径0.3m、深さ0.15mのピットがある。

第47図1は弥生土器甕片で、復元口径25cmを測る。2と3は須恵器高台付壺片である。2は高台部片で、高台は平たく低い。3は口縁部片である。4は須恵器壺又は高壺片か。外面には浅い沈線が2条巡る。5は須恵器壺の底部片か。器壁が厚く高台も高いので、壺と判断した。内外面ともナデだが、高台より上の外面はケズリを施す。第48図6と7は土師器壺で、ともに平底である。6は体部と底部との境目が緩やかであるが、7は角張る。復元口径13.6cm、14.0cmを測る。8と9は土師器の甕片で、口縁部は外反する。復元口径20.0cm、22.0cmを測る。10は土師器鉢片で、口縁部は外湾する。

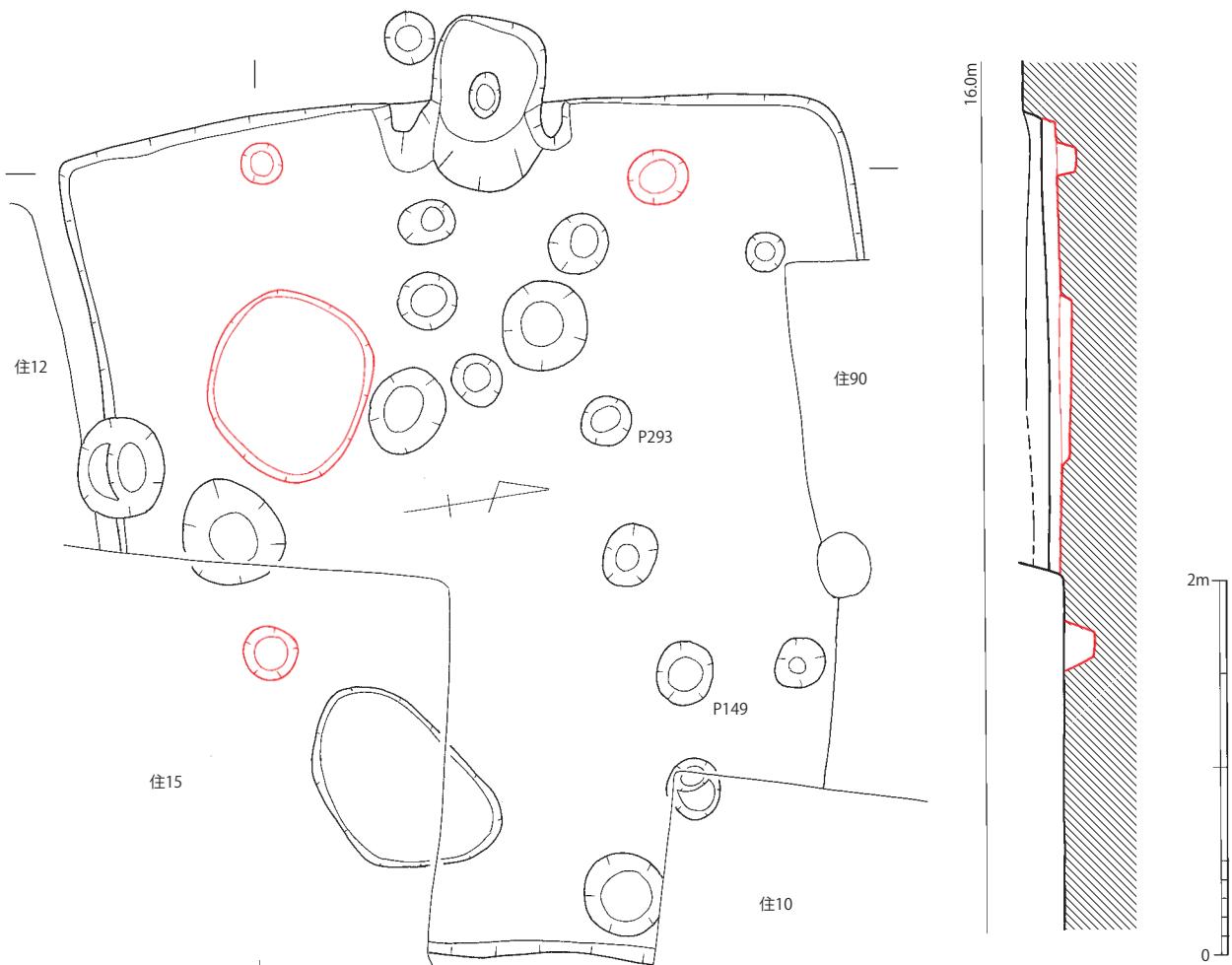
住居跡の時期は出土土器から8世紀中～後半である。

33号竪穴住居跡（第49～51図 図版18・43・44）

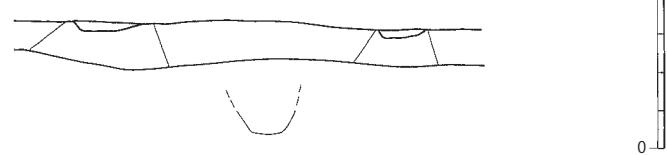
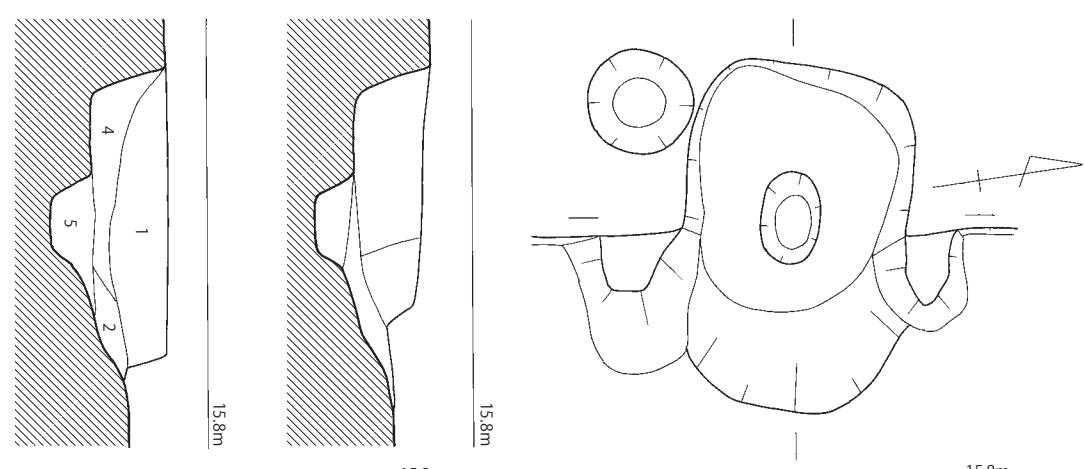
32号竪穴住居跡の南側に位置し、南東隅を38号竪穴住居跡に切られるが、西側は46号・57号竪穴住居跡を切る。中央部分は暗渠により破壊されている。複数の住居跡の切り合いのため、長方形が崩れたような形状で検出する。南北4.4m×東西2.8m、深さ0.2mを測る。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴を2基検出する。径0.35～0.5m、深さ0.2～0.35mを測る。

カマドは突出型で、カマド内から土器片が出土した。長さ1.6m、幅0.65m、深さ0.2mを測る。底面は煙道側に向かって緩やかに上がり 煙道は焚口側のみ傾斜するが、それ以外は平坦である。長さ1.2m、幅0.25m以下を測る。焚口側の底面には赤変した被熱痕を0.3m×0.15mの範囲で検出した。カマドの右壁は暗渠によって破壊されているが、幅0.5mの隅丸長方形状を呈するか。

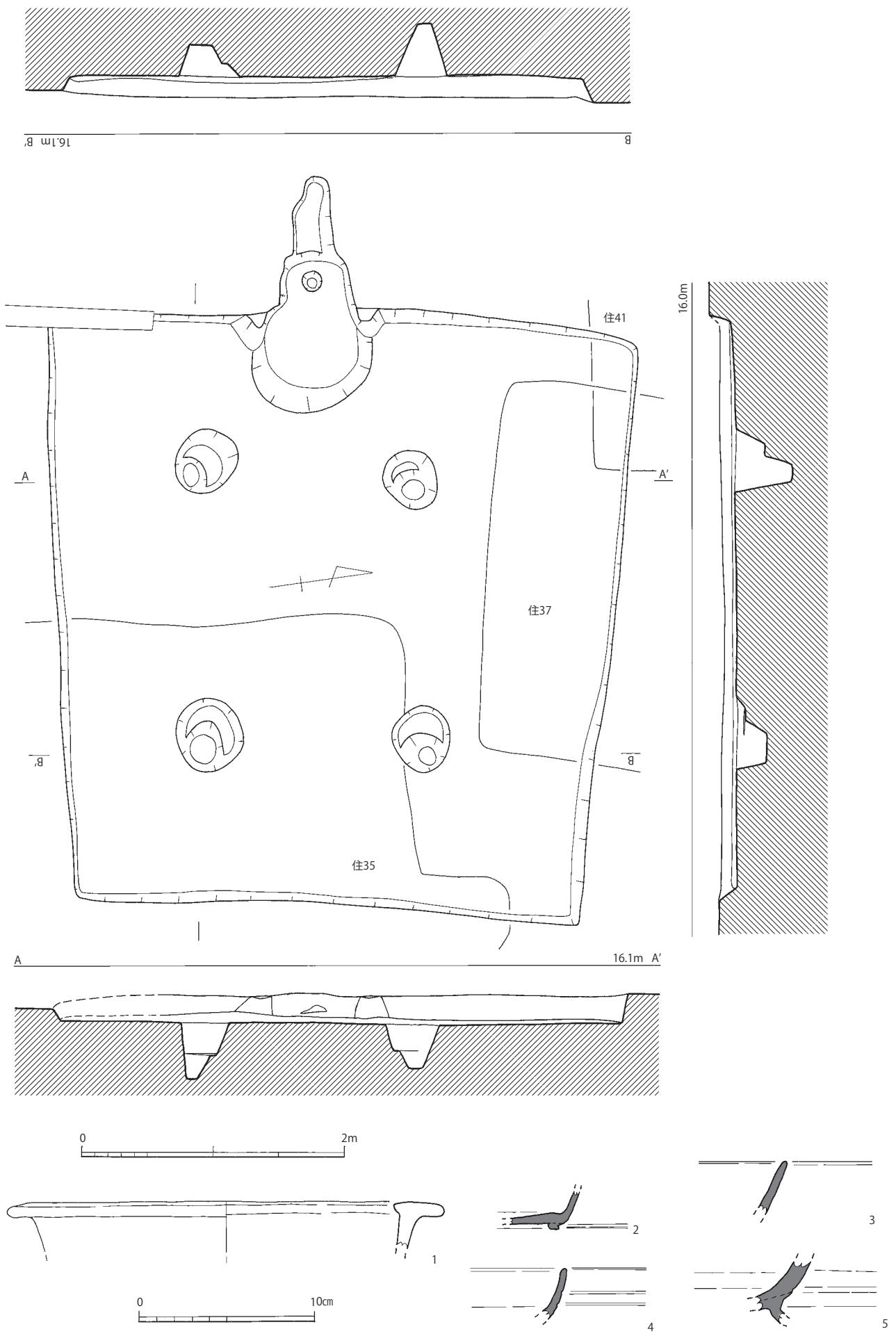
第49図1は須恵器壺蓋片である。外面天井のみヘラケズリ、他は内外面ナデである。外面にはヘラ記号がある。復元口径11.8cmを測る。2も須恵器壺蓋片である。3は須恵器高壺の壺部片か。4～10は土師器である。4は高壺脚部片である。脚端部の手前で折れ曲がり、外へ開く。5は口縁と底部を欠損する把手付甕である。把手は最大径を測る体部中位より上につけられる。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施し、指頭痕が体部に僅かに残る。第50図6は小型の鉢に近い甕で、底部は丸底である。内面には指頭痕が明瞭に残る。復元口径10.8cmを測る。7と8は小形甕で、7の口縁部は僅かに外反し、体部は張らない。8の口縁部は外湾し、それより下の体部中程で張り、最大径を測る。底部は丸底であ



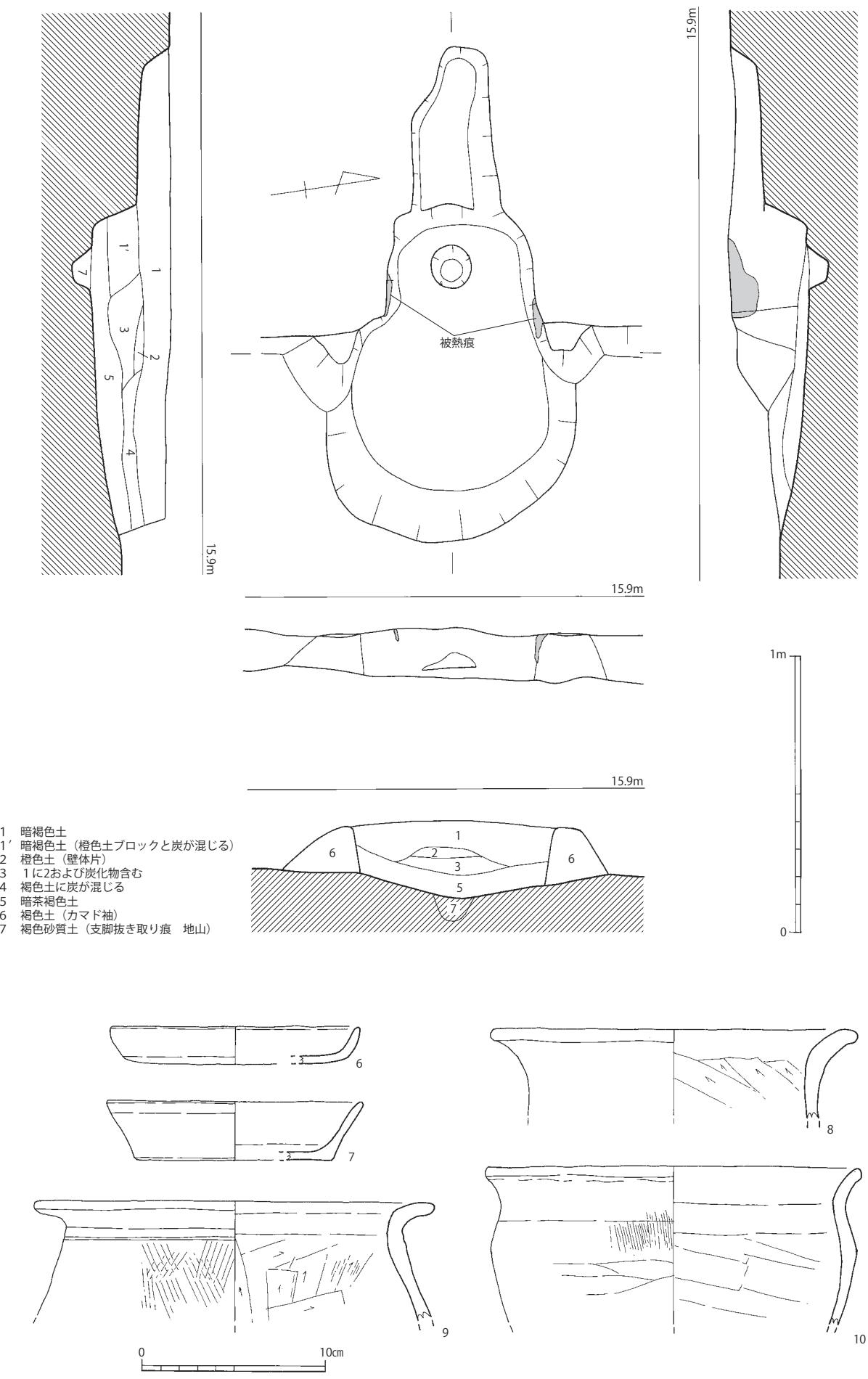
- 1 褐色土（焼土・橙色土）を含む
 2 褐色土
 3 黄褐色砂質土
 4 2と同じ
 5 暗褐色土（焼土片含む）



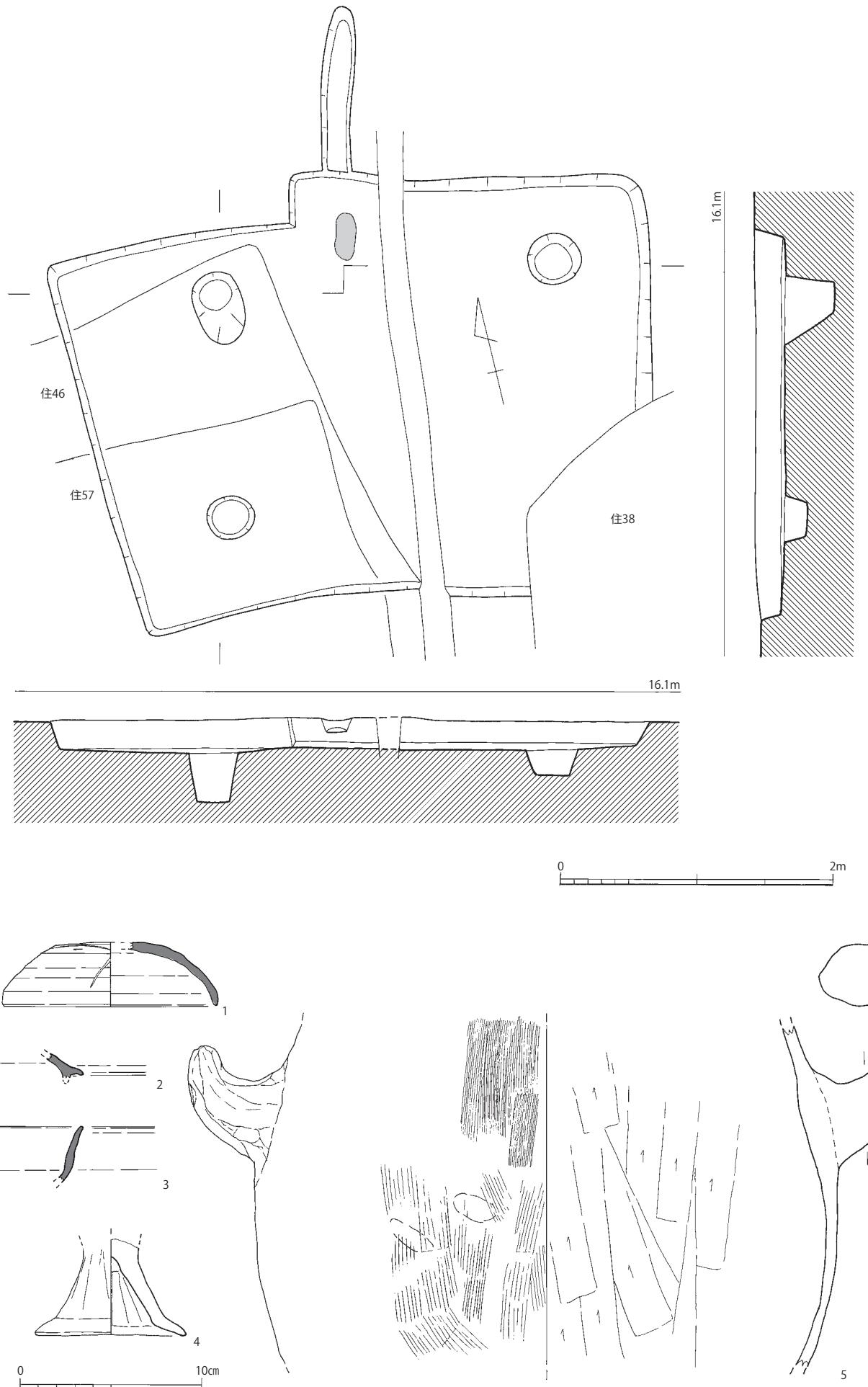
第46図 31号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



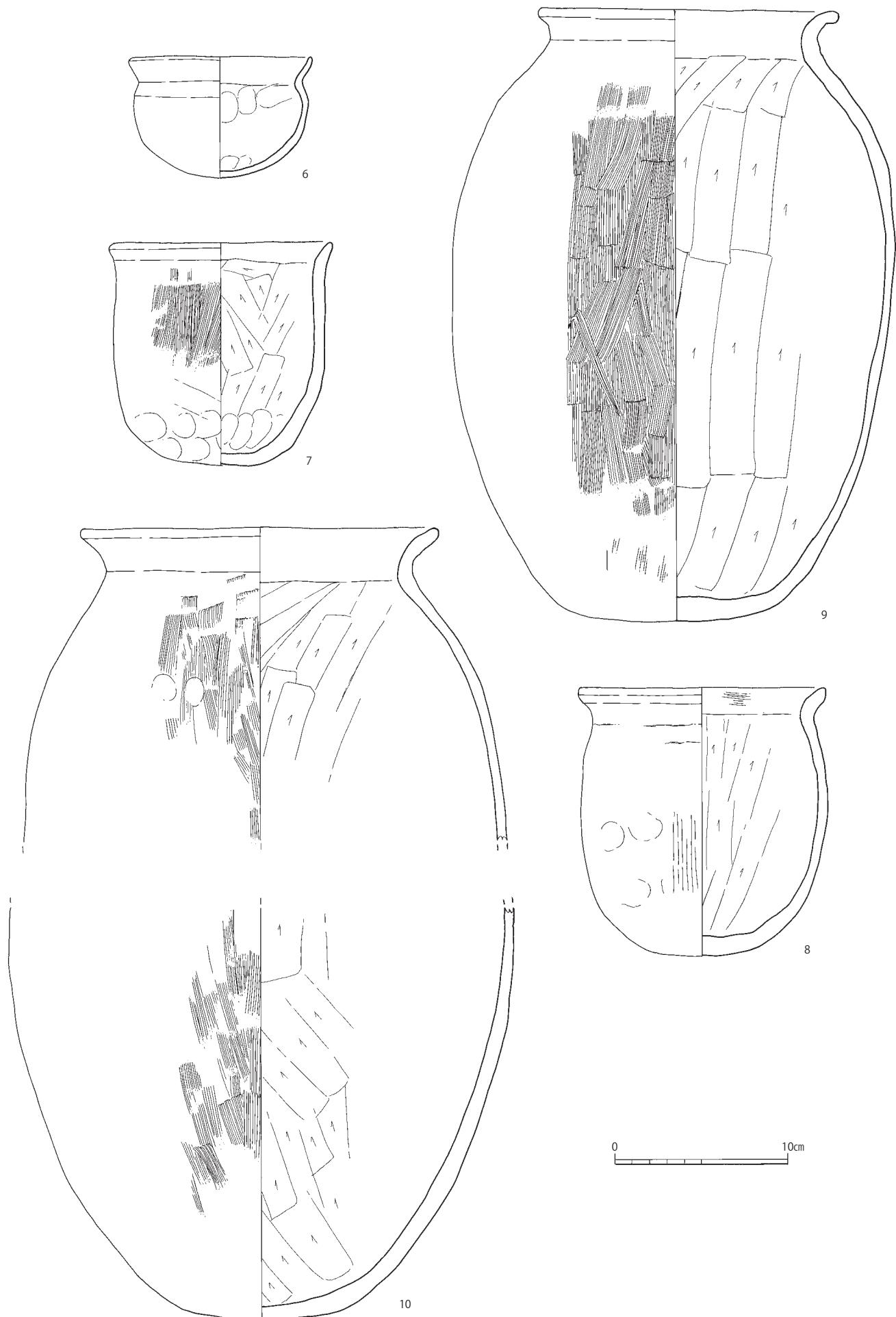
第47図 32号竪穴住居跡および出土土器実測図1 (1/40、1/3)



第48図 32号竪穴住居跡カマドおよび出土土器実測図2 (1/20、1/3)



第49図 33号竪穴住居跡および出土土器実測図1 (1/40、1/3)



第50図 33号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

る。復元口径 13.0cm、14.2cm を測る。8 の方がやや古い型式になる。9 と 10 は平底に近い甕である。9 は 10 に比べると復元口径 17.4cm、器高 35.5cm と一回り小さいサイズになる。口縁は短く、頸部で折れて窄まり、体部中位で張り、最大径をとる。10 は同一の甕として復元したが、破片が足らず 1 個体にすることができなかった。復元口径 20.8cm、器高 41.9cm 以上を測る。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施し、10 の体部や底部には、所々に指頭痕が残る。

住居跡の時期は 7 世紀の土器が多いが、土師器甕から 8 世紀前半～中頃か。

34・36・39 号竪穴住居跡（第 53・54・112 図 図版 19・47）

32 号竪穴住居跡の東側に位置し、調査区南東隅で 3 つの住居跡が重なるように検出した。34 号竪穴住居跡は、36 号竪穴住居跡東側に位置し、その住居跡を切る。北北東寄りに建てられ、唯一検出した住居の隅は、ピットに切られていた。南北 2.1 m × 東西 2.0 m 以上、深さ 0.4 m を測る。柱穴を検出しが、径 0.25 m、深さ 0.1 m と、主柱穴と判断できるものではない。

第 53 図 1 は須恵器坏片である。調整は内外面にナデ、外面底部にはヘラケズリを施す。復元口径 8.6 cm を測る。2 は須恵器提瓶又は平瓶片か。調整は外面にカキ目、内面はナデである。3 は土師器高台付坏の高台片である。4 は土師器高坏の坏部片か。内外面はナデ調整である。

36 号竪穴住居跡は東側の 34 号竪穴住居跡に切られ、南側の 39 号竪穴住居跡を切る。北向きに建てられ、南北 4.6 m × 東西 4.5 m 以上、深さ 0.25 m を測る。床面はさらに深さ 0.1 m の貼床を施していた。北壁にカマドを設置し、主柱穴を 2 基検出する。柱穴の並びと住居壁のラインはややすれているが、柱穴ははつきりと確認でき、径 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.35 m を測る。

カマドは造り付け型で、煙道を住居外に作る。煙道は焚口側から緩やかに登り、長さ 1.8 m、幅 0.25 m 以下、深さ 0.15 m を測る。焚口では袖を検出できなかったが、長さ 0.8 m、幅 0.45 m、深さ 0.1m 以下を測る。

第 53 図 5 ~ 10 は 34・35・36 号竪穴住居跡出土である。5 ~ 8 は須恵器坏蓋片である。口縁端部の形状は 7 はかえりがあるが、5 と 8 は嘴状になる。6 は天井部片で、擬宝珠の撮みが付く。調整は外面天井部にヘラケズリ、それ以外の内外面はナデである。9 は須恵器高台付坏片である。10 は土師器壺片で、口縁端部は内側に折れ曲がる。

この 2 つの住居跡からは土錘も出土する。

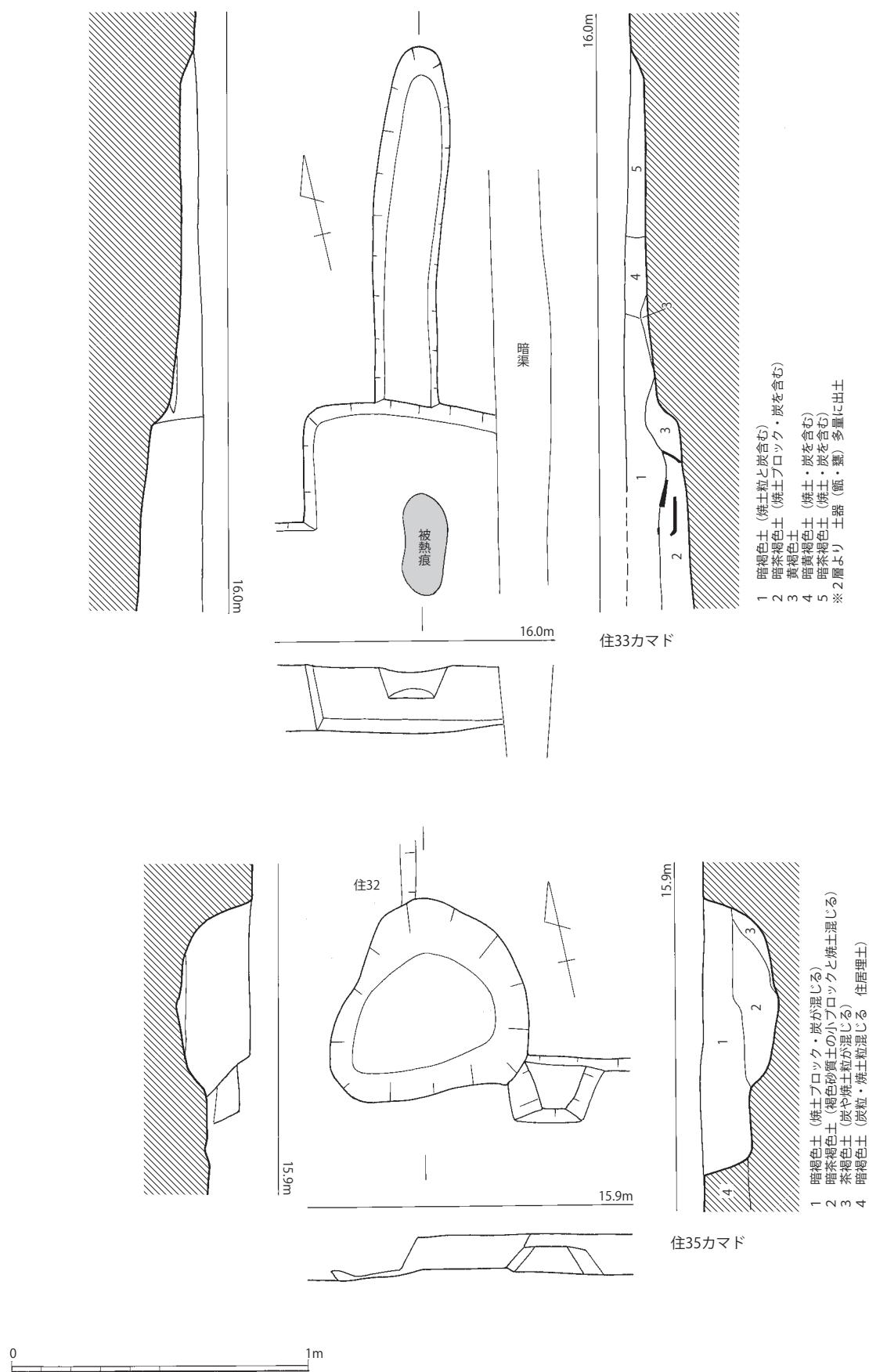
39 号竪穴住居跡は 36 号竪穴住居跡の南側に位置し、その住居跡の床面下から検出する。34 号竪穴住居跡の切り合いは調査区の境で検出したため不明であるが、出土土器から検討すると切られている可能性が高い。全容が把握できないので形状は不明だが、南北 1.1 m × 東西 1.8 m、深さ 0.15 m 以下を測る。

第 53 図 11 は須恵器坏身片、12 は須恵器坏片である。いずれも調整は内外面ナデである。

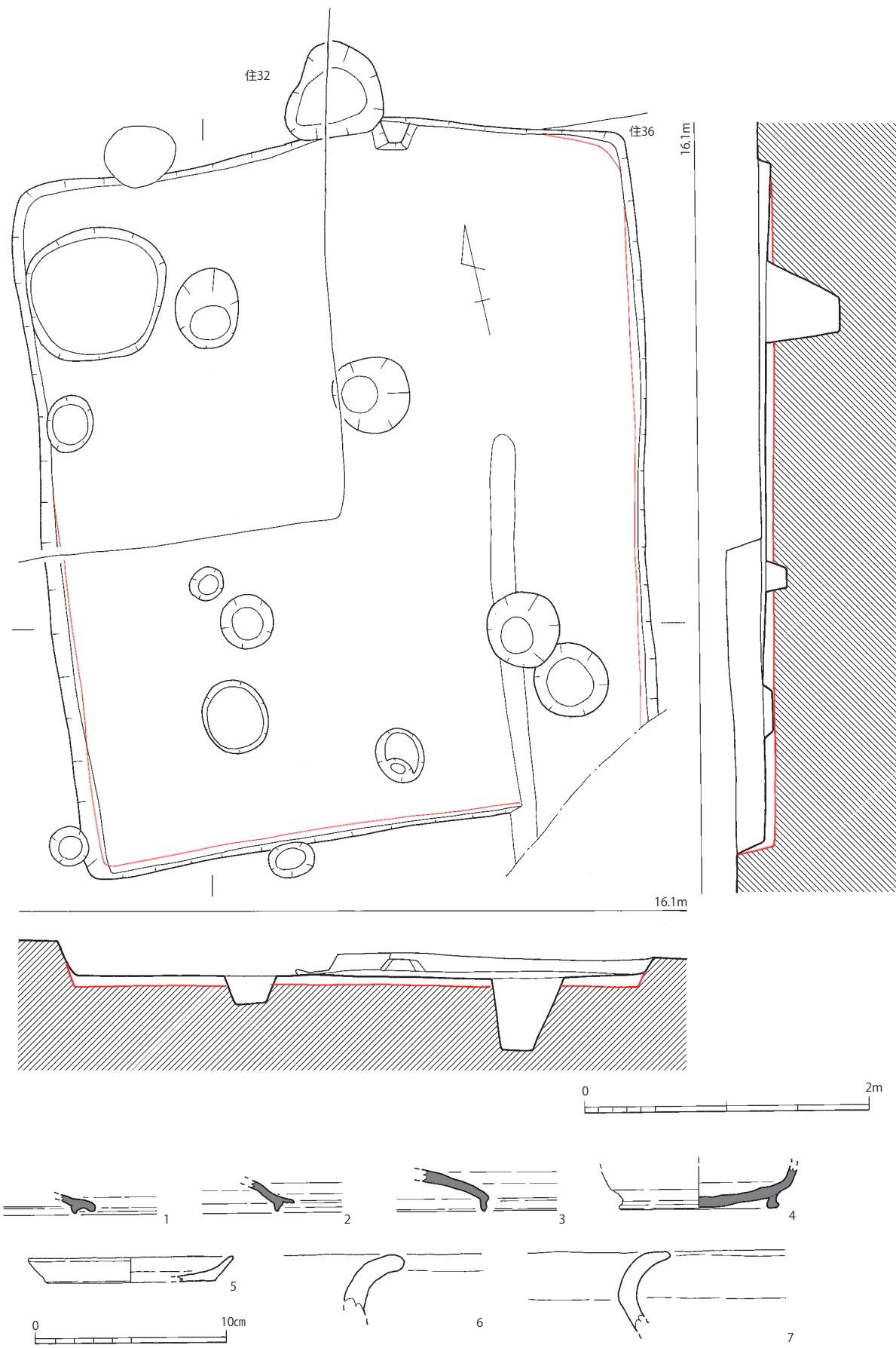
住居跡は、切り合いから 34 号、次に 36 号、そして 39 号の順に古くなる。住居跡の時期は出土土器から 8 世紀前半以降、7 世紀後半、6 世紀末～7 世紀初頭か。

35 号竪穴住居跡（第 51・52・112 図 図版 19・47）

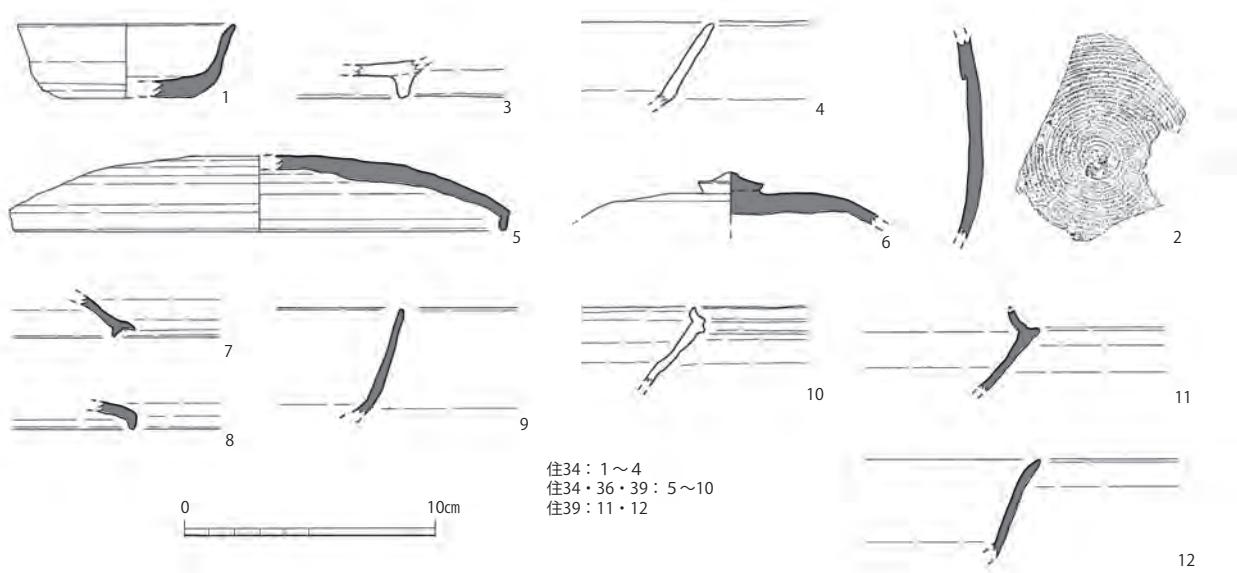
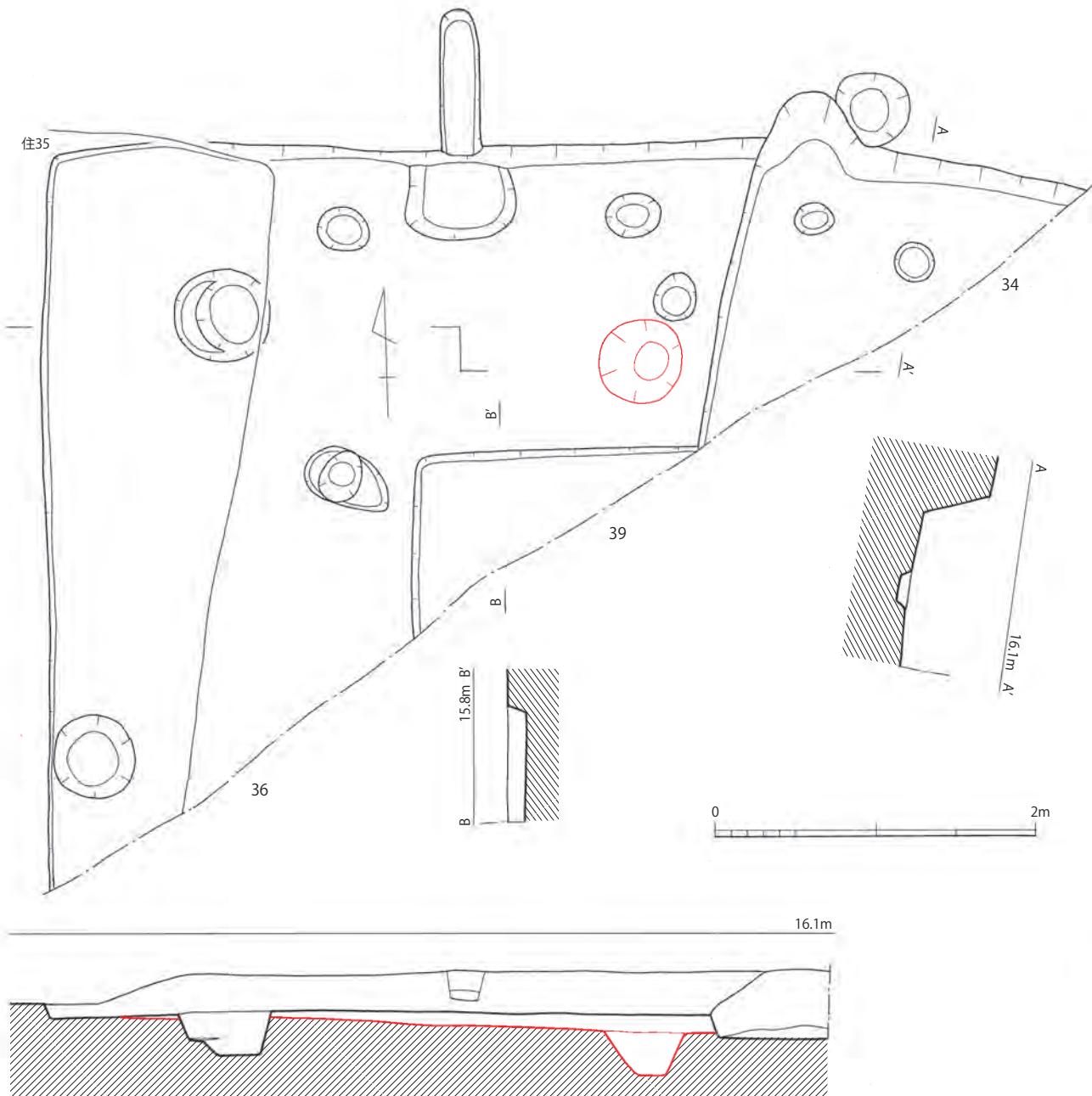
32 号竪穴住居跡に北西側を切られているが、東側にある 36 号竪穴住居跡を切る。南東隅は調査区外で検出できなかった。形状は長方形がやや崩れた形で、南北 4.9 m × 東西 4.1 ~ 4.4 m、深さ 0.1 m を測る。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴は 3 基を検出した。柱穴は径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.2 ~ 0.5 m を測る。



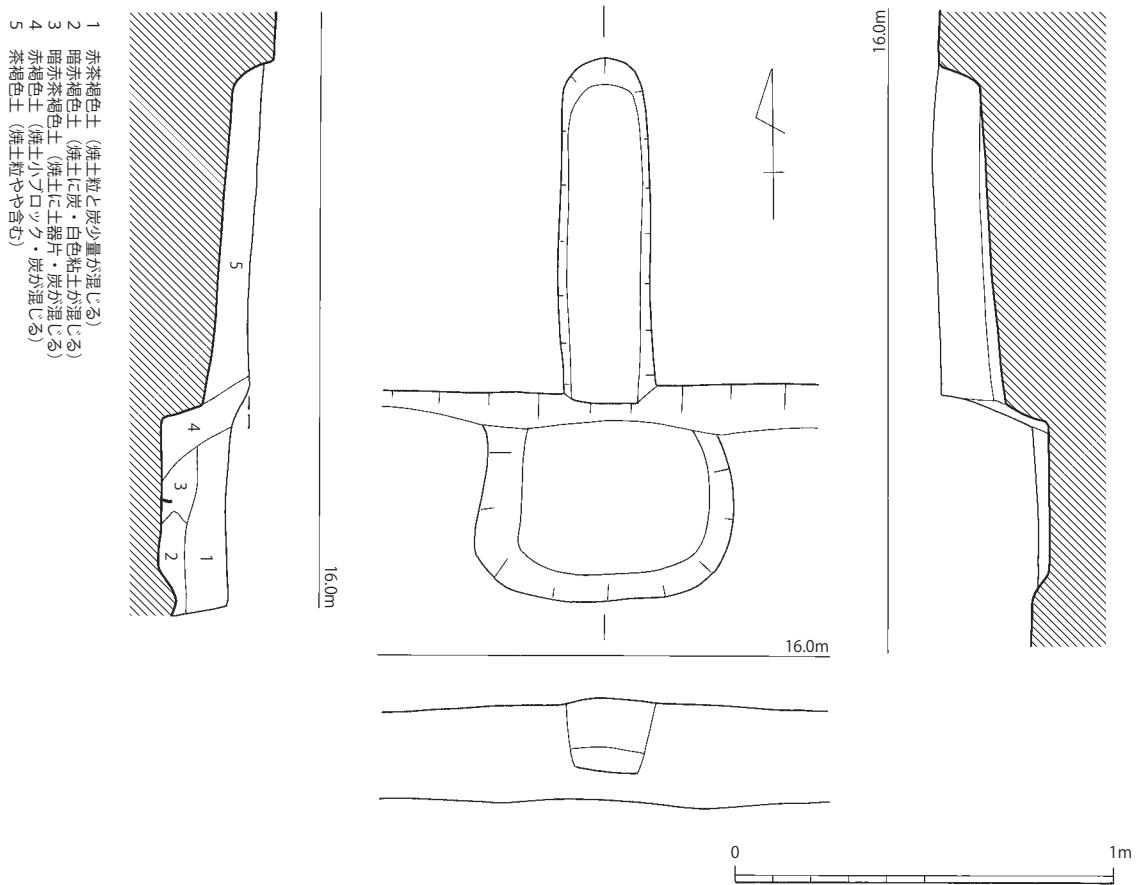
第51図 33・35号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)



第52図 35号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)



第53図 34・36・39号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)



第 54 図 36 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)

カマドは突出型で、煙道側に向かって下がり、奥壁で立ち上がる。長さ 0.7 m × 幅 0.7 m、深さ 0.25 m を測る。カマドも 1 / 3 程切られていて、煙道及び左袖は検出できなかったが、右袖は 0.15 m 程残存する。

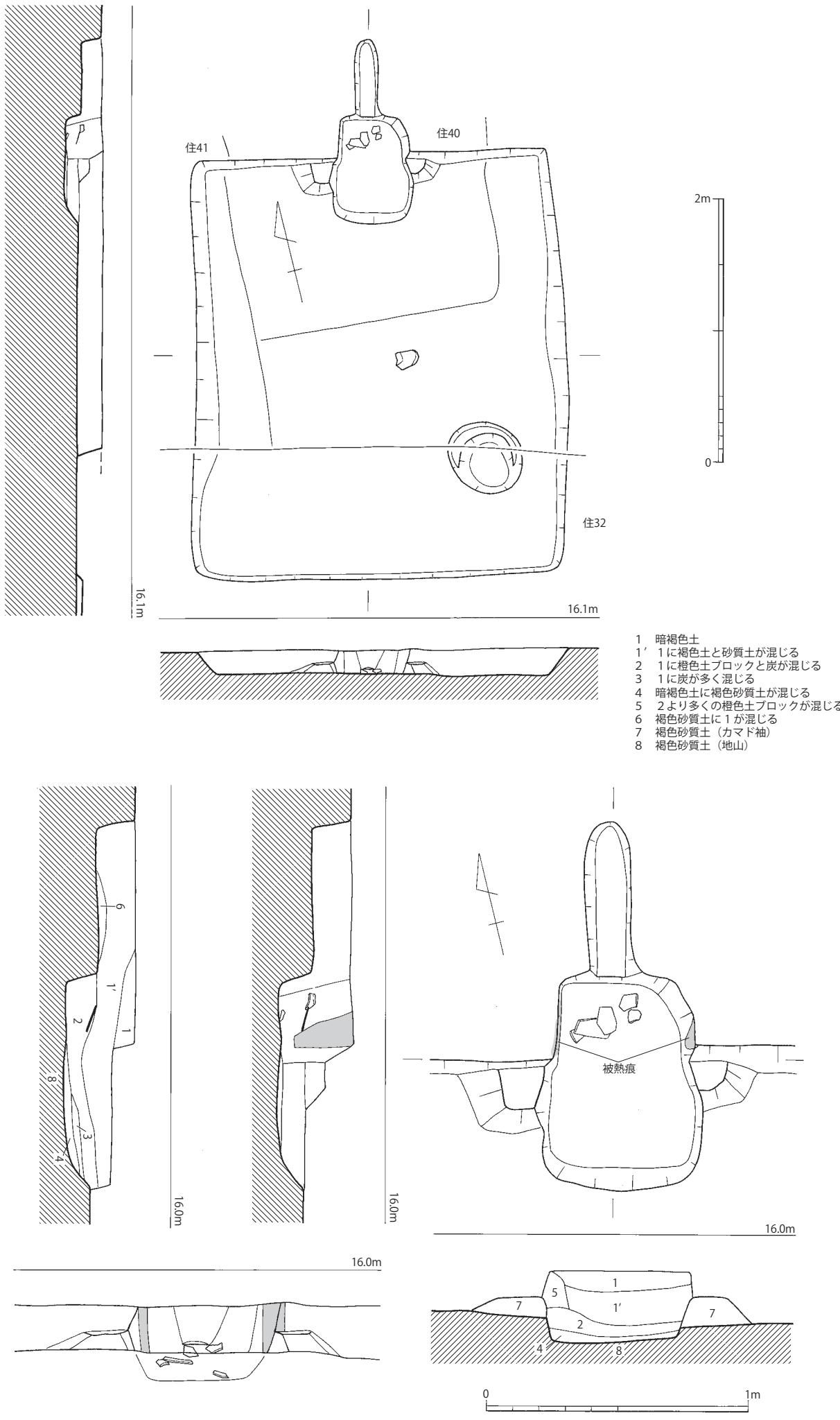
第 52 図 1 ~ 3 は須恵器坏蓋片である。1 と 2 はかえりのある口縁部片で、3 は嘴状になる。4 は須恵器高台付坏片である。高台端部は外へ伸びる。復元高台径で 8.4cm を測る。5 は土師器坏片で、器高 1.3 cm と浅いづくりである。調整は内外面ナデである。復元口径 10.8cm を測る。6 と 7 は土師器甕の口縁部片である。他には土錘 1 点も出土する。

住居跡の時期は、3 の須恵器坏蓋から 8 世紀前半か。

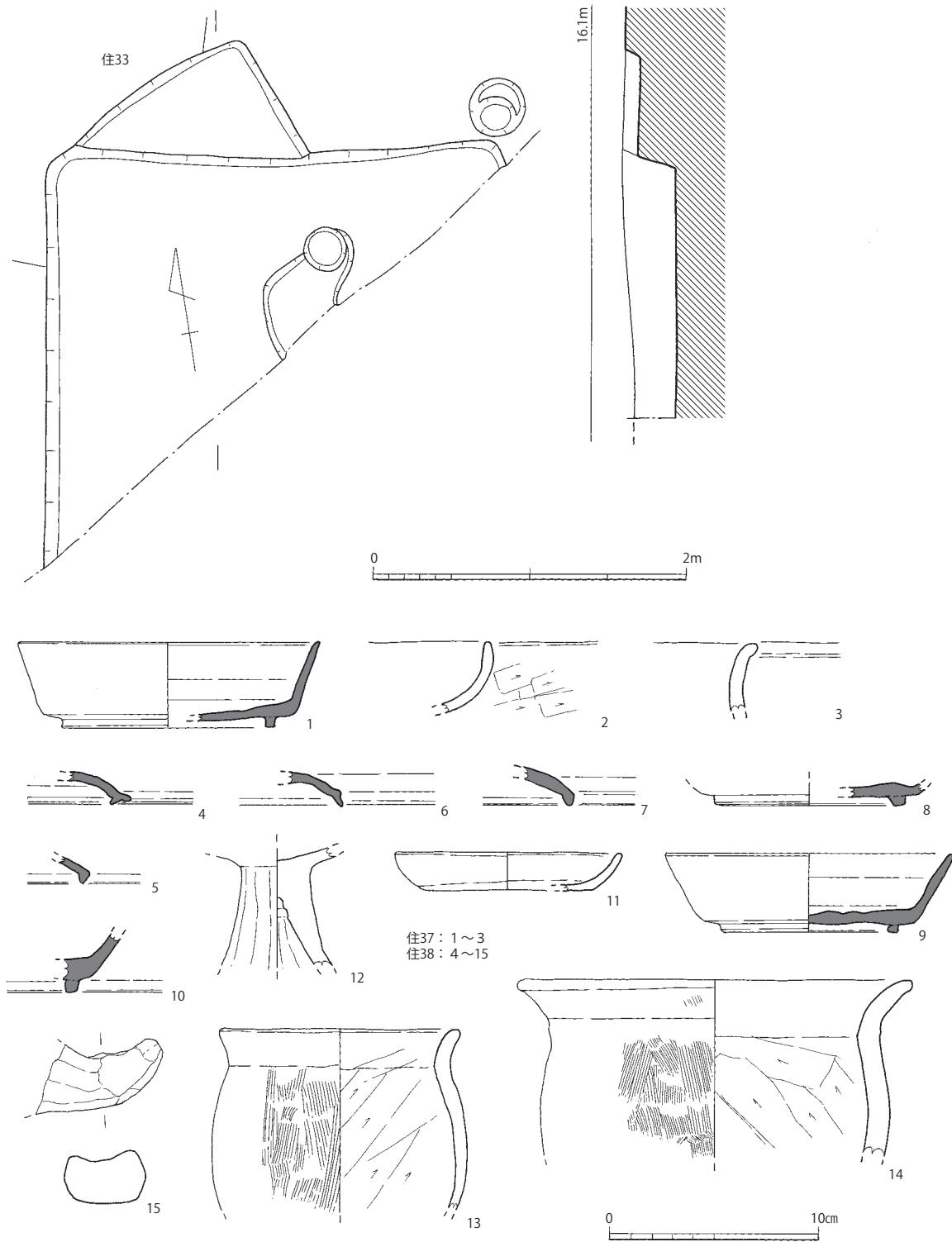
37 号竪穴住居跡 (第 55・56 図 図版 19・20)

32 号竪穴住居跡の北側に位置し、40・41 号竪穴住居跡を切る。形状は南北に長い長方形で、南北 3.2 m × 東西 2.8 m、深さ 0.2 m を測る。カマドは北壁中央に設置し、ピット 1 基を検出した。ピットは径 0.7 m 前後、深さ 0.15 m 以下を測る。

カマドは突出型である。住居外に煙道を長さ 0.35 m、幅 0.5 m、深さ 0.25 m 掘削し、壁面に被熱した痕跡がみられた。カマド内には暗褐色土が堆積し、それに褐色砂質土、橙色土ブロックや炭が混入し、6 層に分層できた。奥壁側には土器が集中して出土した。焚口は長さ 0.5 m、幅 0.6 m の範囲で、床面より深さ 0.1 m 下がる。住居壁に長さ 0.2 ~ 0.25 m の両袖が付く。煙道はカマド内の奥壁中央に設置し、煙道口に向かって窄まる。底面は傾斜もなく、平坦である。長さ 0.55 m、幅 0.15 m、深さ 0.15 m を測る。



第 55 図 37 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



第56図 38号竪穴住居跡および37・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)

第56図1は須恵器高台付壺である。2は土師器壺片で、外面を削ることで丸みを作っている。3は土師器甕片で、口縁端部で僅かに折れ曲がる。

住居跡の時期は、切り合いから40号・41号竪穴住居跡よりも新しくなる。そのため、8世紀中頃か。

38号竪穴住居跡（第56図 図版18・44）

33号竪穴住居跡の南東に位置し、その住居跡を切る住居跡である。住居跡は1/2程が調査区外になり、検出できなかった。形状は方形に近く、南北2.65m以上×東西2.9m、深さ0.3mを測る。住居内にはピットを検出したが、0.1m以下と浅く、主柱穴ではない。カマドも検出していない。

第56図4～7は須恵器坏蓋口縁部片である。4のみ古い様相を示すかえりがある口縁である。他の口縁端部は嘴状になる。8～10は須恵器高台付坏片である。いずれの高台も低平で、貼付く位置は、底部の内側になる。11～15は土師器である。11は平底の坏片で、調整は内外面ナデである。復元口径11.0cmを測る。12は高坏脚部片で、内外面にはケズリを施す。13と14は小形甕片である。13は体部中位で、14は口縁部で最大径を測る。そのため、14の口縁端部は外へ大きく開く。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。復元口径11.6cm、19.0cmを測る。15は甕の把手である。

住居跡の時期は、切り合いから33号竪穴住居跡よりも新しくなる。出土土器から8世紀中頃以降か。

40号竪穴住居跡（第57・59図 図版44）

32号竪穴住居跡の北側に位置し、北側の29号竪穴住居跡を切り、北側の30号竪穴住居跡と南側は37号・41号竪穴住居跡に切られる。形状は東西に長い長方形で南北5.0m×東西5.6～6.0m、深さ0.3m以下を測る。カマドは北壁中央に設置していた可能性があるが、30号竪穴住居跡のカマドと同位置にあり、破壊された可能性がある。主柱穴は4基検出するが、南側の2基の柱列の位置はずれる。柱穴は径0.5～0.7m、深さ0.3～0.55mを測る。

第59図1～3は須恵器坏蓋片で、かえりのある坏蓋片か。口縁端部とかえりとの境が低い。4～6は須恵器高台付坏片である。4と5は坏部片、6の高台端部は僅かに外へ伸びる。7と8は土師器坏である。7は底が平坦になる浅い坏片だが、8の口縁は垂直に立ち、それより下は削って丸みのある底部をつくる。9と10は土師器甕片である。9の口縁は外湾して外へ開くが、10の口縁はあまり外へは開かない。口縁～頸部にかけては厚手だが、体部は薄く作る。口縁の内外面はナデ、外面体部は刷毛目、内面体部は粗いケズリを施す。復元口径16.6cmを測る。

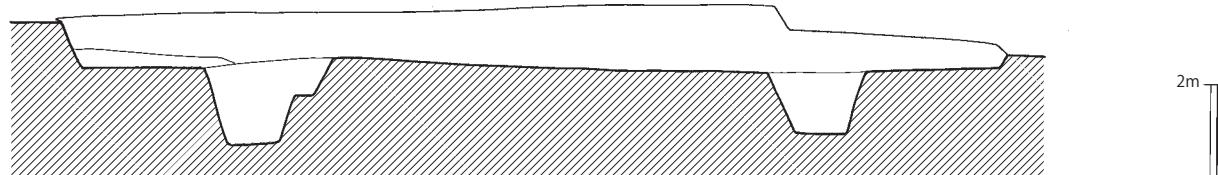
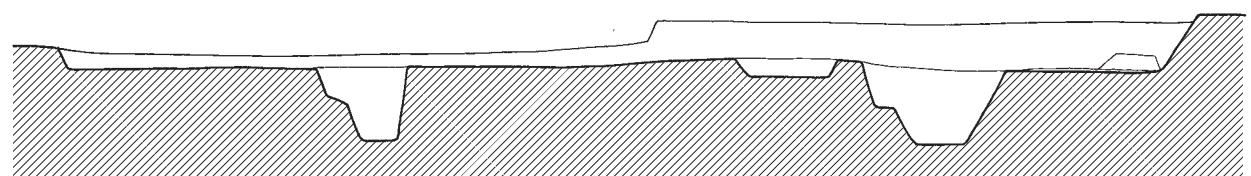
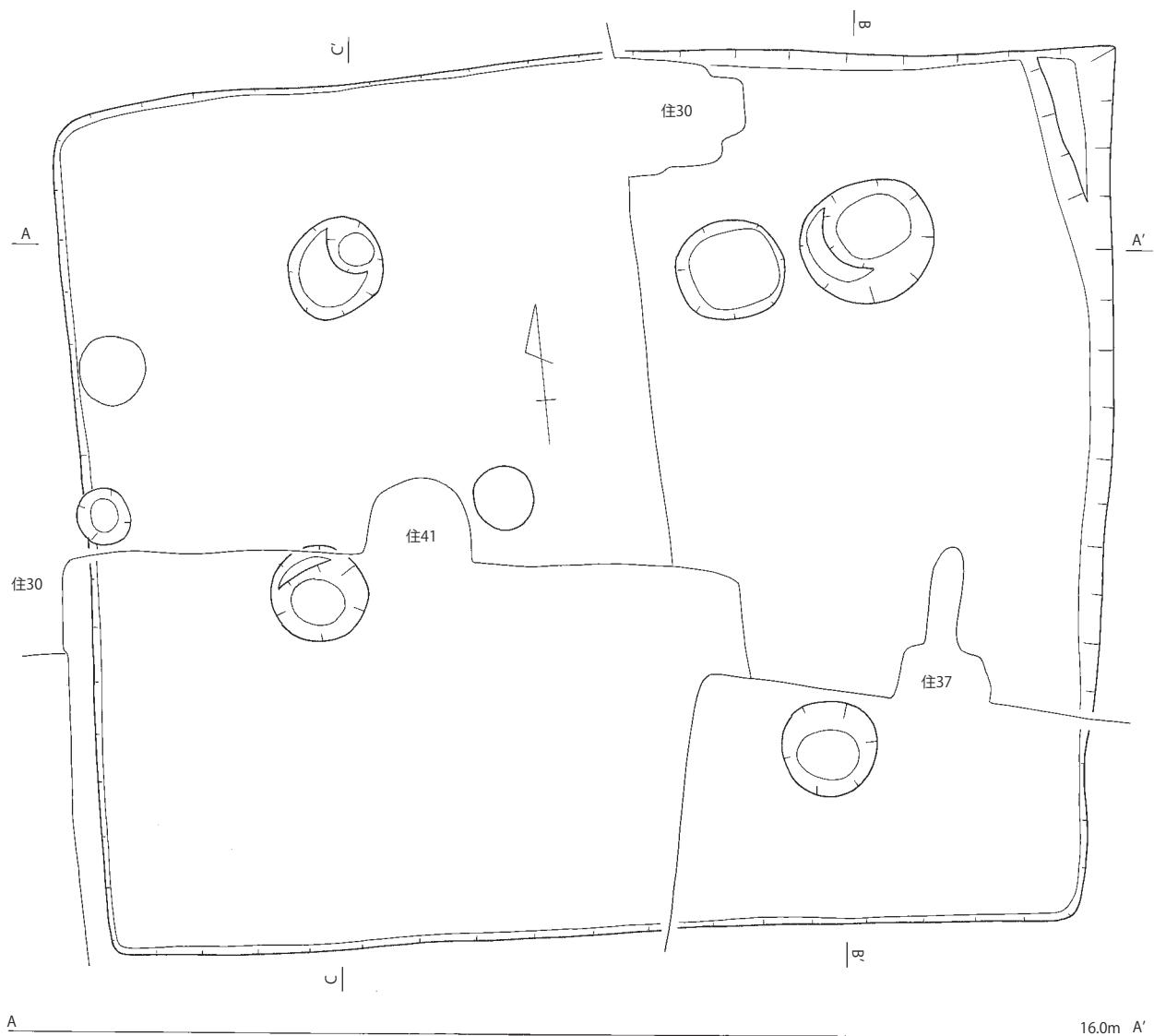
住居跡の時期は、かえりのある須恵器坏蓋片や土師器坏から7世紀後半～末頃か。

41号竪穴住居跡（第58・59図 図版20・21・44）

40号竪穴住居跡の南側に位置し、北側の30号・40号竪穴住居跡を切り、東側の32号・37号竪穴住居跡に切られる。形状は東西に長い長方形で、南北3.1m×東西3.9m、深さ0.15m以下を測る。北壁中央にカマドを設置し、主柱穴は1基のみ検出する。

カマドは突出型で、煙道は確認できなかった。長さ1.2m、幅0.65m、深さ0.15mを測る。焚口側は大きく開き、奥壁側は緩やかに上がる。両袖は暗褐色砂質土で構築し、長さ0.5m～0.6m、高さ0.1mを測り、真っ直ぐに伸びる。

第59図11～13は須恵器坏蓋片で、いずれも口縁端部は嘴状である。11は撮みのある天井部が欠損する。調整は外面体部中位～天井部にかけてヘラケズリ、他は内外面ナデを施す。復元口径18.6cmを測る。14と15は須恵器坏身片で、受け部は14は水平、15は端部が上部へ立つ。16は須恵器高台付坏片である。復元高台径9.0cmを測る。17は須恵器高坏脚部片である。復元底径10.0cmを測る。18は須恵器鉢片で、口縁は僅かに内湾して垂直に立つ。19は土師器坏片である。外面体部中位以下にケズリを施す。

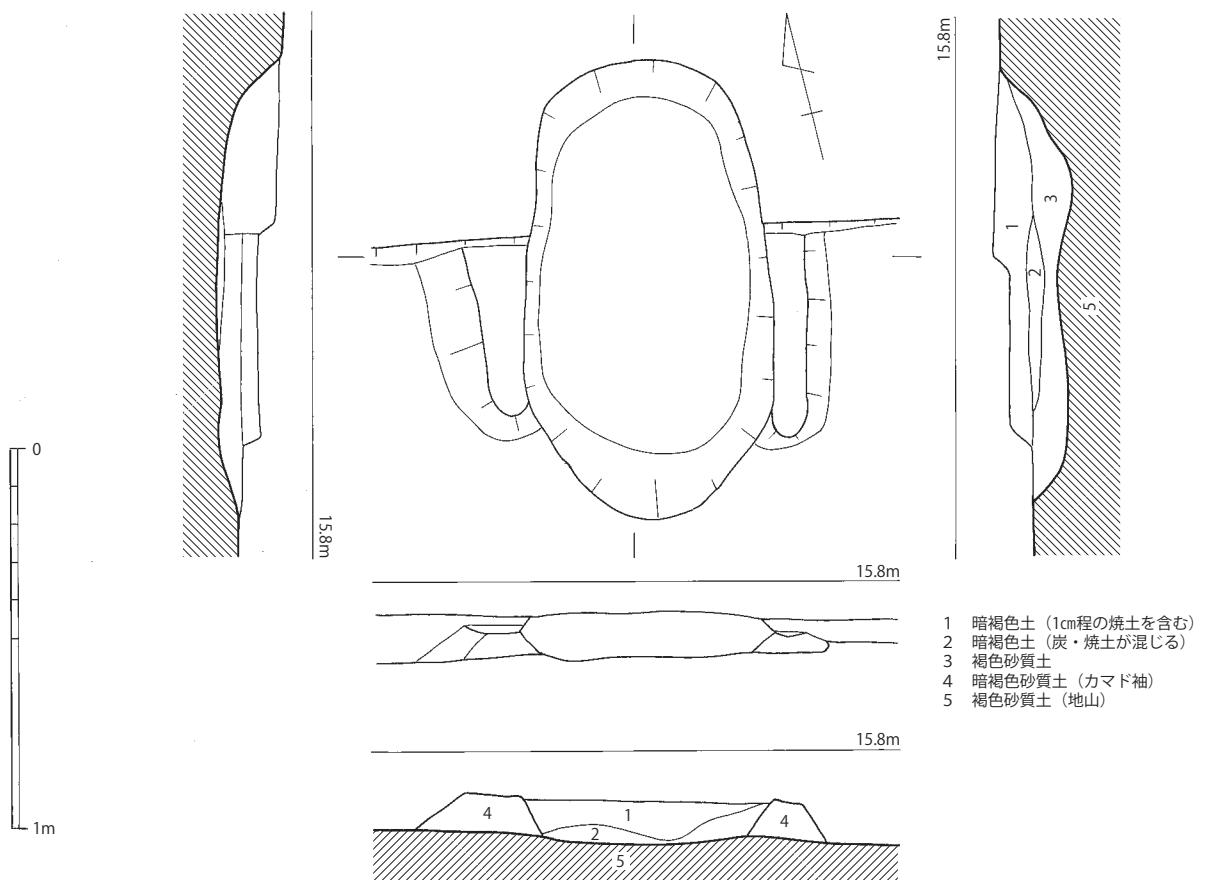
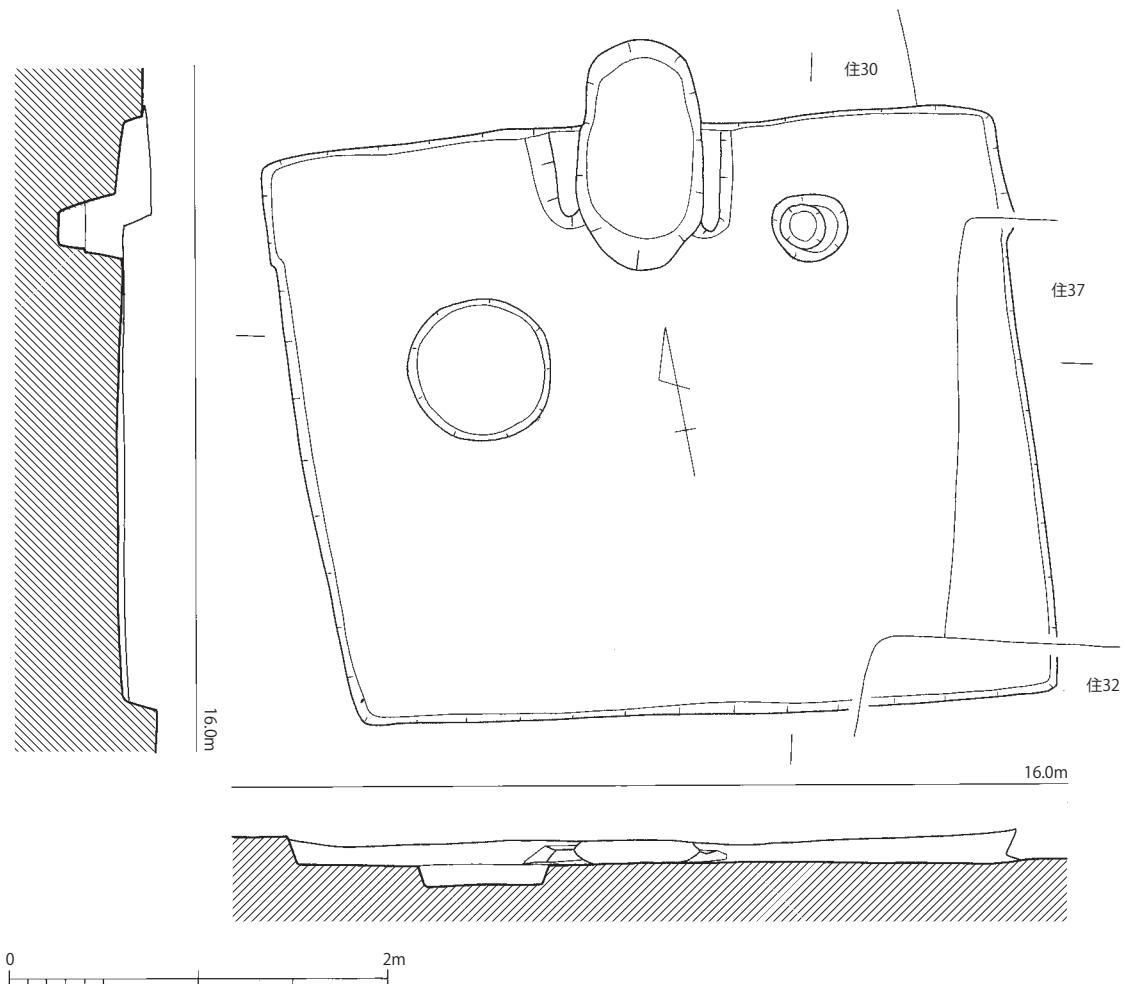


C

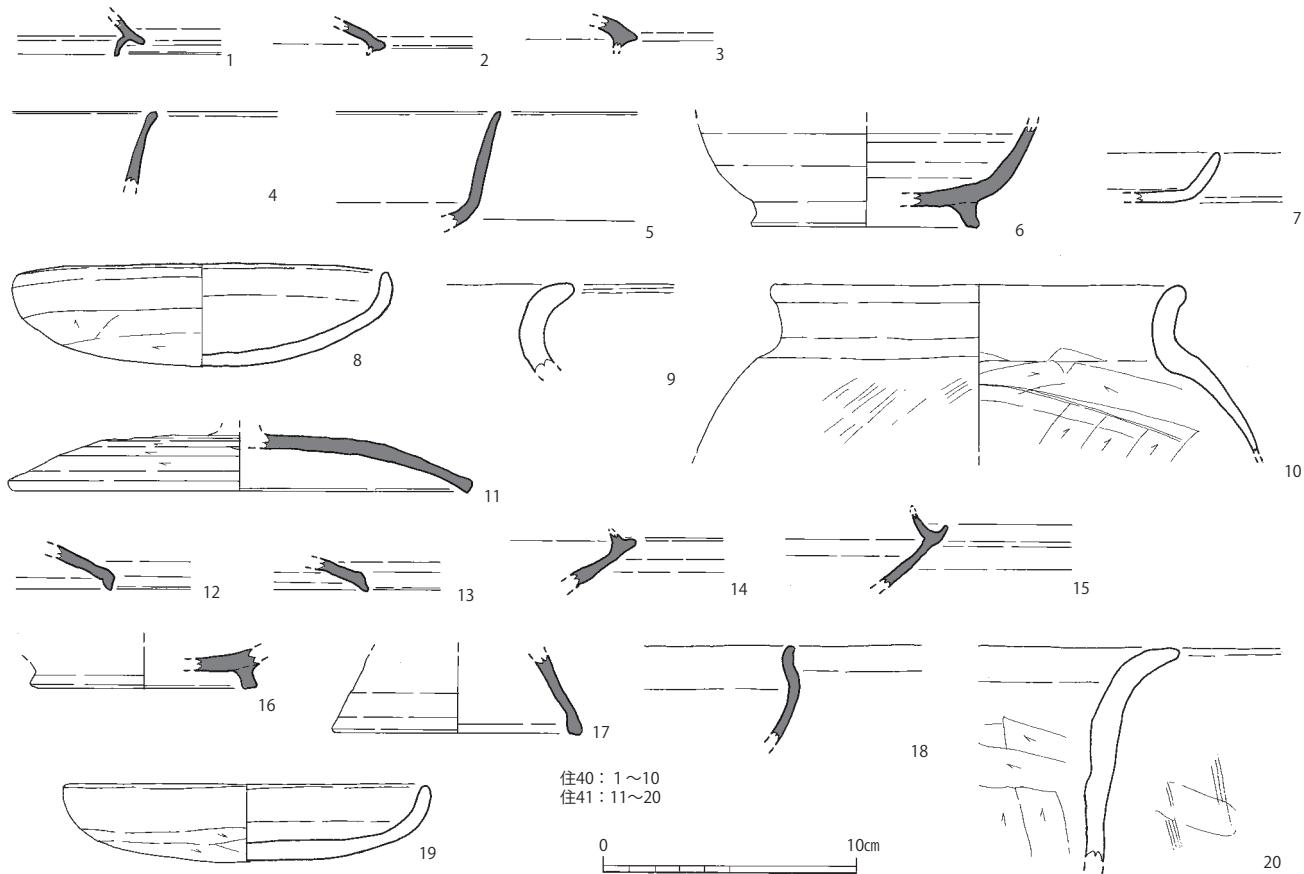
16.0m C'

0

第57図 40号堅穴住居跡実測図 (1/40)



第58図 41号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



第59図 40・41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

復元口径 14.6cmを測る。20は土師器甌片で、口縁端部は外へ長く伸びる。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。

住居跡の時期は、切り合いから、32号・37号竪穴住居跡よりは古くなる。そのため、出土土器も考慮して8世紀前半か。

42・52号竪穴住居跡（第60図 図版20・24）

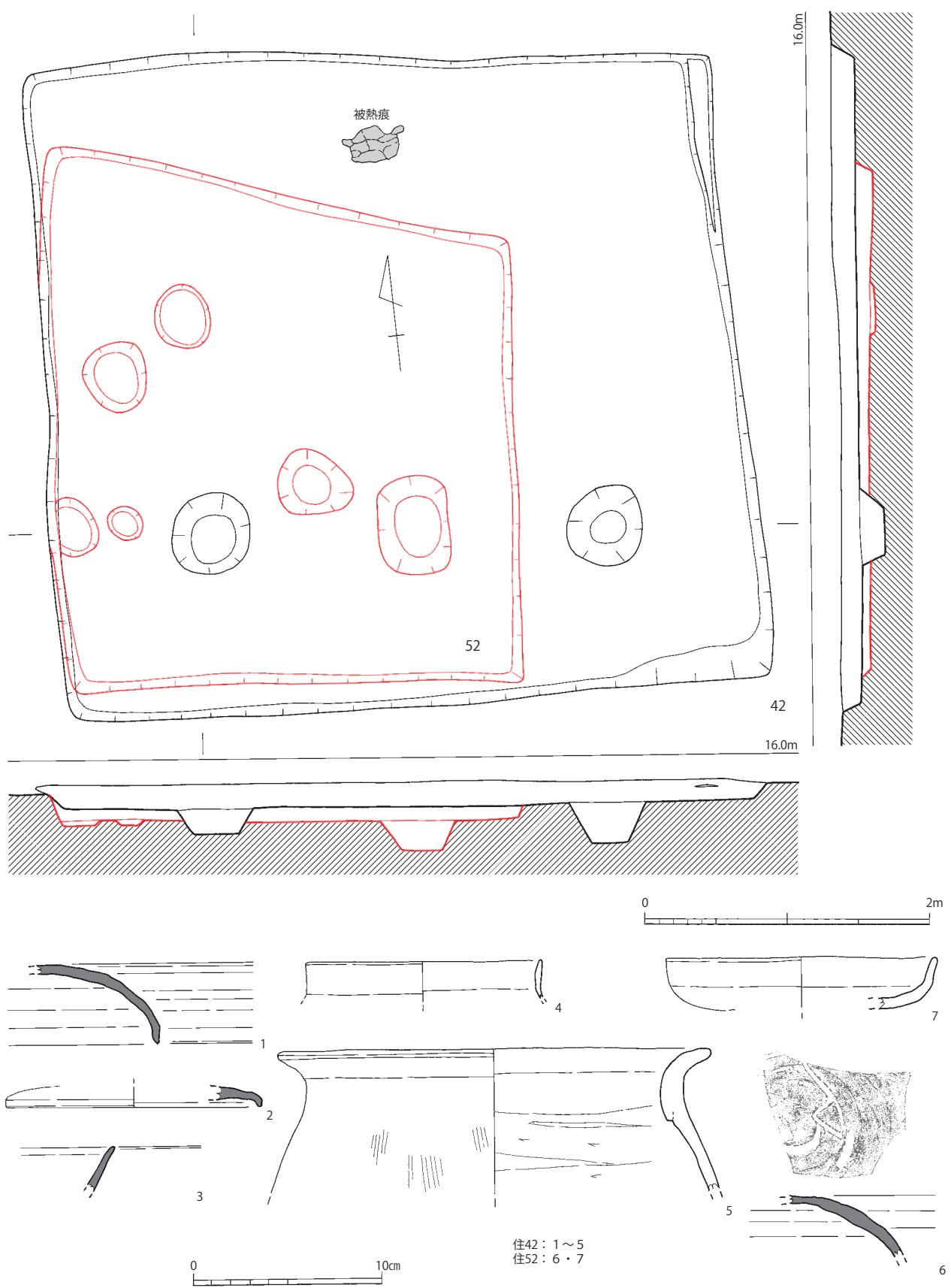
16号竪穴住居跡の南側に位置し、西側の53号竪穴住居跡に切られる。南北4.4～4.6m×東西4.8～5.0m、深さ0.15mを測る。北壁中央付近で被熱痕跡を長さ0.25～0.4mで確認したので、ここに造り付け型カマドがあった可能性がある。住居内の南側には主柱穴と思われる柱穴2基を検出し、径0.55～0.7m、深さ0.2～0.3mを測る。北側にも主柱穴があると想定し、何度か検出を試みたが柱穴は検出されなかった。住居外の東側には、住居跡と並行する2間程の2号柵列がある。

第60図1と2は、時期が異なる須恵器坏蓋片である。1は内外面に細かい稜線が残る。2は口縁端部が嘴状になる須恵器坏蓋片である。復元口径13.4cmを測る。3は須恵器坏の口縁部片である。4は土師器坏の口縁部片である。復元口径12.6cmを測る。5は土師器甌片で、口縁部付近で内湾し外へ開く。

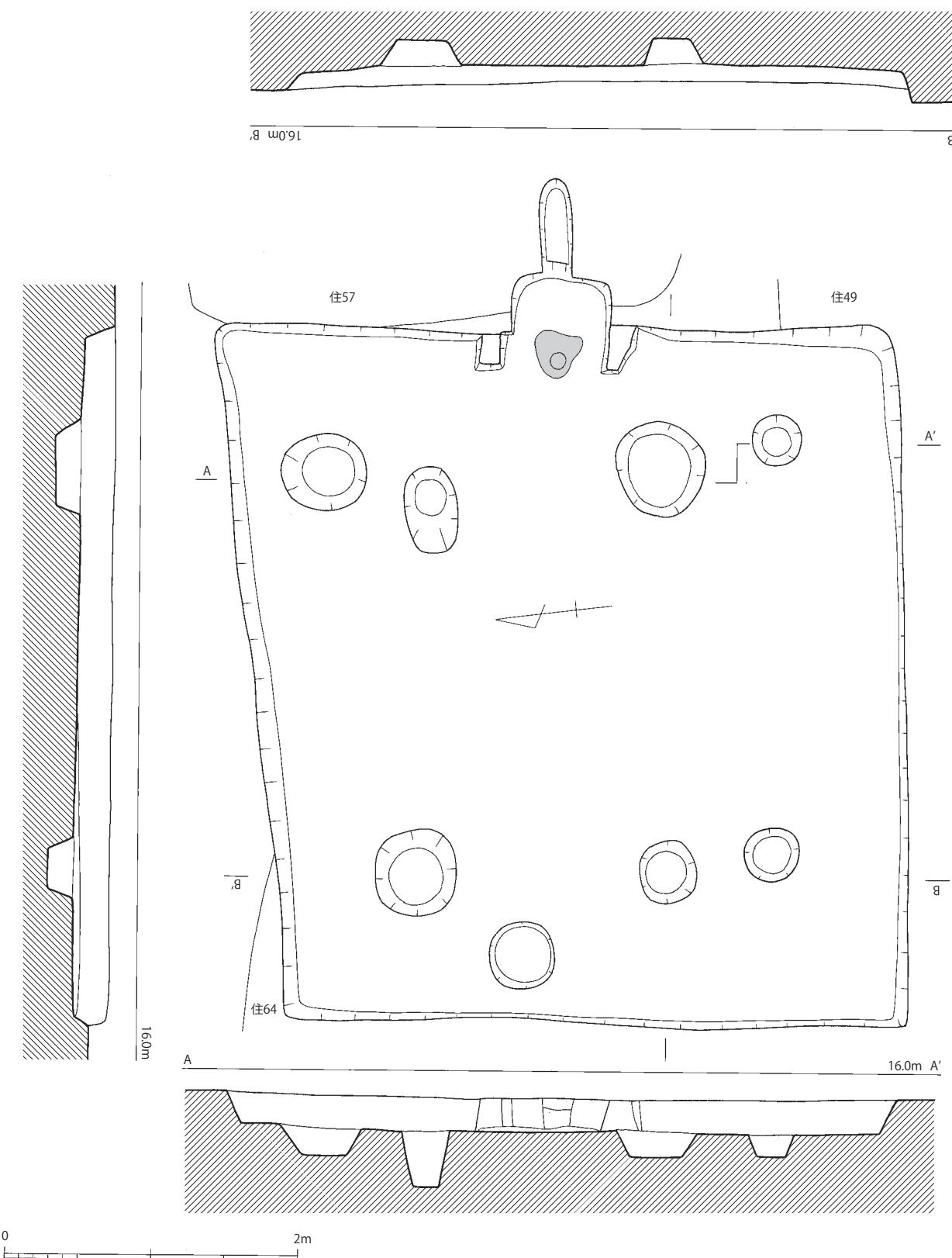
52号竪穴住居跡は42号竪穴住居跡の南西に位置し、下層から検出された住居跡になる。形状は東西の壁は平行だが、北壁の長さが異なるため、やや掘りすぎているか。南北3.1～3.9m×東西3.3m、深さ0.1mを測る。カマドと主柱穴は確認できなかった。

第60図6は須恵器坏蓋片で、天井部にヘラ記号を描く。7は土師器坏片で、底部は平坦になる。復元口径14.4cmを測る。

住居跡の時期は、出土土器から大きく2時期に分けられることと、切り合いから52号竪穴住居跡は



第 60 図 42・52 号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)



第 61 図 43 号竪穴住居跡実測図 (1/40)

6世紀末～7世紀初頭、42号竪穴住居跡は8世紀中頃以降か。

43号竪穴住居跡（第 61・63・64 図 図版 21・44）

42号竪穴住居跡の南側に位置し、南から西にある 49号・57号・59号・63号・64号竪穴住居跡を切る。



第62図 44号竪穴住居跡実測図 (1/40)

形状は正方形に近く、南北4.3m～4.6m×東西4.7m、深さ0.2mを測る。東西の壁の長さがやや異なるので、北東隅は少し掘りすぎている可能性がある。カマドは東壁中央に設置し、主柱穴を4基検出する。主柱穴は径0.4m～0.6m、深さ0.2m～0.4mを測る。

カマドは突出型で、住居外に長さ0.4m、幅0.65mの隅丸長方形状になる。カマド内には、壁面と底面中央に被熱し硬化した痕跡を確認する。奥壁中央には煙道を設置し、煙道は長さ0.65m、幅0.2m、深さ0.1m以下を測り、煙道口に向かって、緩やかに上る。両袖は暗茶褐色土で構築し、直線状で長さ0.25～0.3m程残存する。

第64図1～5は須恵器坏蓋片である。口縁部の形状は、1はかえりがあり、2と3は嘴状になる。1のみ出土位置が、43号・46号・57号竪穴住居跡の検出時出土である。3は天井部に向かって肉厚になる。復元口径12.4cmを測る。4と5は坏蓋天井部片で、4の外面にはカキ目を施す。撮みの形状が4と5で異なる。6～10は須恵器高台付坏片である。高台の形状は方形で、高台の位置は底部よりに設置するが、10のみ体部と底部との境になる。6は口縁を欠損し、復元高台径8.8cmを測る。11は須恵器坏片で、器高が低い皿に近い形状である。復元口径14.6cmを測る。12は須恵器長頸壺の頸部片である。

内面にはナデの痕跡が明瞭に残る。13は土師器坏片で、底部を欠損する。器高が高く丸みのある作りであるため、体部と底部との境は不明瞭である。復元口径14.4cmを測る。14は土師器椀片で、内面にはミガキの痕跡が僅かに残る。形状から18と近い時期の可能性がある。15～17は土師器甕片で、口縁部は外反する。16と17は肩部が張り、体部で最大径を測る甕である。調整は外面に刷毛目、内面はケズリを施す。復元口径14.8cm、16.0cm、29.6cmを測る。18は黒色土器Bの椀で、丸みのある器形で、体部中位に僅かに段を有する。内外面の調整は横や斜めのミガキを施す。底部は丸みがあり、ヘラ切りで、高台は隅丸方形状になる。復元口径15.5cmを測る。他の土器とは時期が異なる10世紀頃のもので、住居を切り込む別の遺構を掘り飛ばした可能性がある。

出土土器は7世紀後半～末と8世紀後半があることから、住居跡の時期は、切り合いも考慮して8世紀中頃以降か。

44号竪穴住居跡（第62～64図 図版21・22）

調査区東壁の西寄りに位置し、西側を43号・49号竪穴住居跡に切られるが、北側の45号・46号・57号竪穴住居跡を切る。形状は長方形状で、南北3.55m、東西4.5m以上、深さ0.4mを測る。0.2m以下の深さで貼床が施されている。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴は3基以上を検出する。主柱穴は径0.5～0.7m、深さ0.3～0.5mを測る。

カマドは突出型で、住居外に長さ0.4m、幅0.65mの長方形状に掘削する。カマド内からは土器片が出土する。カマドの壁面は全体に被熱し、硬化した痕跡を確認する。奥壁中央には短い煙道を設置する。長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.2mを測り、底面は緩やかに傾斜する。両袖は褐色土で構築し、逆「ハ」の字状で長さ0.2～0.45m程残存する。

第64図19～22は須恵器坏蓋片である。19～21はかえりをもつ口縁部片である。22は撮み片である。23と24は須恵器高台付坏片である。高台の形状は方形で、高台の位置は体部と底部の境より内側に入る。復元口径15.8cmを測る。25～27は土師器坏片である。26は薄手な作りで、底部と体部との境が角張るが、25は厚手な作りで丸みをもつ。26と27は復元口径14.0cmと15.6cmを測る。28と29は土師器甕片で、29の口頸部は、肥厚して口縁が外に伸びる。28は体部で、29は口縁部で最大径をとる。調整は外面に刷毛目で、内面はケズリである。復元口径25.2cmを測る。30は土師器甕の底部片である。内面には煤が付着し、外面の器壁は一部剥離する。底部中央には径6.5cm以上の孔があく。31は土師器甕の把手片で、把手の握り部分は凹み、先端部は尖らず丸みを帯びる。断面の形状は方形状になる。

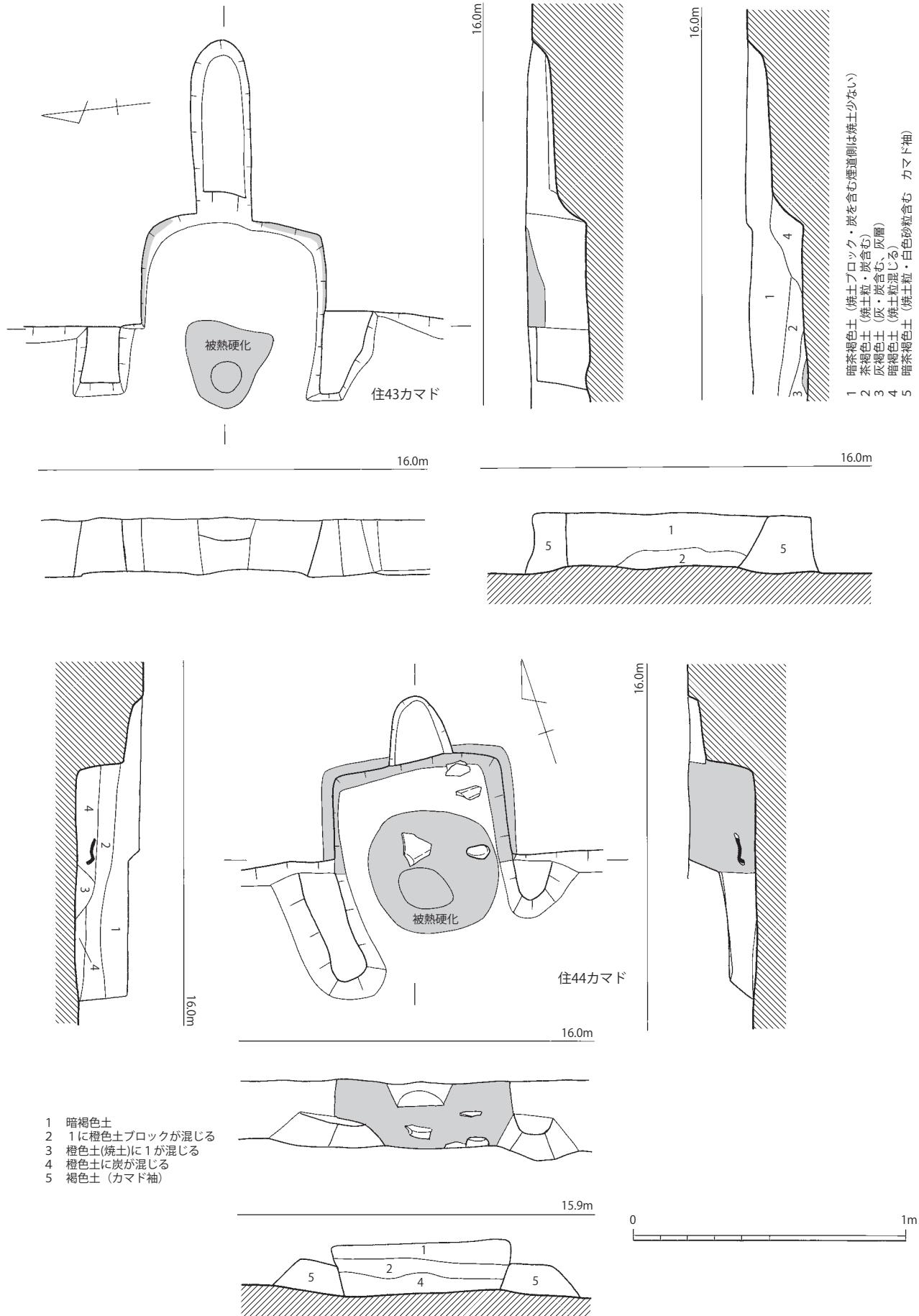
住居跡の時期は、43号竪穴住居跡に切られることと出土土器から8世紀中頃か。

45・46号竪穴住居跡（第65・68図 図版21・22）

45号・46号・57号竪穴住居跡は44号竪穴住居跡の北側に位置し、切り合いから57号・45号・46号の順番で竪穴住居跡は建てられている。

45号竪穴住居跡は、西側を43号竪穴住居跡、南側は44号竪穴住居跡に切られている。北壁の一部と東壁のみの検出状況から、46号竪穴住居跡のカマド左袖部分に北東隅があると思われる。形状は不明だが南北3.6m以上×東西1.7m以上、深さ0.2m以下を測る。カマドや主柱穴は検出していない。

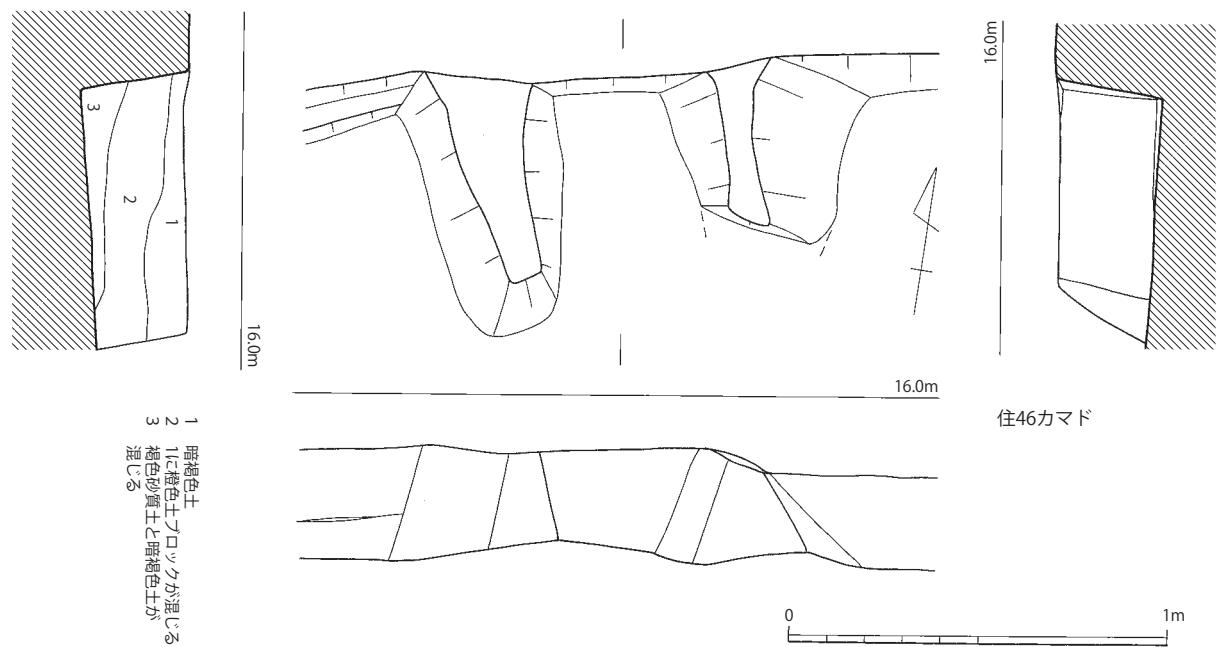
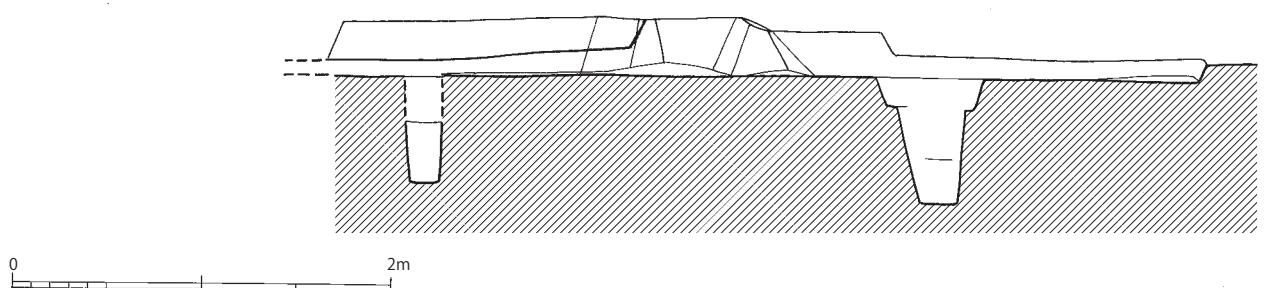
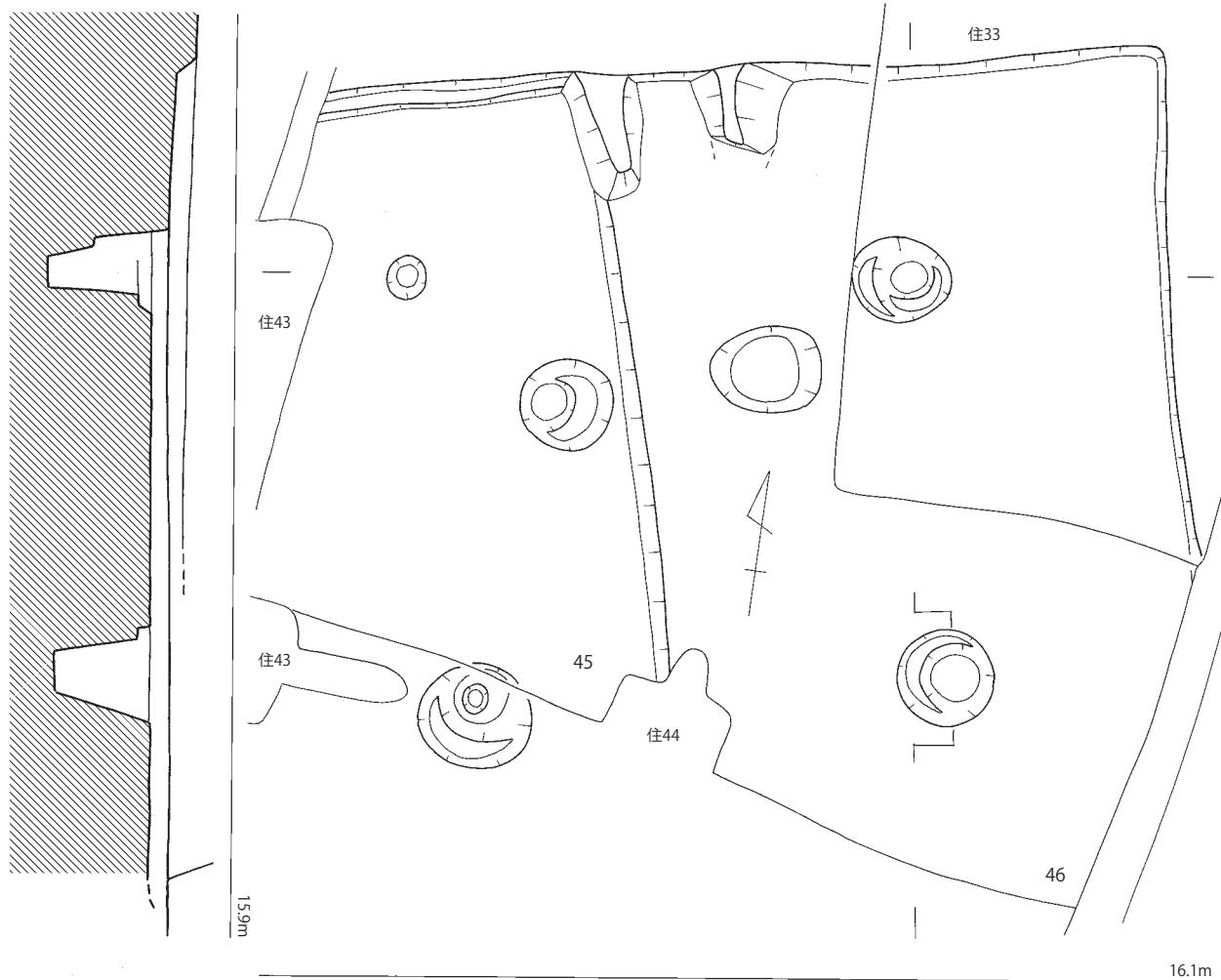
第68図1は須恵器坏身片である。口縁と受け部は短いが、器高が高いので身とした。2は土師器高坏の脚部片である。内外面とも摩滅するがケズリの痕跡が見える。3は土師器甕の把手片である。



第 63 図 43・44 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)



第64図 43・44号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第65図 45・46号竪穴住居跡、46号カマド実測図 (1/40、1/20)

46号竪穴住居跡は、南東隅を暗渠で破壊され、西側を43号竪穴住居跡と暗渠に切られる。西壁は切られているが、形状は正方形に近く南北4.6m×東西4.7m、深さ0.1～0.3mを測る。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴は4基検出する。主柱穴は径0.25～0.6m、深さ0.6m前後を測る。

カマドは造り付け型で、長さ0.7m、幅0.5m以下を測る。カマド内から被熱痕跡などは検出していない。両袖は暗茶褐色土で構築し、直線状で長さ0.45～0.7mを測る。埋土とカマドの袖との違いが分かりにくく、右袖の一部を掘削時に掘りすぎている。

第68図4～11は須恵器である。4は坏蓋片である。口縁部は大きく屈曲した嘴状になる。5も坏蓋片で、撮みの中央は突出する。6は坏身片で、口縁と受け部は短いが身とした。7～9は高台付坏の高台片で、体部と底部の接合する場所に高台を付ける。高台は高く、端部は外へ伸びる。7の復元高台径は12.2cmを測る。10は坏片である。11は高坏の坏部片か。外面に沈線が2条巡るので、無蓋高坏の坏部分か。12～17は土師器である。12は坏片で、調整は内外面とも摩滅するが外面底部はケズリか。復元口径16.0cmを測る。13は小形の壺、又は甕片か。全体的に薄手に作られる。14～17は甕又は甌片である。いずれも口縁は外湾し、外へ大きく開く。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。15の内面口頸部には刷毛目を施す。

出土土器は大きく、6世紀末～7世紀初頭と7世紀後半～末の2時期に分けられる。また8世紀中頃の44号竪穴住居跡に切られることから、住居跡の時期は7世紀後半～末頃の短い期間に建て直されている。

47・48号竪穴住居跡（第66・68図 図版22・23）

47号竪穴住居跡は43号竪穴住居跡の北側に位置し、48号竪穴住居跡に切られる。北向きに建てられ、カマドや主柱穴は検出していない。形状は正方形に近く、南北2.3～2.5m×東西2.05～2.2m、深さ0.2m以下を測る。カマドや主柱穴はなく、住居内から検出されたピットは深さ0.2m以下と浅い。

第68図18は弥生土器の甕口縁部片である。19は須恵器坏蓋の口縁部片である。調整は摩滅していく不明である。20は土師器坏片で、内外面とも調整は摩滅して不明である。21は貼床下から出土した土師器甕片である。

南東にある48号竪穴住居跡は、東壁側を暗渠に切られている。住居の位置や大きさから判断して、47号竪穴住居跡の建て替えになるか。形状は正方形に近く、南北2.1m×東西1.7～1.9m、深さ0.1mを測る。カマドは北西隅に設置するが、主柱穴は検出していない。

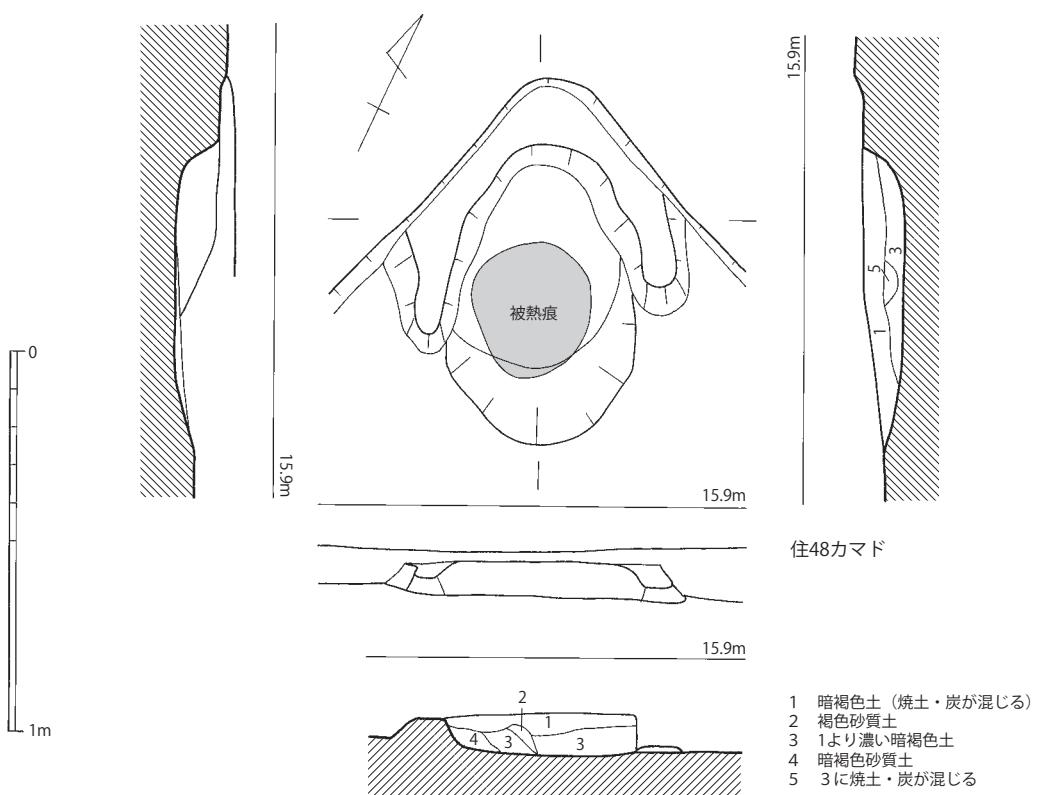
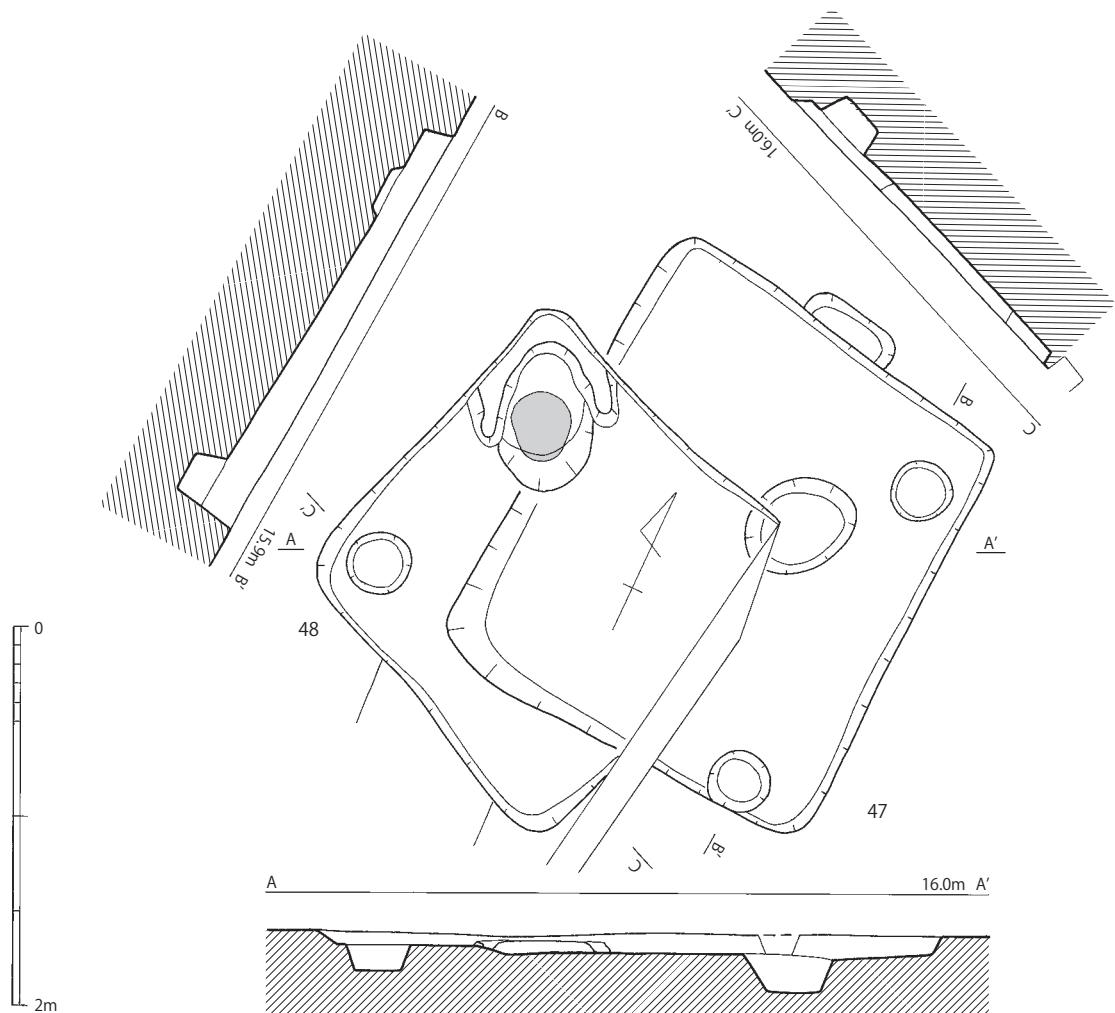
カマドは造り付け型で、当遺跡で検出されたカマドでは、唯一の隅カマドである。カマドは焚口側から緩やかに傾斜し、底面は平坦で奥壁側は傾斜の勾配はきつくなる。底面中央では、円形状に径0.3～0.35mの被熱痕を確認する。両袖は暗褐色土の地山を削ってU字状に構築し、直線状に0.45～0.5m程伸びる。

第68図22は土師器甕片で、頸部を境に口縁部は肉厚である。復元口径29.0cmを測る。

住居跡の時期は、出土土器から48号竪穴住居跡が8世紀前半で、47号竪穴住居跡は切られるのでそれ以前か。

49号竪穴住居跡（第67図 図版23）

43号竪穴住居跡の南東隅に位置する。北西隅を43号竪穴住居跡に切られるが、44号竪穴住居跡を切る。形状は正方形で長さ1.7～1.75m、深さ0.2m以下を測る。長さが2.0m以下と狭い住居跡で、内部



第66図 47・48号竪穴住居跡、48号カマド実測図 (1/40、1/20)

からはカマドや主柱穴は検出されていない。

住居跡の時期は、図化できる遺物はないが、43号竪穴住居跡に切られることや住居跡の形状から8世紀後半か。

50号竪穴住居跡（第67・68図 図版23）

北側の63号竪穴住居跡を切り、南側は調査区外となる。形状は長方形で、南北3.1m以上×東西2.7m、深さ0.4m以下を測る。北東隅にあるテラス部分が床面で、貼床を施していた可能性がある。カマドは検出していないが、主柱穴に関連するピットを数基検出する。径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。

第68図23は須恵器壺蓋片である。天井部は平坦で、外面にはヘラケズリを施す。復元口径15.0cmを測る。24は須恵器短頸壺の蓋片である。外面底部はヘラケズリを施す。復元口径12.0cmを測る。25は須恵器撮み片で、円柱状になる。26は須恵器壺身片である。27は土師器壺蓋片である。僅かに口縁部の上で折れ曲がる。

住居跡の時期は、出土土器から8世紀前半か。

51号竪穴住居跡（第67・68図 図版24）

48号竪穴住居跡の西側に位置し、56号竪穴住居跡に切られる。形状は長方形で、南北2.5m前後×東西2.1m、深さ0.3m以下を測る。東西壁には段が残り、断面は底面中央が低くなるすり鉢状で、床面には貼床を施していた可能性がある。カマドは検出していないが、ピットを数基検出する。ピットは径0.3～0.5m、深さ0.15m以下を測る。

第68図28は須恵器高壺の蓋で、断面の形状が半円形状の撮みが付く。外面の口縁端部のみケズリ、天井部はカキ目を施し、そこにヘラ記号を描く。復元口径16.0cmを測る。29は須恵器壺身片である。外面底部のヘラケズリの範囲は狭い。復元口径10.6cmを測る。30は土師器高壺の脚部片である。31は土師器甌片である。調整は外面に刷毛目、内面に横方向のケズリである。

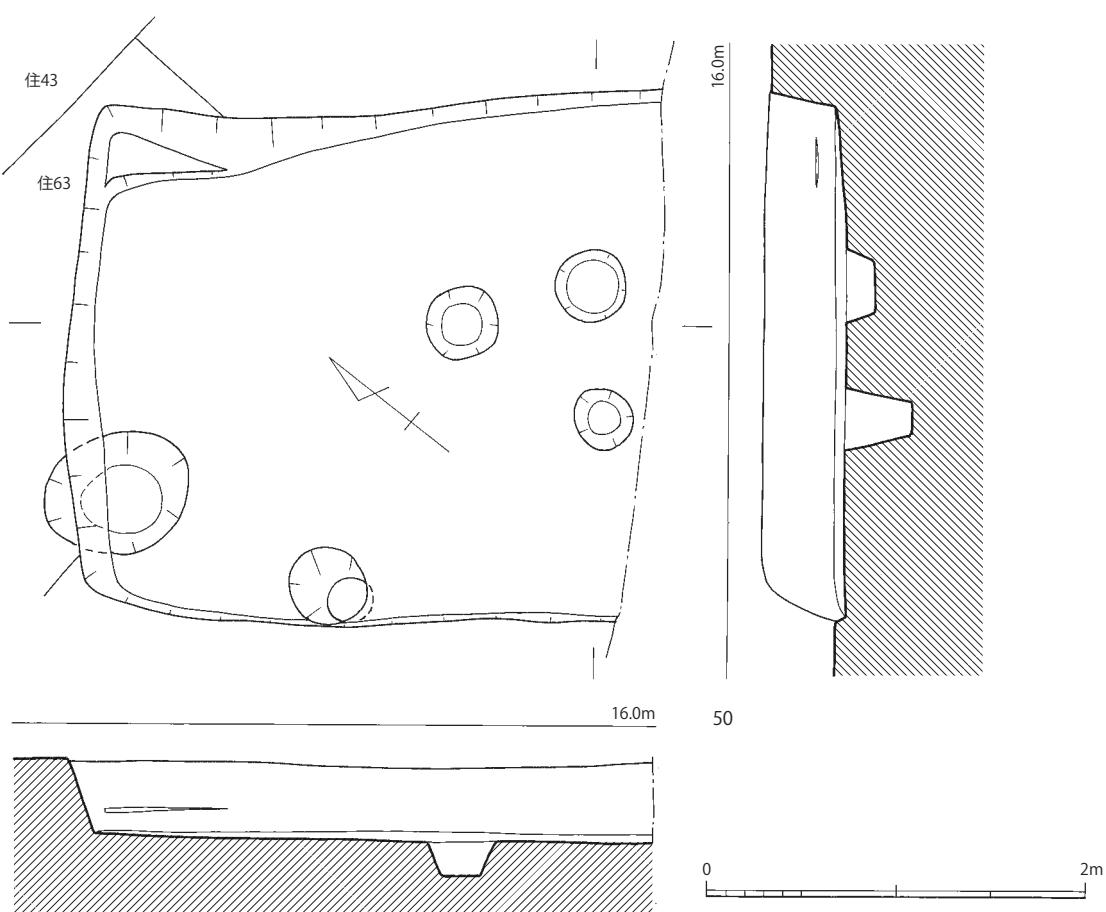
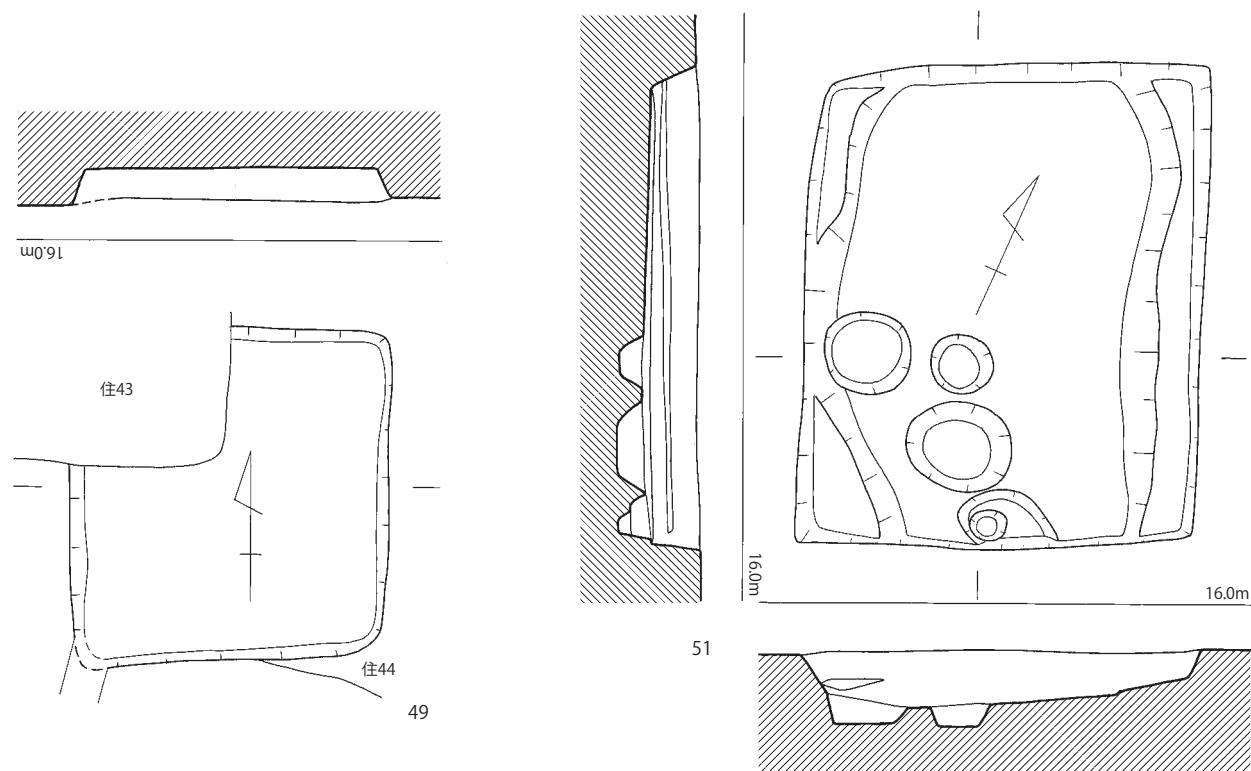
住居跡の時期は出土土器から6世紀末～7世紀初頭となり、切り合いにより56号竪穴住居跡より古くなる。

53・55・56号竪穴住居跡（第69・70図 図版24・25）

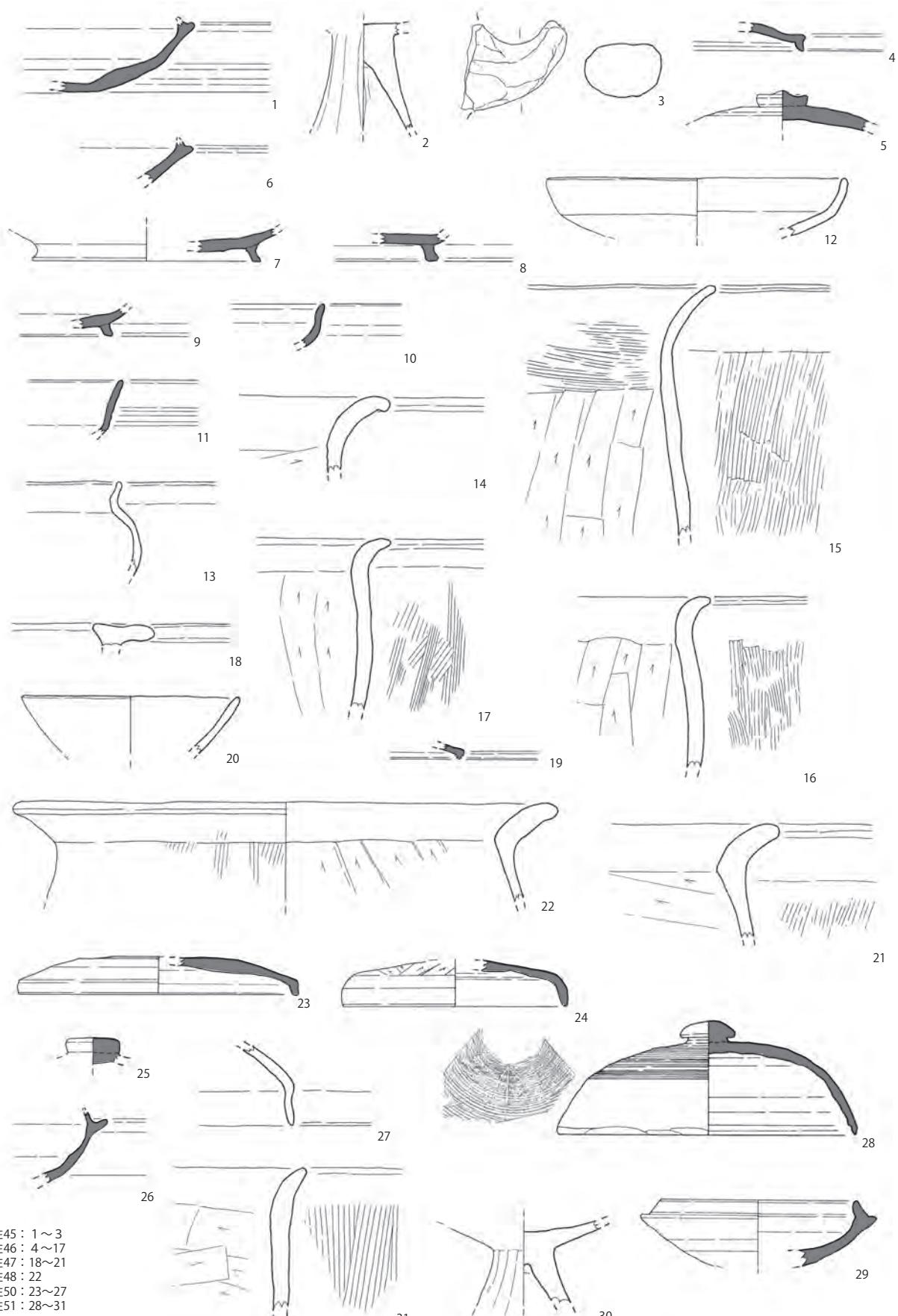
51号竪穴住居跡の北側に位置する53号竪穴住居跡は、東壁側が42・52号竪穴住居跡を切る。住居の南壁は直線状ではなく、一部乱れている。形状は長方形で南北1.85m×東西2.3m、深さ0.2m以下を測る。カマドおよび主柱穴は検出していない。住居内で検出したピットは浅く、径0.5～0.7m、深さ0.2m以下を測る。

カマドは突出型で、住居外に半円形状で長さ0.95m、幅0.65m、深さ0.1mを測る。底面中央には長さ1m前後の被熱痕跡を確認する。カマドの奥壁側で1点石を検出するが、カマドの袖や煙道は検出していない。

第69図1は須恵器壺蓋片で、口縁端部が丸みのある嘴状である。復元口径14.4cmを測る。2は土師器高壺の壺部片か。3と4はカマド出土である。3は土師器鉢片で、口縁部手前で折れて外に開く。4は土師器甌片で、頸部で折れて、口縁は外側に大きく開く。調整は外面に刷毛目、内面は縦方向のケズリである。



第67図 49～51号竪穴住居跡実測図 (1/40)



住45：1～3
 住46：4～17
 住47：18～21
 住48：22
 住50：23～27
 住51：28～31

第68図 45～48・50・51号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

53号竪穴住居跡の北側に位置する55号竪穴住居跡は、28号竪穴住居跡に北西隅、54号竪穴住居跡に東側を切られているため、東壁は検出していない。形状は長方形で、南北5.5～5.7m×東西2.7m以上、深さ0.2m以下を測る。カマドは検出していないが、住居内からは数基のピットを検出する。ピットは径0.3～0.8m、深さ0.2m以下を測る。

第69図5は須恵器坏蓋片で、これも口縁端部が丸みのある嘴状である。復元口径14.4cmを測る。6は須恵器坏身片である。口縁と受け部が短いので、蓋の可能性もある。他の須恵器より古い形状になる。7と8は須恵器高台付坏片である。高台の位置は体部との接合位置より底面側に付く。高台の形状は方形である。9は須恵器壺又は甕の口縁部片か。外面に波状文が僅かに見える。10は土師器坏片である。

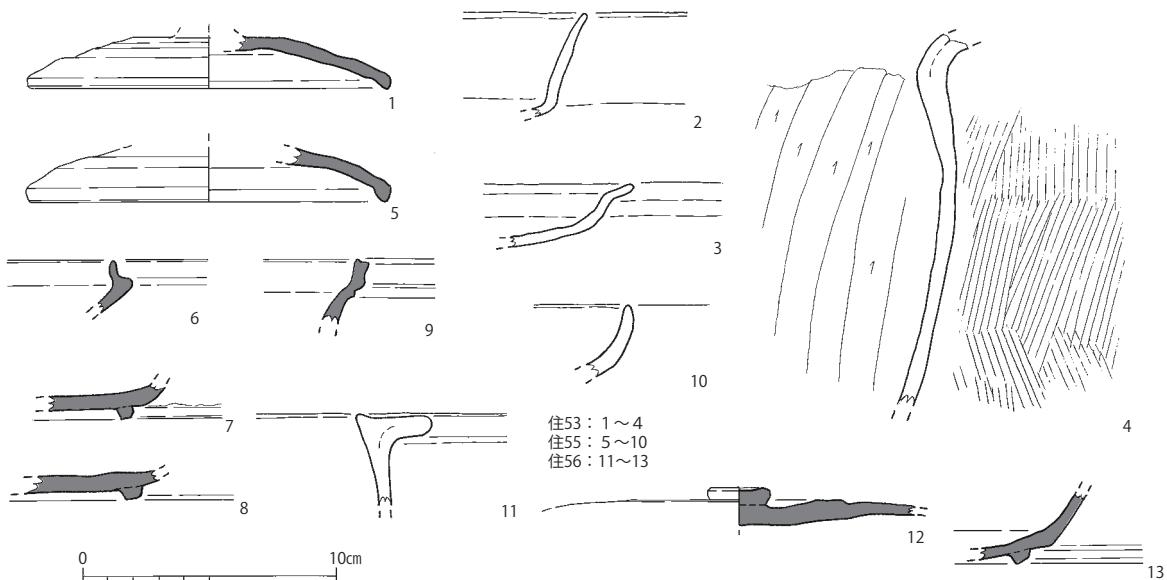
53号竪穴住居跡の西側に位置する56号竪穴住居跡は北側の54号竪穴住居跡を切るが、東側の53号竪穴住居跡に切られる。形状は長方形で南北7.0m×東西5.5m、深さ0.2mを測る。長さが7.0mと他の住居跡に比べて約2m長い。カマドは検出してないが、北壁中央付近で、0.25mの被熱痕跡を確認したので、ここにカマドがあった可能性はある。南壁側では主柱穴と思われる柱穴2基を検出し、径0.3～0.4m、深さ0.3m以下を測る。

第69図11は弥生土器の甕口縁部片である。この遺跡内には弥生時代の遺構はないので、流れ込みの可能性がある。12は須恵器の坏蓋片である。撮みの中央部分が僅かに突出する。13は須恵器高台付坏の底部片である。高台の形状は方形で、低い。

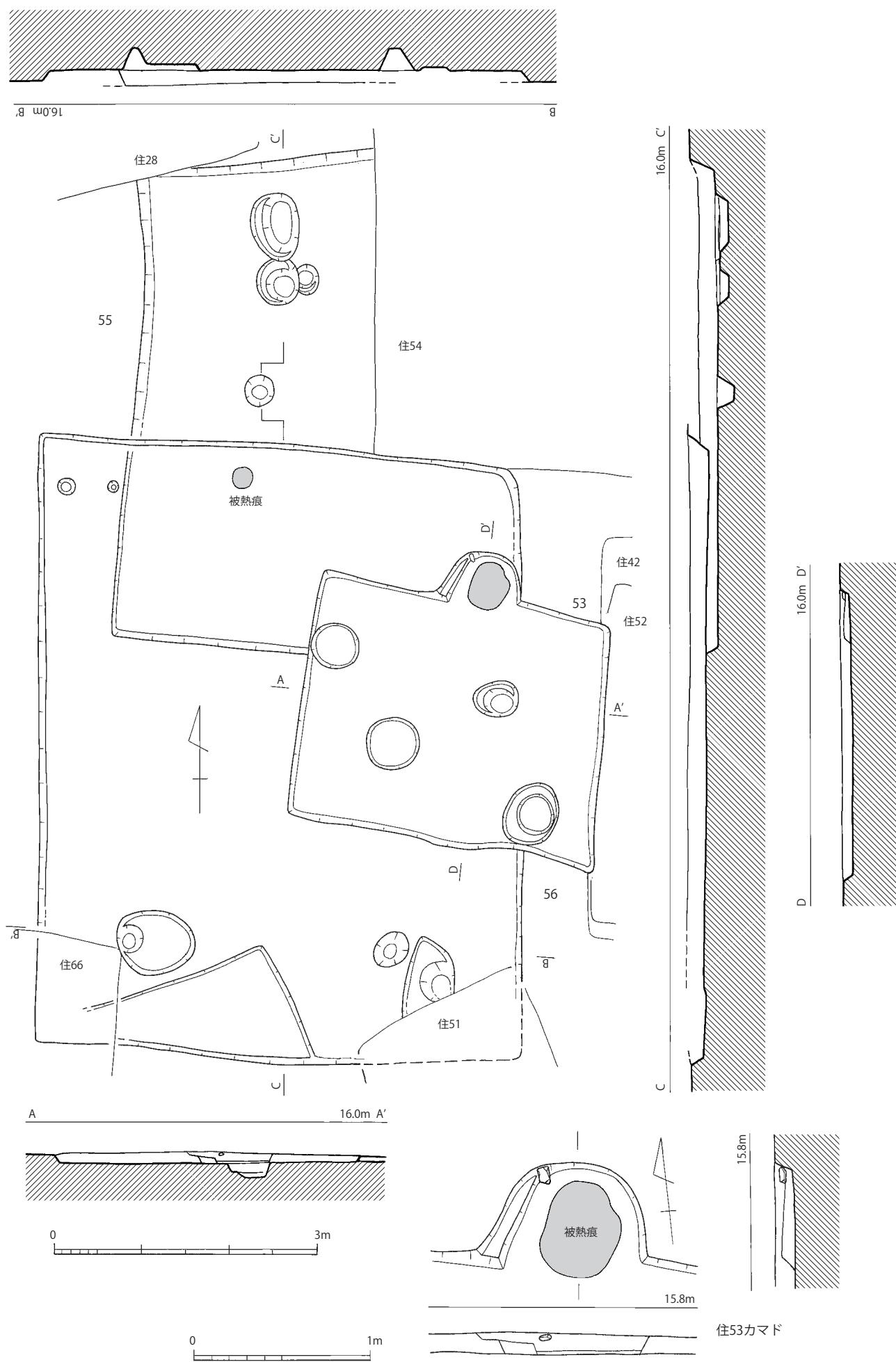
住居跡の切り合いから55号→56号→53号竪穴住居跡の順で新しくなる。出土土器から53号竪穴住居跡は8世紀後半となり、西側の8世紀中頃の42号竪穴住居跡より新しくなる。そのため56号竪穴住居跡は8世紀中頃以前になるが、55号竪穴住居跡は、7世紀後半～末の54号竪穴住居跡に切られているため、さらに古い6世紀後半～7世紀初頭か。

57号竪穴住居跡（第71図 図版26）

57号竪穴住居跡は46号竪穴住居跡の下から検出した住居跡である。西から南にかけては43号・44号竪穴住居跡に切られる。形状は長方形で、南北3.6m×東西4.6m前後、深さ0.1mを測る。カマドは西壁中央に設置し、主柱穴は2基検出し、その内1基は46号竪穴住居跡の主柱穴と位置が重なるため、柱穴の掘り方が大きくなる。柱穴は径0.5～0.6m、深さ0.45～0.55mを測る。



第69図 53・55・56号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第70図 53・55・56号竪穴住居跡、53号カマド実測図 (1/60、1/30)

カマドは造り付け型で、長さ 0.7 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 m 以下を測る。カマド内には暗褐色土に橙色土ブロックが混じる土が堆積していた。カマド内には被熱痕跡を確認できなかった。両袖は炭や土器片を含んだ暗茶褐色土で構築し、直線状で 0.5 m 伸びる。

第 71 図 1 は土師器甕の口縁部片か。全体的に摩滅していて、調整不明である。

住居跡の時期は、43～46 号竪穴住居跡に切られたことから、6 世紀末～7 世紀初頭か。

58 号・59 号・60 号竪穴住居跡（第 72～74・113 図 図版 26・27・48）

58 号竪穴住居跡は 43 号竪穴住居跡の西側に位置し、59 号・60 号竪穴住居跡を切る。形状は長方形で、南北 3.05～3.2 m × 東西 4.2～4.45 m、深さ 0.2～0.4 m を測る。カマドは北壁中央に位置し、主柱穴はやや西側寄りに 1 基検出する。柱穴は径 0.6 m、深さ 0.5 m を測る。これ以外にもピットを検出しているが、深さ 0.2 m 以下と浅い。

カマドは突出型で、長さ 0.45 m、幅 0.75 m、深さ 0.35 m を測る。焚口の底面とカマド内の壁面には被熱痕跡が明瞭に残る。カマドの底面は煙道に向かって緩やかに上り、途中に段があり、そのまま煙道口に向かってさらに緩やかに上る。煙道部分は長さ 0.95 m、幅 0.35 m を測る。

第 74 図 1 は須恵器坏蓋の口縁部片で、口縁端部は嘴状になる。2 は須恵器高台付坏片である。高台の断面は方形で、復元高台径 11.0cm を測る。3 と 4 は土師器坏片である。底部の形状は、3 は丸みがあり、4 は平坦である。復元口径 13.0cm、12.8cm を測る。5 は土師器甕片で、調整は摩滅していて不鮮明だが、内面にケズリを施す。復元口径 25.0cm を測る。出土土器は 8 世紀中頃のものが多い。この他にも鉄製刀子片、鉄鏃と鉄釘が出土する。

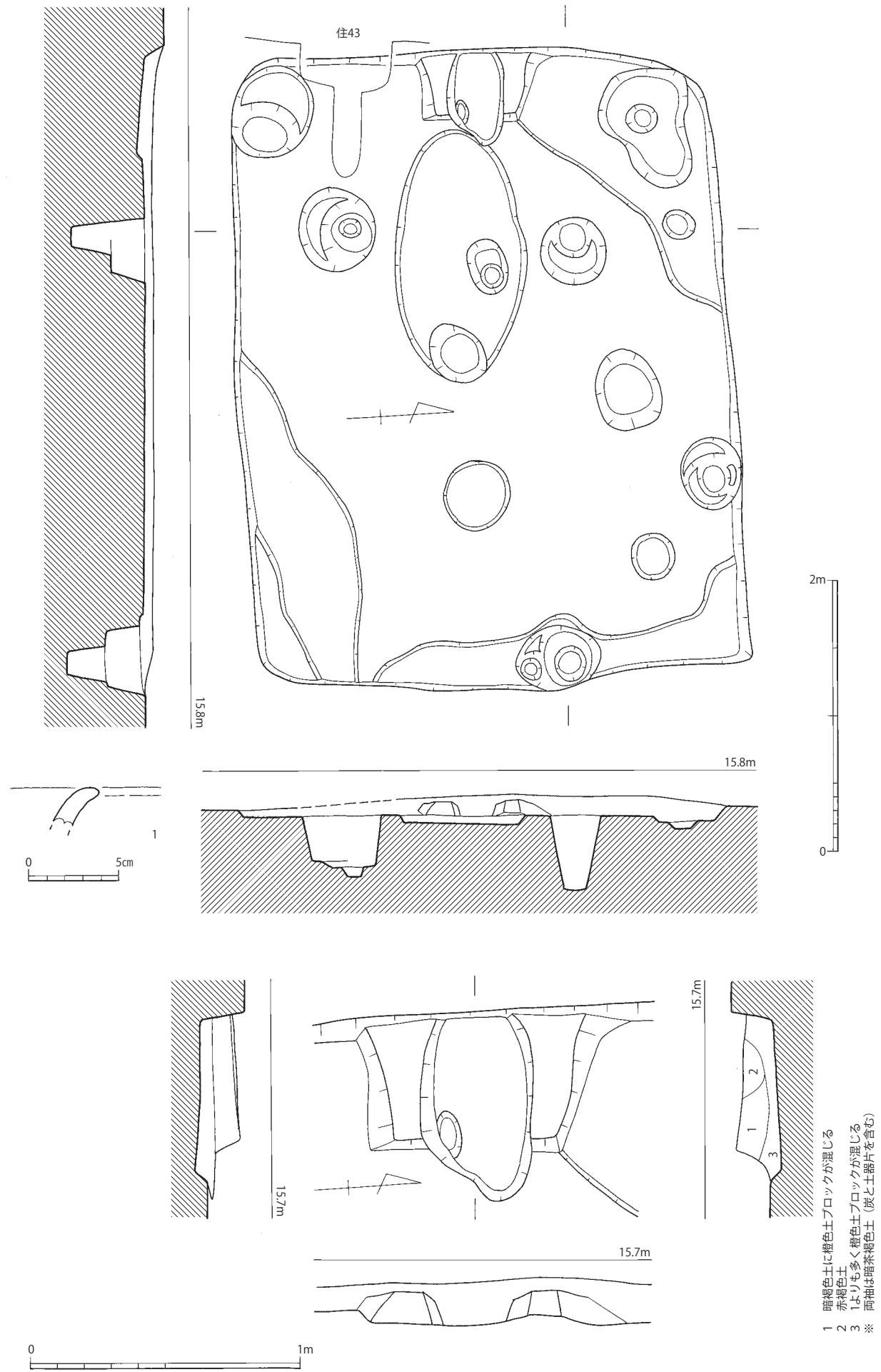
59 号竪穴住居跡は 58 号竪穴住居跡の北側に位置し、43 号・58 号・63 号竪穴住居跡に大部分を切られるが、カマドがある北壁と南壁は一部残存する。58 号竪穴住居跡より一回り以上大きく、形状は長方形で南北 4.6～4.7 m × 東西 5.0 m 以上、深さ 0.3 m 以下を測る。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴はやや西よりに位置するが、4 基検出する。主柱穴は円形で径 0.4 m、深さ 0.5 m を測る。北側と南側で柱穴の間隔がずれるが、柱穴の大きさや深さなどから考えて主柱穴と判断した。

カマドは突出型で、住居外に隅丸長方形状に掘られ、長さ 0.45 m、幅 0.6 m、深さ 0.3 m を測る。カマド内の埋土は、暗褐色土に混入した焼土や赤褐色土の差で分層した。またカマド内の底面や壁面は被熱し、カマドで使用された丸石 2 点が右壁面下に集中して出土した。奥壁中央には煙道が付き、煙道は住居外に長さ 0.6 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。両袖は明瞭ではなく、暗褐色土の硬化した部分が袖となる。直線状に長さ 0.6～0.8 m 残存する。

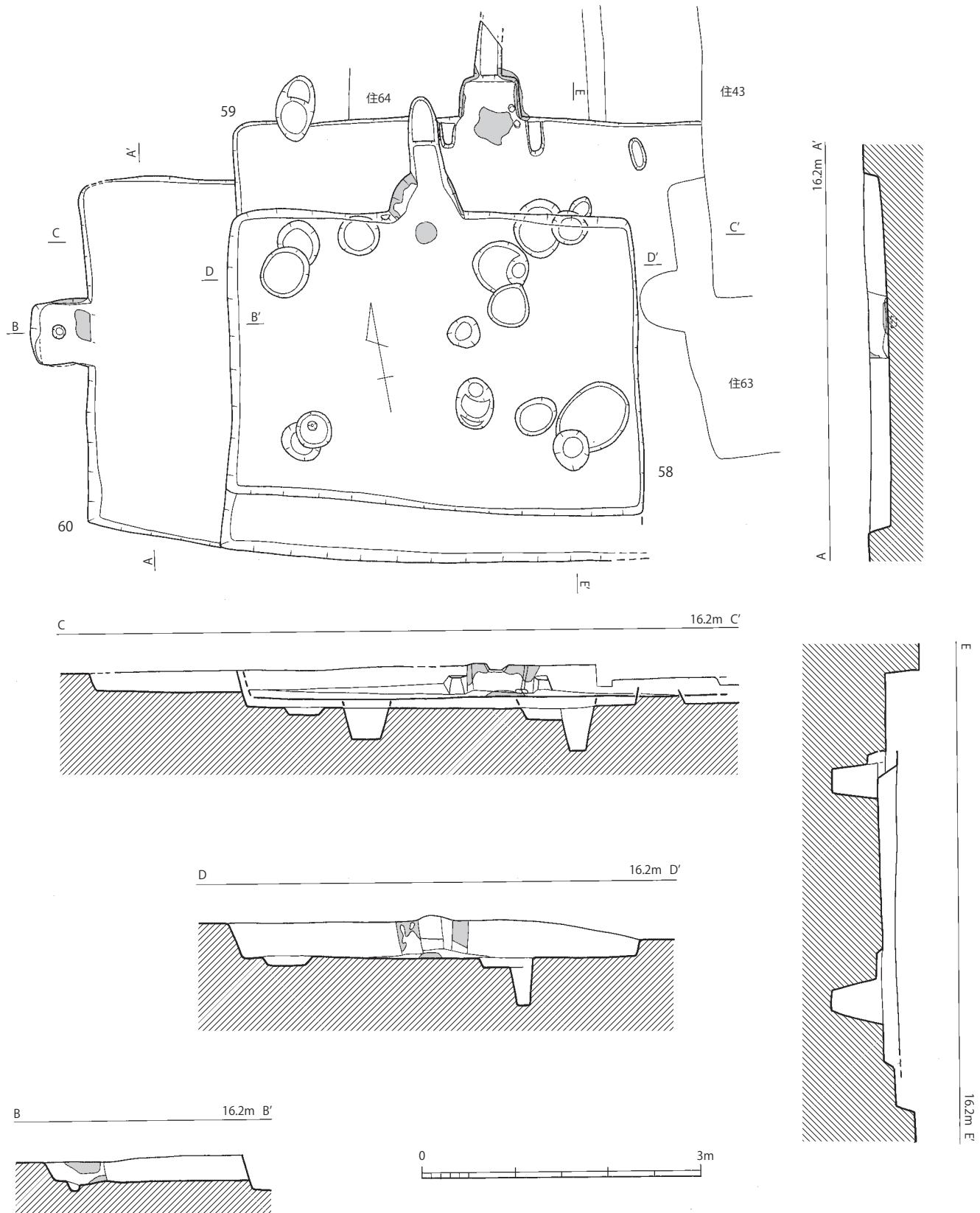
第 74 図 6～11 は須恵器である。6 は坏蓋口縁部片で、嘴状になる。7 と 8 は高台付坏片である。高台の位置は底部寄りで、低い高台が付く。9 は坏部片、10 は高坏脚部片で、外面には沈線が 2 条巡る。11 は壺の体部片で、外面には沈線状の凹みが 1 条巡る。12 は土師器坏片である。13 は土師器甕の口縁部片である。

60 号竪穴住居跡は 58 号・59 号竪穴住居跡の西側に位置し、その 2 つの住居跡に切られる。東側の半分以上を切られているが、形状は正方形に近く、南北 3.7 m～3.9 m × 東西 3.6 m 以上、深さ 0.2 m を測る。カマドは西壁中央に設置し、主柱穴は検出していない。

カマドは突出型で、住居外に隅丸方形状に掘られ、長さ 0.6 m、幅 0.7 m、深さ 0.25 m を測る。カマド内は灰茶褐色土や橙茶褐色土が堆積し、橙茶褐色土の一部が硬化する。カマドの両壁面には被熱痕跡



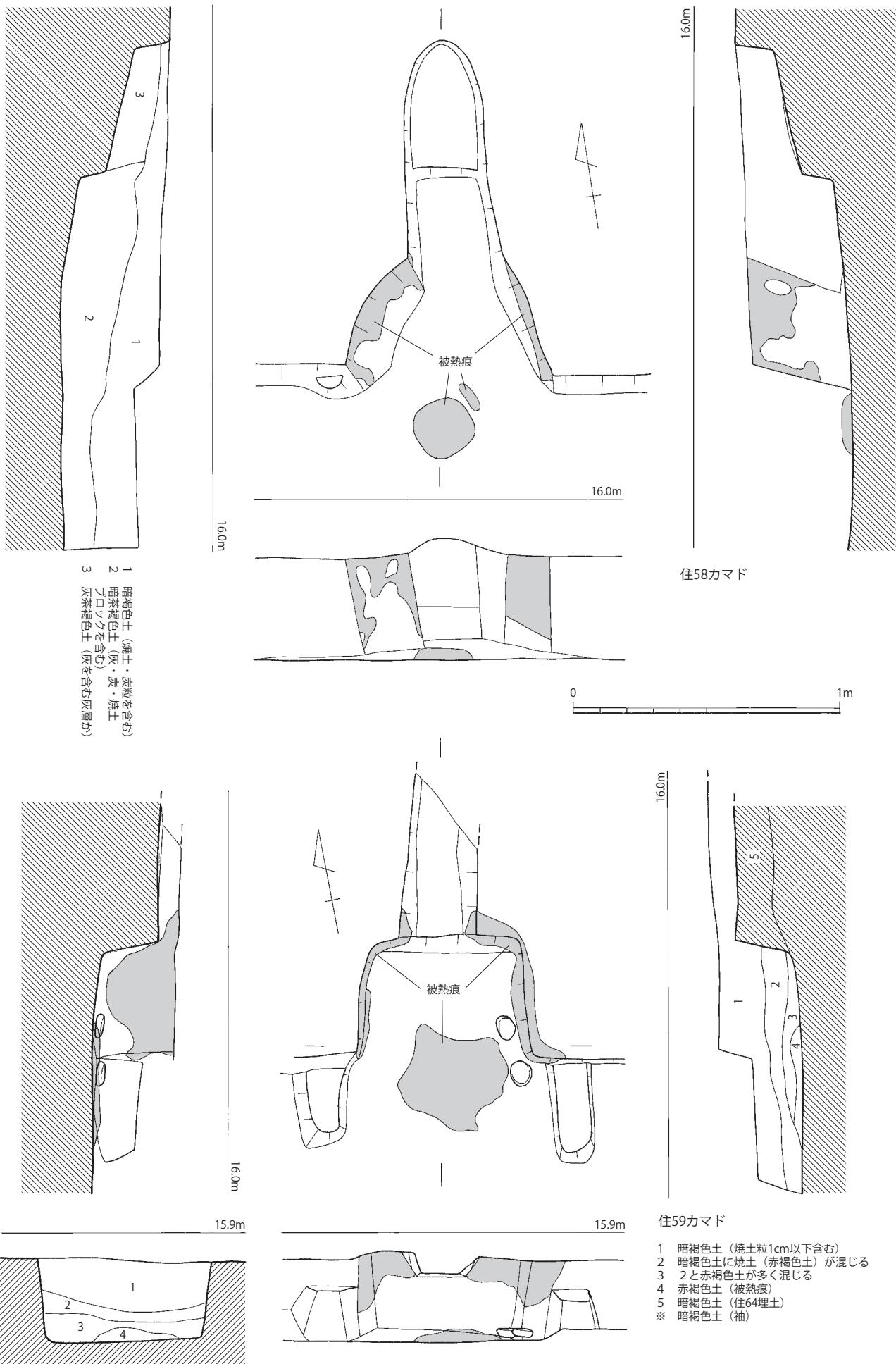
第 71 図 57 号竪穴住居跡・カマドおよび出土土器実測図 (1/40、1/20、1/3)



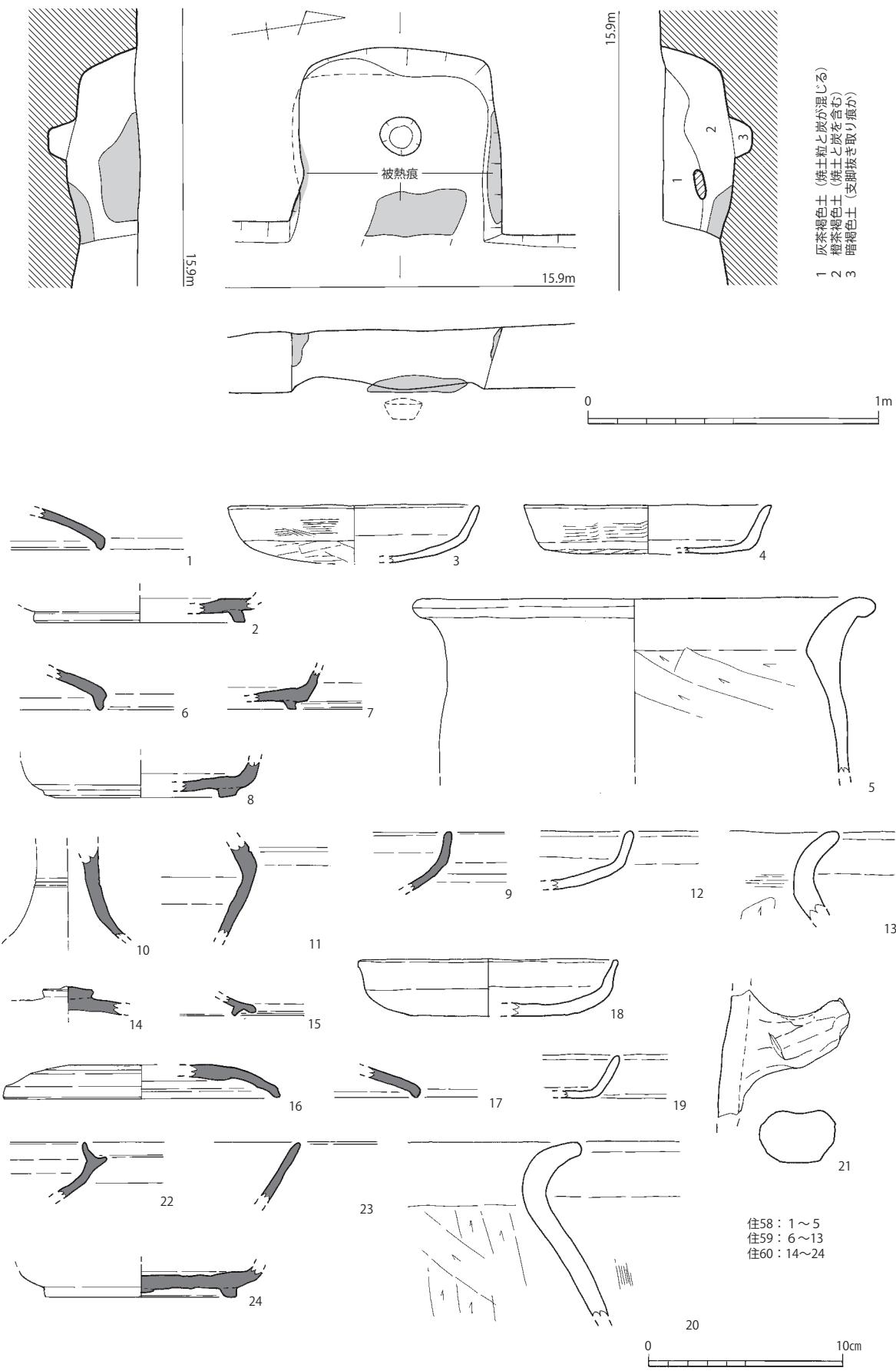
第72図 58～60号竪穴住居跡実測図 (1/60)

があり、底面には径0.1m、深さ0.1m以下の支脚の抜き取り痕跡を確認する。両袖は検出していない。

第74図14～17は須恵器壊蓋片である。14は撮み部片である。口縁端部の形状は、15はかえりがあり、16と17は嘴状になる。16は復元口径で14.4cmを測る。18～21は土師器である。18と19は壊片であ



第73図 58・59号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)



第74図 60号竪穴住居跡カマドおよび58～60号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/20、1/3)

る。18の底部は厚めだが、口縁端部に向かって薄手になる。19は全体的に薄手で、角張る。いずれも摩滅している。18は復元口径13.4cmを測る。20は甕片で、調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。21は甕の把手で、先端は尖らない。22～24は、58号～60号竪穴住居跡を検出時の出土である。22は須恵器坏身片で、他の遺物の時期と比べて古いので混入か。23と24は須恵器高台付坏片である。23は口縁部片で、24は高台部片である。高台が底部の内側に付き、断面の形状は方形である。

出土土器から住居跡の時期は、58号竪穴住居跡が8世紀中～後半頃、59号竪穴住居跡は8世紀前半、60号竪穴住居跡はかえりのある須恵器坏蓋片があることから、7世紀後半～末頃か。

61号竪穴住居跡（第75・113図 図版27・28・48）

60号の南側に位置し、調査区際で検出した住居跡である。全容を把握できていないので、形状は不明だが南北0.9m以上×東西2.85m、深さ0.4mを測る。カマドや主柱穴は検出していない。

第75図1～4は須恵器坏蓋の口縁部片である。1は口縁と受け部が短い。2と3は口縁端部が嘴状になる。4は撮み片で、中央部分が盛り上がる。5は須恵器高台付坏片である。高台の形状は方形で、短く低い。復元高台径9.2cmを測る。羽口片1点も出土する。

住居跡の時期は、須恵器坏蓋や高台付坏から8世紀中頃～後半か。

62号竪穴住居跡（第75図 図版28・44）

61号の西側に位置し、調査区際で検出した住居跡である。これも全容は把握できていないので、形状は不明だが南北1.25m以上×東西2.5m、深さ0.4mを測る。主柱穴は不明だが、東壁際に屋内土坑1基を検出する。屋内土坑の埋土は暗褐色土で、長さ0.6m、深さ0.25mを測る。

カマドは西壁側に設置した突出型で、長さ0.5m、幅0.3m以上を測る。カマド内には暗褐色土や赤褐色土が堆積する。西側は暗渠で削られたため煙道の有無は不明である。

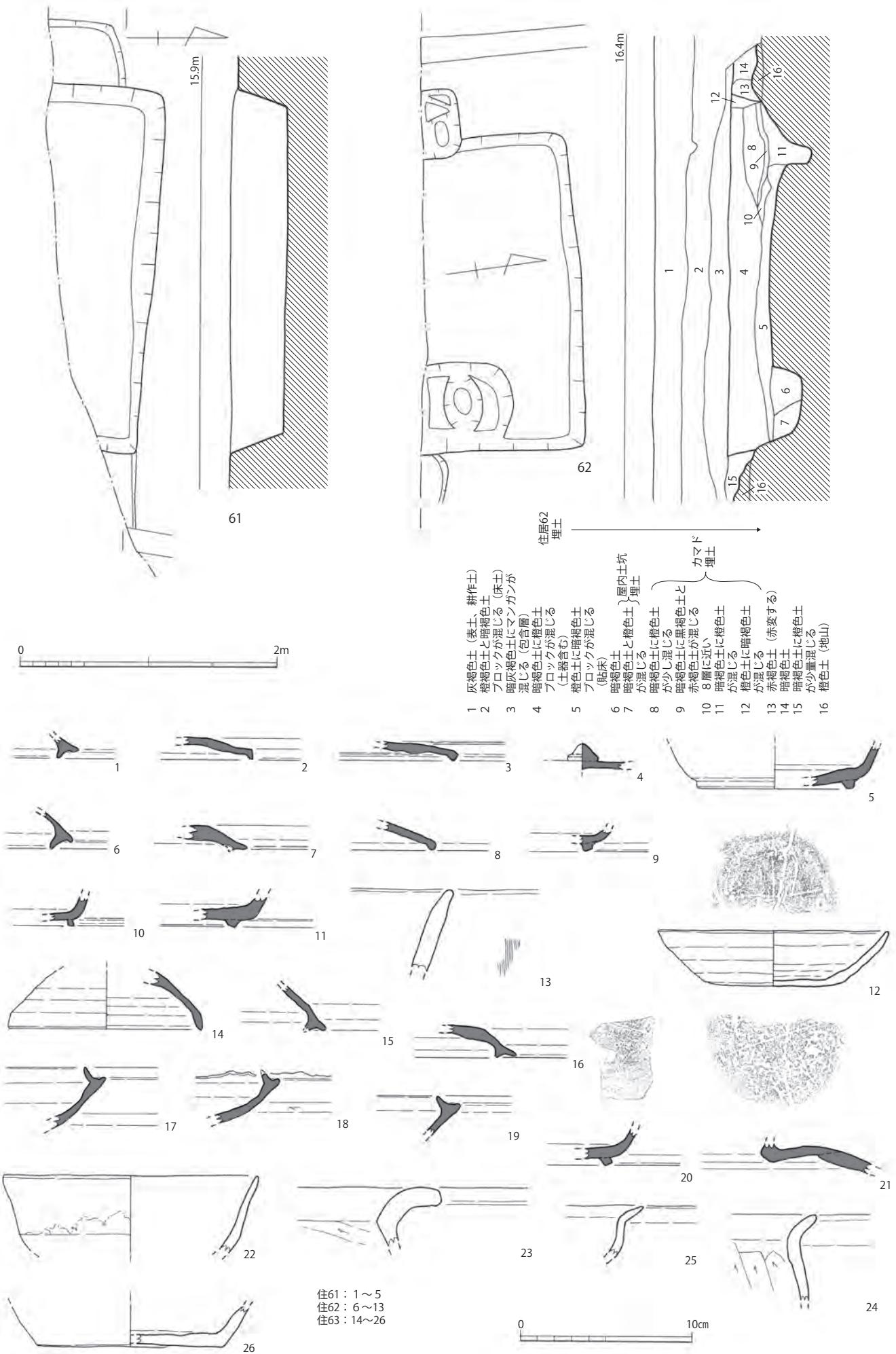
第75図6～8は須恵器坏蓋片で、口縁は6と7はかえりがあり、8は嘴状になる。9～11は須恵器高台付坏片である。高台の形状は方形で、いずれも高台は低く短い。12は土師器坏である。調整は摩滅しているが、ナデで、底部のみヘラ切り後ナデている。外面底部にはヘラ記号「十」を描く。復元口径13.6cmを測る。13は土師器甕の口縁部片か。厚手な作りから甕片と判断した。

出土土器から7世紀後半～末頃と8世紀後半以降の土器があるので、住居跡の時期は8世紀後半以降か。

63号竪穴住居跡（第75・76図 図版28）

50号竪穴住居跡の北側に位置し、北側の64号竪穴住居跡を切るが、北側を43号竪穴住居跡に南側を50号竪穴住居跡に切られる住居跡である。形状は長方形で南北3.1m×東西3.7～3.8m、深さ0.2m以下を測るが、東壁側が一段高くなることから、本来の住居の大きさは東西3.0mで形状は正方形になる。東側の1段高い部分は別の住居跡の可能性もある。西壁中央にはカマドを設置し、主柱穴と思われる柱穴1基を検出する。柱穴は径0.4m、深さ0.3mを測る。

カマドは突出型で、住居外に半円形に長さ0.45m、幅0.65m、深さ0.4mを測る。カマドは奥壁中央に向かって、丸くなる。カマド内には暗褐色土が堆積し、底面は奥壁に向かって緩やかに上がっている。直線状で長さ0.3mを測る両袖は、掘削時には判別が難しかったが、褐色土で構築する。煙道は確認で



第 75 図 61・62 号竪穴住居跡および 61～63 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)

きなかった。

第 75 図 14～21 は須恵器である。14～16 は坏蓋片である。14 は復元口径 11.4cm を測る。15 と 16 は口縁と受け部の高さの位置がほとんどないので、かえりのある蓋と判断した。16 の外面には並行する 4 本線に交差する 1 本線のヘラ記号を描く。17～19 は坏身片で、受け部から口縁までの高さは短い。20 は高台付坏片で、高台は低く短い。21 は平瓶や壺などの肩部片か。内面にある接合痕が明瞭に見える。22～26 は土師器である。22 は坏片で、復元口径 15.0cm を測る。23 と 24 は甕の口縁部片で、内面にケズリの痕跡が見える。25 は小型の鉢片である。26 は壺や甕などの底部片で、平底である。

出土土器には 6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器が多いが、7 世紀後半～8 世紀前半の土器も含むので、住居跡の時期は 8 世紀前半頃か。

64 号竪穴住居跡（第 77・81 図 図版 29）

58 号・59 号・63 号竪穴住居跡の北側に位置し、それらと 43 号竪穴住居跡に切られる住居跡である。中央は暗渠に切られ、カマドは検出されていない。形状は不明だが、南北 3.0 m 以上 × 東西 5.4 m、深さ 0.2 m 前後を測る。東側は 43 号竪穴住居跡との切り合いから床面を掘りすぎている。明確な主柱穴は検出されていないが、径 0.3～0.4 m、深さ 0.15～0.25 m を測る。

第 81 図 1 は須恵器坏蓋片である。2 と 3 は須恵器高台付坏の口縁部片である。調整は内外面ナデである。

住居跡の時期は、59 号竪穴住居跡に切られていることと、出土土器から 7 世紀後半頃か。

65 号竪穴住居跡（第 77・81・113 図 図版 29・48）

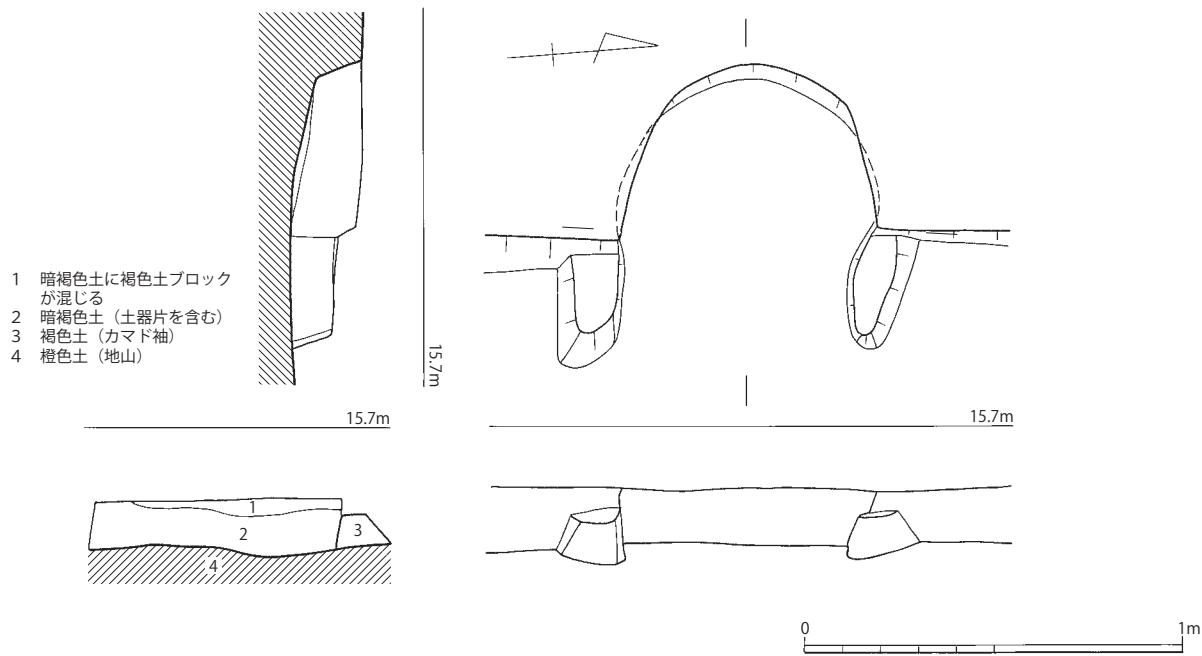
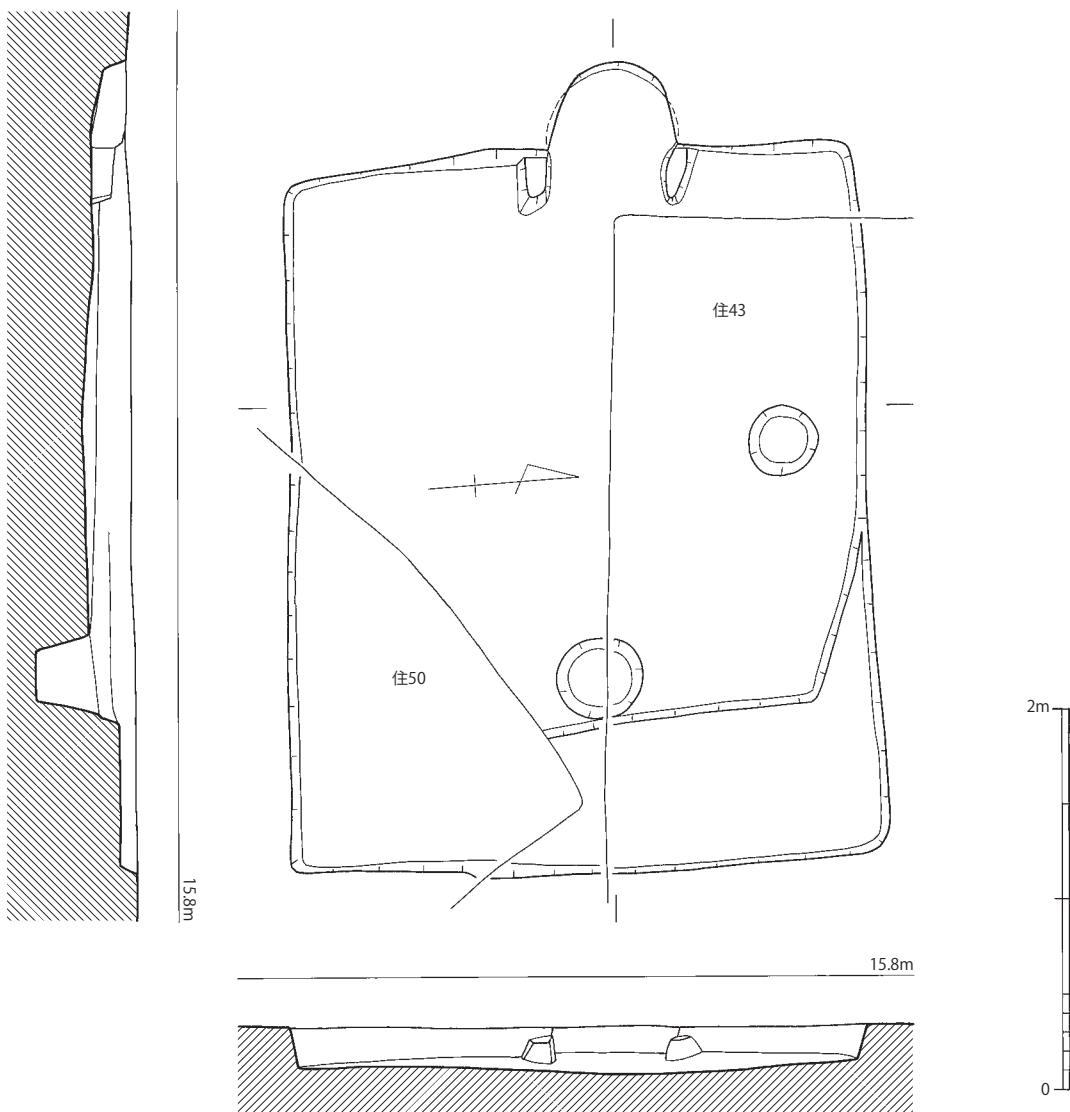
58 号・59 号竪穴住居跡の南側に位置し、それらに切られる住居跡である。形状は不明だが、南北 3.9 m 以上 × 東西 4.9 m、深さ 0.5 m を測る。カマドは検出されていないが、西壁側で長さ 0.5 m × 0.6 m の範囲で焼土を検出したので、ここにカマドを設置していた可能性がある。なお、西側には 65 号竪穴住居跡に切られる形で長方形状の遺構を検出する。南北 3.15 m × 東西 1.3 m、深さ 0.3 m を測る。床面からはカマド及び主柱穴は検出されていないが、遺構の形状や埋土から別の住居跡の可能性がある。

第 81 図 4～10 は須恵器坏蓋片である。4 は天井部に釦状の撮みが付く。復元口径 11.7cm を測る。5～7 はかえりのある坏蓋の口縁部片である。8 は宝珠状の撮み片である。9 と 10 は口縁端部が嘴状になる。11～15 は須恵器坏身片で、11～14 は他の坏よりも時期が古いタイプである。11 は外面底部中央から外へ放射線状に 4 本以上のヘラ記号を描く。復元口径 9.4cm を測る。15 は口縁部を欠損するが、坏の底部か。底部は平坦で、外面に 2 本線のヘラ記号を施す。16 と 17 は須恵器高台付坏片である。18～26 は土師器である。18 は坏片で、全体的に丸みがある。復元口径 14.6cm を測る。19 は高坏脚部片で、内外面ともケズリ後にナデる。20～22 は甕の口縁部片である。23 は高坏の坏部の口縁部片か。口縁部は折れ、外に広がる。24 と 25 は甕の底部片である。底部の端部は丸みがある。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。26 は甕の把手片である。他には鉄滓 2 点も出土する。

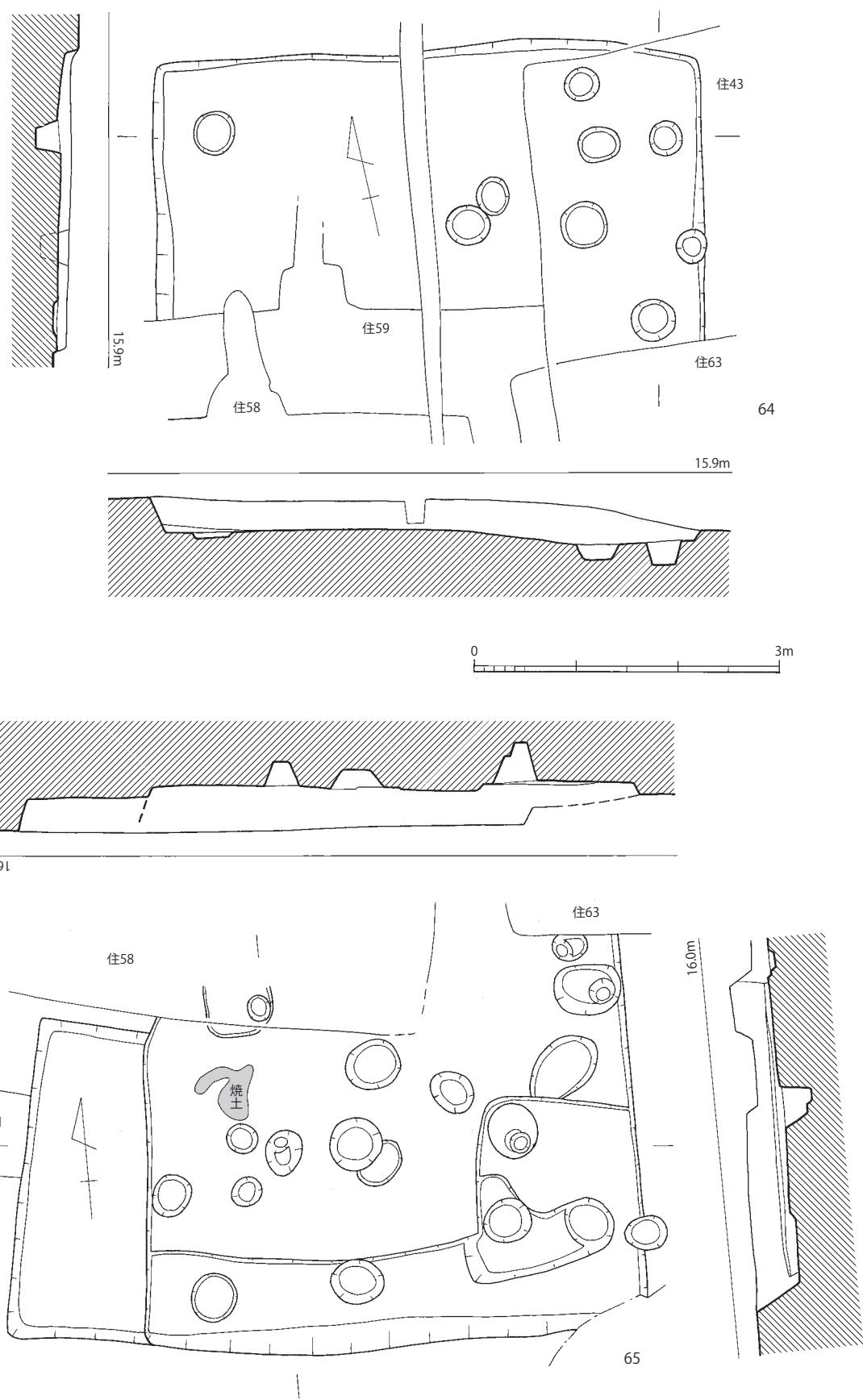
住居跡の時期は 59 号竪穴住居跡に切られることと、出土土器から 7 世紀後半～末頃か。

66 号竪穴住居跡（第 78 図 図版 28・29）

64 号竪穴住居跡の北側に位置し、56 号竪穴住居跡を切るが、その住居跡の切り合いのため北東隅は



第76図 63号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



第 77 図 64・65 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

掘りすぎている。住居内の東側は浅い溝状の窪みがある。形状は正方形で、南北 3.2 ~ 3.4 m × 東西 3.1 ~ 3.3 m、深さ 0.2 m を測る。カマドは西壁中央に設置し、主柱穴は 3 基検出する。柱穴は径 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m を測る。

カマドは突出型で、住居外に半長円状に掘られ、長さ 0.55 m、幅 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。カマド内には右奥隅に 0.1 m 程の河原石 1 点が置かれている。両袖は黄褐色土で、逆ハの字状に作られ、長さ 0.5 m を測る。

出土土器は小片のため図化できないが、住居跡の時期は 8 世紀中頃以前の 56 号竪穴住居跡を切ることからそれ以後か。

67・68 号竪穴住居跡（第 79・80・81 図 図版 30）

67 号竪穴住居跡は調査区中央北側に位置し、北側の 68 号竪穴住居跡に切られる。住居の検出は鮮明ではなく、南壁のラインは少し掘りすぎている可能性がある。形状は方形で、南北 2.8 m 以上 × 東西 2.7 ~ 3.2 m、深さ 0.15 m を測る。床面は貼床が施され、0.1 m 程下がる。さらに床面を掘り下げた結果、カマドは西壁に設置し、主柱穴は検出していない。

カマドは突出型で、半円形で住居外に長さ 0.4 m、幅 0.65 m、深さ 0.4 m を測る。両袖はしまった暗褐色土で構築し直線状に伸び、長さ 0.2 ~ 0.3 m 残存する。

第 81 図 27 は須恵器坏蓋片である。外面のヘラケズリの範囲は天井部の 1 / 3 以下になる。28 は土師器甕の口頸部片で、頸部は外湾し、口縁端部は肥厚する。

68 号竪穴住居跡は 67 号竪穴住居跡の北側に位置し、67 号竪穴住居跡と床面下で検出した 84 号竪穴住居跡を切る。北西隅は調査区外になり検出できていない。形状は南北 3.6 ~ 3.8 m × 東西 4.5 m、深さ 0.2 m を測る。床面は貼床が施され、さらに 0.1 m 程下がる。カマドは西壁に設置し、主柱穴は検出していない。

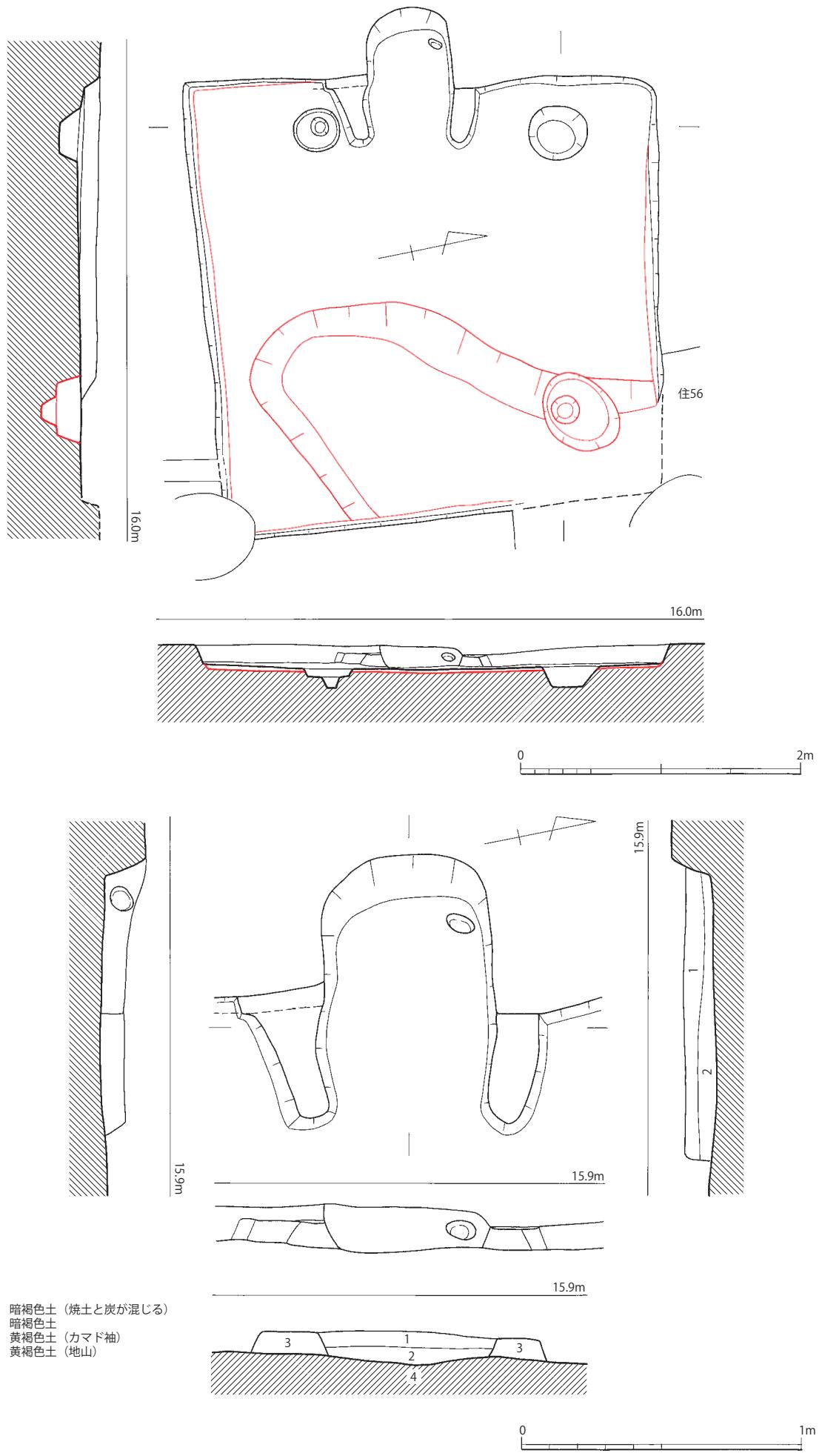
カマドは突出型で、隅丸方形状で住居外に長さ 0.2 m、幅 0.5 m、深さ 0.2 m を測る。両袖は黄褐色土で構築し、直線状に伸び、長さ 0.25 ~ 0.3 m 残存する。

第 81 図 29 ~ 31 は須恵器坏蓋片である。29 は鉗状の撮み片、30 と 31 は口縁端部が嘴状になる。32 は須恵器坏身片である。33 ~ 35 は須恵器高台付坏片である。33 と 34 は口縁部片である。35 は高台片で、高台は低く方形になる。36 は須恵器壺の肩部片である。肩部は角張らず丸みがある。37 は貼床下から出土した土師器坏片で、口縁部は垂直に立つ。復元口径 11.5cm になる。38 は土師器坏片で、底部は平底になる。39 は土師器鉢片である。器高に比べて、口径が大きく鉢とした。内外面は摩滅していて調整不明である。復元口径 16.4cm になる。40 と 41 は土師器甕又は甌の口縁部片である。40 は貼床下出土である。41 の口縁部は折れて水平になり外に広がる。42 は土師器甌の把手片である。

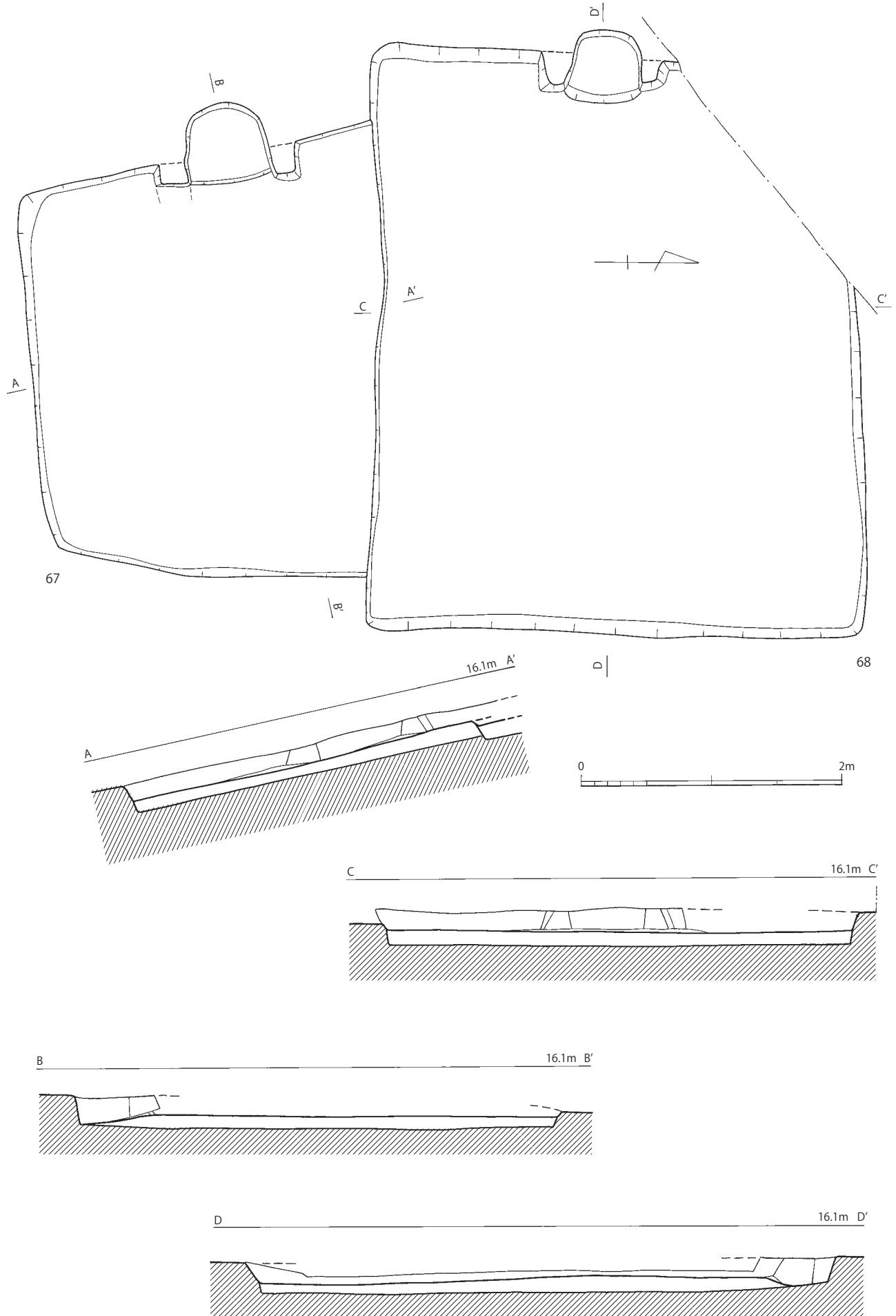
27 の須恵器坏蓋片や貼床出土の 37 の土師器坏は、84 号竪穴住居跡のものである可能性が高い。切り合いで出土土器から住居跡の時期を検討すると、68 号竪穴住居跡は 8 世紀中頃で、67 号竪穴住居跡はそれ以前の 8 世紀前半か。

69 号竪穴住居跡（第 82・83・112・113 図 図版 30・31・44・47・48）

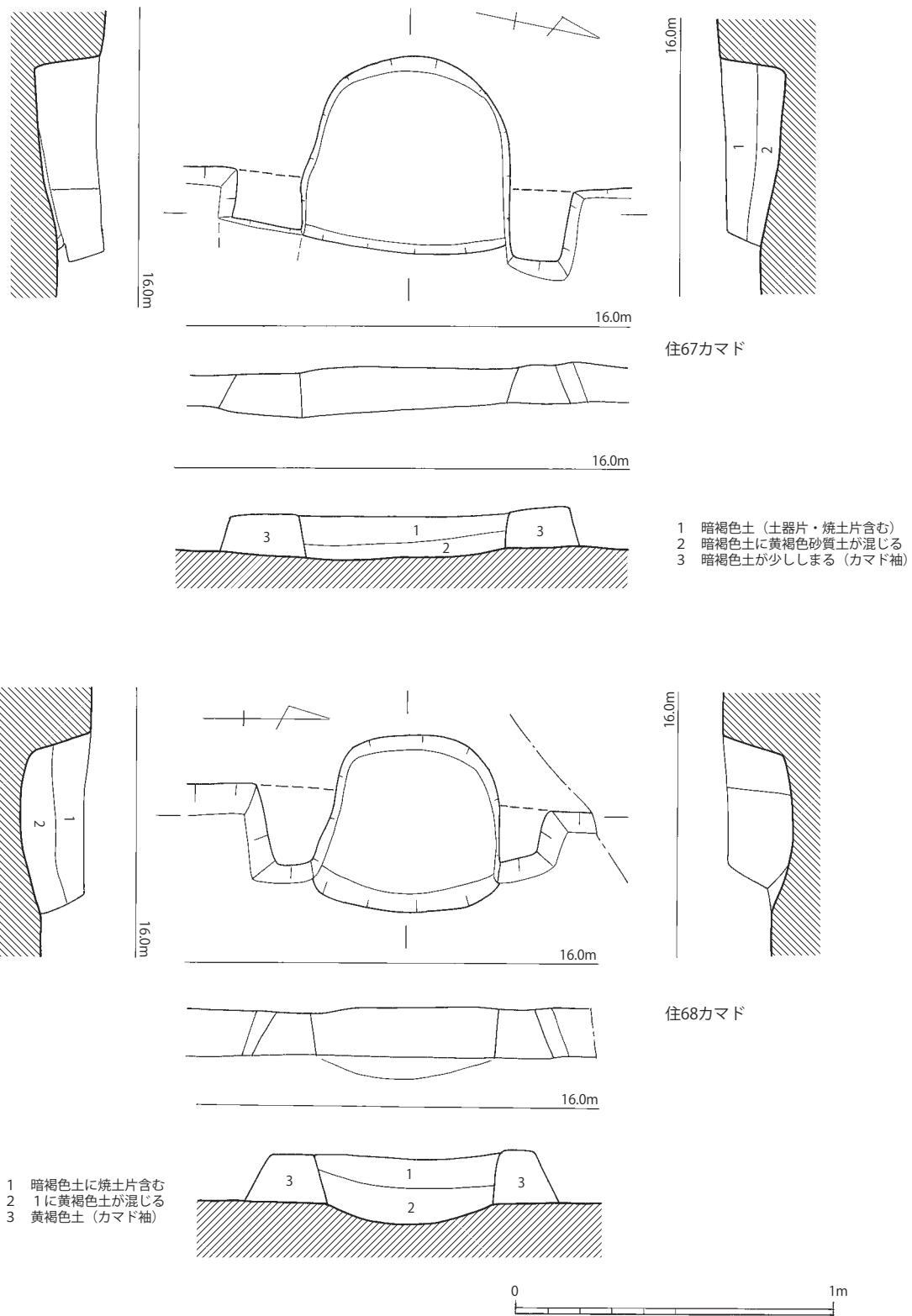
67 号・68 号竪穴住居跡の西側に位置し、西側の 76 号竪穴住居跡を切る。69 号竪穴住居跡の床面を掘削後に他の住居跡を検出する。北西隅を掘りすぎたため、形状が少し歪になるが正方形に近く、南北 3.65 ~ 3.9 m × 東西 3.5 ~ 4.0 m、深さ 0.2 m 以下を測る。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴は検出していない。



第78図 66号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



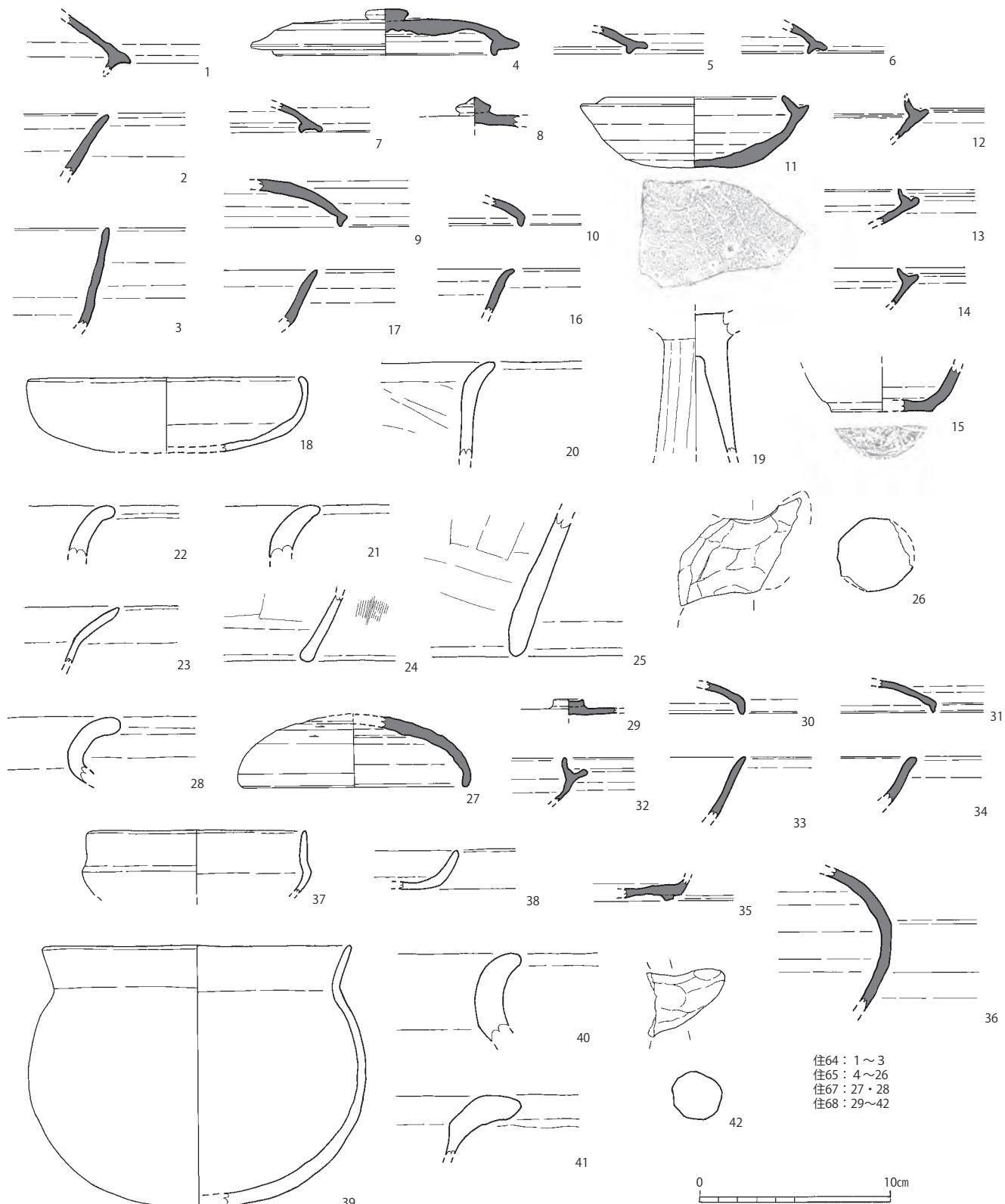
第 79 図 67・68 号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第 80 図 67・68 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)

なお床面から検出した別の住居跡の形状は正方形で南北 3.55 m × 東西 3.55 m、深さ 0.1 m を測る。カマドは検出していないが、主柱穴を 3 基検出する。主柱穴は径 0.4 ~ 0.6 m、深さ 0.1 m を測る。

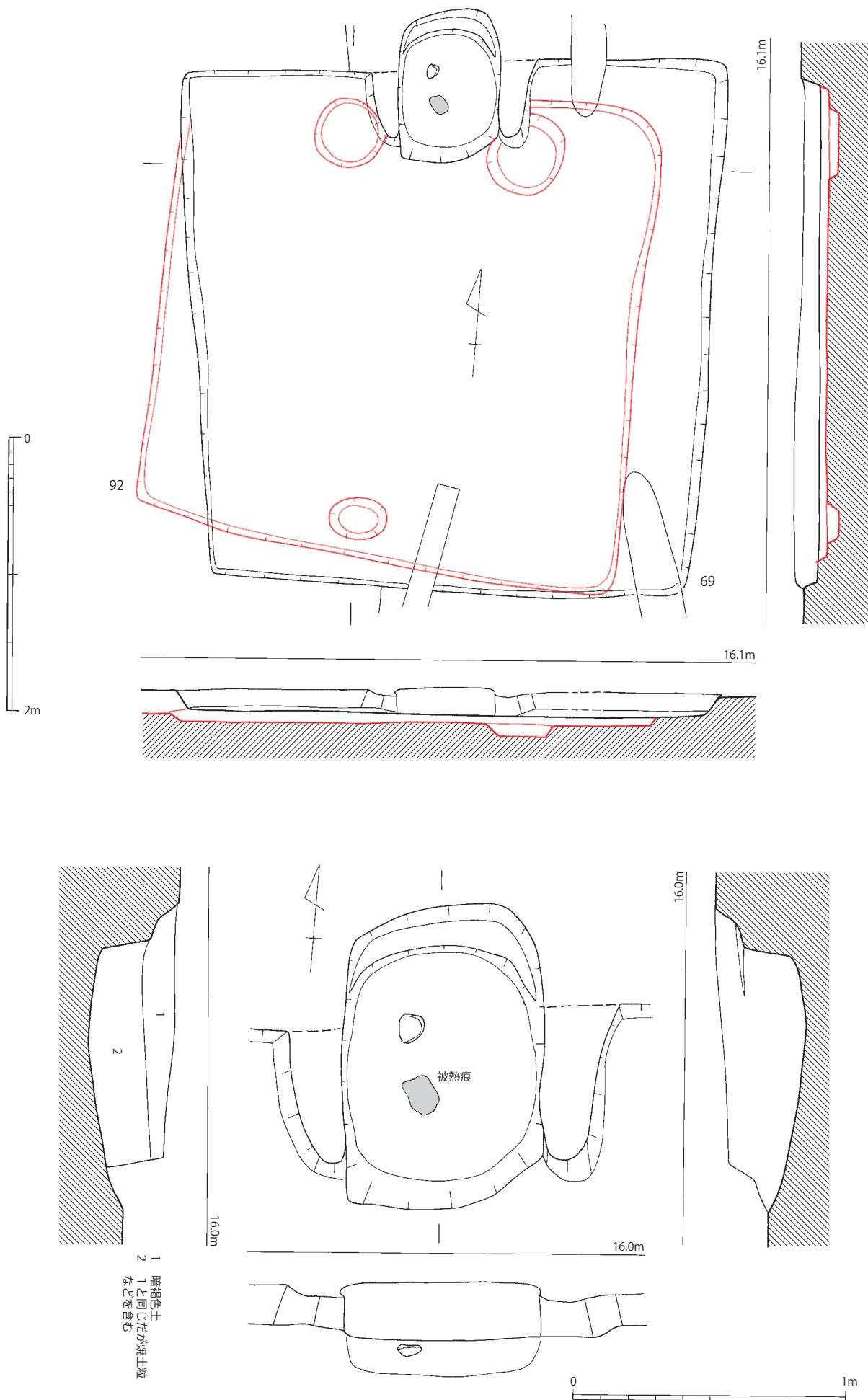
カマドは突出型で、長さ 1.1 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 m を測る。カマド内には暗褐色土が堆積し、焼土粒の有無で 2 層に分層した。カマド底面の中央には 0.15 m の被熱痕跡と 0.1 m 程の河原石 1 個を検出する。カマドは奥壁に向かってなだらかに下がり、住居外に 0.4 m 張り出す。奥壁には段が付くが、煙道は検出していない。両袖は暗褐色土に黄色土が混じった土で構築し、直線で残存した長さ 0.55 ~ 0.65



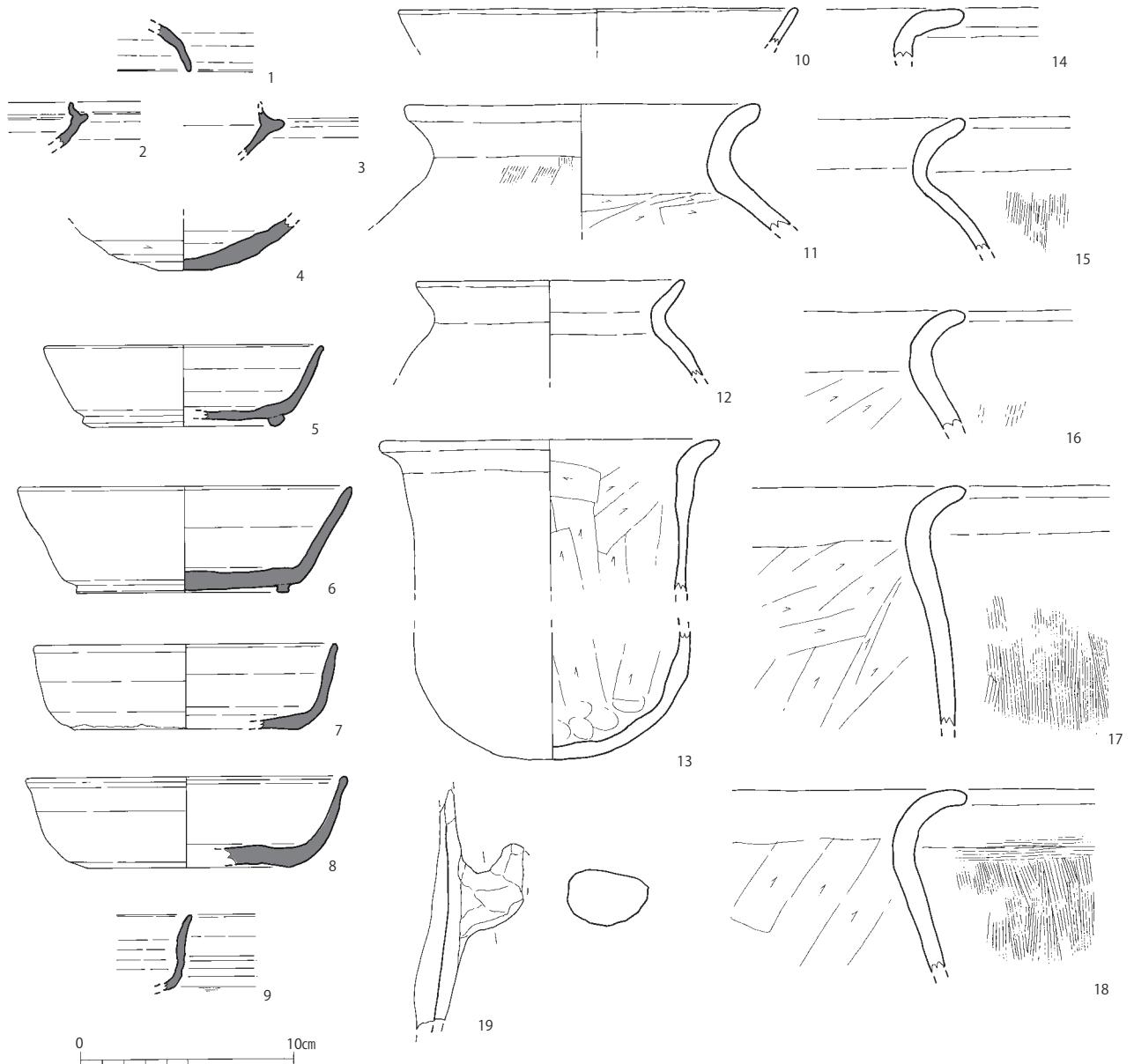
第 81 図 64・65・67・68 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1 / 3)

mを測る。

第 83 図 1 は須恵器壺蓋の口縁部片である。2 と 3 は須恵器壺身の口縁部片で、形状から身とした。4 は須恵器壺身の底部片である。5 と 6 は須恵器高台付壺で、高台の位置は底部側に付く。復元口径 13.2cm、15.8cm を測る。7・8 は須恵器壺片で、外面底部はヘラケズリで平坦になる。復元口径 14.4cm、15.0cm を測る。8 世紀前半頃のものか。9 は須恵器高壺の壺部片で、外面に 2 条の沈線が巡る。10 は土師器壺片で、調整は摩滅していて不明である。復元口径 18.8cm を測る。11～15 は土師器甕片で、14 の



第 82 図 69・92 号竪穴住居跡・69 号カマド実測図 (1/40、1/20)



第 83 図 69 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1 / 3)

み口頸部の形状が逆「L」字状に大きく外反する。13は同一個体の小さい甕になる。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。11～13の復元口径 16.8、12.6cm、16.0cmを測る。19は土師器甕の把手片である。把手は体部と先端部との間が狭く、垂直に立つ。土錘 1 点と鉄製鋤先と鉄釘も出土する。

住居跡の時期は、出土した須恵器高台付壺や壺から 2 時期に分けられるので、8世紀前半頃と床面下の 92 号竪穴住居跡は 6 世紀末～7 世紀初め頃か。

70・71号竪穴住居跡（第 84 図 図版 31）

70 号竪穴住居跡は調査区西側北よりに位置し、東側の 71 号竪穴住居跡に東壁を切られる住居跡である。北西隅は調査区外になるので確認はできないが、形状は長方形で南北 2.9 m × 東西 3.65 m、深さ 0.1 m 以下を測る。カマドや主柱穴は検出していない。

71 号竪穴住居跡は 70 号竪穴住居跡の東側に位置する住居跡である。形状は方形で、南北 3.0 ～ 3.4 m × 東西 3.2 ～ 3.7 m、深さ 0.1 m 以下を測る。70 号竪穴住居跡と同様で、カマドや主柱穴は検出してい

ないが、住居外にある径 0.2 m 程、深さ 0.1 m の柱穴が、住居に関係するのかもしれない。

出土土器が小片のため、詳細な時期は不明である。

72 号竪穴住居跡（第 85 図 図版 31）

70 号竪穴住居跡の西側に位置し、1 号溝を切るが 4 号溝に切られる。大部分は調査区外で形状は不明だが、南北 1.7 m 以上 × 東西 2.8 m、深さ 0.2 m 以下を測る。柱穴を 1 基検出するが、径 0.6 m、深さ 0.65 m を測る。

第 85 図 1 は深みのある須恵器坏片のため、坏身としたが蓋の可能性もある。復元口径 10.0cm を測る。2 は須恵器坏蓋の口縁部片か。口縁端部は折れ曲がる。3 は土師器甕片で、口縁部片は外湾する。内面の調整はケズリである。

住居跡の時期は 1 号・4 号溝との切り合いを考慮し、出土土器の 2 と 3 から 8 世紀前半か。

73 号竪穴住居跡（第 85・88 図 図版 31）

72 号竪穴住居跡の南西に位置し、5 号溝に切られる。大部分は調査区外になるが、形状は方形又は長方形になり、南北 2.65 m × 東西 2.7 m 以上、深さ 0.2 m 以下を測る。貼床が施されており、さらに 0.1 m 程下がり、その面で柱穴 1 基を検出する。柱穴は径 0.2 m、深さ 0.2 m を測る。

第 88 図 1 と 2 は須恵器坏蓋の口縁部片である。1 はかえりのある口縁部、2 は端部が嘴状になる。3 と 4 は須恵器高台付坏片である。高台の形状が異なり、3 の高台は高く、端部が外へ開く。4 の高台は低く、形状は逆台形状になる。復元高台径 9.2cm を測る。5 は土師器の甕口縁部片である。調整は内外面に刷毛目であるが、外面は縦方向、内面は横方向になる。

出土土器は 7 世紀後半と 8 世紀前半の 2 時期あるが、この住居跡が 5 号溝に切られることから住居跡の時期は 8 世紀前半か。

74・75 号竪穴住居跡（第 86・88 図 図版 32）

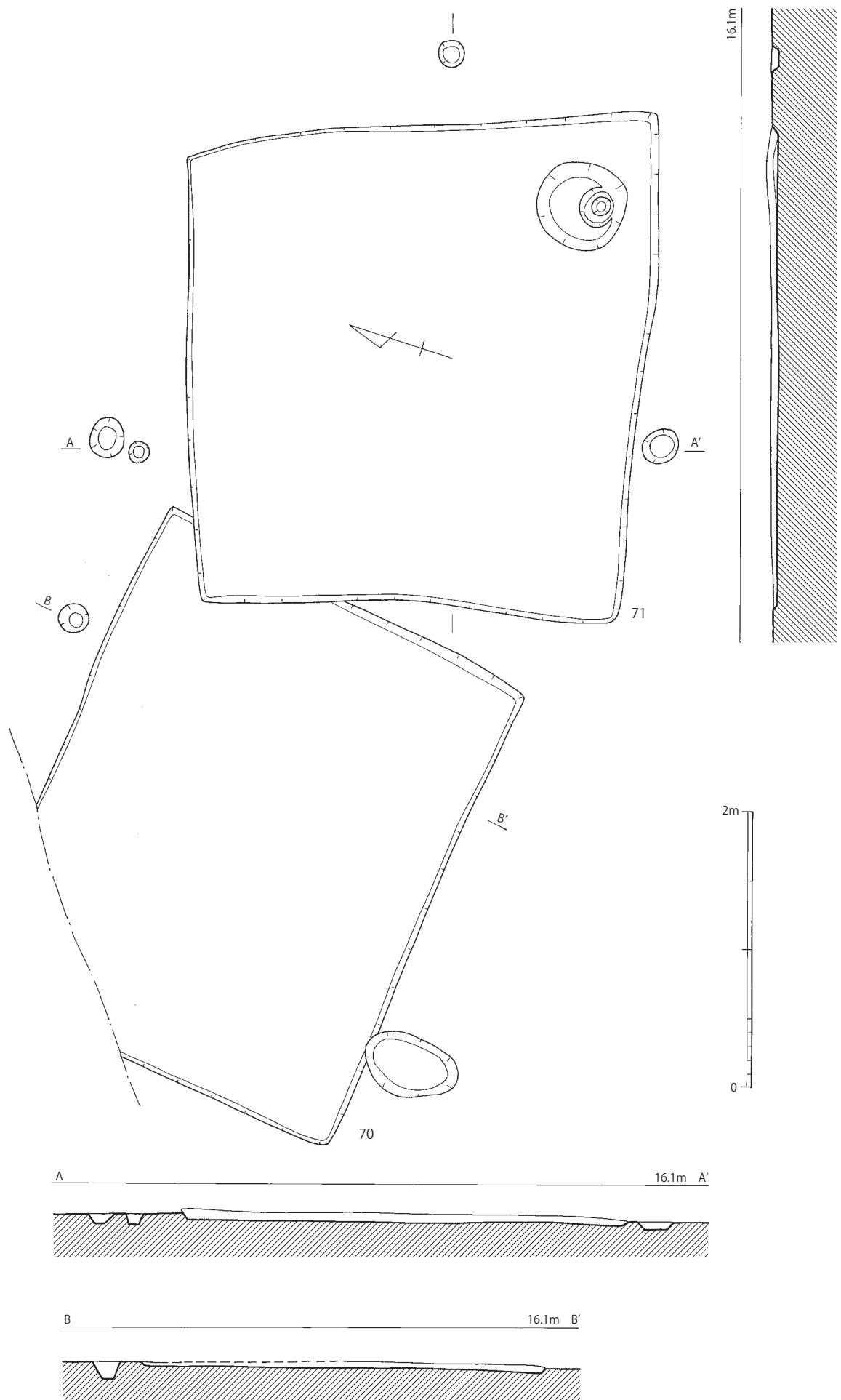
74 号竪穴住居跡は調査区南西隅に位置し、75 号竪穴住居跡に切られる。形状は不明であるが、直線状に遺構のラインを検出したので住居跡としたが、ほとんどが調査区外になり、判断に悩む。南北 0.9 m 以上 × 東西 2.0 m 以上、深さ 0.2 m を測る。

第 88 図 6 は須恵器高台付坏片である。高台は低く、形状は逆台形状になる。復元高台径 10.0cm を測る。

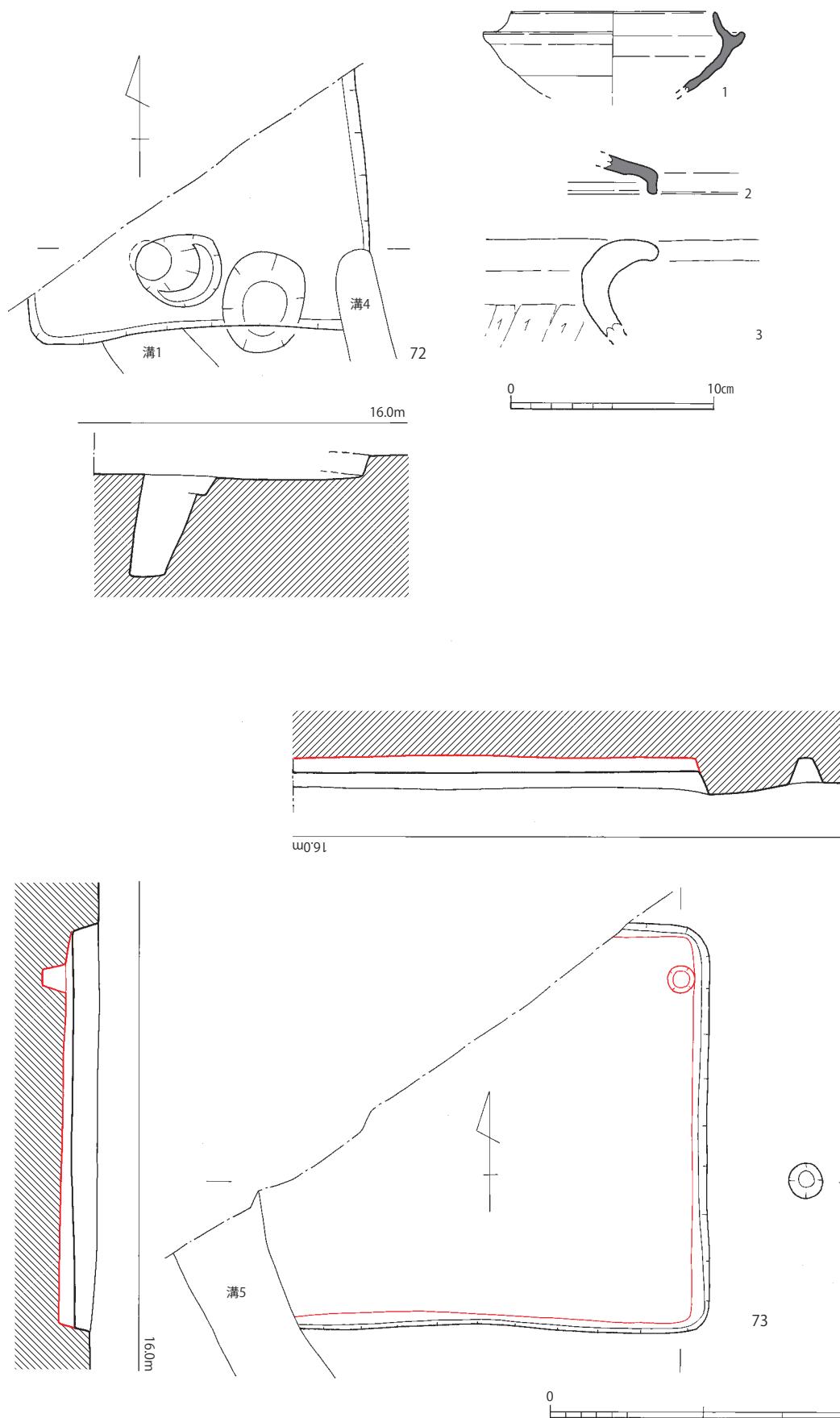
75 号竪穴住居跡は 74 号竪穴住居跡の南側に位置し、それを切る。西壁側は調査区になり、形状は方形で、南北 3.3 m × 東西 3.2 m、深さ 0.3 m を測る。カマドは北壁側に設置し、主柱穴と思われる柱穴は 1 基のみ検出する。柱穴は径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.1 m 以下を測る。床面からは他の住居跡と思われる掘り込みを検出し、南北 2.3 m 以上 × 東西 1.8 m 以上、深さ 0.1 m 以下を測る。別の古い住居跡の可能性がある。

カマドは造り付け型で、長さ 0.7 m、幅 0.7 m を測る。カマドは奥壁に向かって緩やかに下がり、カマドの埋土は暗褐色土に黄橙色土や土器片が混入し、3 層に分層できる。両袖は暗褐色土で構築し、直線状に長さ 0.6 m を測る。

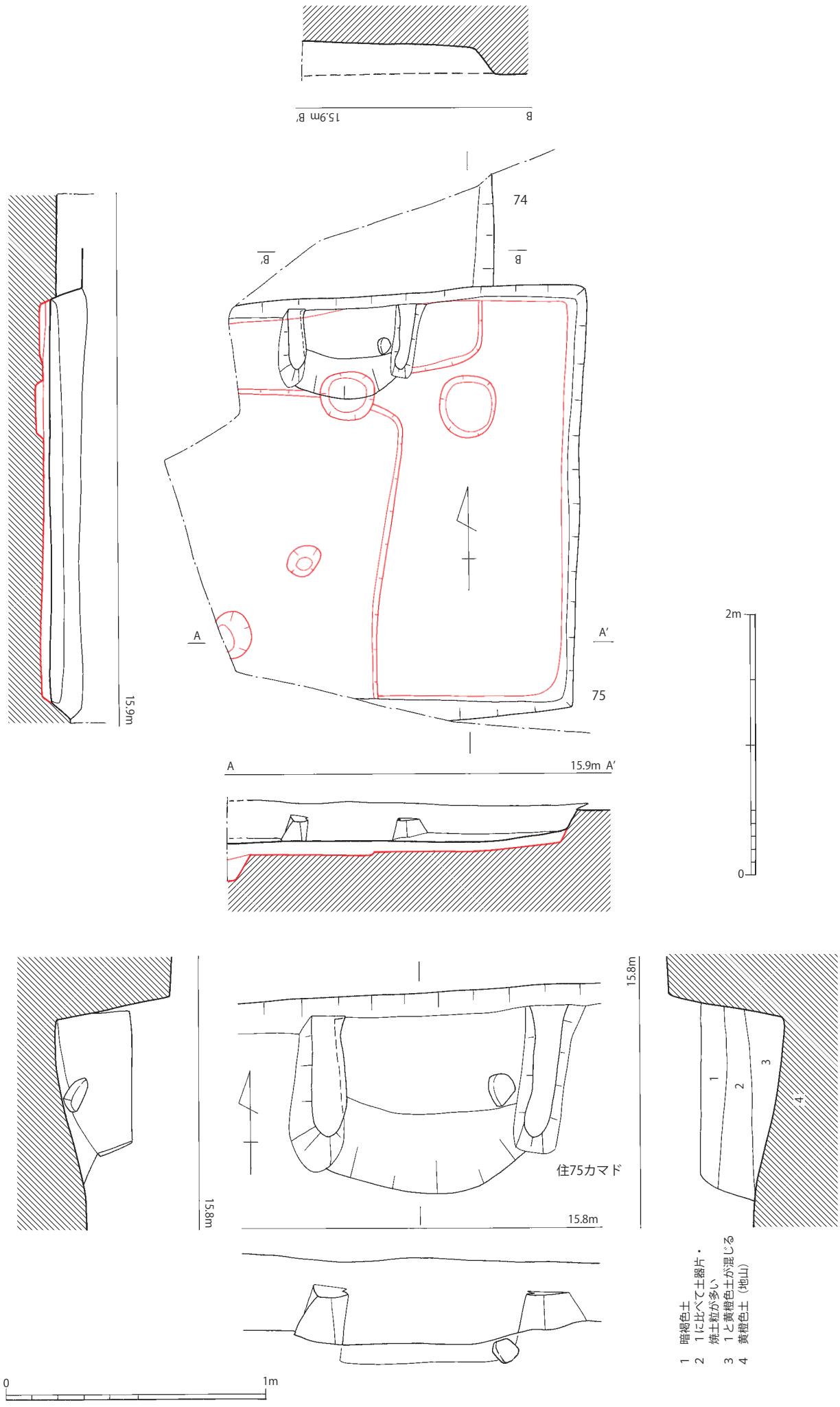
第 88 図 7 ~ 9 は須恵器坏蓋片である。7 と 8 は天井部片で、撮みは低い宝珠形になる。9 は口縁部片で、端部は嘴状になる。10 は貼床下出土の時期の古い須恵器坏身片である。11 ~ 13 は須恵器高台付



第 84 図 70・71 号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第 85 図 72・73 号竪穴住居跡および 72 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)



第 86 図 74・75 号竪穴住居跡、75 号カマド実測図 (1/40、1/20)

坏片である。11は口縁部片である。12は底部が厚いが、高台は低い。復元高台径10.2cmを測る。13の高台は高く、端部は外へ伸びる。14～17は土師器甕の口頸部片である。口縁部はゆるやかに外湾するが、14・15・17に比べ、16の内面には明瞭に稜が付くので、時期が新しいか。復元口径16.8cmを測る。18～20は土師器甕の把手片である。18の先端部は尖り、持ち手部分は僅かに凹む。19と20の先端部は丸みがあるが、持ち手部分は明瞭に凹む。

21～28は73～75号竪穴住居跡検出時の出土である。21～27は須恵器である。21～24は坏蓋片で、口縁部の形状が21はかえりがあり、22と23は嘴状になる。24は撮み片で、撮みの上部中央が尖る宝珠状になる。25～27は高台付坏片である。高台端部の形状は、25と26は逆台形状、27のみ高く外へ伸びる。28は土師器高台付坏である。高台の形状は三角形状になる。色調は茶褐色になり、瓦器椀ではない。25と26の復元高台径は8.8cm、9.4cmを測る。

出土土器はほとんどが7世紀後半～末の時期のものが多い。そのため75号竪穴住居跡の時期は、6世紀末～7世紀初頭の住居跡を壊して7世紀後半～末に造られた可能性が高い。

76号竪穴住居跡（第87～89・112図 図版32・33・44・46・47）

71号竪穴住居跡の東側に位置し、69号竪穴住居跡と7号掘建柱建物跡に切られている。北西隅から北壁にかけては調査区外になり検出できていない。形状は僅かに東西が長い長方形で、南北5.5m×東西5.8m、深さ0.1mを測る。住居は貼床が施され、床面はさらに0.1m下がる。カマドは西壁に設置するが、主柱穴は検出していない。住居内中央には径0.5m、深さ0.15mを測るピット1基があり、さらに径0.2mの柱痕跡も検出する。

カマドは突出型で住居外に半長円状に掘られ、長さ0.8m、幅1.0mを測る。カマド底面は平坦であるが、左奥壁側は7号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。両袖は暗褐色土で構築し、左袖は長さ0.5～0.6mを測る。煙道は検出していない。

第88図29は弥生土器甕の底部片で、底部は上げ底になる。調整は外面に縦方向の細かい刷毛目、内面は斜め方向のケズリである。周辺に弥生時代の遺構はないので、混入品である。30は須恵器坏蓋片で、天井部には弧状のヘラ記号を施す。復元口径12.2cmを測る。31は須恵器坏身片で、口縁は長いが、受け部は短く高低差がある。32は土師器坏の底部片で、丸みがある。33は土師器甕の口縁部片で、頸部は僅かに外湾する。34は土師器甕の体部下半～底部片で、僅かに丸みのある平底である。第89図35は底部を欠損する土師器甕片で、口頸部は折れ、端部は外へ開く。甕の形状は頸部で窄まり、体部上位で最大径を測る。34と35の調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。紡錘車1点も出土する。

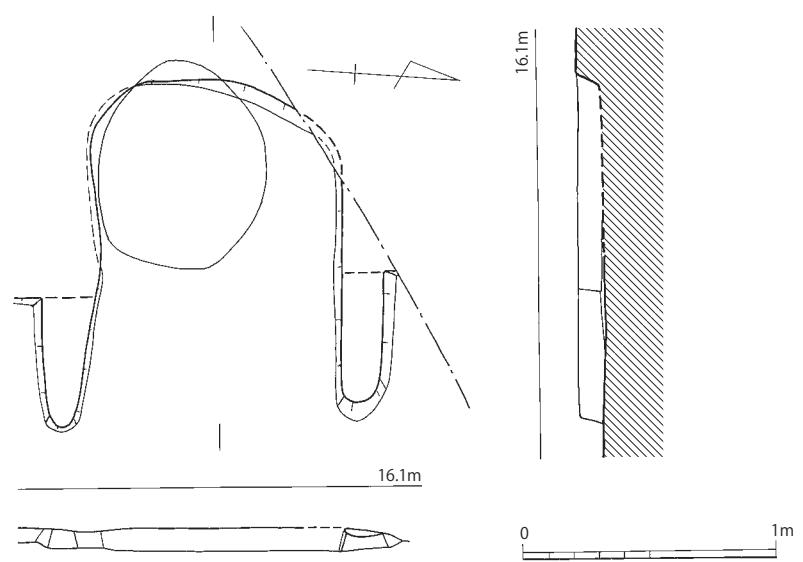
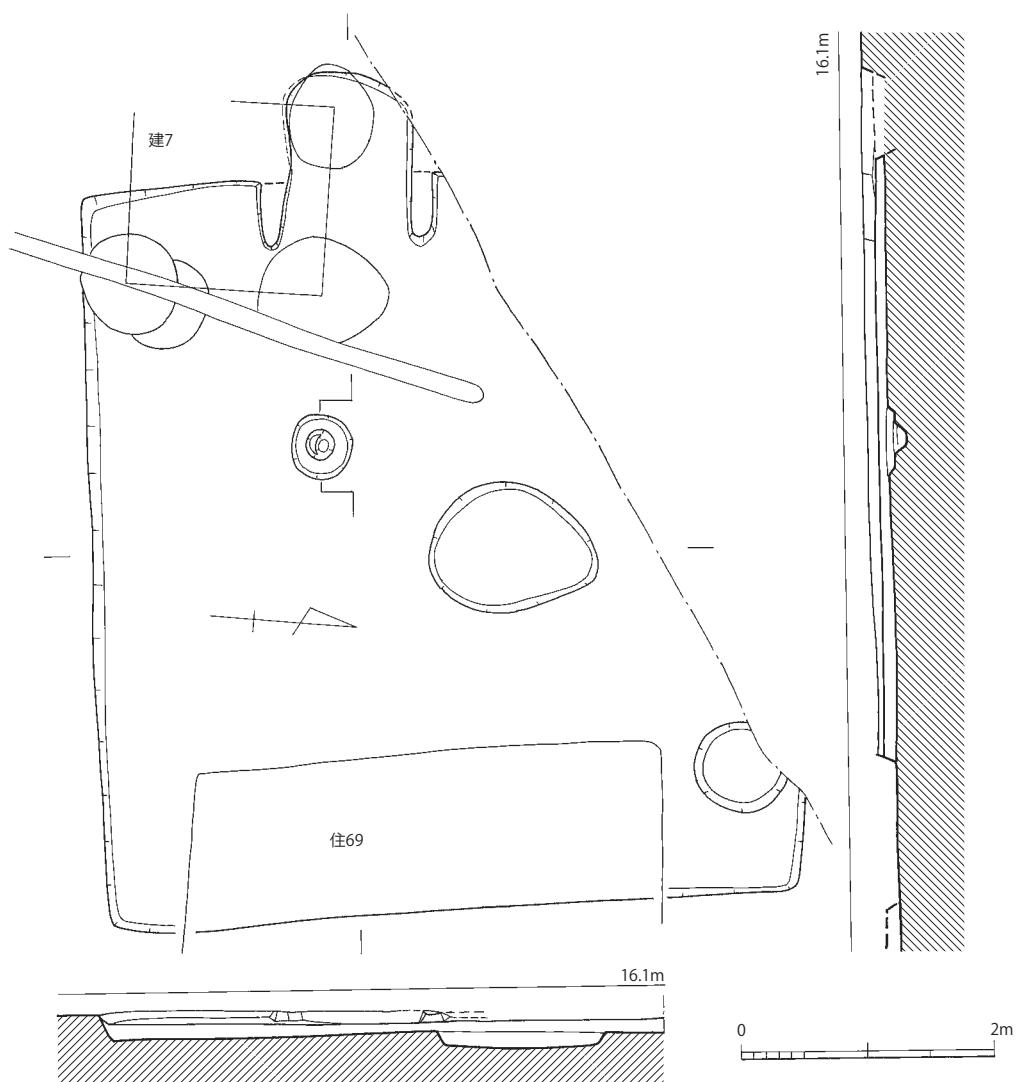
住居跡は、出土土器から7世紀後半頃か。

77・78号竪穴住居跡（第90・92～95図 図版33・45）

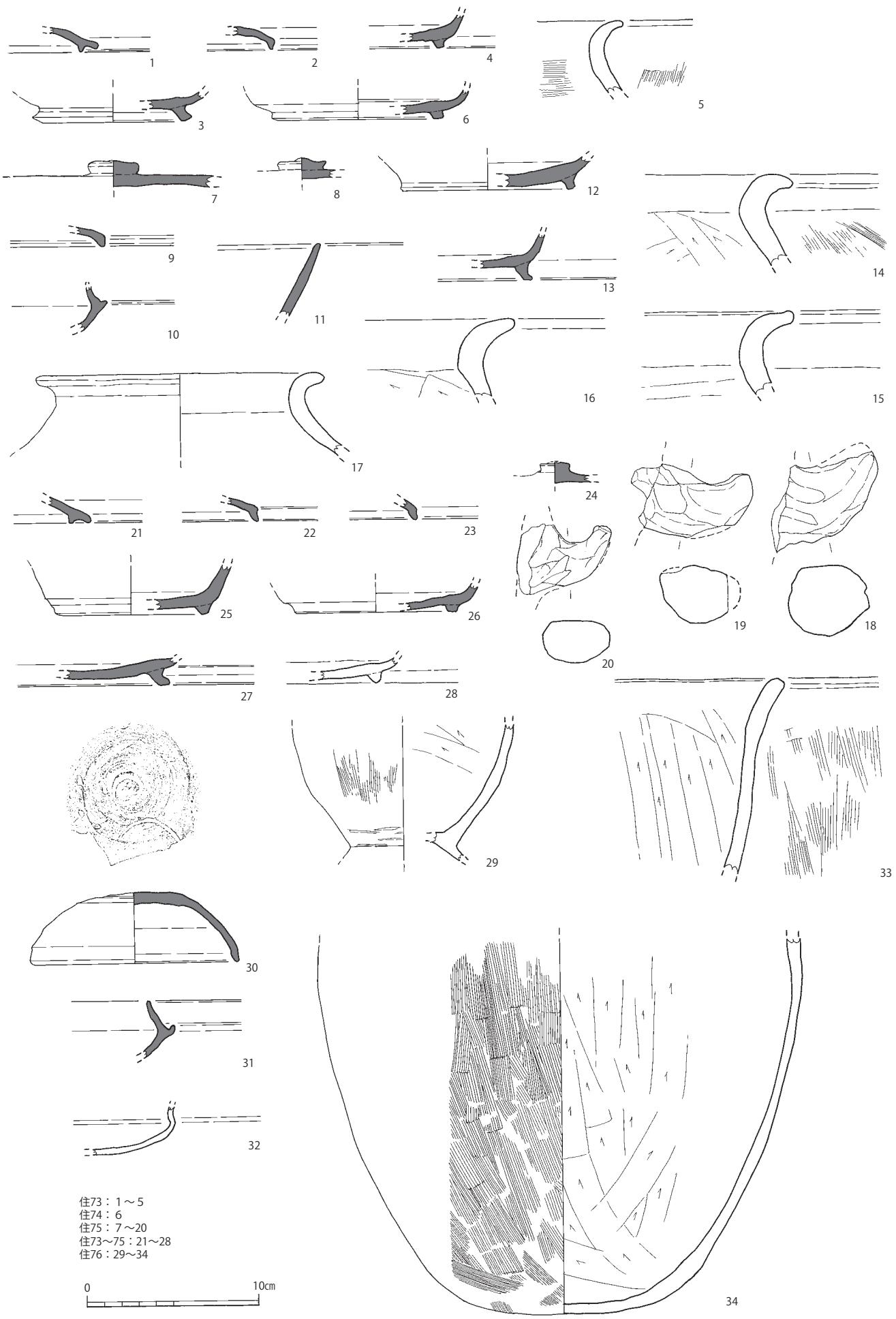
77号竪穴住居跡は調査区西壁中央に位置し、78号・79号竪穴住居跡に切られる。南壁側は調査区外になるが、形状は南北2.9m以上×東西4.0m、深さ0.15m以下を測る。カマド及び主柱穴は検出していない。住居内からは0.1～0.3mの石が所々で検出された。

第92図1は須恵器坏蓋片で、口縁が短くかえりが接地する。2は須恵器坏蓋の口縁部片で、口縁と受け部が短いので、小サイズの坏蓋片か。3は土師器甕の把手片で、先端部は尖らない。

78号竪穴住居跡は77・79号竪穴住居跡を切り、77号竪穴住居跡の南東側に位置する。南壁は調査区



第 87 図 76 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)



第 88 図 73 ~ 76 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1 / 3)

外になり、東壁は暗渠に切られるので、形状は不明だが、南北1.7m以上×東西2.3m以上、深さ0.2m以下を測る。カマドは西壁に設置するが、主柱穴は検出していない。この住居内からも0.2m以下の石を多数検出する。

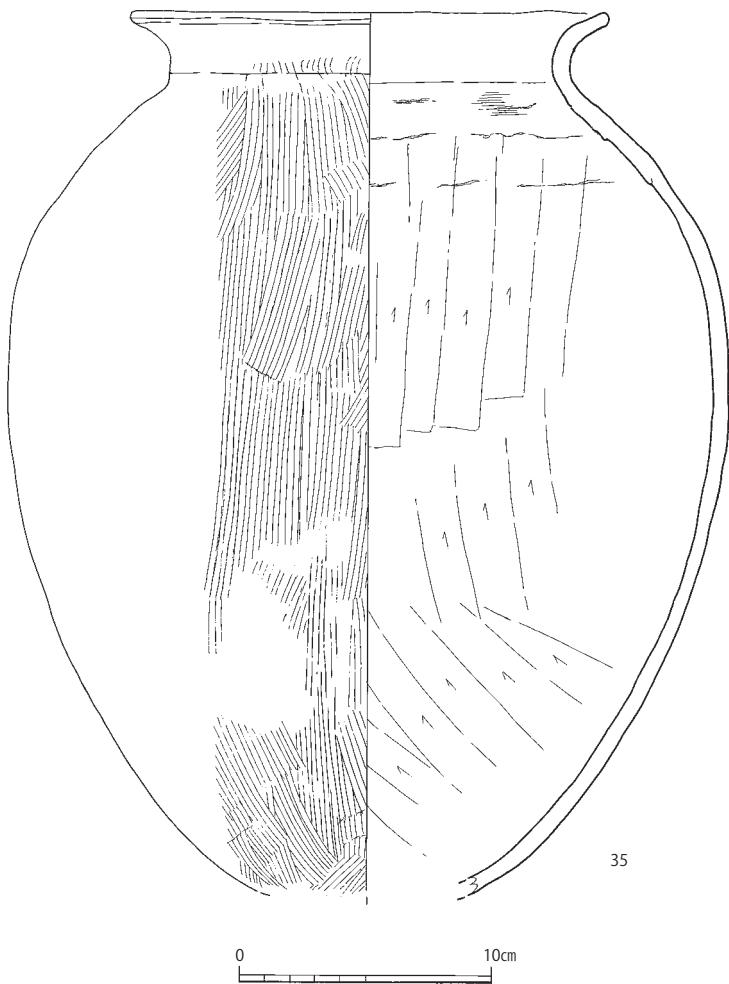
カマドは突出型で、住居外に隅丸方形状に掘られ、長さ0.7m、幅0.55mを測る。カマドの底面は奥壁に向かって僅かに下がる。カマド内は2層に分層でき、土器が含まれる暗褐色土が堆積する。カマドの両袖は暗褐色土で構築しているため、判別がしにくい。左袖は一部掘りすぎているが、両袖は直線状で、長さ0.45mを測る。

第92図4と5は須恵器坏身の口縁部片である。6は須恵器高台付坏片で、底部は体部より厚い。高台は体部との境で接合し、高台は外へ伸びる。復元高台径11.9cmを測る。7は土師器坏片で、器高が低い皿状になる。8～12は土師器甕片である。いずれもの口縁部は外反し、内面には稜が付く。特に11・12の口縁部の外反が強いので、時期は新しい。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。10は復元口径26.8cmを測る。13と14は77・79号竪穴住居跡検出時に出土した須恵器である。かえりのある坏蓋片と高台付坏片である。13は宝珠形の撮みが付く。14の高台は低いが、端部が外へ伸びる。時期的に見て、77号竪穴住居跡出土の須恵器の可能性がある。

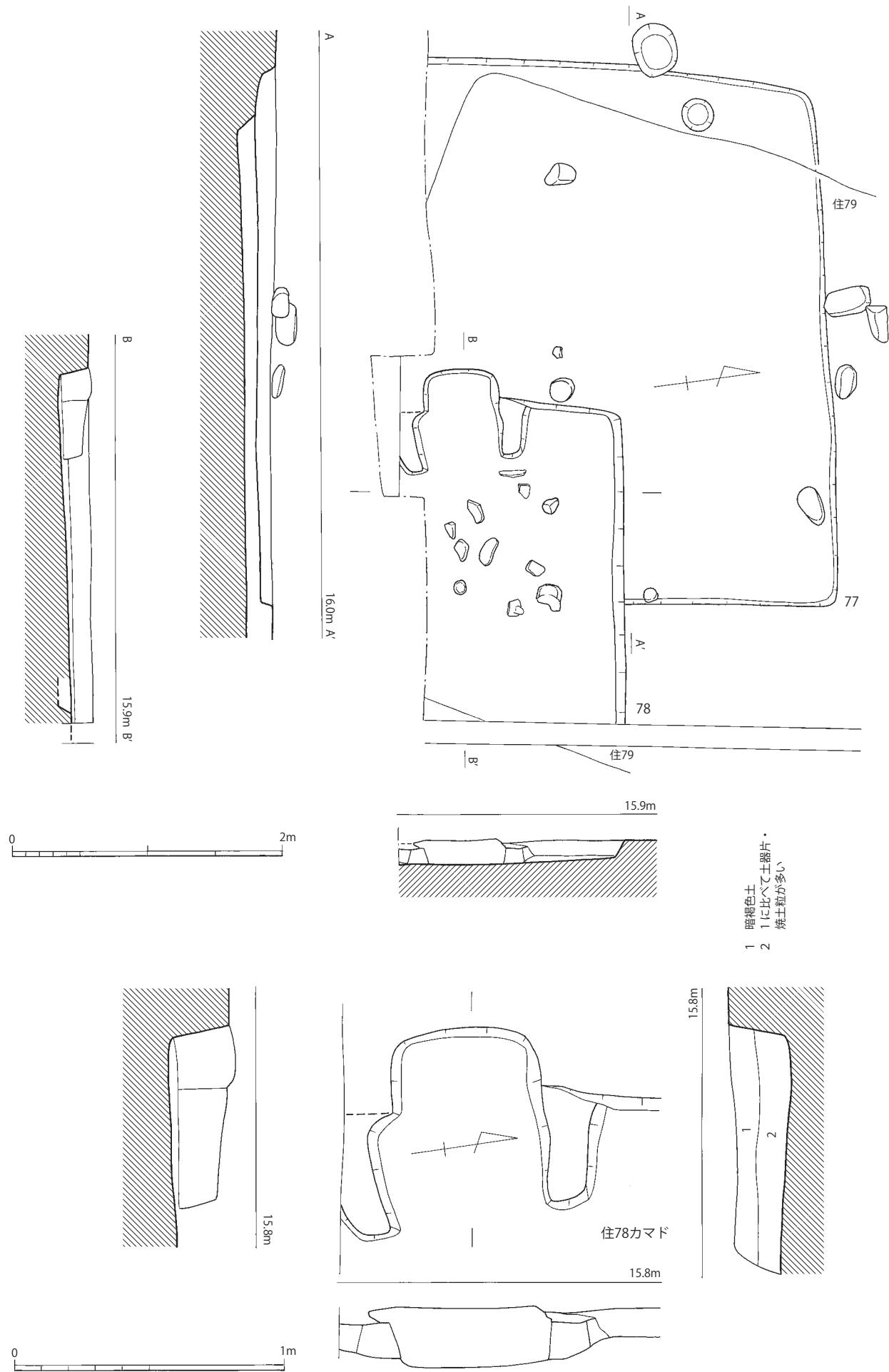
79号竪穴住居跡（第91～95図 図版34・35・45・46）

77号竪穴住居跡の北側に位置し、78号竪穴住居跡に切られる。南壁側は調査区外になり、すべてを検出できていないが、形状は南北4.0～4.5m×東西4.5m、深さ0.2mを測る。床面は貼床が施されているため、さらに0.1m掘り下がる。カマドは西壁中央に設置し、主柱穴は3基以上を検出する。主柱穴は貼床を下げた面で検出し、径0.35～0.55m、深さ0.1m以下を測る。柱軸は西壁側に少しずれるが、北西隅と南西隅で検出した柱穴の方が、径0.4～0.45m、深さ0.2～0.3mを測り、柱を据える穴としては安定する。

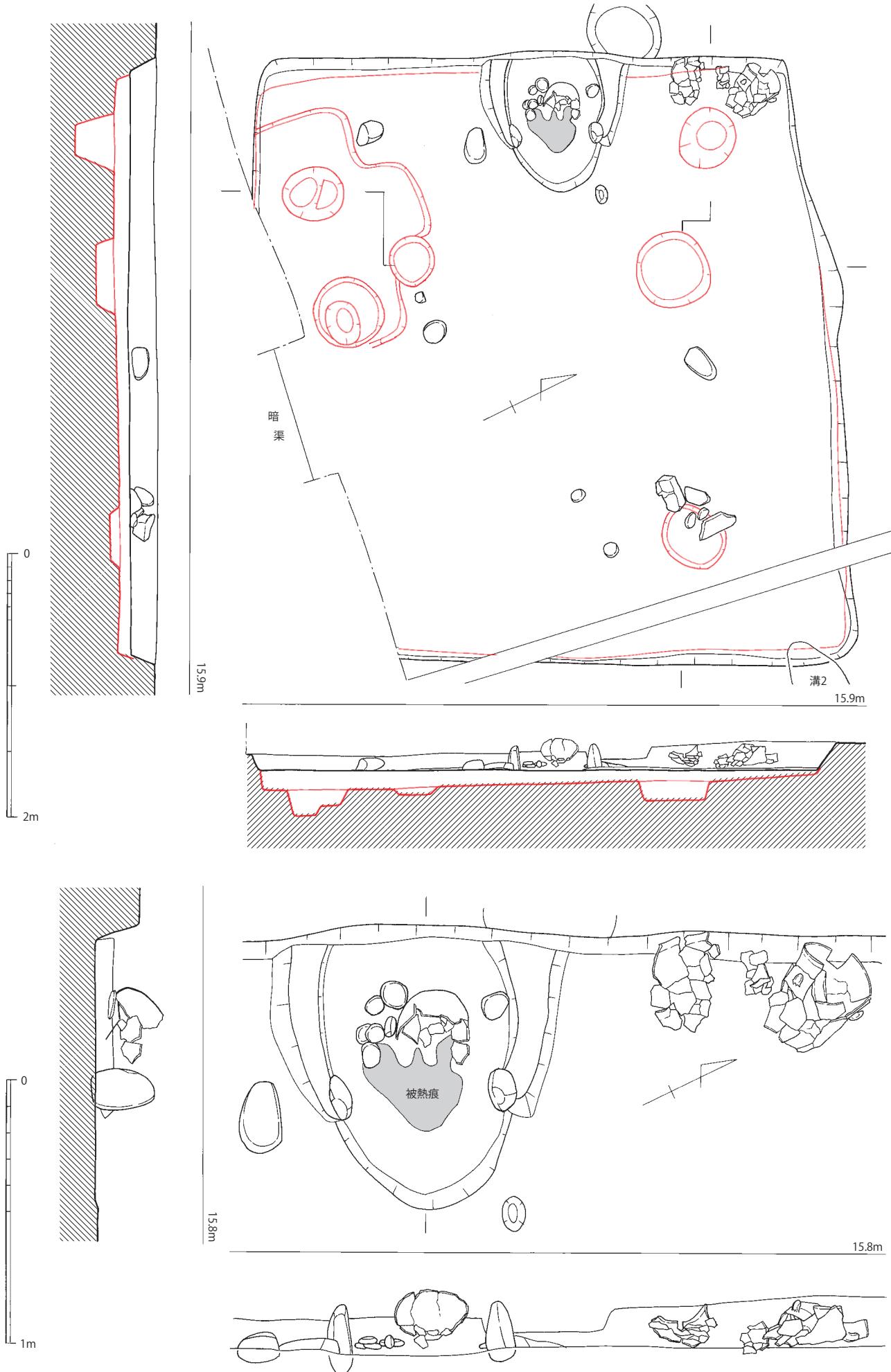
カマドはこの遺跡で最も良好な状態で検出し、造り付け型で長さ1.0m、幅0.7mを測る。カマドの中央には土師器甕の底部片があり、その左側には0.1m以下の平たい河原石が水平になるように並べて置かれている。支脚の代わりに、この石を並べ置くことで、土器を安定して設置していた可能性がある。焚口側には0.4m×0.3mの範囲に被熱した痕跡も確認する。両袖は暗褐色土で構築し、丸みのある逆「ハ」



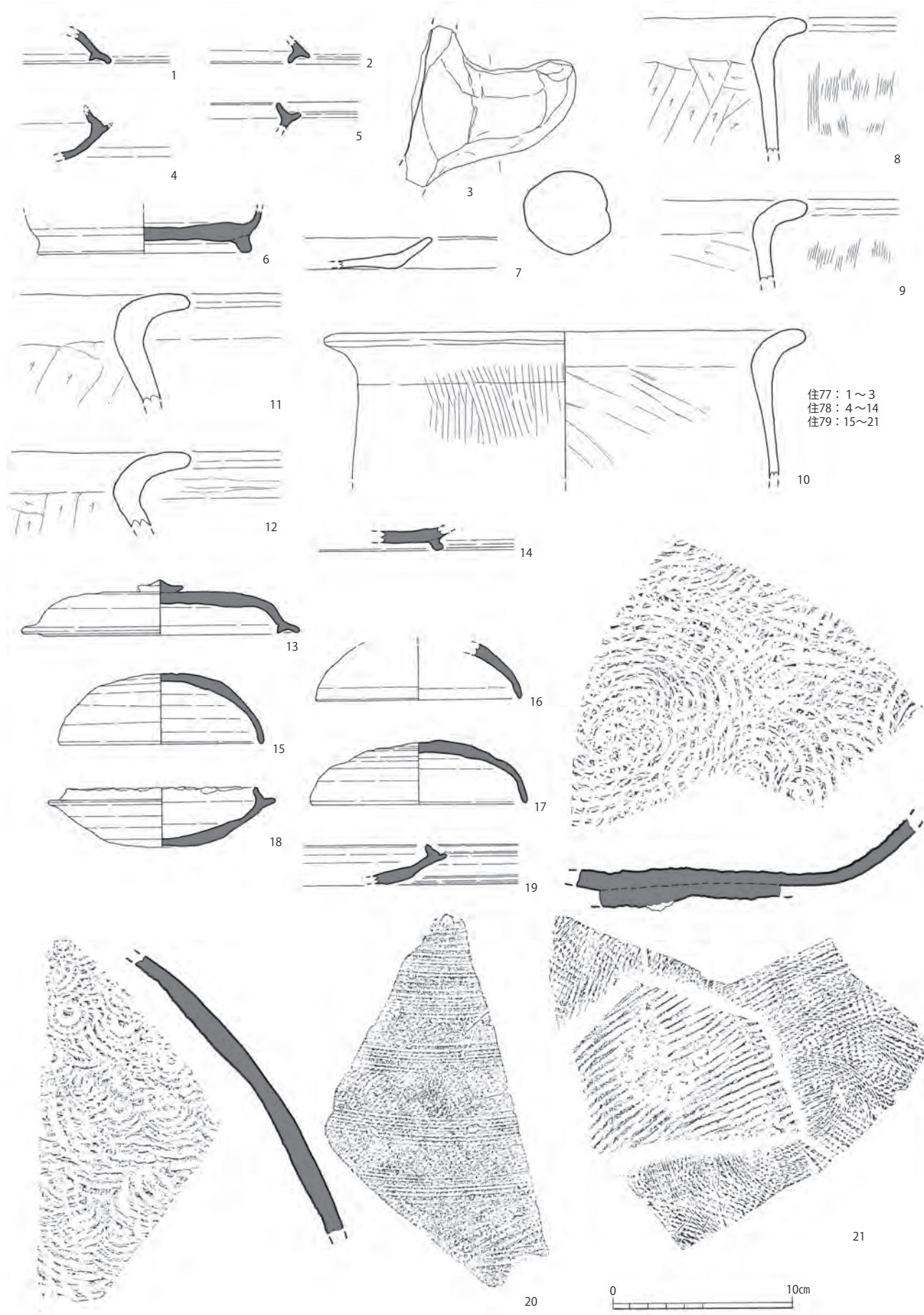
第89図 76号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)



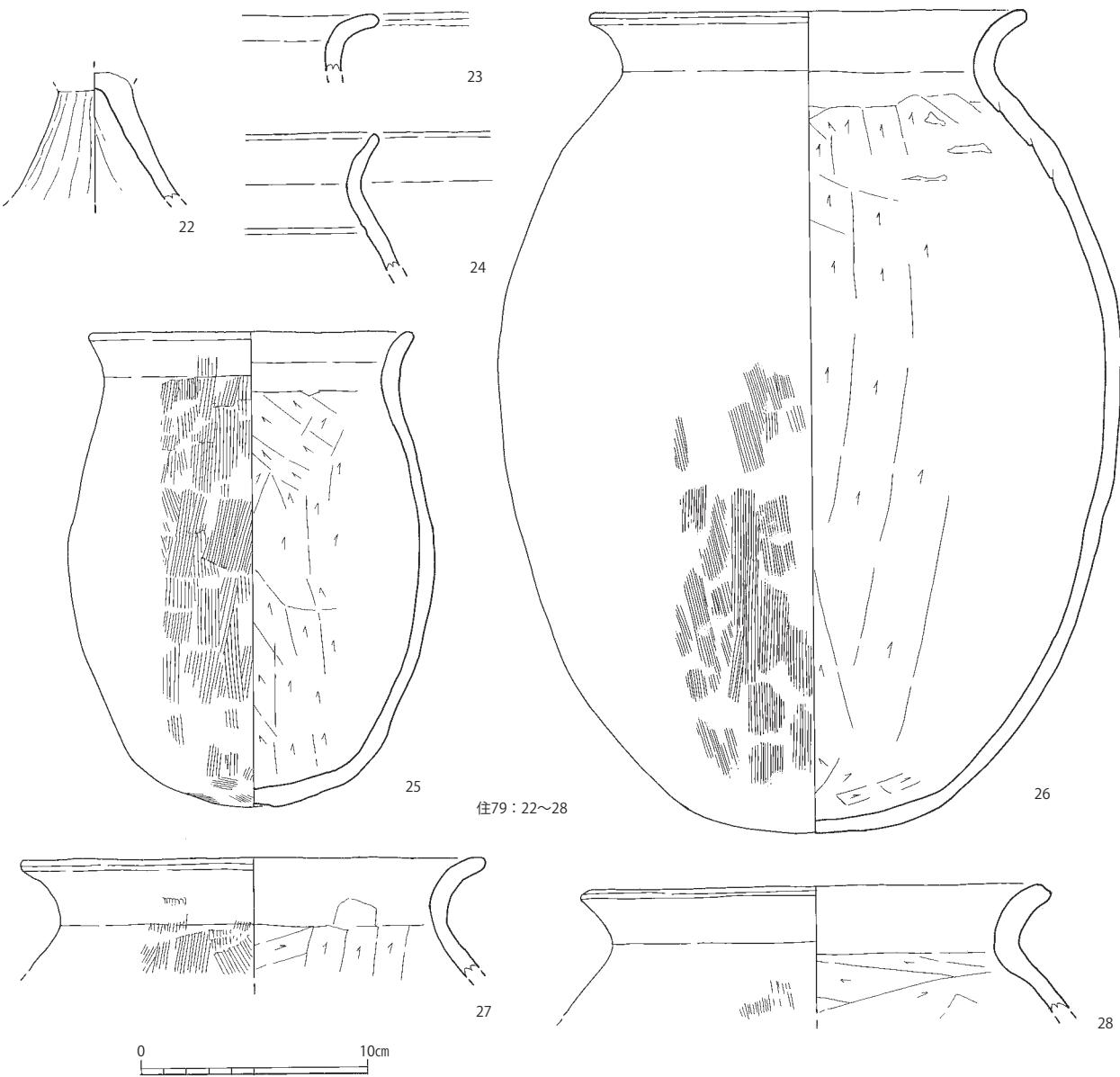
第90図 77・78号竪穴住居跡、78号カマド実測図 (1/40, 1/20)



第91図 79号竪穴住居跡・カマド土器出土状況実測図 (1/40、1/20)



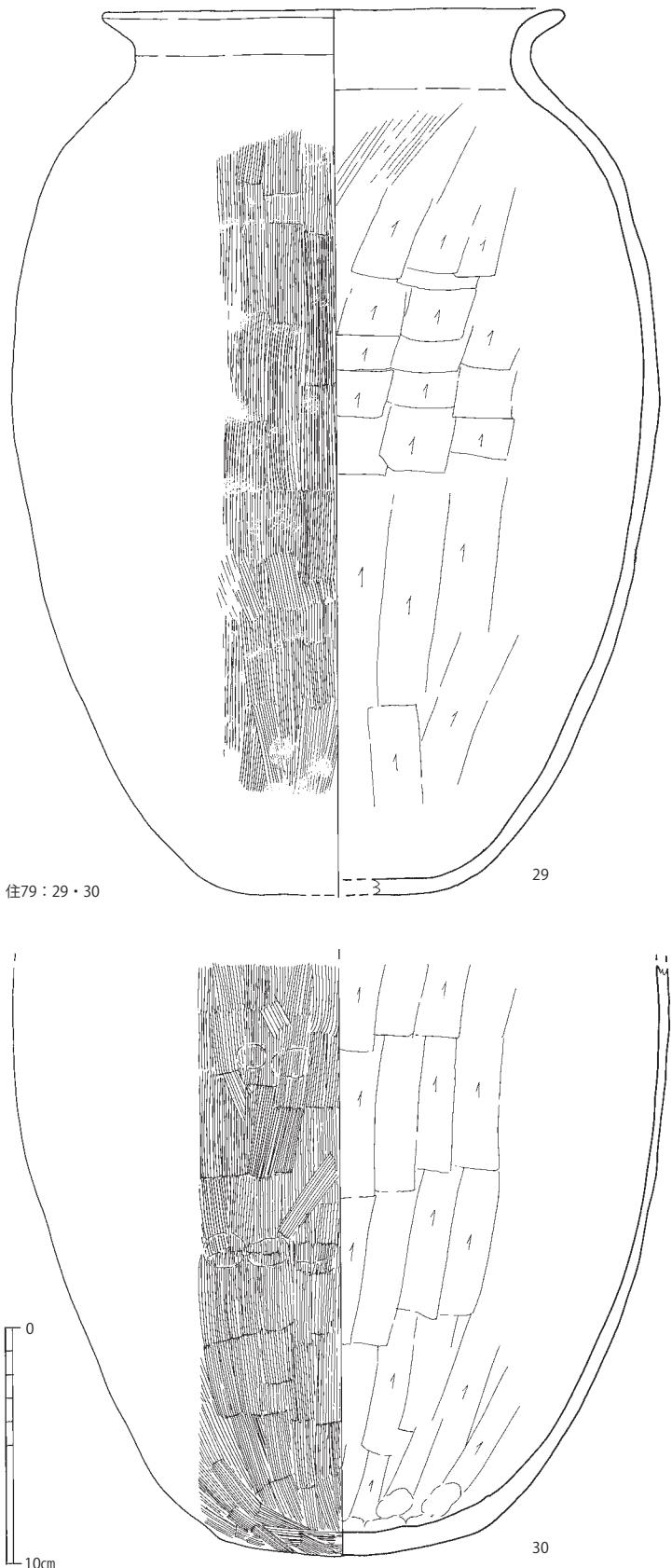
第92図 77～79号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第 93 図 77～79 号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

の字状になる。長さ 0.6～0.7 m を測り、袖の先端部には長さ 0.25 m、幅 0.1 m の河原石を先端が上になるように据え置く。左袖近くには、長さ 0.25 m、幅 0.15 m の石があり、右袖から住居の北西隅にかけては、壁にもたれ掛かるように、土師器甕と甌が置かれている。

第 92 図 15～17 は須恵器壊蓋片である。復元口径 11.4cm、11.4cm、12.0cm を測る。18 と 19 は須恵器壊身片である。18 の口縁端部は打ち欠いている。19 は器高が低く浅い壊で、蓋の可能性もある。15 と 18 の 2 つはセット関係か。20 と 21 は須恵器甕の肩部片と体部片である。外面は平行タタキで、20 はその上にカキ目を施す。内面は青海波文のタタキである。21 は外面に他の須恵器甕片と窯の焼土が付着する。第 93～95 図 22～36 は土師器である。22 は高壊脚部片で、内外面に縦方向のケズリの痕跡が僅かに残る。23 と 24 は甕の口縁部片である。24 の口縁部は浅く外湾し、口頸部はあまり曲がらない。25 は小形甕で、口縁部の外湾は緩く短い。接合はしないが同一個体のため図上で復元する。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。26 と 29 は甕片で、残存率は 4 割以下と 7 割以上である。いずれも体部中位で最大径を測るが、29 の方がより体部が張らず、他と比べて器高は 37.6cm と長い。30 は底部片のみであるが、体部は張らない形状から 29 に近いか。25 と 26 の底部は僅かに丸みを帯びる。復元口径 14.3



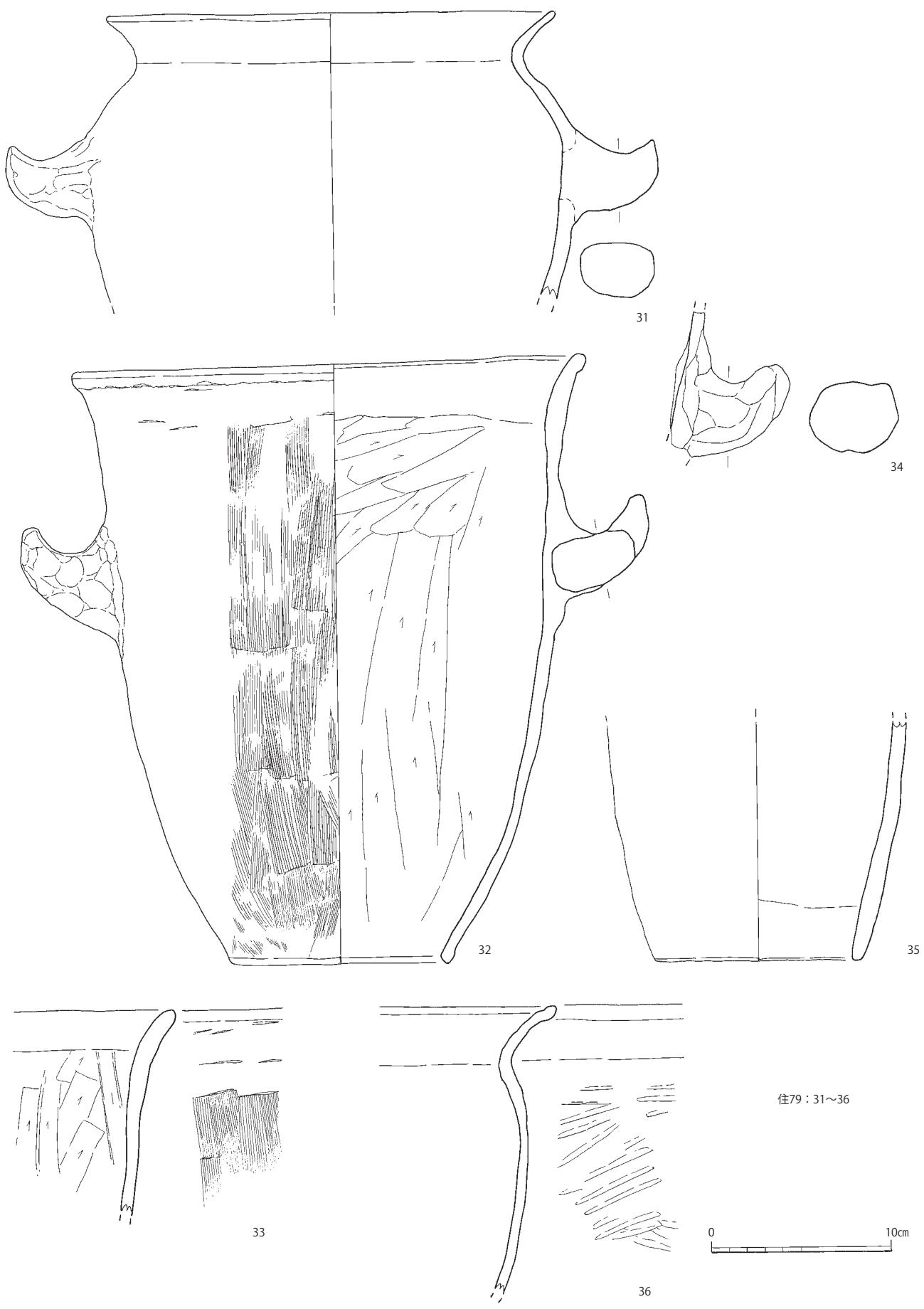
第 94 図 77～79 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/ 3)

80 号竪穴住居跡 (第 96 図 図版 36・45)

4 号竪穴住居跡の北東側に位置する。周辺の遺構密度を確認するトレンチを入れたため、南西隅は掘りすぎて欠損する。形状は長方形で、南北 5.2 m × 東西 4.7 m、深さ 0.2 m 以下を測る。カマドは検出していないが、主柱穴は少し柱列がずれるが、4 基検出する。径 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。

cm、19.3cm、19.6cm を測る。27 と 28 は土師器甕の口縁部片である。口縁部はゆるやかに外湾し、内面に薄い稜が付く。復元口径 20.5cm、20.8cm を測る。31 は把手付甕片である。口縁部は「く」字に外湾し、体部中央で最大径を測る鉢のような形状である。体部下半は欠損するが、復元口径 25.0cm を測る。32～35 は甕である。32 は所々欠損するが 8 割以上残存する甕で、底部中央は径 11.0cm の孔がある。調整は外面に細かい刷毛目、内面にケズリを施す。把手は指押さえの痕跡が明瞭に残る。口径 29.5cm を測る。33 は僅かに外湾する口縁部片である。34 は把手で先端部は尖らないが、持ち手部分は明瞭に凹む。35 は底部片で、上部はあまり開かない。36 は鉢状になる把手付甕片か。口縁部は外反し、全体的に薄手に作られる。内面の調整は摩滅するが、外面はタタキを施す。27 はカマド内、25、26、32 はカマド右袖横の西壁横で出土する。

77 号～79 号竪穴住居跡の時期は、出土器から 6 世紀末 7 世紀初頭、7 世紀後半～末、8 世紀前半の 3 時期に分けられる。77 号竪穴住居跡からは、7 世紀後半の須恵器壊蓋片が出土するが、78 号・79 号竪穴住居跡に切られることを考慮すると 6 世紀末～7 世紀初頭の可能性が高い。79 号竪穴住居跡は、出土土師器から 7 世紀後半頃か。上記 2 つの竪穴住居跡を切る 78 号竪穴住居跡からは 8 世紀中頃の土器が出土する。



第95図 77～79号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/3)

第96図1～3は須恵器坏身片で、外面のヘラケズリは体部下半から始まる。2は外面底部にヘラ記号がある。復元口径10.2cm、10.2cm、13.6cmを測る。4は須恵器甕の体部片である。調整は外面は格子目文のタタキ後にカキ目、内面は青海波文の当て具痕である。5は土師器高坏の坏部片で、内外面の調整は摩滅する。復元口径13.6cmを測る。6は土師器甕の口縁部片で、ゆるやかに外反する。

住居跡の時期は、出土した土器から6世紀末～7世紀初頭頃か。

81号竪穴住居跡（第97図 図版36）

80号竪穴住居跡の北側に位置し、北側は調査区外のため検出できていない。形状は長方形で南北3.7m×東西3.4m、深さ0.2m以下を測る。カマドや主柱穴は検出していない。

第97図1は須恵器甕の口縁部片か。胎土は2mm程度の砂粒を多く含み粗い。色調は黒灰色を呈す。2は土師器坏片で、器高は2.1cmと低い。底部はケズリで丸みを帯びる、体部下位で折れ曲がる。3は土師器高坏脚部片で、外面にはケズリの痕跡がある。

住居跡の時期は、出土土器から7世紀後半以降か。

82号竪穴住居跡（第97図 図版36）

南調査区南壁の西寄りで検出した住居跡である。標高15.6mから下には、土層4層が堆積し、その下の標高14.7mあたりで住居跡を検出する。形状は不明で、南北0.7m以上×東西3.2m、深さ0.3～0.4m以上を測る。北東隅には暗褐色土が堆積したピット状の掘り込みがある。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴は検出されていない。

カマドは突出型で、住居外に半長円状に掘られ、長さ0.55m、幅0.55mを測る。奥壁側は段が付くが、煙道は検出していない。袖は右袖のみ残存し、長さ0.3mを測る。

出土土器は小片のため図化できないが、住居跡の時期は突出型カマドから7世紀後半以降か。

83号竪穴住居跡（第97図 図版36）

南調査区南壁中央で、82号竪穴住居跡の東側に位置する住居跡である。形状は不明だが、南北0.8m以上×東西4.0m、深さ0.2mを測る。土層は暗褐色土に地山である黄橙色土の混入具合で2層に分層できるので、下層は貼床か。中央付近には、住居を切るピット状の掘り込みがあり、その埋土からは炭や焼土が混入するので、ここにカマドがあった可能性がある。

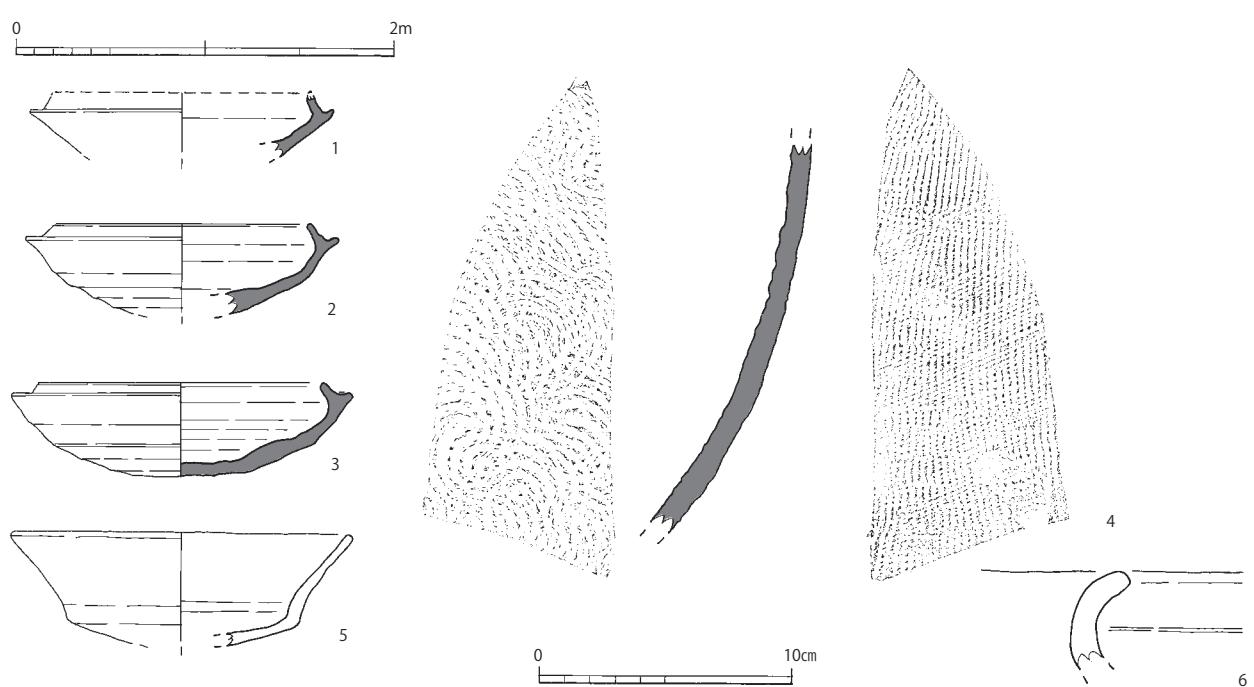
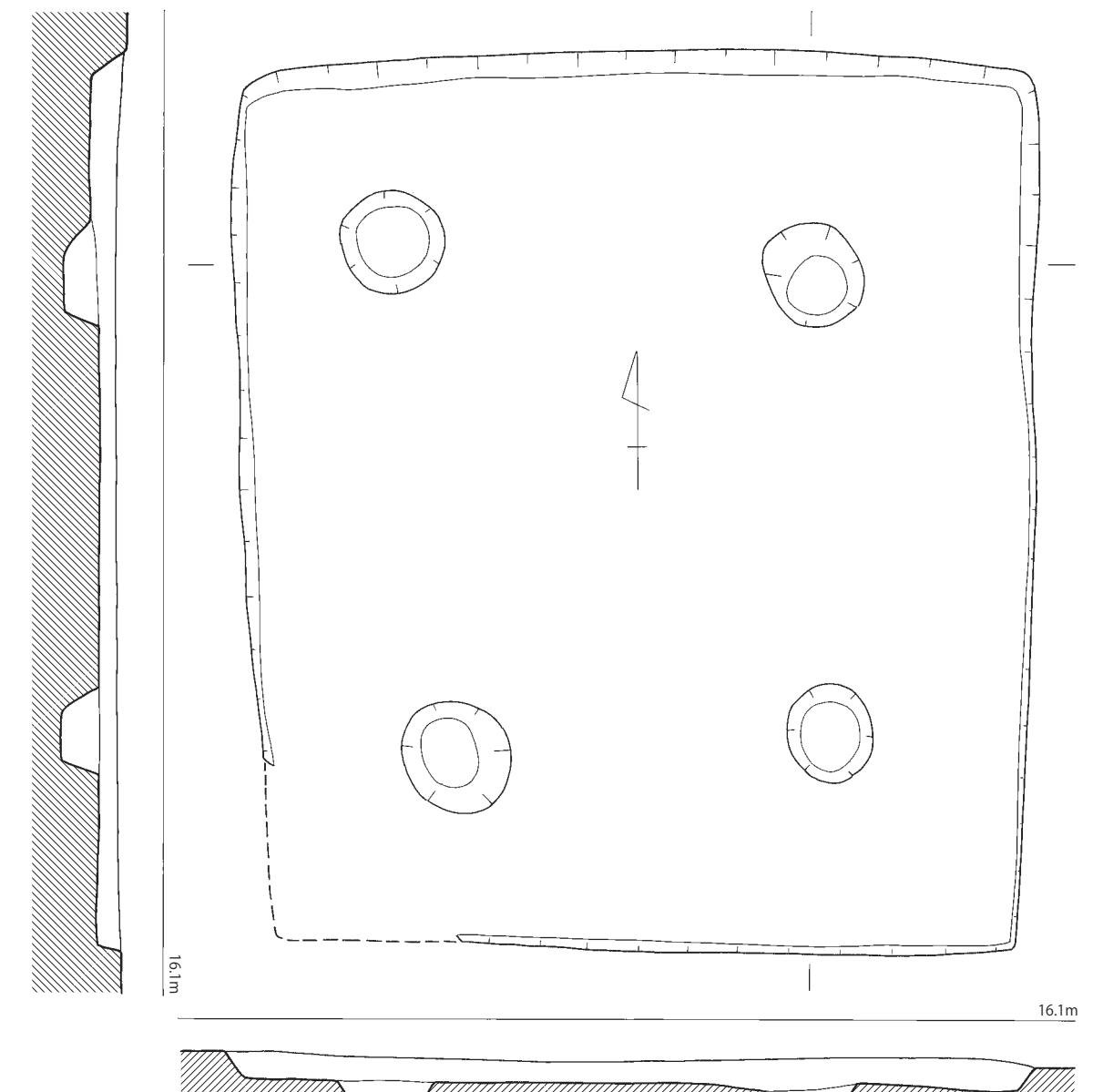
出土土器は小片のため図化できないため、住居跡の時期は不明である。

84号竪穴住居跡（第98・100図 図版37）

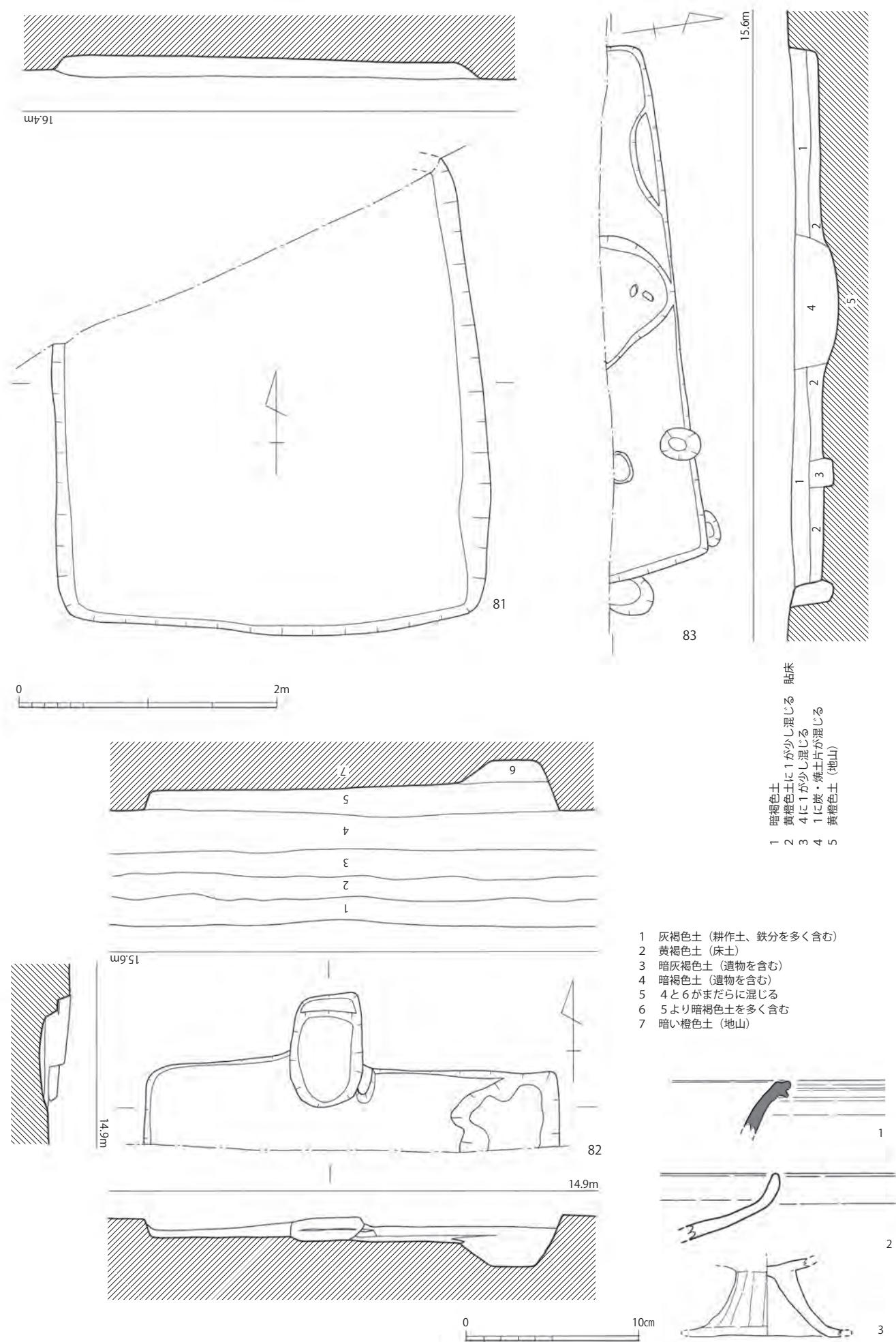
67号・68号竪穴住居跡の下から検出した住居跡である。形状は正方形で、南北3.4～3.65m×東西3.4～3.55m、深さ0.1mを測る。カマドは北壁中央に設置し、主柱穴は4基検出する。主柱穴は径0.4m以下で、柱痕跡部分で径0.2m、深さ0.2mを測る。

カマドは突出型で、住居外に長さ0.25m、幅0.4mに掘られる。奥壁側には段があり、そこからさらに0.85m伸びる煙道部分が付く。焚口側は半円状に0.1m以下掘り下がり、その底面中央には0.15～0.2mの被熱痕跡を確認する。カマドや煙道には、暗茶褐色土が堆積する。カマドの袖は検出していない。

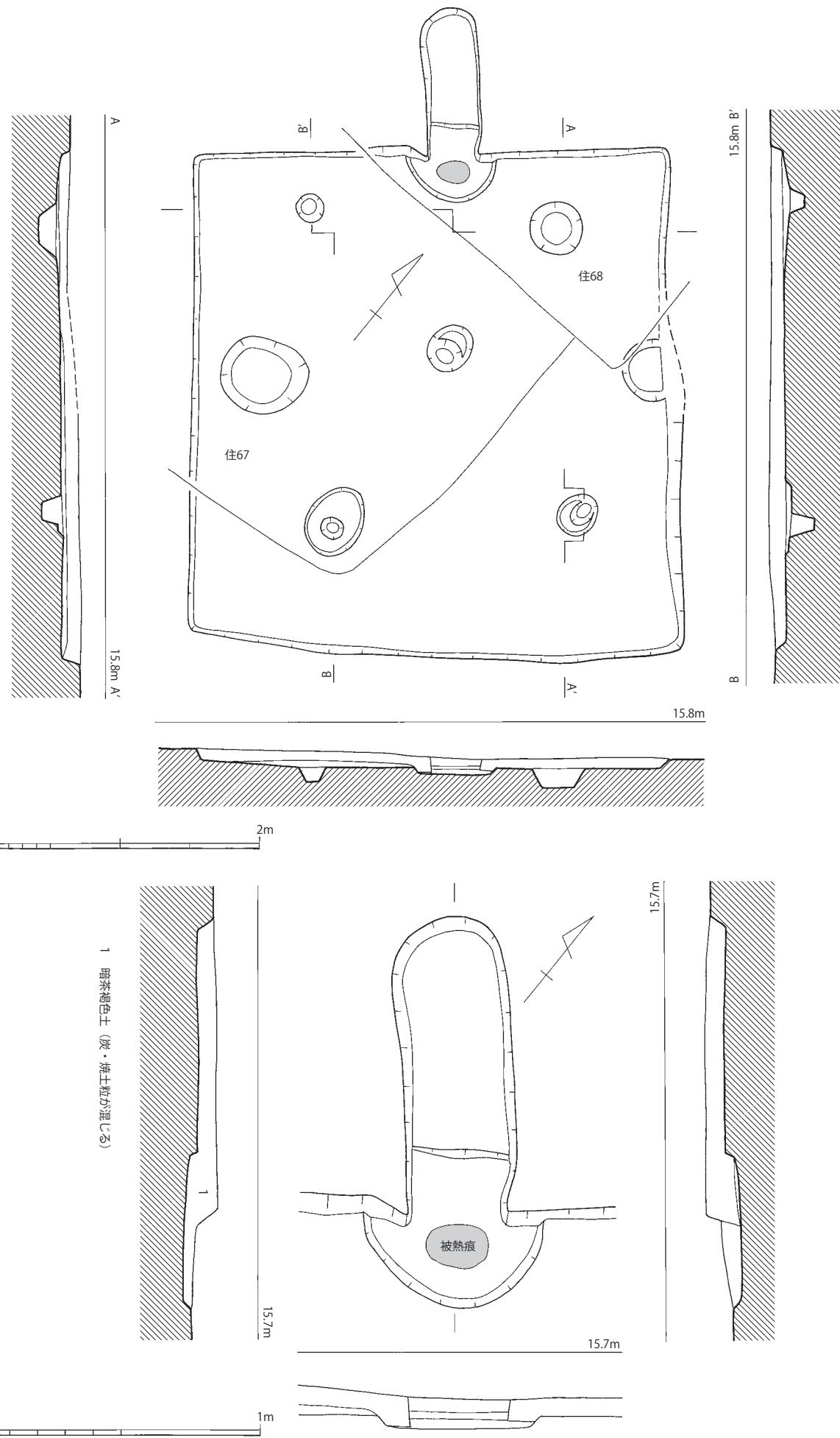
第100図1は土師器小形甕片である。口縁部は外湾し、内面に薄い稜が付く。体部は僅かに丸みがあ



第96図 80号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/40、1/3)



第97図 81～83号竪穴住居跡および81号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)



第98図 84号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)

る。外面の調整は摩滅するが、刷毛目工具の小口痕が所々明瞭に残る。内面はケズリを施す。復元口径14.4cmを測る。上面で検出した68号竪穴住居跡の混入品か。

住居跡の時期は、8世紀前半～中頃の67・68号竪穴住居跡に切られるので、それ以前と考えられ、2つの住居跡からは6世紀末～7世紀初めの遺物もあったので、その時期になるのか。

85号竪穴住居跡（第99・100図 図版37）

80号竪穴住居跡の南側に位置し、調査区際で検出した住居跡である。調査区際で検出したため全容を把握できず形状は不明である。南北1.9m以上×東西3.0m以上、深さ0.3mを測る。カマドは北壁に設置し、主柱穴は検出していない。

カマドは突出型で、住居外に隅丸方形状に掘られ、長さ0.5m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。カマド内の壁面には被熱痕跡が所々に残る。焚口付近の底面には炭が0.6～0.7mの幅で広がり、その中央には0.15mの長円形形状の被熱痕跡がある。カマドの底面は奥壁に向かって下がり、その奥壁中央には煙道が作られる。煙道は煙道口に向かって緩やかに上がり、長さ0.6m、幅0.2mを測る。

第100図2～15は須恵器である。2と3は壺蓋の口縁部片で、端部は嘴状になる。4と5は壺身片である。6～12は高台付壺片である。高台の形状は逆台形状であるが、6～9の高台端部は外へ伸びる。13は壺などの口縁部片で、端部は尖る。14は壺の頸部片で、内外面に絞りの痕跡がある。15は壺の体部及び底部片で、肩部は角張る。この2点は同一個体である。16～33は土師器である。16～19は壺片である。16は内傾する口縁部をもつ。17の壺片は口縁端部が厚くなる。18と19の器高は低い皿状になる壺である。復元口径12.4cm、12.8cm、13.4cm、15.0cmを測る。20～30は甕片である。24・26・28の口縁部は外反し、それ以外の口縁部はゆるやかに外湾する。特に24は他の甕片と異なり、口縁端部は厚く丸みをもち、内面には稜が付く。復元口径11.8cm、14.0cm、16.0cm、17.8cm、25.6cmを測る。31は鉢の口縁部片で、他の口縁部と比べ厚手で、口縁部は強く外反する。いずれの調整も外面に刷毛目、内面にケズリを施す。32と33は甕の把手片で、32は体部との接合部分に刷毛目が残る。鉄釘も出土する。

住居跡の時期は、8世紀前半～中頃の土器が多く出土しているので、8世紀中頃か。

86号竪穴住居跡（第101図）

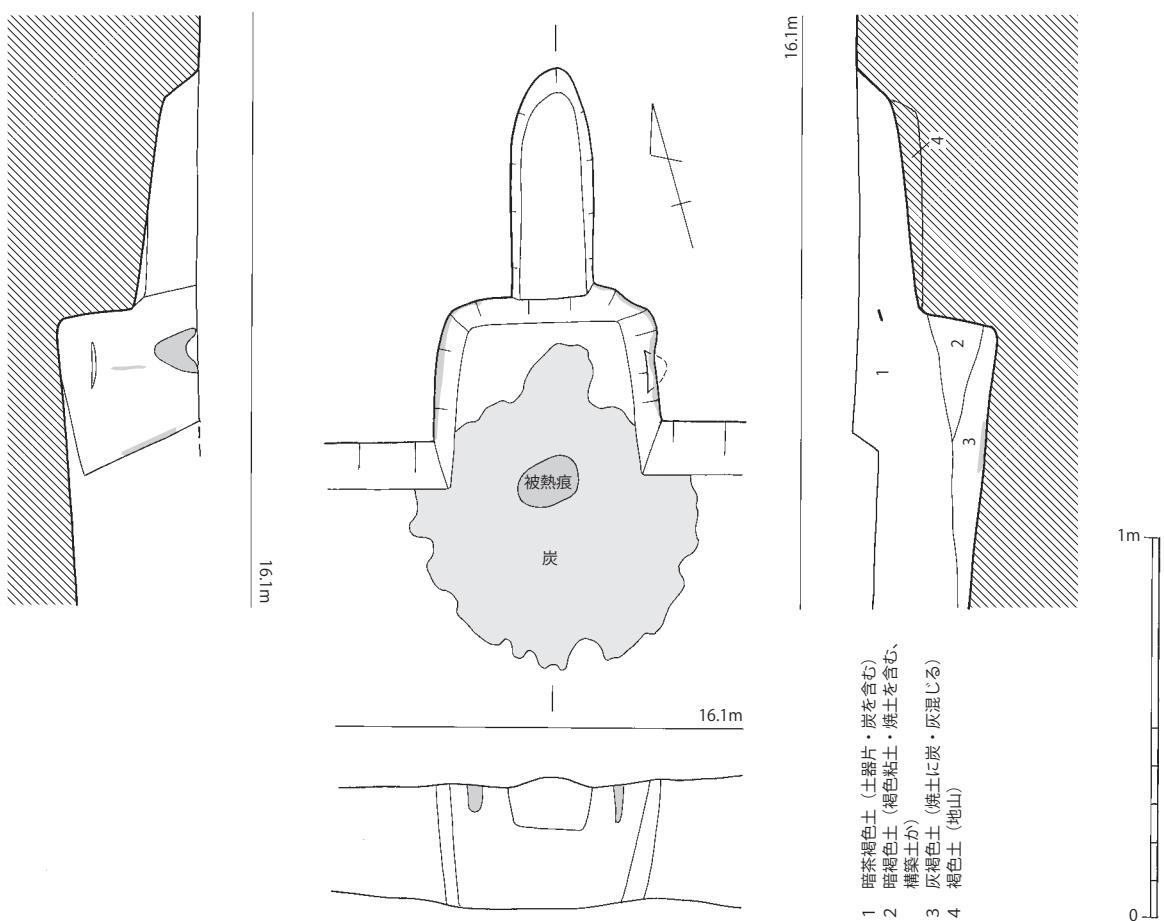
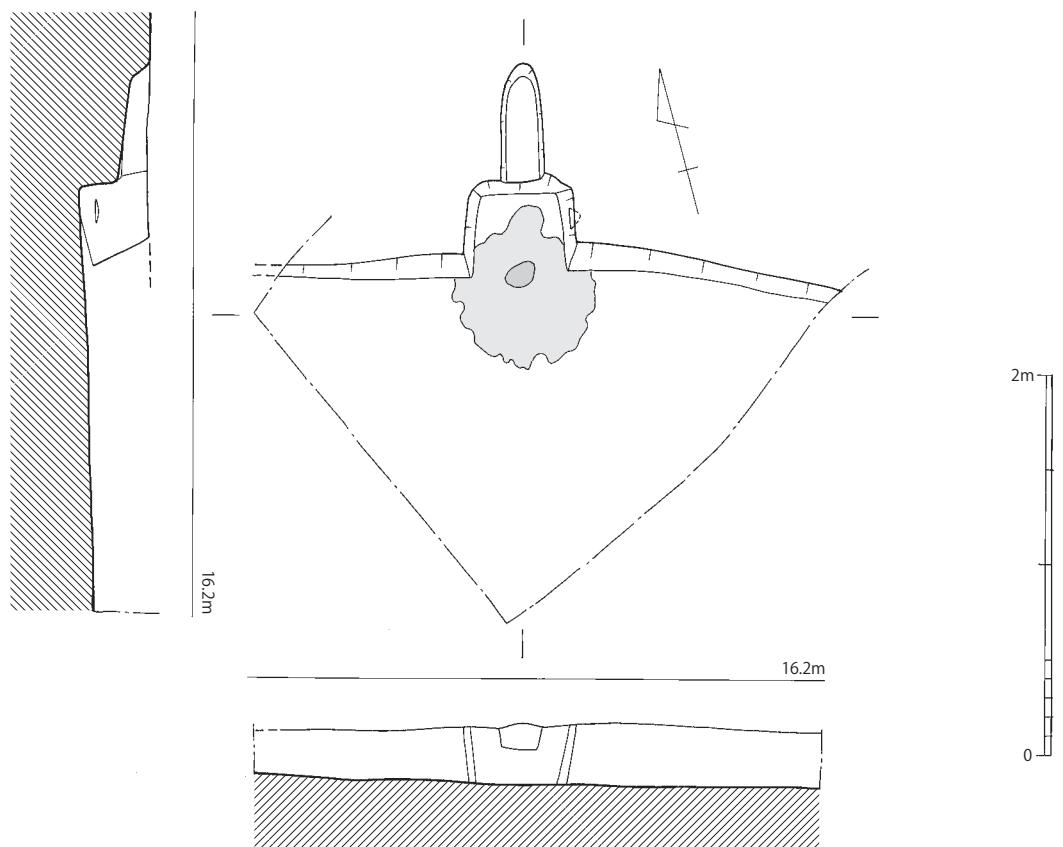
19号・21号竪穴住居跡の南側に位置し、21号竪穴住居跡を切る。北西側の一部は検出できずに掘り飛ばしている。形状は長方形状で、長さ南北3.0m×東西2.55mを測る。カマドはなく、明確な主柱穴は検出してないが、北側には柱穴を2つ検出するので、これが住居に関連するかもしれない。なお、住居跡の東側では南北方向のラインをもう一本検出しているので、別の住居跡の壁の可能性がある。

出土土器が小片のため図化できないが、住居跡の時期は8世紀前半の21号竪穴住居跡に切られるので、それ以前か。

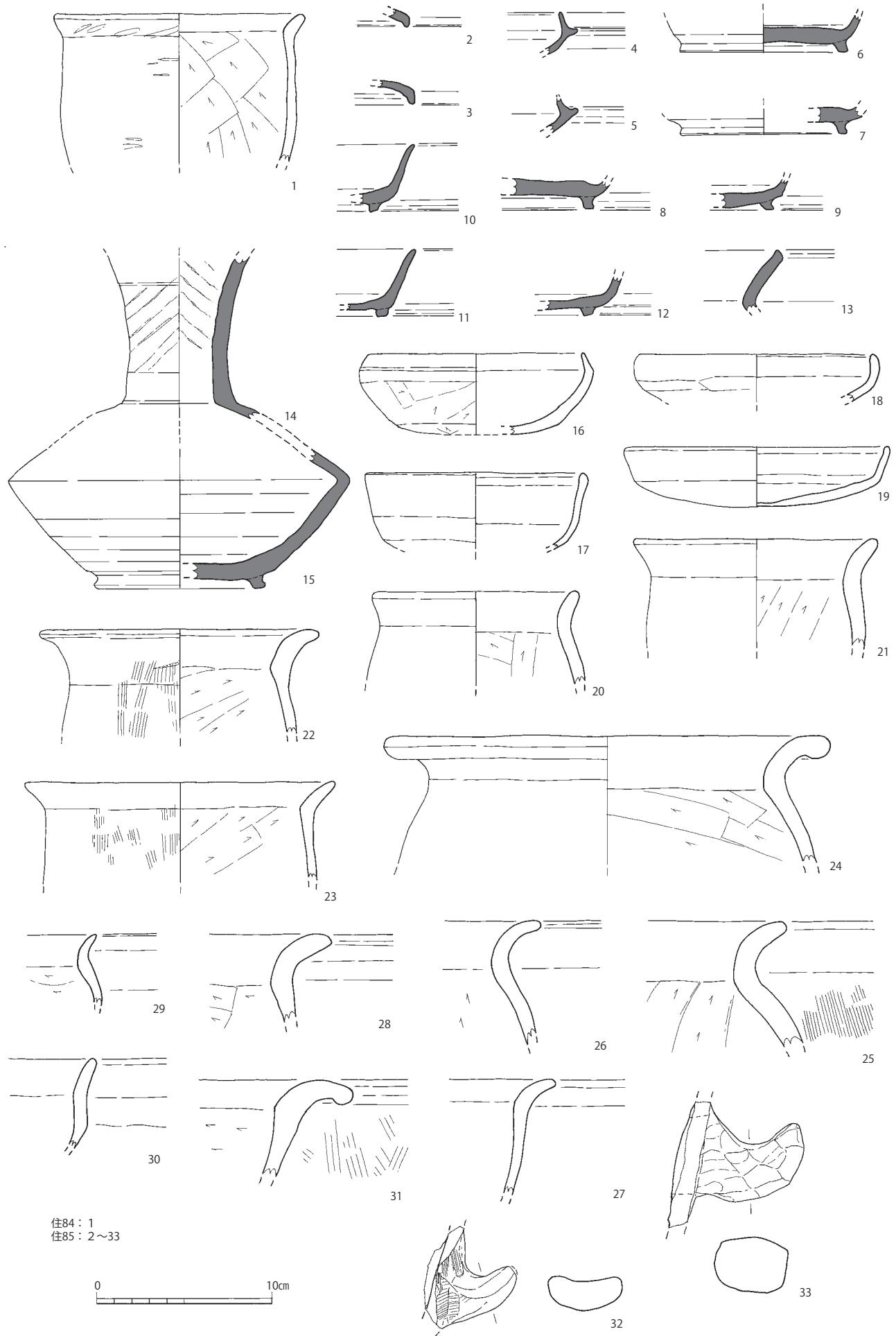
87号竪穴住居跡（第101・102図）

31号竪穴住居跡の北側に位置し、形状はほ方形状で南北2.3m×東西2.5mを測る。これもカマドはないが、住居に関わるいくつかの柱穴を検出する。南西隅には約0.3m程の石が置かれていたが、カマドなどは検出できなかった。

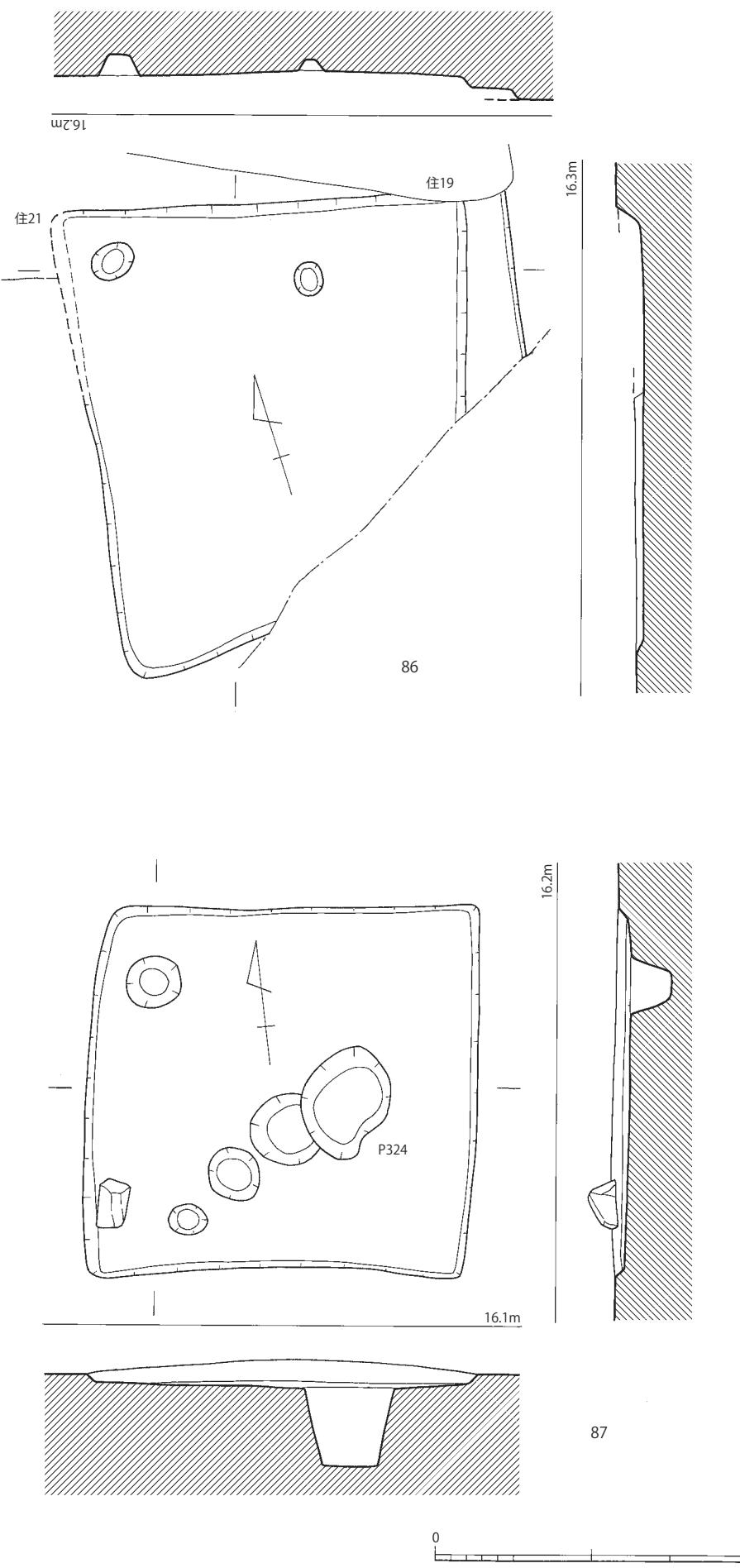
第102図1は須恵器壺蓋片で、端部は丸みのある嘴状である。2は撮みを欠損する須恵器壺蓋片で、



第99図 85号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/40、1/20)



第 100 図 84・85 号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/ 3)



第 101 図 86・87 号竪穴住居跡実測図 (1/40)

外面には 3 本線のヘラ記号が残る。3 は須恵器高台付壙片である。4～6 は土師器甕片で、口縁部がゆるやかに外湾し、内面に薄い稜が付く。調整は外面は刷毛目、内面はケズリである。6 は復元口径は 15.0cm を測る。

住居跡の時期は出土土器から 8 世紀中頃か。

88・91 号竪穴住居跡（第 102 図）

88 号・91 号竪穴住居跡は 9 号竪穴住居跡の西側に位置し、91 号竪穴住居跡が 88 号竪穴住居跡を切る。88 号竪穴住居跡は北東向きに建てられた住居跡で、形状は方形で南北 2.6 m × 東西 2.5 m を測る。深さ 0.1 m と浅いため、東壁側は掘りすぎて壁を飛ばしている。中央付近は貼床が施されているため、長さ 2.0 m 前後の方形状に一段下がる。カマドは検出していないが、主柱穴と思われる 2 基の柱穴を検出する。柱穴は、円形で径 0.4 m、深さ 0.35 m を測る。

第 102 図 7 は土師器壙片である。外面の調整は摩滅するが、内面はナデである。

91 号竪穴住居跡は北側

の 89 号竪穴住居跡に大部分を切られる。東壁の一部は掘りすぎたため欠失している。これもカマドは検出していないが、主柱穴と思われる 2 基の柱穴を検出する。柱穴は長円形で、径 0.35 ~ 0.6 m、深さ 0.4 m を測る。

第 102 図 11 は土師器甌片である。外面の調整は刷毛目で、内面はケズリである。

88 号竪穴住居跡を切る 91 号竪穴住居跡からは時期を示す 7 世紀後半の土器が 1 点出土する。88・91 号竪穴住居跡は 7 世紀後半とそれ以前か。

89 号竪穴住居跡（第 103 図）

1 号竪穴住居跡の南側に位置する。形状は方形で長さ 2.5 m 前後、深さ 0.15 m 以下を測る。カマドは検出していないが、住居内中央や南寄りに柱穴を 2 基検出する。これらの柱穴の形状は円形で、径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m を測る。住居の西壁壁際にも柱穴を検出しているので、これも関連があるのかも知れない。住居内の西側は溝状に凹んでいるが、貼床は確認できなかった。

図化できる出土土器がないため、住居跡の時期は不明である。

90 号竪穴住居跡（第 102・103 図）

31 号竪穴住居跡の北側に位置し、その住居跡を切るが、東側の 10 号・14 号竪穴住居跡には切られる。ここも住居と地山との検出が困難で、東壁や南壁の一部の検出を誤認していて、住居の形状が乱れている。形状はほぼ方形状で、南北 3.0 m × 東西 2.7 m、深さ 0.1 m 以下を測る。住居内の西側は貼床を施しているため、さらに床面から深さ 0.15 m 程度下がる。カマドは検出していないが、住居内中央には 2 基の柱穴を検出する。柱穴の形状は円形で、径 0.45 ~ 0.6 m、深さ 0.5 ~ 0.6 m を測る。

第 102 図 8 は須恵器高台付坏の口縁部片である。9 は須恵器壺などの体部片である。10 は土師器甌の把手片である。把手部分は削って形を造りだし、その後ナデる。

出土した須恵器高台付坏片から、住居跡の時期は 8 世紀以降か。

4. 土坑

1 号土坑（第 104 図 図版 38）

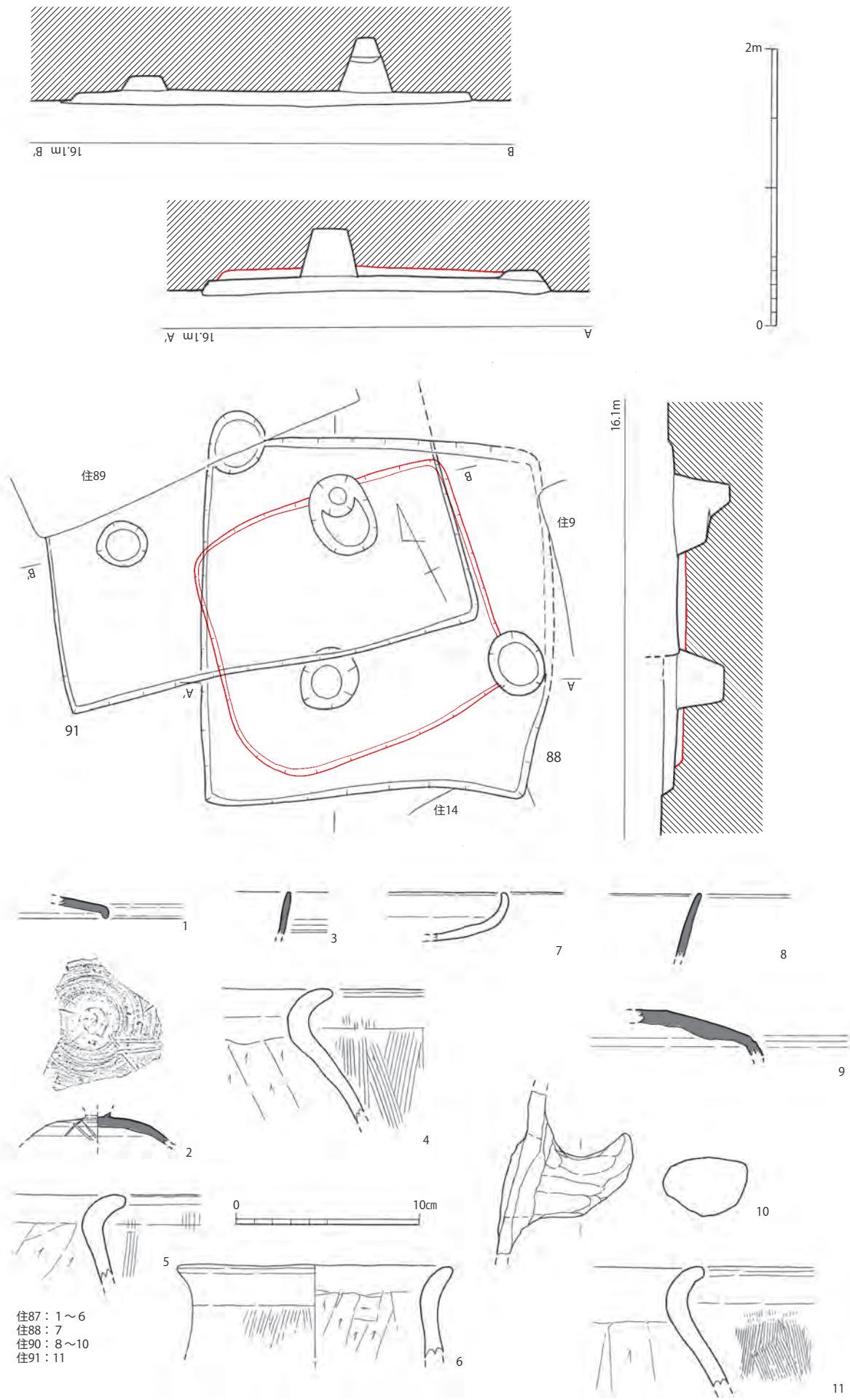
16 号竪穴住居跡の北東隅に位置し、それを切る土坑である。長さ 1.8 m、幅 1.25 m、深さ 0.55 m を測る。東側には途中段が付くが、断面の形状は逆台形状である。埋土は暗褐色土で、土器片を少量含むが、図化できる土器はない。

土坑の時期は、時期を示す土器はないが、16 号竪穴住居跡より新しいので、8 世紀中頃以降か。

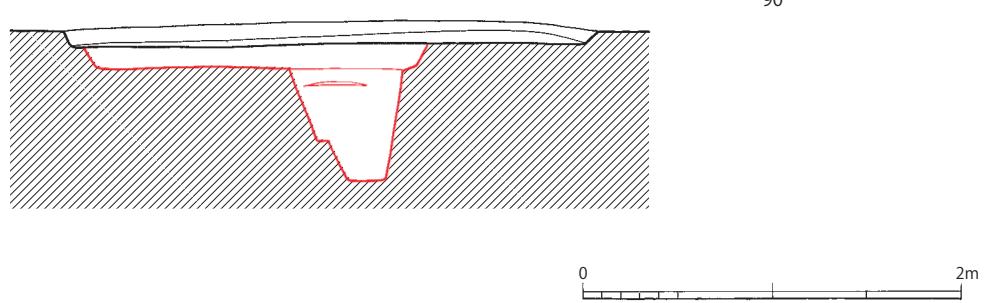
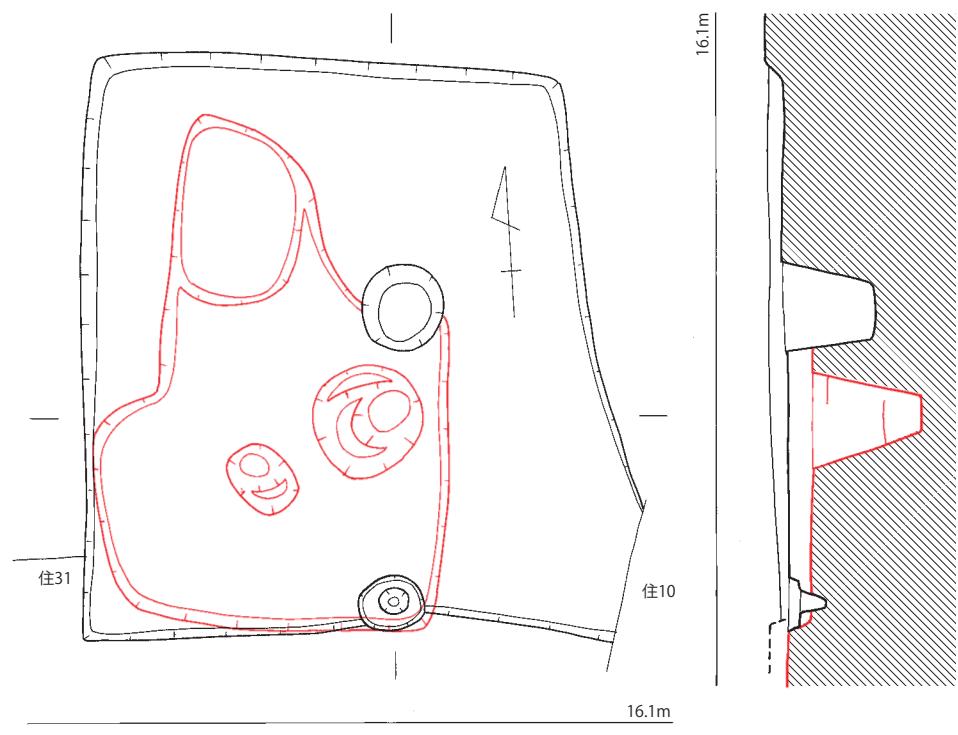
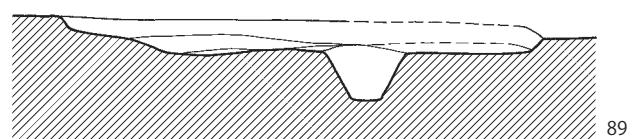
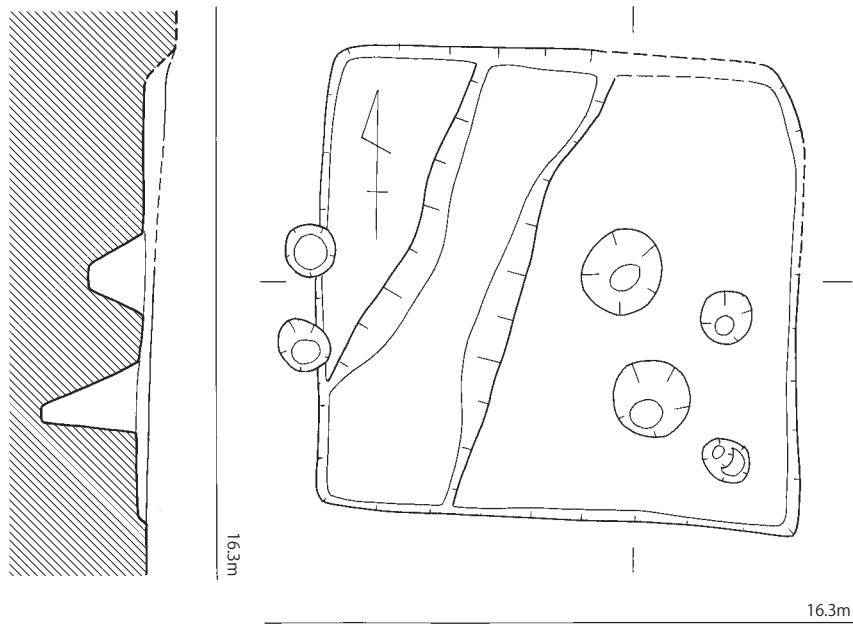
2 号土坑（第 104・106 図 図版 14）

20 号竪穴住居跡の西側に位置する土坑である。台形状に 0.1 m 下げると、さらに不整形形状の掘り方に変わる。不整形の掘り方は長さ 1.8 m、幅 1.6 m、深さ 0.4 m になる。断面の形状はすり鉢状で、東側は急斜面だが、西側は緩やかに立ち上がる。

第 106 図 1 は須恵器坏蓋片で、口縁はあまり立たず、かえりと平行になる。ヘラケズリの範囲は外面天井部のみに収まる。復元口径 10.6cm を測る。2 は須恵器坏蓋の口縁部片である。3 は須恵器高坏脚端部片で、端部に向かって深く内湾する。4 は土師器坏片である。5 は土師器高坏脚部片で、外面にはケ

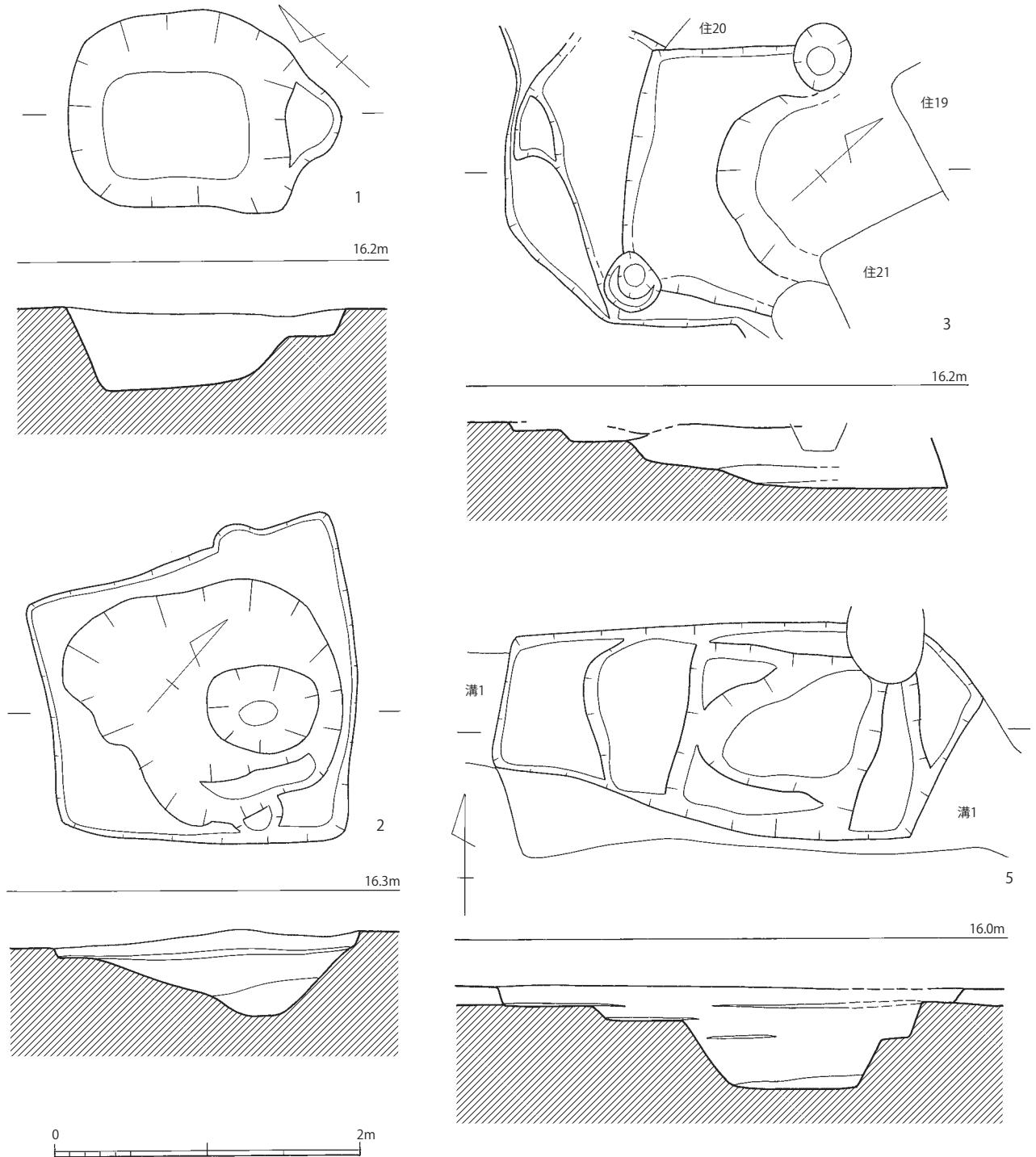


第102図 88・91号竪穴住居跡および87・88・90・91号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/40、1/3)



0 2m

第103図 89・90号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第 104 図 1~3・5 号土坑実測図 (1/40)

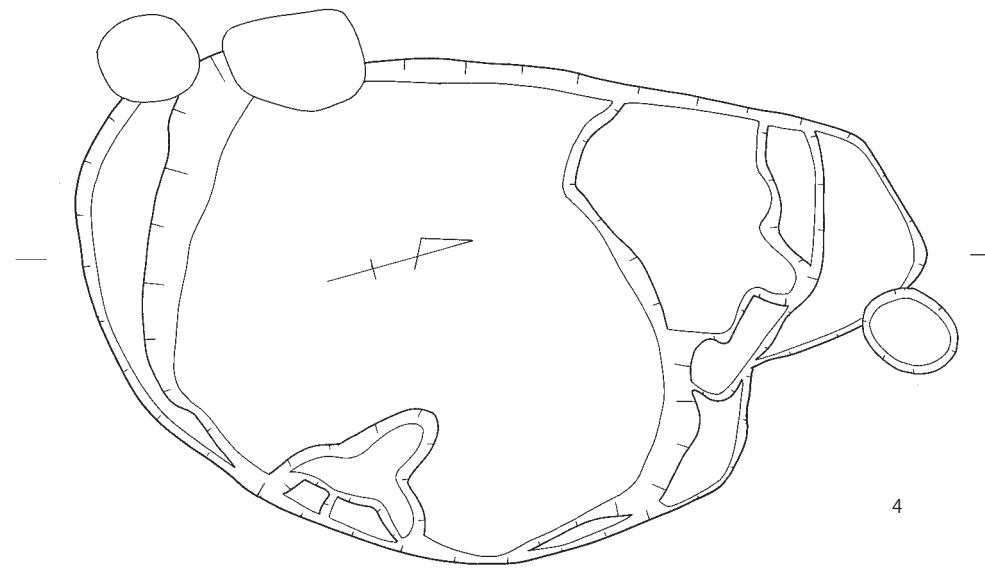
ズリの痕跡が見える。

土坑の時期は、7世紀後半と8世紀中～後半の土器が出土するので、8世紀中～後半頃か。

3号土坑（第 104・106 図 図版 14）

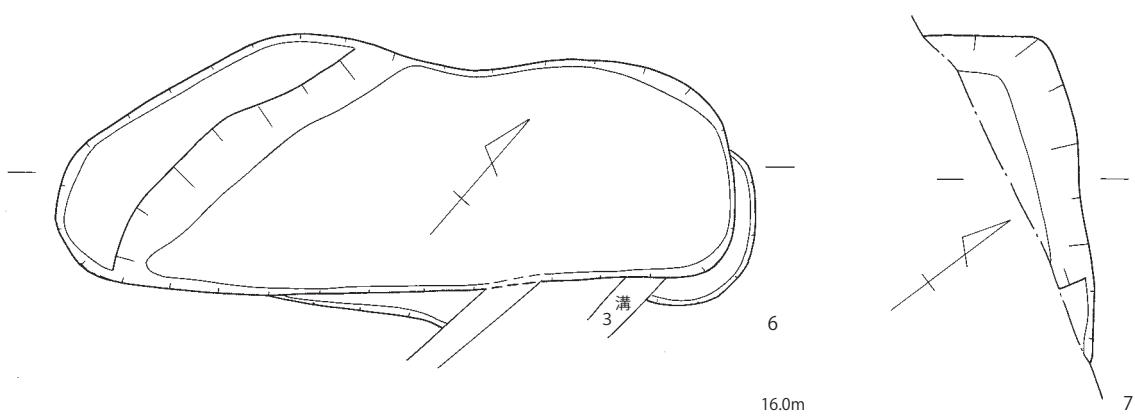
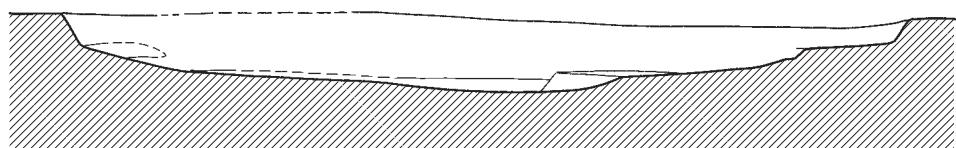
2号土坑の東側に位置し、20号竪穴住居跡を切る。20号竪穴住居内にあることから、検出が困難であったため、掘り方は不鮮明である。形状は不整形で、長さ 2.8 m、幅 1.8 m、深さ 0.45 m を測るが、2段下で確認できる方形部分は、長さ 2.0 m と 2号土坑の大きさに近い。さらにその下には径 1.2 m の半円形の掘り方が検出できる。

第 106 図 6 は須恵器高台付壺の底部片か。7 は土師器甕の口縁部片か。



4

16.2m

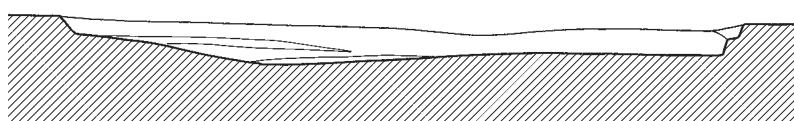


3

6

7

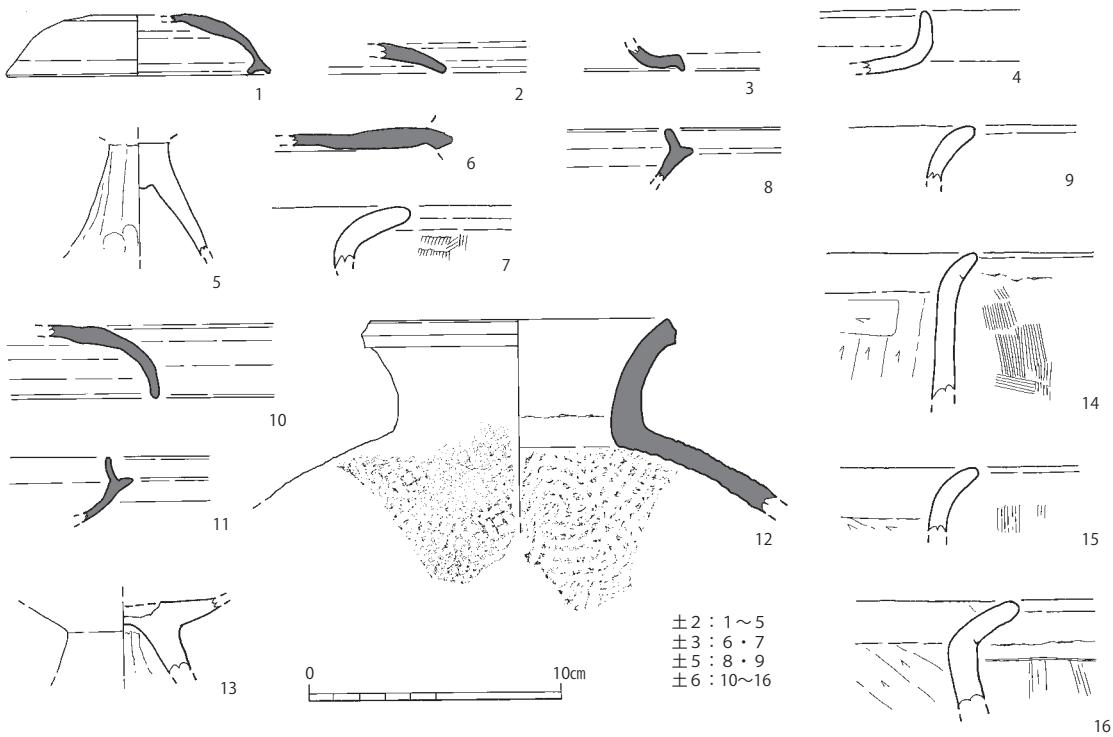
16.0m



16.3m



第105図 4・6・7号土坑実測図 (1/40)



第106図 2・3・5・6号土坑出土土器実測図 (1/3)

土坑の時期は、出土土器から2号土坑と同じ時期か。

4号土坑（第105図 図版38）

調査区中央の13号竪穴住居跡と36号竪穴住居跡の間に位置し、一部ピットに切られる。形状は少し崩れた卵形状で、長さ4.5m、幅2.65m、深さ0.35mを測る。埋土は暗褐色土が堆積していたので、住居跡かと思われたが、円形状になったので土坑と判断した。

出土土器は小片のため、図化できない。

5号土坑（第104・106図 図版38）

60号竪穴住居跡の西側に位置し、1号溝に切られる土坑である。形状は長方形で、長さ3.2m、幅1.5m、深さ0.65mを測る。遺構面から0.1mの深さは1号溝であり、その下の2.15mが本来の5号土坑の姿である。東西両方向に段を持つが、断面の形状は逆台形状を呈する。

第106図8は須恵器坏身片である。9は土師器甕の口縁部片である。

土坑の時期は、出土土器から7世紀前半頃か。

6号土坑（第105・106図 図版39）

51号竪穴住居跡の南側に位置し、3号溝を切る。形状は隅丸長方形で、長さ3.55m、幅1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は黄色土と暗褐色土が混じり、中からは土器が少量出土する。

第106図10は須恵器坏蓋片で、外面天井部のみヘラケズリを行う。11は須恵器坏身片である。12は須恵器甕片である。口頸部はナデであるが、肩部以下タタキを施す。外面に格子目文、内面に青海波文を施す。復元口径13.0cmを測る。13は土師器高坏脚部片で、内外面ともに摩滅する。14～16は土師器甕の口縁部片である。16の口縁部は強く外湾する。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。

土坑の時期は、出土土器から6世紀末～7世紀初頭頃か。

7号土坑（第105図）

調査区南壁際で検出した遺構のため、長さ1.7m、幅0.4mのみしか掘ることができず、全容を把握できていない。他の住居跡や溝に比べ、深さが0.95mと深いことから土坑と判断した。埋土は暗褐色土が堆積する。出土土器は小片のため、図化できない。

5. 溝

1号溝（第107・108図 図版40・42・45）

調査区南側に位置する。東側は65号竪穴住居跡、西側は4号溝に切られるが、1号掘立柱建物跡の柱穴を切る。溝は東西方向に延びるが、西側は北西へ向きを変えている。長さ約29m、深さ0.3m以下を測る。断面の形状は北側に段を持ち、土層は暗褐色土に地山である橙色土の混入具合で、2層に分層できる。

第108図1は須恵器坏蓋片である。天井部にはヘラ記号「卅」や「井」のようなものが描かれる。2と3は須恵器坏蓋の口縁部片である。4と5は須恵器坏身片である。6は土師器高坏脚部片である。7～9は土師器甕片である。7は外面に沈線が2条巡る。口頸部を欠損するが、甕の肩部片か。8は小型甕で、口縁部は緩やかに外湾し、内面には僅かに稜が付く。9は緩やかに外湾する口縁になる。復元口径13.5cm、21.0cmを測る。10は土師器甕の把手片である。

出土した土器から溝の時期は6世紀末～7世紀初め頃か。

2号溝（第107・108図 図版40）

1号溝の南側に位置し、東側を暗渠に切られ、西側は79号竪穴住居跡を切る。東西方向で長さ約4m、深さは0.2m以下と浅い。断面の形状はすり鉢状で、土層は暗褐色土に地山である黄橙色土の混入具合で、2層に分層できる。

第108図11は土師器甕の口縁部片で、緩やかに外湾する口縁である。

出土した土器から溝の時期は、7世紀後半以降か。

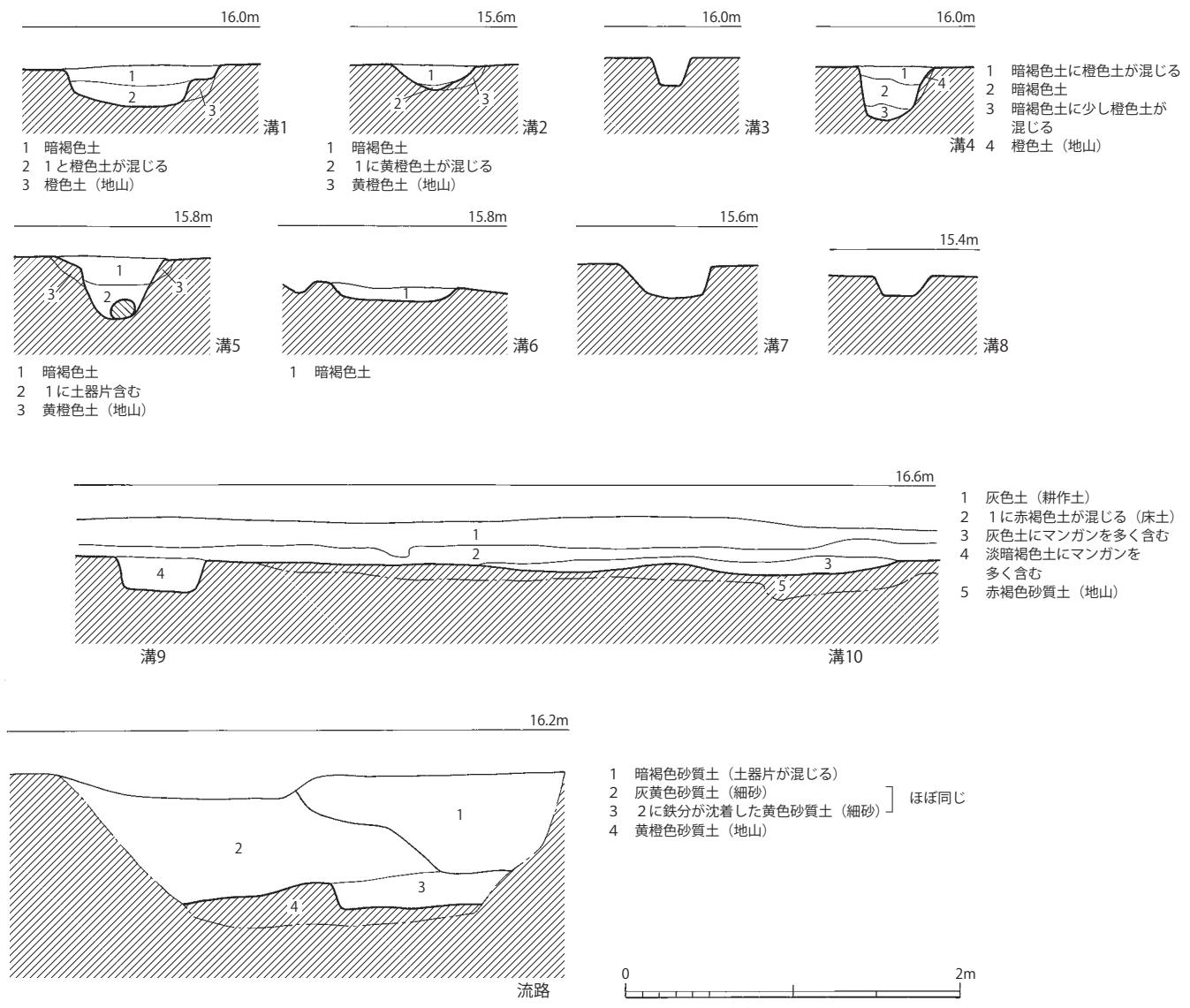
3号溝（第107図）

調査区中央西寄りに位置し、北を6号土坑、南を64号竪穴住居跡に切られる。長さ約2m、幅0.3m、深さは0.2m以下と浅い。断面の形状は逆台形状で、土層は暗褐色土の1層である。出土土器は小片のみのため、図化できなかったので、時期は不明である。

4号溝（第107・108図 図版40・42）

72号竪穴住居跡の南側に位置し、72号竪穴住居跡と1号溝を切る。北北西方向、長さ12.5m、深さ0.3mを測る。断面の形状は、西側は急傾斜であるが、東側は膨らみながら落ちる。土層は暗褐色土に地山である橙色土の混入具合で、3層に分層できる。

第108図12は須恵器坏蓋の撮み片で、僅かに中央が尖り、宝珠形になる。13は須恵器高台付坏の高台部片である。14は須恵器円面硯の硯部片で圈台の下半部を欠失する。大部分が欠損し硯部の全容は不明だが、厚手な作りで、外提の下に突帶が1条巡る。さらに、その下には、長方形の透かしを有することが残存状況から伺える。14号竪穴住居跡出土の円面硯とは別固体である。15は土師器高坏脚部片で、



第 107 図 1～10 号溝、流路断面図・土層実測図 (1/40)

外面にケズリの痕跡が見える。16 は土師器甕の口縁部片である。

溝の時期は出土土器から 8 世紀中頃か。

5 号溝 (第 107・108 図 図版 40・42)

南北の調査区にまたがって検出し、北側調査区では 73 号竪穴住居跡と 74・75 号竪穴住居跡の間に位置する。73 号竪穴住居跡を一部切り、北西方向で長さ 5.5 m、深さ 0.4 m 以下を測る。断面の形状は逆台形状で、北側は上層に段を持つ。土層は暗褐色土に地山である黄橙色土の混入具合で、2 層に分層できる。南側の調査区にも同一直線状で、この溝に繋がる溝を長さ 8 m 分検出する。溝は 2 手に別れ、その間は陸橋となる。

第 108 図 17 と 18 は須恵器坏蓋の口縁部片で、端部の形状は 17 はかえり、18 は嘴状になる。19～21 は須恵器高台付坏片である。19 の高台は高く、端部が外へ伸びる。20 と 21 は口縁部片である。22 は須恵器坏片で、底部はヘラ切り後、ナデを施す。

出土した土器は 7 世紀後半～8 世紀中頃になるが、8 世紀前半頃の 73 号竪穴住居跡を切るので、溝の時期は 8 世紀中頃か。

6号溝（第107図）

南側調査区の西側に位置する溝で、東西から南北方向へとL字状に曲がる。幅は隅部分は1.4mと広くなるが、西側は0.6mに狭まる。北壁側では、溝は2手に分かれている。長さ22.5m、深さは0.1m以下と浅い。断面の形状は逆台形状で、溝の埋土は1層のみで、暗褐色土が堆積する。溝の内側には目立った遺構は検出していない。出土土器は小片のため、溝の時期は不明である。

7号溝（第107・108図 図版41・42）

6号溝の東側で検出した溝で、東西方向、長さ約6.2m、深さ0.2mを測る。断面の形状は逆台形状で、暗褐色土が堆積する。

第108図23は須恵器甕の体部片である。調整は外面に格子目文、内面に青海波文のタタキを施す。24は器高3.5cmと深みがある丸底の土師器坏片である。25は土師器甕片で、緩やかに外湾する口縁部である。

出土した土器は7世紀後半頃を示すので、溝の時期はその頃か。

8号溝（第107・108図 図版41）

7号溝の西側で検出した溝で、南北～東西方向にL字状に曲がる。溝は長さ約8m、幅0.3m、深さ0.15m以下を測る。断面の形状は逆台形状で、埋土は暗褐色土が1層のみ堆積していたので、溝とした。

第108図26は混入した弥生土器甕の鋤先形口縁片である。

図化できるのが弥生土器のみだが、その他にも須恵器や土師器の小片が出土したことから、この溝の時期は古墳時代後期以降か。

9・10号溝（第107・108図 図版42）

調査区の北側で検出した溝である。9号溝は南側を流路で切られるが、北西方向で長さ約8m、幅0.55m、深さ0.2mを測る。土層はマンガンを含む淡暗褐色土が1層堆積する。この9号溝東側が集落内を通る道路状遺構の可能性があり、東側の日詰遺跡に繋がる可能性もある。

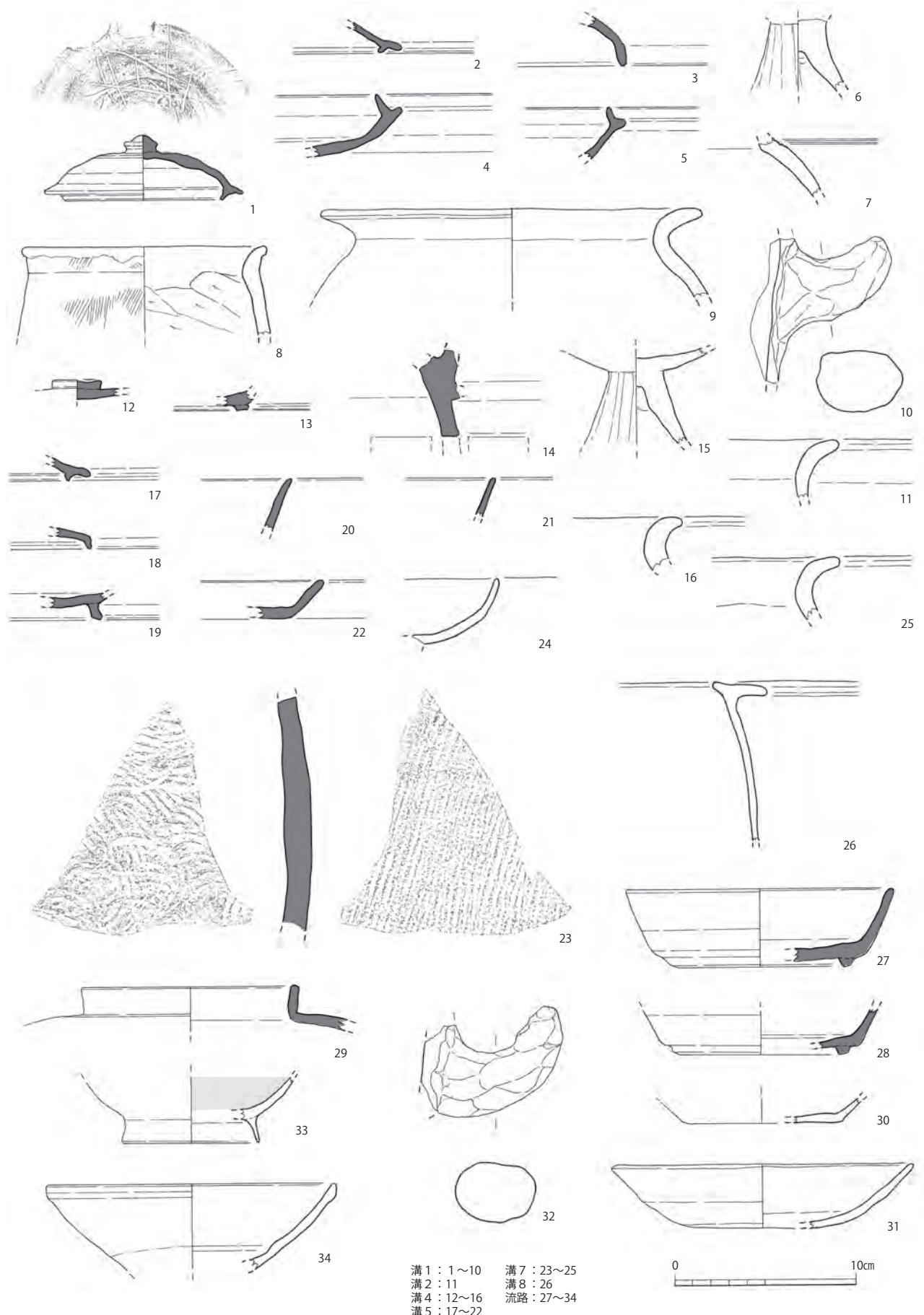
10号溝は9号溝と同様に北西方向で、長さ約2.5m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。断面の形状は西側に傾く逆台形状になる。当初、褐色土が堆積していたのでその部分を掘り下げたが、深い凹みのようになり、溝の可能性は低い。

9・10号溝からは図化できる出土土器はないが、南側にある流路に切られているので、12世紀頃には使用されなくなった可能性がある。

流路跡（第108図 図版39・42）

9号溝の東側に位置し、調査区東壁側で検出した流路跡である。東側の立ち上がりは検出できていないが、西側の形状から逆台形状で、暗褐色や灰黄色の砂質土が3層堆積する。底面は平坦ではなく波立ち、出土遺物の時期も限定されることから、中世の自然流路と思われる。

第108図27と28は須恵器高台付坏片である。高台は方形状で、体部との接合位置より、底部側に付く。復元口径14.8cmを測る。29は須恵器短頸壺片で、外面の屈曲部には沈線状の凹みが付く。復元口径12.0cmを測る。30と31は土師器坏片で、内外面とも摩滅し底部の調整も不明である。31は丸底状の坏片か。



第108図 1・2・4・5・7・8号溝、流路跡出土遺物実測図 (1/ 3)

復元口径 16.6cm を測る。32 は土師器甌の把手片で、把手の先端が伸びているので、持ち手部分は深くなる。33 は黒色土器 A 梗の底部片である。内面は黒色であるが、摩滅していてミガキの痕跡は見られない。34 は白磁碗片で、やや玉縁状の口縁部をもつ。底部が欠損して全容は不明だが、口縁部の形状から白磁 I 類又はIV 類になるものか。

出土した土器は 3 時期に分けられる。8 世紀の須恵器、9 世紀の黒色土器 A 類、12 世紀の土師器が出土したことから、流路時期は少なくとも 12 世紀頃か。

6. その他の出土遺物

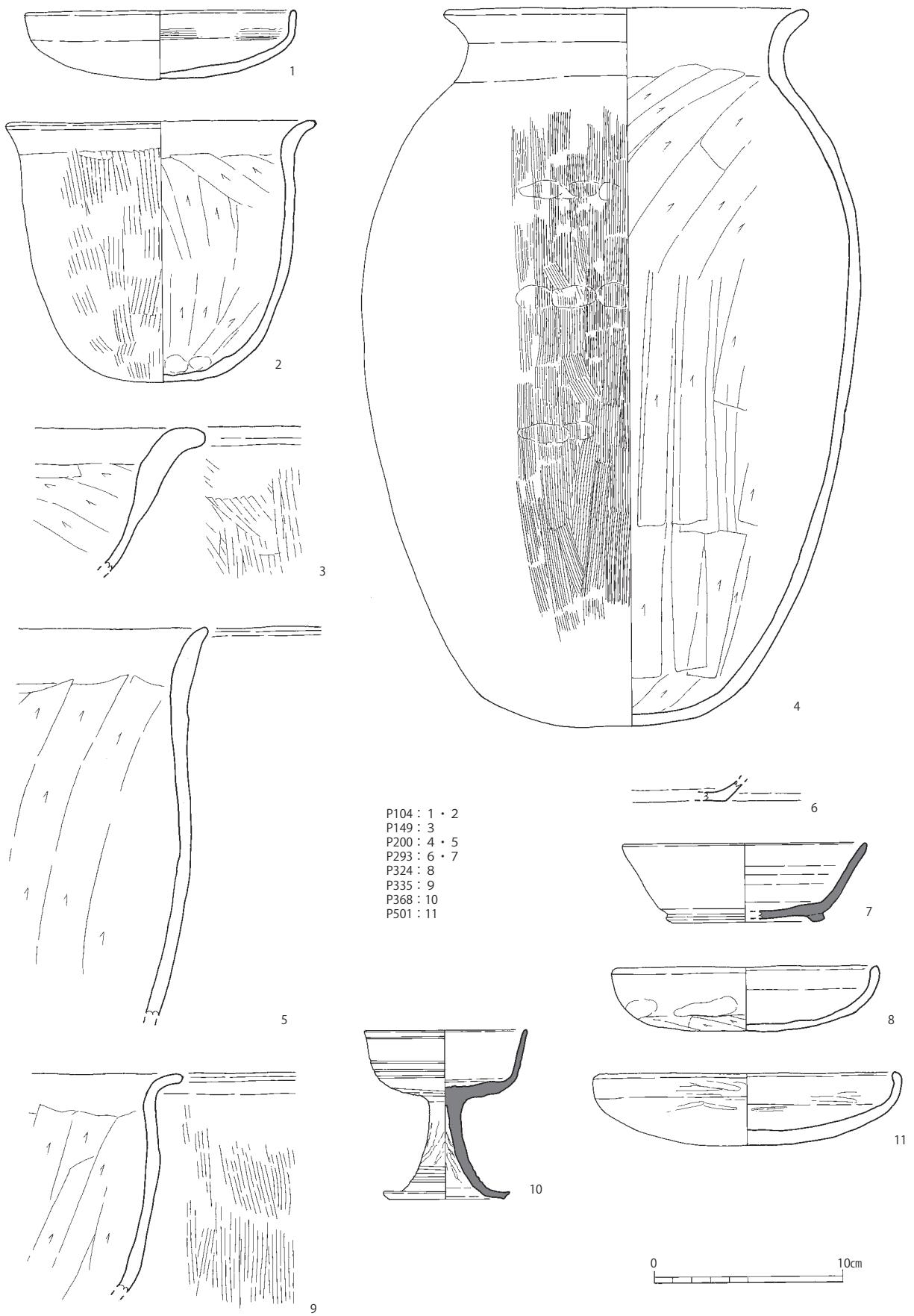
ピット出土土器（第 109 図 図版 45・46）

第 109 図 1 と 2 は P 104 出土である。1 は土師器坏片で、外面体部中位で稜が付き口縁部は垂直に立つ。内面の屈曲部には刷毛目状の痕跡がある。2 は土師器の小形甌片で、口縁部は僅かに外湾し最大径を測る。やや丸みのある体部をもち、底部は丸底である。調整は外面に刷毛目、内面にはケズリと底部にナデを施す。復元口径 14.4cm、16.4cm を測る。3 は P 149 出土の土師器鉢の口頸部片で、厚手な口縁部は外反し、内面に薄い稜が付く。4 と 5 は P 200 出土である。4 は土師器甌片で、丸底で緩やかに外湾する口縁部をもつ。体部中位よりやや上で最大径を測る。復元口径 19.7cm を測る。5 は土師器甌片で、口縁部は僅かに外反する。6 と 7 は P 293 出土である。6 は土師器坏の底部片である。7 は須恵器高台付坏片で、高台は短く、体部との境目に接合する。復元高台径 12.9cm を測る。8 は P 324 出土の土師器坏片で、外面体部中位には薄い稜が付く。外面のヘラケズリは底部近くに行い、平底になる。復元口径 14.2cm を測る。9 は P 335 出土の土師器甌片である。口縁端部付近で折れ曲がり、外湾する。口縁部内面の稜は付かない。調整は外面に刷毛目、内面はケズリである。10 は P 368 出土の須恵器無蓋高坏片である。外面の坏部に沈線 4 条、脚部には絞りと沈線 3 条が巡る。口径 8.6cm を測る。他の土器と比べ、古い時期のものである。11 は P 501 出土である。土師器坏で、口縁部付近でわずかに内湾する。内外面の口縁部付近まで丁寧なヘラケズリを施し、ミガキ状に残る。復元口径 16.4cm を測る。

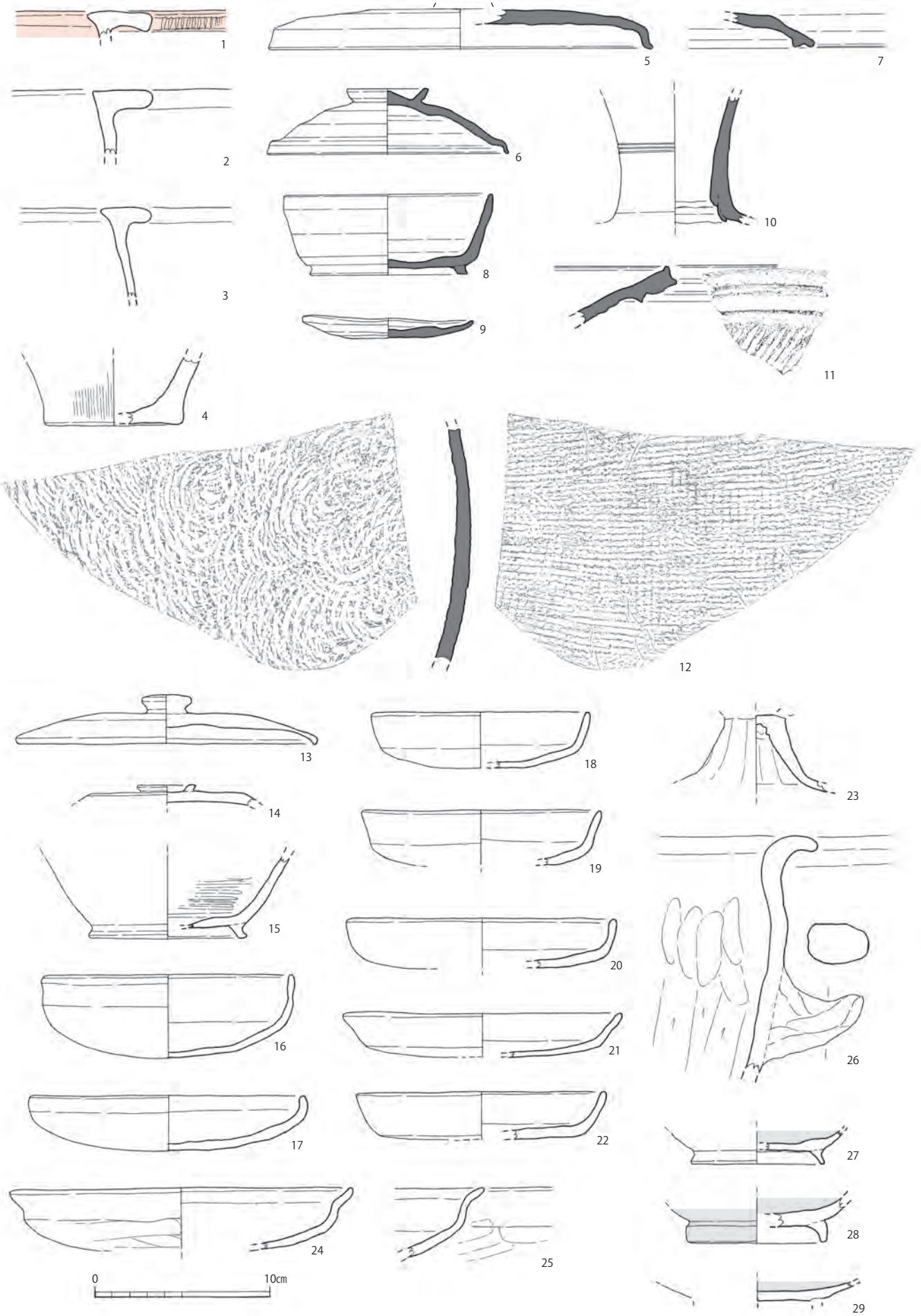
主に 7 世紀後半～8 世紀前半代のものが多いが、中には 6 世紀末～7 世紀初頃のものもある。

遺構検出出土遺物（第 110 図、図版 45）

第 110 図 1 ～ 4 は弥生土器甌の口縁部片と底部片である。1 は丹塗りされ、口縁端部に刻み目を入れる。2 と 3 の調整は摩滅して不明である。4 の底部は平底であるが、僅かに上げ底になる。5 ～ 12 は須恵器である。5 ～ 7 は坏蓋片である。5 は口縁部のすぐ上で角張り、外面には稜が付く。天井部中央付近に撮みが付いていた痕跡があるので、蓋とした。6 の坏蓋は、他の蓋とは異なり横ナデやヘラケズリの痕跡が明瞭で段が付く。天井部には輪状の撮みが付く。7 はかえりのある口縁部片である。8 は高台付坏片である。高台の形状は逆台形状で、底部よりに接着し、低い。復元口径 12.0cm を測る。9 は坏であるが、蓋の可能性もある。外面底部はヘラケズリである。復元口径 9.8cm を測る。10 は壺の頸部片である。頸部と肩部の境には接合痕が明瞭に残る。11 は甌の口縁部片で、外面の端部下には突帶が付き、その下には斜行子文タタキを施す。12 は甌の体部片である。外面は平行タタキ、内面は青海波文タタキである。13 ～ 26 は土師器である。13 は土師器の坏蓋片で、色調は橙色である。外面天井部はヘラケズリで、口縁部は横ナデである。復元口径 17.6cm を測る。14 も土師器坏蓋片で、輪状の撮みが付くことから 6 の須恵器坏蓋と同じ形状を呈するか。15 は高台付坏片である。内面にはミガキの痕跡が僅かに



第109図 ピット出土土器実測図 (1/ 3)



第 110 図 遺構検出土器実測図 (1 / 3)

残る。復元高台径 9.0cm を測る。16～22 は坏片である。16 は器高 4.7cm と他より深い坏である。16 と 17 の底部は丸底で 7 世紀後半～末頃のものある。18～22 の底部は平底で、8 世紀中～後半のものか。復元口径 14.6 cm、15.8cm、12.4cm、13.8cm、15.6cm、16.2cm、14.4cm を測る。23 は高坏脚部片である。24 と 25 は鉢片で、口縁部が折れ曲がる。24 は復元口径 19.8cm を測る。これら坏や鉢の底部はヘラケズリで丸みをもつ。26 は甌片である。内面の調整はケズリ、体部上位はナデを施す。27 と 29 は黒色土器 A 類椀の底部片、28 は黒色土器 B 類椀の高台部片である。27 と 28 の高台の形状は異なる。27 は細く尖るが、28 は太く丸みがあり内湾する。復元高台径 7.6cm、8.0cm を測る。29 の外面底部は高台を欠損する。

第 111 図 30 は平瓦片で、凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕である。色調は灰色で、細かい砂粒を含む。出土土器は主に 7 世紀後半～8 世紀後半までのものが多いが、黒色土器 A 類・B 類等の 9 世紀～11 世紀を示す土器も出土する。

土製品（第 112 図、図版 47）

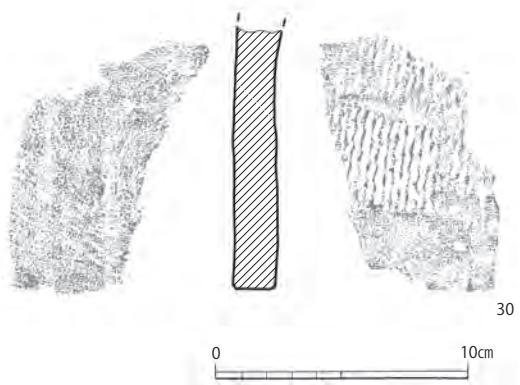
第 112 図 1～29 は土錘で、12・20・21・25・28・30・34～36・69 号竪穴住居跡と遺構検出から出土する。欠損するものも多いが、完形品で長さ 5cm 前後の 6・23 と 6 cm 前後の 1・5・7・13～16・25 の 2 つに分けられる。厚さは 0.7～1.3cm、孔部分は径 5mm 程を測る。

石製品（第 112 図、図版 47）

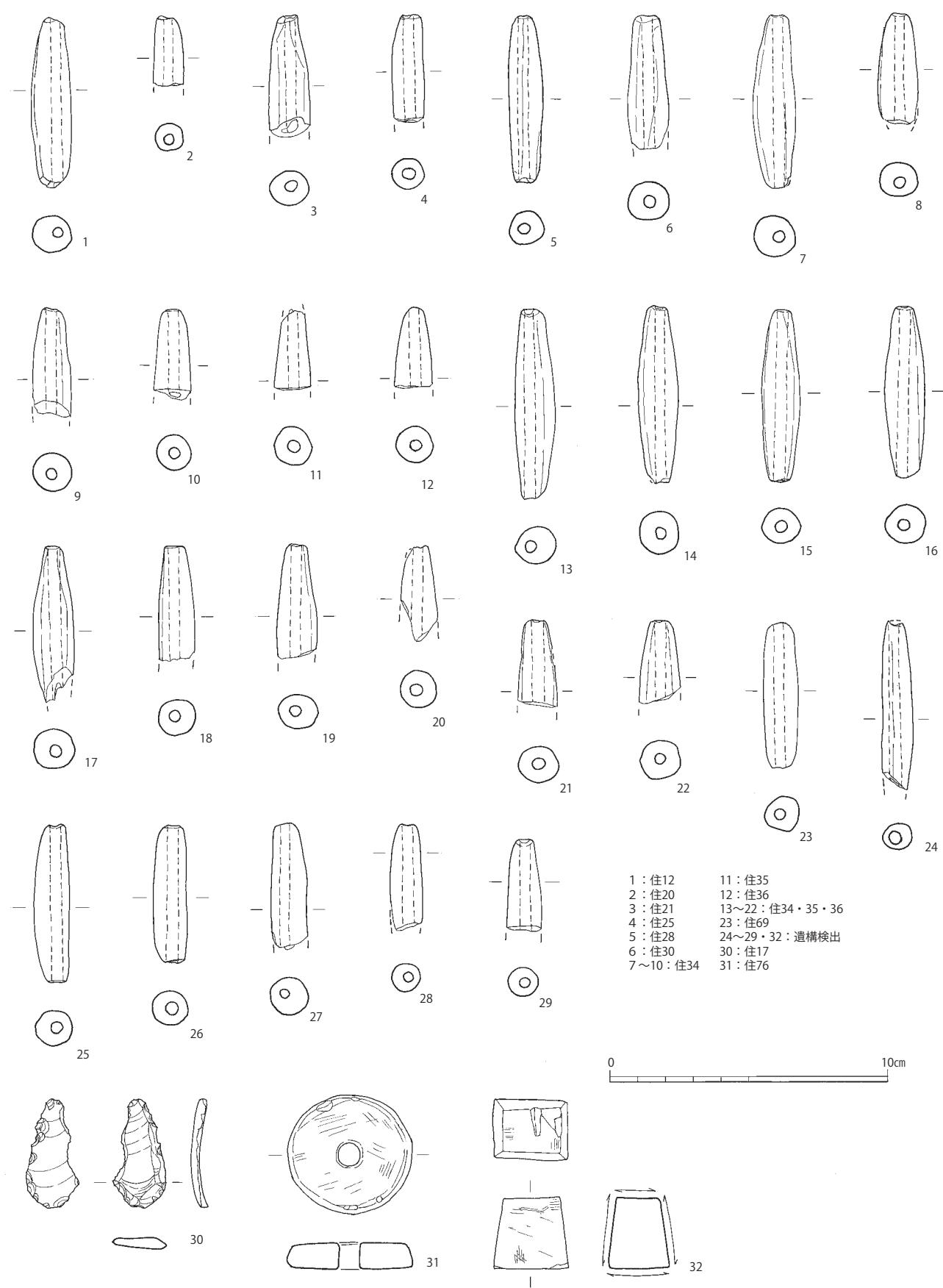
第 112 図 30 は 17 号竪穴住居跡出土の黒曜石製で使用痕のある剥片である。側面には微細な剥離がある。長さ 3.8cm、幅 1.9cm、厚さ 4mm、重さ 3.1 g を測る。古墳時代以前の混入品か。31 は 76 号竪穴住居跡出土の滑石製紡錘車の完形品で緑灰色を呈す。全面がきれいに磨かれており、所々に磨き痕が見える。径 4.5cm、高さ 0.95cm、孔の部分で径 8～9 mm、重さ 33.6 g を測る。断面は隅丸台形状である。32 は遺構検出出土の砂岩製の権か。上面は一部欠損するが約 1 cm 程の直線状の削り痕がある。下面の長さで 2.2 × 2.7cm、高さ 2.55cm を測る。断面は台形で、重さ 23.9 g を測る。全ての面はきれいに磨かれており、当初は権として使用していたものが、砥石として再利用されたものかも知れない。

鉄製品（第 113 図、図版 48）

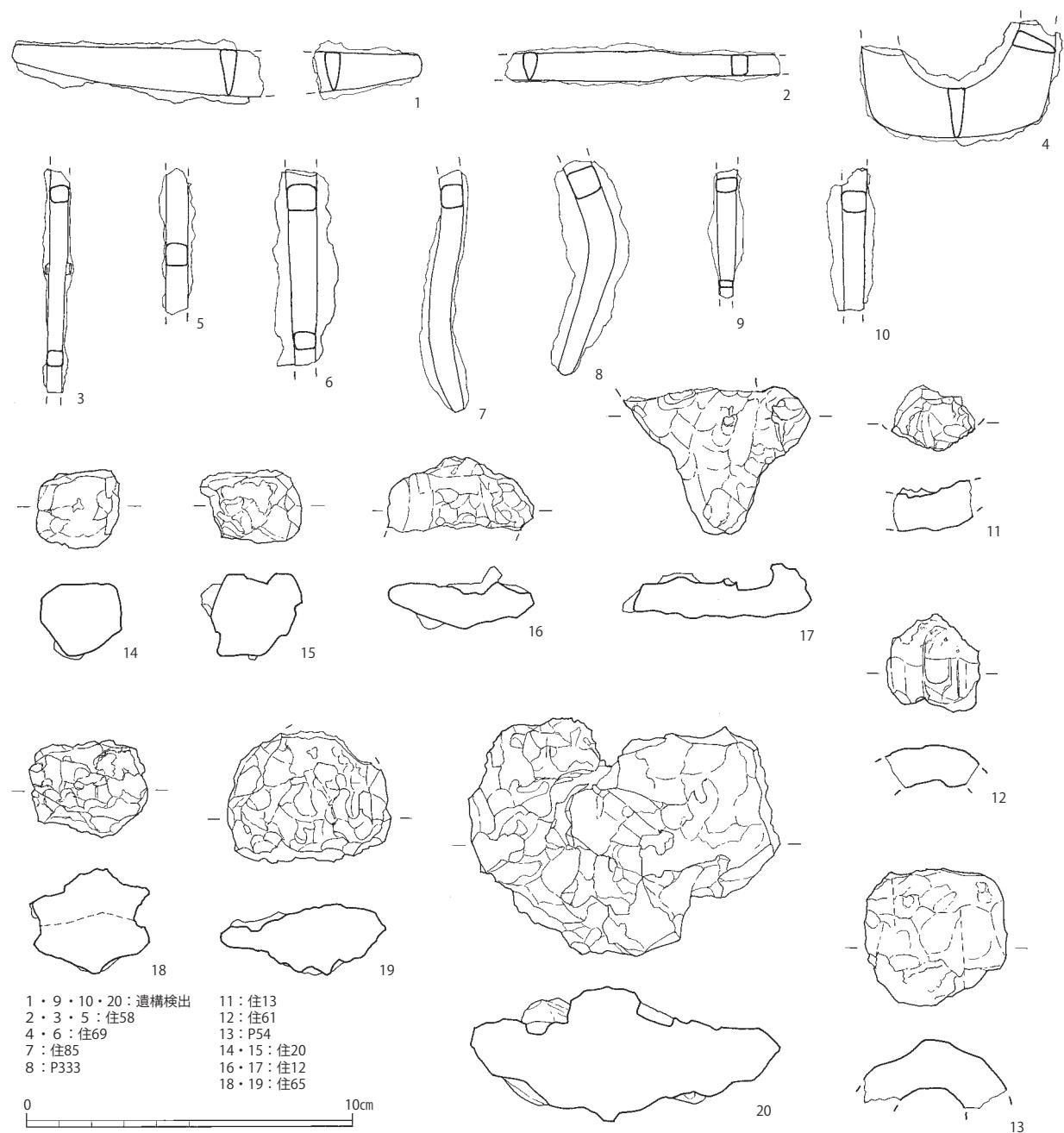
第 113 図 1 と 2 は刀子片で、遺構検出と 58 号竪穴住居跡から出土する。1 は切先を欠損するが、刃部長 7.75cm 以上、身幅 1.4cm、背厚 0.5cm を測る。2 も切先や茎部を欠損する刀子片で、刃部長 5.55cm、身幅 0.9cm、背厚 0.45cm を測る。3 は刃部を欠損する鉄鎌の茎部片で、範被の形態は棘範被である。58 号竪穴住居跡出土である。4 は鋤の先端部か。5～10 は釘片か。残存長 3.95～7.4cm、厚さ 1.0cm 以下を測る。11～13 は轔の羽口片である。14・15 は鉄塊で 20 号竪穴住居跡出土である。長さ 2.4 × 2.45 cm、2.2 × 3.05cm、重さは 19.2、23.6 g を測る。16～20 は椀形滓で、12 号・65 号竪穴住居跡と遺構検出出土である。最も大きい 20 で幅 9.55cm を測る。重さは 20.1、29.9、33.2、40.0、207.5 g である。



第 111 図 遺構検出出土瓦実測図 (1 / 3)



第 112 図 出土土製品・石製品実測図 (1/2)



第113図 出土鉄製品実測図 (1/2)

IV おわりに

関戸遺跡の調査結果から、集落の時期別変遷、カマドの分類、円面硯の3つについて述べたい。

関戸遺跡で検出した遺構は、古墳時代後期と奈良時代の2時期に分けられる。そのため、当遺跡の時期を知る上で堅穴住居跡から出土する土器を検討しなければならない。周辺では、それぞれの遺跡での土器の検討が行われている。主に参考にしたものは、田崎博之※の千潟遺跡の編年図と大庭孝夫※の堂畠遺跡の変遷図である。それらを踏まえて第114図で関戸遺跡の須恵器・土師器の変遷図を作成した。この変遷図を作成する上では、上記の2氏以外にも松村一良※、森田勉※、山本信夫※らの編年図も参考にした。

出土した須恵器と土師器を検討すると5つの時期に分けられる。

・ 6世紀末～7世紀初

2号堅穴住居跡で出土した一括資料と17号堅穴住居跡から出土した土器が良好な資料となる。須恵器坏身は受け部が小さく低くなる。径は坏蓋で13cm以下、坏身で11cm以下と小形になる傾向である。坏以外には高台で使用された大形の坏や受け部のない坏身、短頸壺もある。土師器では、須恵器坏を模倣した坏が出土する。口縁部は僅かに内傾しながら垂直に立ち上がる。口縁部と体部との境で稜が付き、底部は丸底である。土師器小形甕・甕・鉢の口縁部は緩やかに外湾する。

・ 7世紀後半～末

7号・40号・79号堅穴住居跡からの出土土器がある。須恵器坏蓋の口縁部には、かえりがまだ残る。高台付坏は角張らず、高台の端部は外へ伸びる。土師器では、79号堅穴住居跡のカマド周辺出土があり、小形甕・甕の口縁部は緩やかに外湾して頸部は窄まる。体部の張りが強く、中位で最大径をとる。把手付甕の口縁部は緩やかに外湾し、体部は丸みを持ち、把手付近で最大径となる。甕の体部はほぼ直線的で、緩やかに外反する口縁部を持つ。14号堅穴住居跡出土には円面硯がある。

・ 8世紀前半

3号・6号・50号・69号堅穴住居跡からの出土土器がある。須恵器坏蓋の口縁部は嘴状に明瞭に角張る。短頸壺の蓋もある。高台付坏は口縁部と体部が直線状に開く。土師器坏の底部は平底状になるが、底部中央に丸みを少し残す。土師器甕は外湾する口縁部を持ち、口縁部内面には明瞭な稜が付く。鉢の口縁部は外反し、口縁部内面には稜が付く。

・ 8世紀中～後半

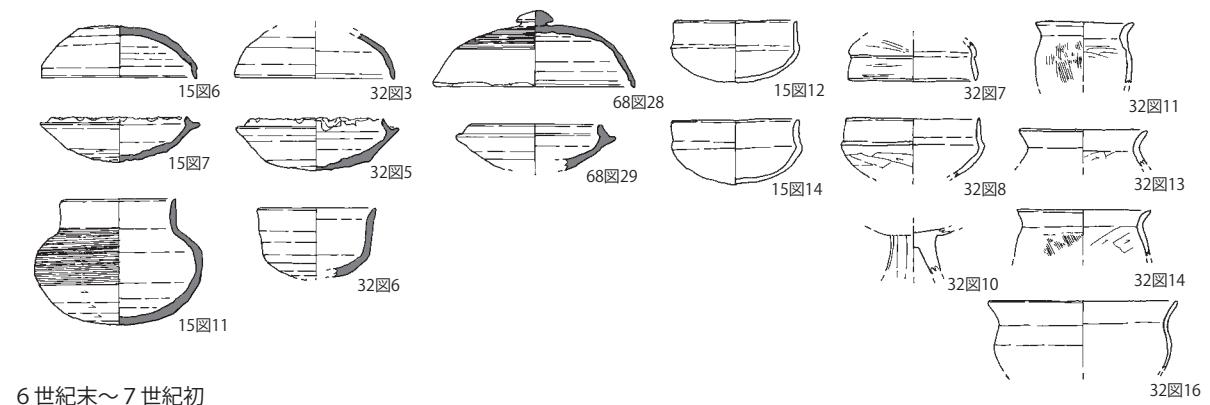
1号・41号・44号堅穴住居跡からの出土土器がある。須恵器坏蓋の口縁端部は前半に比べて、丸みを帯び、角張らない。高台付坏は口縁部で僅かに外湾し、高台は低く台形状である。土師器坏の底部は僅かに丸みを残すが、前半に比べて底部との境は明瞭で平底になる。土師器小形甕や甕の口縁部内面には、前期に比べてさらに角張り、明瞭な稜が付く。小形甕は8世紀前半に比べ寸胴になる。

・ 8世紀末

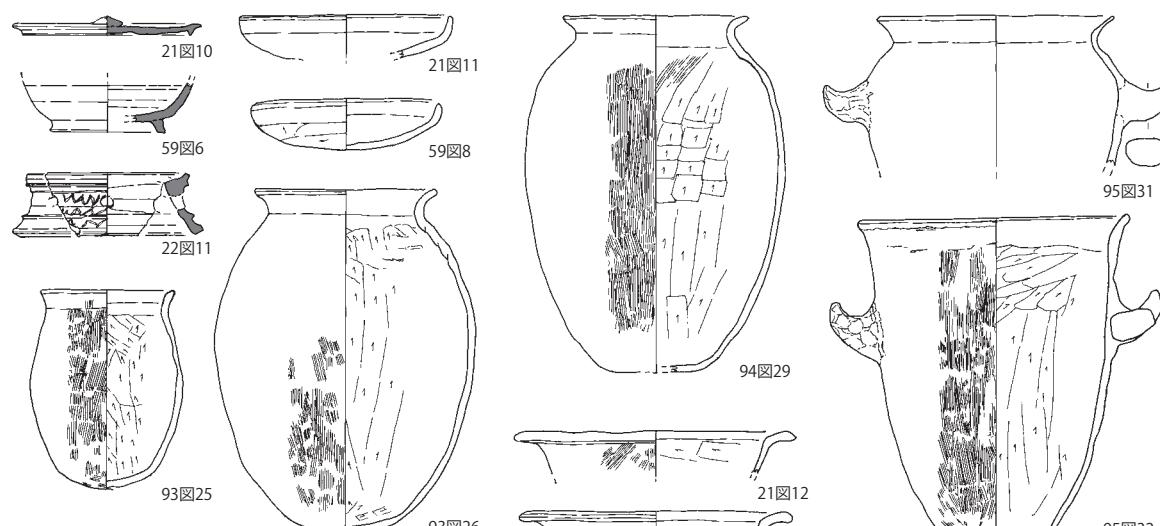
5号堅穴住居出土の土師器坏がある。口縁部は外へ大きく開き、器高は低い。底部は平底である。

○集落の時期別変遷について

第114図の須恵器・土師器変遷を元に作成した関戸遺跡の遺構の時期変遷図が第115図である。この図は遺構の時期が判別できたもののみを示す。



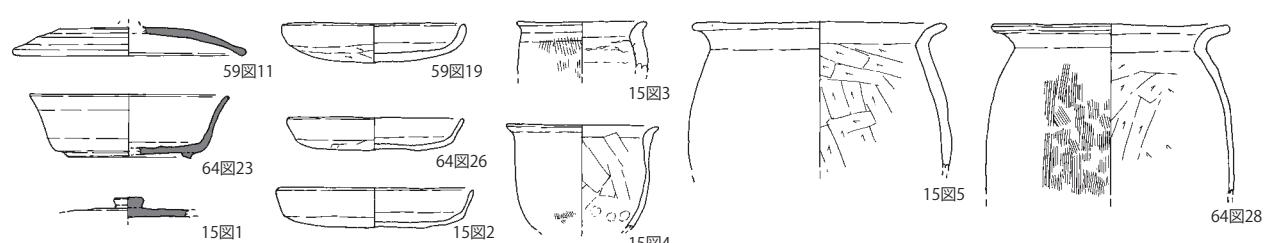
6世紀末～7世紀初



7世紀後半～末



8世紀前半



8世紀中～後半



第114図 関戸遺跡須恵器・土師器変遷図 (1/8・1/12)



第 115 図 関戸遺跡時期別変遷図 (1/600)

- ・ 6世紀末～7世紀初頭 住居跡15軒 土坑2基 溝1条
 (住居跡) 2号・11号・17号・20号・29号・39号・51号・52号・55号・57号・77号・80号・84号・
 88号・92号
 (土坑) 5号・6号 (溝) 1号
- ・ 7世紀後半～末 建物跡4棟 柵列1条 住居跡27軒 溝2条
 (建物跡) 5号・6号・8号・9号 (柵列) 2号
 (住居跡) 4号・7号・8号・12号・14号・18号・21号・25号・30号・31号・36号・40号・
 45号・46号・47号・54号・60号・64号・65号・(70号)・75号・76号・79号・81号・
 82号・86号・91号
 (溝) 2号・7号
- ・ 8世紀前半 住宅跡23軒 溝2条
 (住居跡) 1号・3号・6号・10号・13号・15号・22号・26号・28号・33号～35号・41号・
 48号・50号・56号・59号・63号・67号・69号・(71号)～73号
- ・ 8世紀中頃以降 住居跡24軒 土坑2基
 (住居跡) 5号・9号・16号・19号・23号・24号・27号・32号・37号・38号・42号～44号・
 49号・53号・58号・61号・62号・66号・68号・78号・85号・87号・(89号)
 (土坑) 2号・3号 (溝) 4号・5号

※正確に時期が判断できないものは、ここでは省くが、()は推定の時期を示す。

上記の時期以外としては、9号溝が9世紀、流路跡が12世紀となる。

今回の調査結果から、この集落の始まりは6世紀末～7世紀初頭となる。7世紀前半～中頃にかけての遺構の検出がほとんどないことから、集落は一時的に中断する。この時期の集落の中断は、田主丸・浮羽地域の堂畠遺跡、仁右衛門畠遺跡、船越高原遺跡、日詰遺跡、新開遺跡などの主要な集落遺跡で起きている。これについては、今後の課題であるが、現地点では7世紀に起きた寒冷期による自然環境の変化※や、660～663年百済の役（白村江の戦いなど）や評などの官衙の建設※が、この地域の集落動態にも影響を及ぼしている可能性があるのではないかと思われる。その後、7世紀後半～末にかけ住居跡が27軒と最も多くなる。続く8世紀前半には23軒、8世紀中頃以降へと時期を下るにかけ徐々に数を減らしていく。集落は8世紀末以降には廃絶したのではないかと思われる。また、9世紀以降の遺物が出土することから、周囲に小規模の集落があったのかも知れない。

○関戸遺跡のカマドについて

関戸遺跡で検出した竪穴住居跡は92軒になるが、その内、カマドを検出したのは44軒である。検出されたカマドは、造り付け型と突出型の大きく2種類に分けられる。ここでは小田和利の北部九州のカマドの分類を利用した堂畠遺跡を参考にしたが、煙道については考慮していない。



関戸遺跡の跡地（令和7年1月30日）

・カマドの分類

I類（造り付け型）

II類（突出型で、突出部分が壁から50cm以内）

III類（突出型で、突出部分が壁から50cm以上）

この3つの分類を閑戸遺跡に当てはめると以下の結果になる。

I類 2号・7号・17号・36号・46号・48号（隅カマド）・57号・75号・79号・84号

II類 9号・13号・15号・16号・24号・31号～33号・37号・41号・43号・44号・54号・
58号・59号・62号・63号・67号・68号・78号・85号

III類 5号・6号・18号・19号・26号・30号・35号・53号・60号・66号・69号・76号・82号・
84号

I類のカマドは10基あり、その内、2号・17号・57号堅穴住居跡が6世紀末～7世紀初頭になる。その他は7世紀後半～8世紀前半までとなり、8世紀中頃以降の堅穴住居跡では検出されていない。これは堂畠遺跡での造り付け型のカマドは8世紀までは続かないという指摘に合致する。ただ、隅カマドをもつ48号堅穴住居跡のみ8世紀前半となる。

突出型カマドのII類は21基、III類は14基になる。堅穴住居跡の時期別に分けると、6世紀末～7世紀初頭が1基、7世紀後半～末が7基、8世紀前半が11基、8世紀中頃以降が16基となる。

さらに詳細にみると、7世紀後半～末頃にかけて、III類が5基と多くなるが、8世紀にかけてはII類の方が19基と多くなる。II類は8世紀前半で7基、8世紀中頃以降にかけての12基に分けられ、8世紀中頃以降に突出型カマドの大きさも定型化したことが伺えるのではないかと思われる。

○14号堅穴住居跡出土の円面硯について

10号堅穴住居跡出土の円面硯については、7世紀後半と8世紀前半の2つの時期の切り合いがある住居跡から出土するが、下層の14号堅穴住居跡から出土しているので、この円面硯の時期は7世紀後半としている。なお、4号溝からは破片ではあるが、別個体の円面硯片が出土する。破片なので詳細は不明だが、長方形の透かしが付く円面硯片になり、溝の他の土器から8世紀前半～中頃の可能性がある。なお、いずれも横田賢次郎の編年によれば、I～C類の圈足硯に分類される。

周辺の遺跡では、仁右衛門遺跡で7世紀末頃の円面硯、堂畠遺跡でも出土があり、それぞれの集落ごとに、一定の識字層が存在したこと示しているのではないかと思われる。

（参考文献）

- ・大庭孝夫2005「堂畠遺跡Ⅲ 下巻」一般国道210号線うきはバイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 福岡県教育委員会
- ・田崎博之1980「Ⅲ干潟遺跡出土土器の編年－特に土師器を中心として－」『干潟遺跡1』福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会
- ・松村一良1983「筑後国府の調査」『古代文化』35号
- ・山本信夫1996「古代前期の煮炊具－筑前・筑後・豊前・豊後・肥前－」『古代の土器研究－律令的土器様式に西・東4煮炊具－』古代の土器研究会
- ・安田喜憲2004『気候変動の文明史』NTT出版
- ・吉野正敏2009「4～10世紀における気候変動と人間活動」地学雑誌118巻6号
- ・小嶋篤ほか2024「筑後における集落と古墳の動態－弥生時代終末期～飛鳥時代－」『集落と古墳の動態V－総括・弥生時代終末期～飛鳥時代－』九州前方後円墳研究会
- ・小田和利1994「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- ・横田賢次郎1983「福岡県内出土の硯について」－分類と編年に関する一試案－『九歴論集』9九州歴史資料館

図 版



1 関戸遺跡合成写真（真上から）

図版2



上1 調査区周辺1（北東から）

下2 調査区周辺2（北から）



上1 北調査区東側1（真上から） 下2 北調査区東側2（真上から）

図版 4



上1 北調査区西側1（真上から） 下2 北調査区西側2（真上から）



1 南調査区西側全景
(真上から)



2 南調査区東端
(東から)
左 3 南調査区東側 1
(西から)
右 4 南調査区東側 2
(西から)



図版6



1 1号掘立柱建物跡
(真上から)

2 2・3号掘立柱建物跡
(真上から)

3 4・5号掘立柱建物跡
(真上から)



1 7号掘立柱建物跡
・3号柵列跡（真上から）



2 6・10号掘立柱建物跡
(真上から)

左3 9号掘立柱建物跡
(東から)

右4 10号掘立柱建物跡
・1号柵列跡（東から）



図版8



1 1号竪穴住居跡
(西から)



2 2号竪穴住居跡
(東から)
左3 2号竪穴住居跡カマド
(東から)
右4 2号竪穴住居跡土器出土状況
(東から)



1 3号竪穴住居跡
(東から)



2 4号竪穴住居跡
(南から)



3 5・6号竪穴住居跡
(南から)

図版 10





1 9号竪穴住居跡
(南から)



2 10・14号竪穴住居跡
(東から)

左3 9号竪穴住居跡カマド
(南から)

右4 13号竪穴住居跡カマド
(南から)



図版 12



1 13号竪穴住居跡
(南から)



2 15号竪穴住居跡
(南から)
左3 15号竪穴住居跡カマド
(南から)
右4 16号竪穴住居跡カマド
(南から)





1 16号竖穴住居跡
(南から)



2 17号竖穴住居跡
(南から)



3 18号竖穴住居跡
(東から)



左 1 18号竪穴住居跡カマド
(東から)

右 2 19号竪穴住居跡カマド
(南から)

3 19号竪穴住居跡
(南から)

4 20号竪穴住居跡、
2・3号土坑 (南から)



1 22~24号竪穴住居跡
(南から)



2 24号竪穴住居跡
(西から)



3 25号竪穴住居跡
(南から)

図版 16



左 1 24号竪穴住居跡カマド
(西から)

右 2 31号竪穴住居跡カマド
(東から)



3 26号竪穴住居跡
(東から)



4 27号竪穴住居跡
(南から)



1 28号竪穴住居跡
(南から)



2 30・40号竪穴住居跡
(西から)



3 31号竪穴住居跡
(東から)



1 32号堅穴住居跡
(東から)



2 33・38号堅穴住居跡
(南西から)

左3 32号堅穴住居跡カマド
(東から)

右4 33号堅穴住居跡カマド
(南から)





1 34・36号竪穴住居跡
(西から)



2 35号竪穴住居跡
(南から)

左3 36号竪穴住居跡カマド
(南から)

右4 37号竪穴住居跡カマド
(南から)



図版 20



1 37号竪穴住居跡
(南から)



2 41号竪穴住居跡
(南から)



3 42号竪穴住居跡
(南から)



左1 41号竪穴住居跡カマド
(南から)



右2 43号竪穴住居跡カマド
(西から)



3 43号竪穴住居跡
(西から)



4 44・46号竪穴住居跡
(南から)



左1 44号竪穴住居跡カマド
(南から)



右2 46号竪穴住居跡カマド
(南から)



3 44号竪穴住居跡
(南から)

4 47・48号竪穴住居跡
(南から)



1 47号竪穴住居跡カマド
(南から)



2 49号竪穴住居跡
(南から)



3 50号竪穴住居跡カマド
(西から)



1 51号堅穴住居跡
(東から)



2 52号堅穴住居跡
(西から)



3 53号堅穴住居跡
(南から)



左1 53号竪穴住居跡カマド
(南から)



右2 54号竪穴住居跡カマド
(南から)



3 54号竪穴住居跡
(南から)



4 56号竪穴住居跡
(北から)

図版 26



1 57号竖穴住居跡
(南から)



2 58号竖穴住居跡
(南から)

左3 57号竖穴住居跡カマド
(南から)

右4 58号竖穴住居跡カマド
(南から)





左1 59号竪穴住居跡カマド
(南から)



右2 60号竪穴住居跡カマド
(東から)



3 60号竪穴住居跡
(東から)



4 61号竪穴住居跡
(東から)



1 62号堅穴住居跡土層
(北から)



2 63号堅穴住居跡
(東から)

左3 63号堅穴住居跡カマド
(東から)

右4 66号堅穴住居跡カマド
(東から)





1 64号竪穴住居跡
(東から)

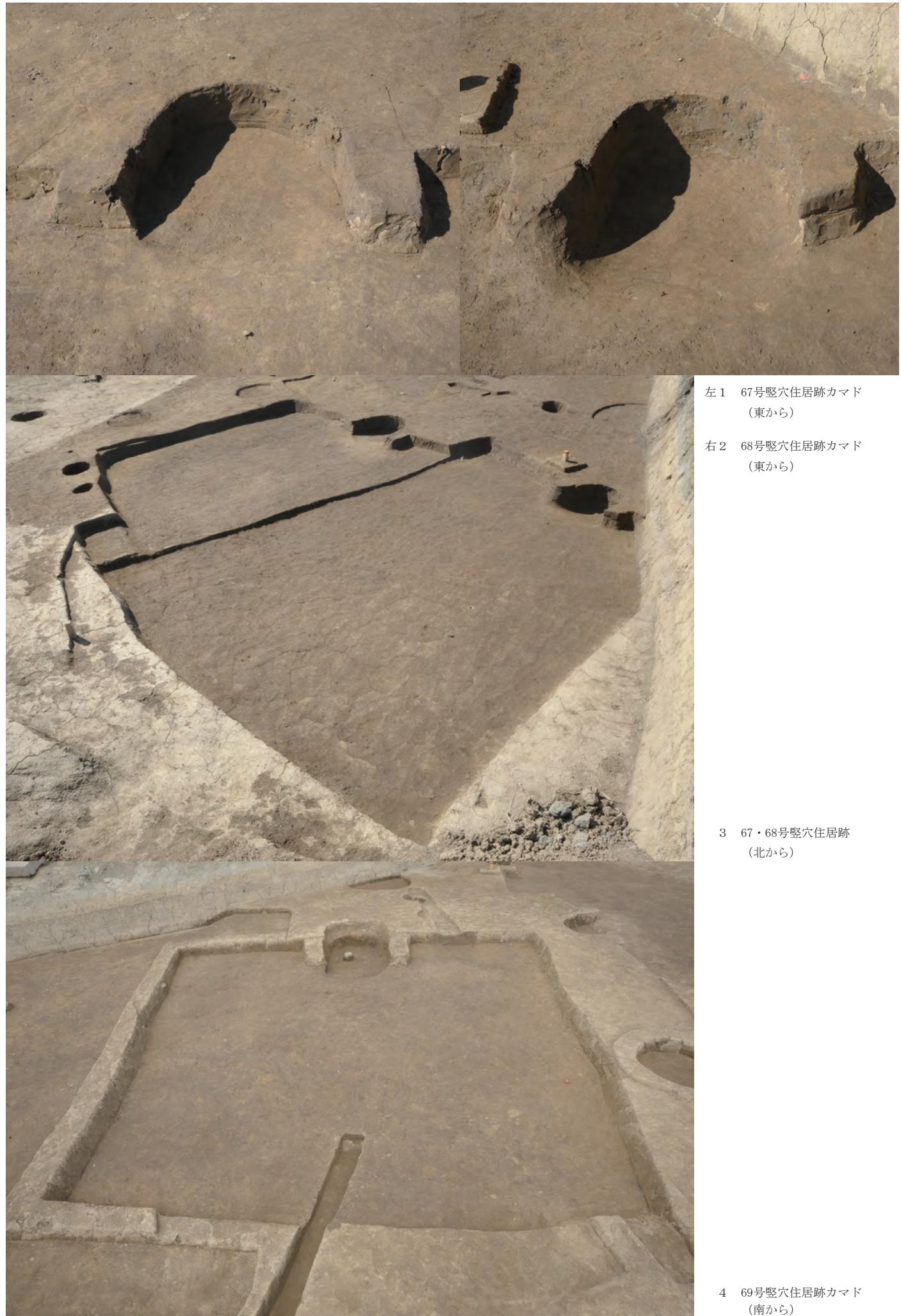


2 65号竪穴住居跡
(東から)



3 66号竪穴住居跡
(東から)

図版 30



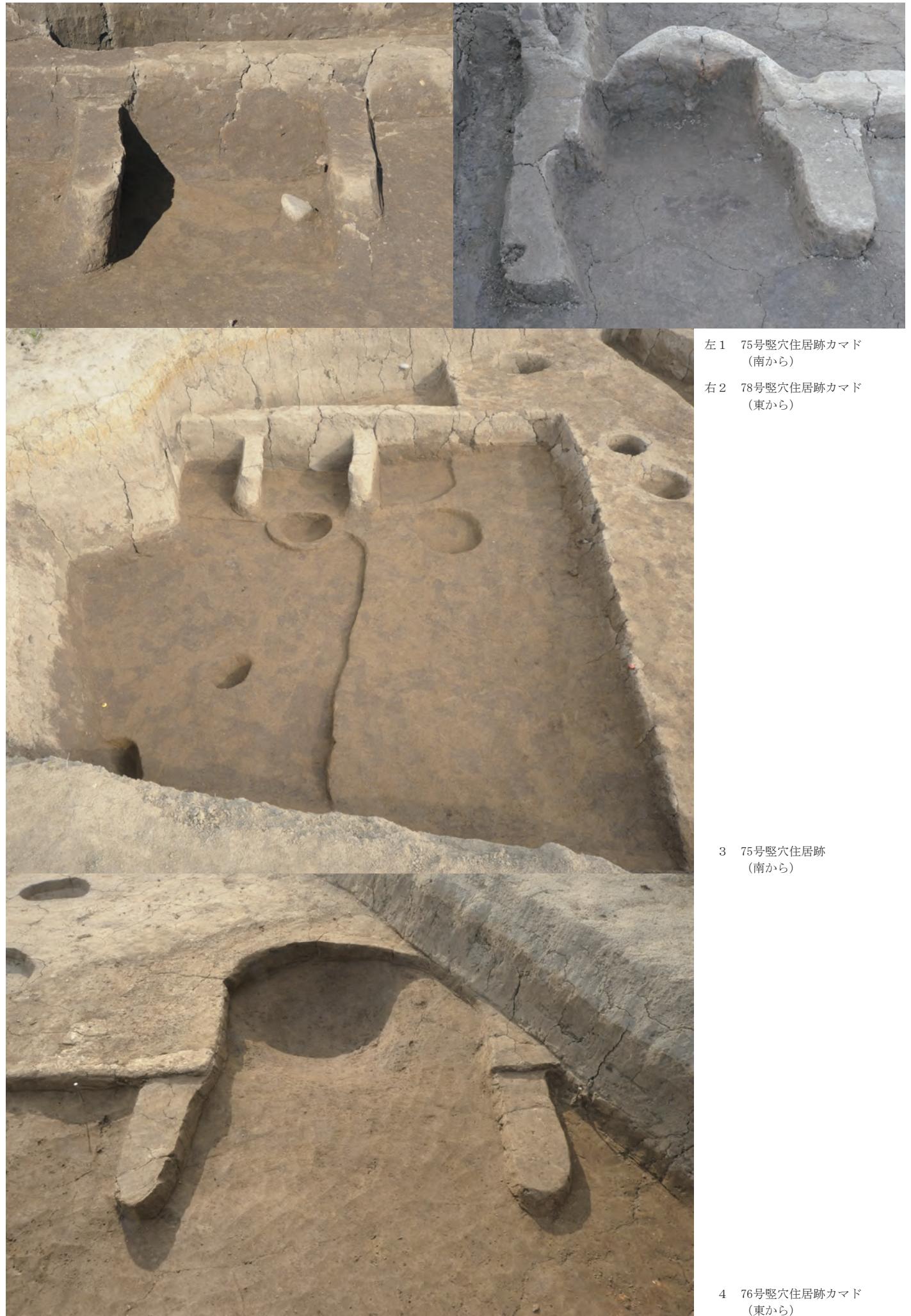
左1 67号竪穴住居跡カマド
(東から)

右2 68号竪穴住居跡カマド
(東から)

3 67・68号竪穴住居跡
(北から)

4 69号竪穴住居跡カマド
(南から)







1 76号堅穴住居跡カマド
(東から)



2 77号堅穴住居跡
(南から)



3 78号堅穴住居跡
(東から)

図版 34



1 79号竖穴住居跡
(東から)



2 79号竖穴住居跡土器出土状況
(東から)

3 79号竖穴住居跡カマド周辺
(東から)





1 79号堅穴住居跡カマド1
(東から)



2 79号堅穴住居跡カマド2
(東から)



3 79号堅穴住居跡
(東から)



1 80号竪穴住居跡
(南から)



2 81号竪穴住居跡
(南から)



3 82号竪穴住居跡
(南から)



4 83号竪穴住居跡土層
(北から)



1 84号竪穴住居跡
(南から)



2 85号竪穴住居跡
(南から)

左3 84号竪穴住居跡カマド
(南から)

右4 85号竪穴住居跡カマド
(南から)





1 1号土坑
(北から)



2 4号土坑
(東から)



3 5号土坑
(南から)



1 6号土坑
(北から)



2 道路状遺構
(北から)



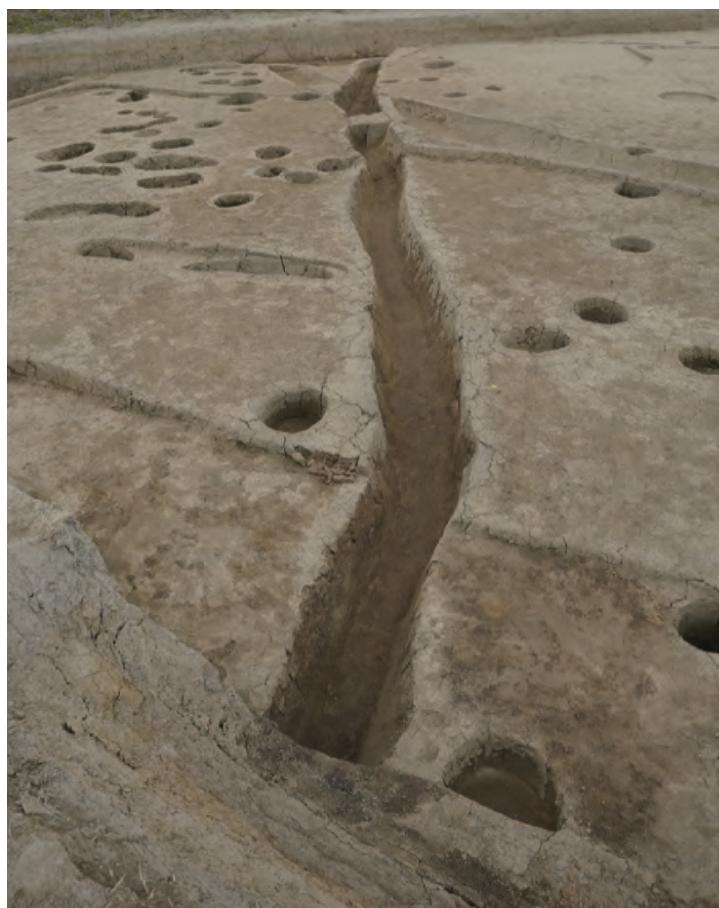
3 流路跡
(南から)



1 1号溝（東から）



2 2号溝（東から）



3 4号溝（南から）



4 5号溝（南から）



図版 42



1 1号溝土層（東から）



2 4号溝（東から）



3 5号溝土層（南から）



4 7号溝土層（西から）



5 流路土層（南から）



15 図2



15 図12



15 図6



15 図14



15 図7



21 図2



15 図8



25 図7



15 図9



34 図10



15 図10



50 図7



50 図8



59 図 11

59 図 19



50 図9



64 図 18



56 図9



83 図 6

88 図 30



92 図 13



92 図 15



109 図 2



92 図 18



109 図 8



96 図 5



109 図 10



108 図 1



109 図 1



110 図 6



110 図 9



89 図 35



109 図 4



95 図 32



22 図 11



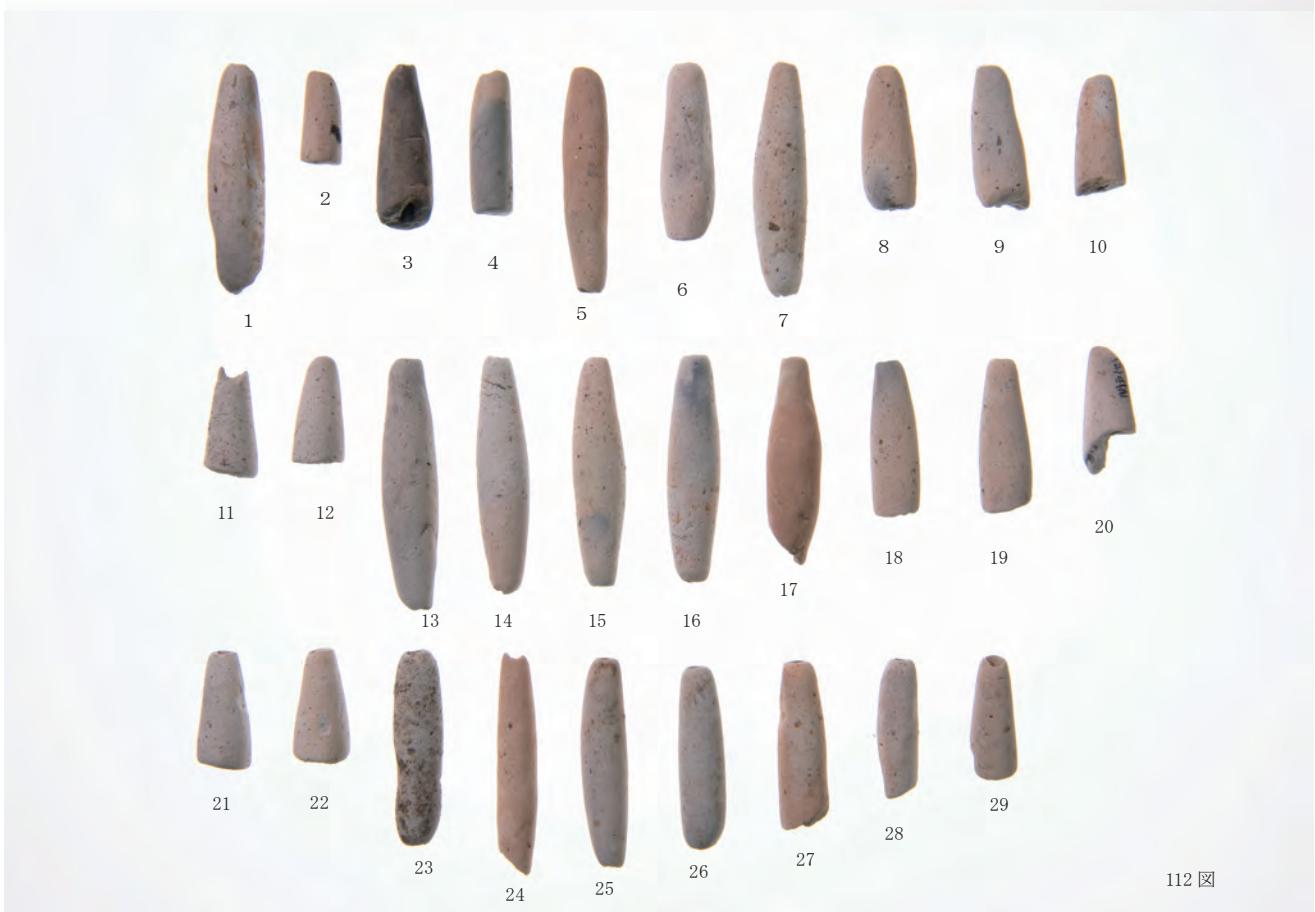
34 図 28



111 図 30



108 図 14



112 図



30



31



32

112 図

図版 48



113 図



113 図



113 図

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
6	0003

一般国道 210 号線浮羽バイパス関係文化財調査報告第 27 集

関戸遺跡

令和 7 (2025) 年 3 月 31 日

発 行 九州歴史資料館

〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印 刷 株式会社 四ヶ所

朝倉市馬田 336